
東方医療録

ヘタレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方医療録

【Nコード】

N2112V

【作者名】

ヘタレ

【あらすじ】

後ろから刃物か何かで刺されて。死んだと思ったら死んでなくて。眼を開けたら、森だった。最初に会ったのは人の言葉を理解できる何かで、最初に辿り着いたのは……紅い、館だった。

東方紅魔郷からの話。勝手な解釈、設定等があるので苦手な方にはお勧めしません。

其の壱（前書き）

初めまして。

知っているかたはいないかと思えますので少し自己紹介を。万年ヘタレ、生涯勇気を出して奮い立つ事の無いであろうヘタレと申します。

至らぬ所しかないかと思えますのでどうか温かい純粋な目で見ていただけたら嬉しい限りです。

では、しばし短い幻想をご覧ください。

其の壱

俺、桜井勇輝は医者を目指す普通の学生だった。

強いて違つところを上げるなら、父親が闇医者だったことだろう。医師免許も無いのに腕だけは確かな物だった。

何故それほどの腕を持ちながら闇の世界でのみ振るつたのは分らないが、尊敬できる父親だった。

何故過去形なのかと言うと、二度と会うことは無いだろうから。

俺は、もう死んでいるだろうから。

今朝の事だ。いつも通り学校へ通う道を歩いていた。そこで運悪く通り魔に襲われた。

重なった偶然により命を落とすのはあまり気分の良いモノではない。実際に未練は腐るほど残っていた。

真つ暗な空間で、通り魔に刺された傷の辺りから力が抜けていくように感じた。死という、生きている内は味わう事の無い感覚。どうしてだろう、恐怖より興味の大きい。

死者の魂はどこへ行くのか。この意識はどのように消えていくのか。止まる事の無い思考はより鮮明になっていく。

……鮮明に？

勇輝は弾かれたように起き上がり、目を開ける。

目に写るのは緑。草木で埋め尽くされた景色。

だが、刺されたのはコンクリートの道の上だった筈だ。少なくともこんな森の中にはない。

「ここは……？」

そして、ふと気づく。刺された傷が塞がっている事に。

しかし、夢だったという事はないだろう。現に血の痕はべっとりと服に残っている。

このままでは気持ちが悪い。仕方ないので、バッグの中から着替えを取り出して服を変える。

こんな森の中で白衣を着るのはどうかと思ったが、血だらけでいるよりは遥かに良いだろう。

足もすっかり動く。貧血という事はない。

まずは人のいる場所へ行かなければならない。かといって歩き回って森の中で迷って遭難しては死を待つだけになるかもしれない。

最悪、薬草なら分かるのでそれで餓えを凌げばよいので迷わない事に重点を置こう。

持ち歩いているメスを一つ取り出し、一番近い木にバツ印を着けた。

歩き回って数時間、少し小さな湖を見つけた。

日も落ちはじめているし、今日はここで火でも焚いて過ごそう。これほどの規模の森だ、熊や野犬ぐらいいるだろう。

荷物を置き、薪にするための枝を集めようとして湖に背を向ける。

「ねえ、アンタもしかして人間？」

後ろから人の声がした。少女のものだ。しかし、勇輝の背後には湖しかない。

恐る恐る振り返り、声の主を確認する。

そこには、青いワンピースのような服を着た氷の羽のようなものを持つ少女が湖の上、空中に浮いていた。

其の壱（後書き）

一話？プロローグ？まあ、導入の導入のような話になりますね。実は東方projectは一部キャラの名前すら正確に分からないのですが始めさせていただきました。

STGやwikiや他の作者様を参考にし、精一杯書かせていただきますので、お付き合いいただければ幸いです。

投稿サイトを使うのは初めてなのでとりあえず1000文字程度にしたのですが、長い短いがあったら言って下さると助かります。

このような拙い文章に目を通して下さりありがとうございました。

其の弐（前書き）

前回のあらすじ

主人公は刺されました。

其の貳

つまりは、そういう事らしい。

目の前の少女は人外存在。そして、こちらはただの人間。

だから冷静に、敵意や恐怖を抱かぬように対応する。

「ああ、人間だよ。君は何なのかな」

「あたい？ あたいは幻想郷でさいきょーの氷精よ」

少女は腰に手をあて、胸を張って言う。

幻想郷、氷精。意味は推測できるが現実味の無い事に変わりはない。

まず氷精。氷の妖精、精霊のどちらかだろう。

次に幻想郷。この土地、または世界を指す言葉。

「そうか、じゃあこの幻想郷で最強の君はこの近くで人の住んでいる場所へ俺を無傷で連れていく事が出来るかい？」

言動から察するにこの子は見た目に違わぬ精神だ。こうやって挑発を混ぜた要求には乗ってしまうだろう。

「とーぜんよ！ あたいはさいきょーだからカエルだって鬼だって凍らせられるんだから！」

「そうか、頼もしいな。けどもつすぐ暗くなるから明日日が上ってからでも良いかな？」

さすがに夜の森を歩くのは無謀だ。月明かりも差し込まない漆黒の森は猛獣の絶好の狩場といえるかもしれない。

「分かった。アンタはそれまで何するの？」

「寝るのは危険そうだからここでじっとしているよ。君は朝まで好きにしていってもらって構わない」

実の所、色々と考えて置かなければならない。

出所の分からない人物を簡単には受け入れてもらえないだろう。

幸いにも、医療に関わっている分交渉の余地はあるが、現実ではない。

この幻想郷という場所がどのような所か分からない以上は迂闊に気を許せないだろう。

もしかしたら、人間といっても特別な存在かもしれない。

人外が存在が普通にいるのだ、魔法使いや剣を振り回す騎士がいてもおかしくは無い。

バッグの中を探り、何か使えそうな物は無いか見る。

バッグの中には血のついた服、医学の参考書、救急箱、眼鏡、昼に食べようとコンビニで買った菓子パン、父親から貰った医療器具。

そういえば通貨は大丈夫だろうか、恐らくは別世界だろうし使えない可能性が高い。

携帯も使えないだろう。少なくともこの森の中では。

そして、さっきからずっとこちらを見ている少女の扱いはどうしたら良いのだろうか。

「えっと……、まだ何か用かな？」

「それって何？」

少女が指差したのは菓子パンの入った袋。

「ああ、これはパンだよ。チョココロネって言うんだけど食べたこと無いのかな？」

「無い。あたいは天才だけど見るのも初めて」

なるほど、少なくともこの子の知る限りではチョココロネは幻想郷に無いらしい。

そういえば言葉も通じているので、昔の日本とでも考えておけばいいのかもしれない。

少女はじつとチョココロネを凝視する。

「もしかして食べたい？」

少女が首を縦に振るのに時間はかからなかった。

勇輝の隣に座り、少女は幸せそうにチヨココロネを頬張る。

「これすごくおいしい！　どうやって作ったの！？」

「いや、俺は作れないんだ。君は名前とかってあるのかな？　いい加減、君って呼ぶのはどうかと思うんだけど」

「あたいはチルノだよ」

口のまわりにチヨコを浸けたまま少女、チルノは答えた。

「チルノ、か。俺は桜井勇輝、勇輝で良いよ」

しかし困った。これで何も食べずに朝を迎えなければならない。

生憎、魚は捕ることも調理することも出来ないので湖を前にして希望が持てる訳でもないのだ。

隣ではチヨココロネを食べ終えたチルノが満足そうな表情を浮かべていた。

口のまわりにチヨコがついたままなので、布で拭いてやる。

「ん…。そうだ、勇輝はやっぱり“外”から来たの？」

外というのは幻想郷の外という事だろう。

「よく分かったね。流石天才」

「そうそう、あたいは天才だから何でも分かるのよ」

先程チヨココロネが分からなかった奴の言う台詞だろうか、知らなくて当然なのかもしれないが。

「少し聞きたいんだけど、幻想郷って人間はどれくらいいるのかな？ やっぱり少ない？」

「十人くらいだと思う。はくれないの巫女とか魔法使いも入れて。他はあたいみたいな妖精や妖怪。あとは幽霊とか」

幻想郷。つまり幻想が具現化する場所と言ったところだろうか。

これなら医者への価値は上がるだろう。怪我をする機会も多そうだ。

「じゃあ、何で俺が外の人間と思ったんだ？」

「その格好だよ。幻想郷では見たことないから、もしかしたらって思ったの」

チルノの発言に思わず笑みを浮かべていた。

これで決まったも同然。幻想郷には医者はいない。

これでしばらくは衣食住は確保できそう。後は元の世界に帰れるかどうか。それを探さなくてはならない。

翌日、チルノに案内される家…いや、館にたどり着いた。

それは紅い館。鮮血にも似た紅で染められた魔の館。

其の弐（後書き）

チルノのターンは終了いたしました。

其の参(前書き)

前回のあらすじ

?に食べられました

其の参

紅い。とにかく紅い。

チルノの案内で屋敷が見える場所まで来たのだが、正直遠くても良かったから他の場所にしてほしかった。

これから、迷いこんだ外来者を突き通さなければならない。

チルノと会った事も伏せておこう。あくまで無知を貫かなければ面倒に巻き込まれるかもしれない。

紅い館に近づくと、壁に囲まれている事が分かった。

どこかに門でもあるのだろうか、壁に沿って歩いていく。

「……………」

門らしき物を見つけ、そこに向かって歩いていく。

そこには女の子が寝ていた。

「……………」

開いた口が塞がらないとはこういった時の自分の状態を言うのだろう。

見たことの無い緑色の服に赤い髪。容姿はかなり良いがどこか残念なオーラが感じられる。

「あの、ここの館の方ですよね……？」

「……もう、それ以上は……食べら、れ……ない」

定番、なのだろうか？

起こしてまで入るのはどうかと思うが、行き倒れては仕方ない。

「すみません。少し聞きたい事があるので起きてもらっても良いですか？」

肩を軽く叩いて呼び掛ける。返事が無い。

「……仕方ない」

寝ている少女の鼻を摘まみ、口を葉っぱで塞ぐ。

かなり非道な起こし方ではあるが、面識の無い相手に水をかけたり叩き起こす訳にはいかないだろう。

待つこと60秒。

「んん！？ んーッ、ぶはっ！」

「おはようございます。目覚めは最悪でしょうね」

急いで距離を取り、自分は何もしていないという態度をとる。

「あゝ、死ぬかと思いましたあ。ん？ お客さんですか？」

「気づいたら森の中で倒れていて、ここが見えたので。良ければ街に案内していただきたいのですが……」

本当はこの館に世話になろうと思ったが、嫌な予感しかない。

ここは早慶に立ち去るべきだろう。

「そうですか、大変でしたね。でも私は門番なので出かける訳にはいきませんし……。そうだ、咲夜さんに聞いてますから待っていて下さいね」

騒がしい人だった。

こちらの返答を聞きもしないで館の中に駆け込んでしまった。

かといって今更後には引けない。待つことにしよう。

「あの、連れてこいとの……」

戻ってきた少女の額には切り傷があり、血が垂れていた。

思わず顔をひきつらせてしまったが、少女はそれに気づく余裕が無
いようだった。

広い、そして不気味だ。

少女、紅　美鈴に案内されこの紅魔館へと入ったのだが先程から違和感が拭えない。

「美鈴さん、ここって何人の人が住んでいるんですか？」

そう、人が見当たらないのだ。

外から見た限りでは、少なくとも50人…その半分以上は人間ではないかもしれないが、とにかくそれだけの規模があった。

しかし、紅魔館の中で人とすれ違う事は一度もしていない。

「人間は一人ですね、人数なら六人です」

つまり、残り五人は妖怪か何からしい。

人数という事は、少なくとも人の形をしているという事。

「あの……人間が一人で人数が六人ってどういう事ですか」

そう、俺は妖怪の存在を知ってはならない。あくまで、無知な外来者を演じる。

「説明はお嬢様がするので。あ、こちらです」

目の前にあるのは大きな扉。高さは二メートルちょっとぐらい。

美鈴さんは門番の仕事に戻らないといけならしく、さっさと退ってしまった。

扉をノックして、手で押して開ける。

「……失礼、します」

この扉に触れてから妙な悪寒が走る。

この中に入ることを本能が拒絶しているのだろうか。冷や汗が頬を伝う。

半分だけ開けた扉から中に入り、自分を招待したであろう者達に視線を向けた。

「ようこそ、紅魔館へ。私がこの主、レミリア・スカーレットよ」

視線の先にいたのは二人の少女。

今口を開いた少女は、見た目は十歳かそこらに見える。しかし異形、その背には人にはある筈の無い一對の翼があった。

もう一人は、メイド服を来た一見普通の少女。見た目で推測出来る年は同じか少し下だろうか。

「……初めまして。桜井勇輝と申します」

名前を名乗り、軽く頭を下げる。ここであの二人の機嫌を損ねるのは得策ではない。慎重にしなければ。

「へえ、驚かないのね。突然だけど勇輝。あなた、血液型は？」

……いや、それって四分の一か三の確率で殺されるのでは？

容姿、今の質問からしてレミリアは吸血鬼。気に入らない血液型なら殺す。または気に入っている血液型なら食糧とするのどちらかだろう。

しかし偽ったところで後からバレるに決まっている。

「B型です。自分で採血して調べて事もあるのでま間違い無いかと」

レミリアはそれを聞くと、僅かに笑みを浮かべる。

「そう。それで何故勇輝はこの幻想郷へと来たのかしら？」

「自分でもよく分かりません。目が覚めたら森の中でしたから」

射抜かれるような視線に耐えながら勇輝は告げた。

「なら行く宛もないでしょうし構わないわね。桜井勇輝、この紅魔館で私の従者として働きなさい」

其の参（後書き）

キャラの口調などについては、各自脳内変換にて修正お願いします。

其の肆（前書き）

前回のあらすじ

中国に案内されました。

其の肆

「従者、ですか」

「ええ、もちろん衣食住は保障するし好きに暮らしてもらって構わないわよ。仕事さえしてくれたらね」

「仕事ですか、俺が役に立つような仕事場は紅魔館にはあるとは思えませんが」

それに、個人的な意思でも自分の分野をまるで活かせない仕事は御免だ。

せっかく医者として生きるためのスキルを学んでいたのだから、そういった役職に望みはある。

「では、勇輝には何が出来るの？　そしてそれは当然他よりも優れているのよね？」

正直、自信は無い。

父の仕事を間近で見っていた。時には手伝う事もあった。だが、同職の人間よりも優れていると過信したことはない。

「僅かなことかもしれませんが、医療に携わっていました。そこらの一般人よりは知識も腕もあるかと。この紅魔館で役に立つ技術かは分かりませんが」

「ならそれは捨てなさい。雑用が出来て血が吸えるなら十分だから」

レミリアの言葉に思わず拳を握りしめ、齒を食いしばって睨み付けてしまう。

今までの努力を否定され、必要無いと切り捨てられて。

だが、ただの人間である自分が吸血鬼に抵抗したところでどうなる。待っているのは死だけだ。

「……分かりました。従者として働かせていただきます」

自らの感情を押し殺して答えを出す。

「不服そうね。でも諦めなさい。この幻想郷で怪我や病にかかる事はほとんど無いわ、医者が必要になる事なんて何十年に一度かしらね」

レミリアの言い分はよく分かる。しかし、昔からの目標は簡単には諦められない。

「ええ、諦めますよ。“必要にならない限り”は、ね」

挑発とも受け取れる発言。しかしレミリアは楽しそうに笑った。

「咲夜、勇輝に部屋を一室。それと紅魔館の案内をして、適当な仕事を与えなさい」

「分かりました。お嬢様」

レミリアの隣に立っていたメイド……咲夜で合っているのだろうか。その子がこちらに向かって歩いてくる。

「私は十六夜咲夜。桜井勇輝で良いのよね、部屋に案内するから着いてきて」

こちらの返答を聞かないで咲夜は部屋を出ていく。少し予想外な行動に慌てて、後に着いていく。

今の広い部屋を出て、数分歩いたところにある部屋。そこに勇輝は案内された。

部屋の印象は普通に綺麗、ベッドにテーブル、クローゼット。生活に必要な物だけを置いただけのようだ。

「食事は広間、入浴は浴場、トイレ何かは適当に探して。他にも案内するから荷物を置いて早く来なさい」

嫌われているのかと思うほどやつつけ仕事のように扱われている気がする。

バッグをベッドの上に放り投げて、咲夜の後に着いていった。

「貴方が入っていいのはキッチンや広間、掃除を申し付けられた場所。絶対に入っちゃいけないのは私達の部屋、図書館、地下。それと、無闇に外に出るのも禁止。妖怪に食われて死にたいならどうぞ」

「分かった。部屋は分かるけど図書館と地下に入れない理由は？」

「図書館にはパチュリー様がいるし、地下に入ったら間違いなく貴方は死ぬわ」

化け物でも彷徨っているのだろうか。

そんな事を考えていると咲夜がその答えを告げる。

「地下にいるのはお嬢様の妹、あまりにも強すぎる力と、不安定な精神を持っているからお嬢様が軟禁しているの」

「なら死ぬそうに無いかな。俺は仮にも医者を目指してた、そういつた患者への対処法も学んだしカウンセリングの経験もある」

「近づいた瞬間に殺されるかもしれないから止めておく事ね」

あっさりと切り捨てられた。

「それで、紅魔館にはどれだけ働き手がいるんだ？ この広さで咲夜だけとは思えないけど」

「妖精メイドが数十匹。正直、今更人を増やすのもどうかと思うぐらい手は足りてるわ」

「じゃあどうして俺が？」

「血を貰うためよ。人里まで行って献血をしにくるのにも限界があるの、だから身近に血を吸える人間がいた方がいいでしょ」

「人間は俺以外にも一人いるって聞いたけど」

「それは私。吸血鬼は異性の血しか吸わないらしいの。転生しても血を捧げたいとは思ってたけど出来ないから仕方ないわ」

転生してまでやることではないと思うが、あまり触れないでおう。

「じゃあもう一つ質問。万が一、俺が逃げ出した場合の対処は？」

「それは……」

咲夜の姿がそこから消えた。そして、後ろからナイフを首筋にあてられている事に気づく。

「こつやつて、脅して連れ帰るしかないんじゃないの？」

「了解。馬鹿な真似はしないでおく」

冷や汗をかきながらもそう答える。どうやら人間でも普通じゃないらしい。

「今のは時間を止めたの。私の力は“時間を操る程度の能力”、使い勝手が良さそうでしょ」

「なるほど、確かに使えそうな力だな」

程度とついているが、十分すぎると思うのは気のせいだろうか。

とりあえず、回りに普通がないという生活を送っていかなければならないようだ。

其の肆（後書き）

とりあえず多くの人に見ていただけているようなので感謝してます。

もう口調とか性格とか本当に残念ですけど、まあ仕様ということで勘弁して下さいと助かります。

其の伍（前書き）

前回のあらすじ

紅魔館に雇われました。

其の伍

紅魔館で働き初めて三日、勇輝は与えられた部屋で参考書に目を通していた。

時間はまだ昼過ぎ、咲夜は働いている。

何故、仕事が回ってこないかという勇輝の家事スキルが絶望的に低かったためだ。

料理は出来ない。掃除は中途半端、選択は布を伸ばす。

よっているよりいない方がマシだと言われ、こうして部屋に閉じ籠っている。

本を閉じて、鉄格子のはめられた窓から外を見る。

紅魔館で窓のある場所は珍しい。レミリアが日光に弱いからだ。

「……暇だ」

血は何日分か蓄えがあるので不必要らしく、仕事もない。

これでは家畜だ。何か役に立つ事をしなければ。

自然と、意識は地下室に向いた。

レミリアの妹、精神が不安定らしいが実際のところはどんなのだらう。

軟禁で済んでいるということは、殺人鬼のように狂っていないという事だろう。

となると、回りの全てが敵に見える被害妄想者あたりといったところか。

それなら、時間をかけて治すことは可能だ。

ベッドから降りて部屋を出る。

このまま食糧として過ごすのは嫌だ。そして家事では役に立たない、逃げるにしても不可能だし何より行き先が無い。

考えながら歩いていると、地下室への階段にたどり着いた。

確かに嫌な予感がする。ここから降りたら二度と日の光を拝めないような気が。

しかし、一度刺されて死んだような身だ。このまま家畜のような生活を送るより危険な場所へ赴いて変化を求めるのも一興だろう。

階段を一段ずつ降りて、地下に降りる。

蠟燭の日だけが頼りの、少し広めの廊下。高さは四メートル、幅は六メートル程だろうか。

蠟燭は替えているのか減らないのかは不明だが、消えているものは無いようだ。

別れ道も扉も無い一本道、その奥へ奥へと進んでいくと、突き当たりにつだけドアがあった。

金属製の重々しい雰囲気が漂うドアのドアノブに手をかける。

これを開ければ、ただでは済まないのだろう。

しかし、勇輝は変化を求め、その重いドアをゆっくりと開けた。

「？ …… 貴方は誰？」

中にいたのはレミリアと同じような幼い少女。

背には奇妙な形の翼があるが、とても飛ぶために使う物とは思えない。

「初めまして。数日前からこの紅魔館でお世話になっています。桜井勇輝と言います。お嬢様には妹様がいらっしやると聞いて挨拶に来させていただきました」

現段階では、精神的に問題は無いように見える。

「ふーん、そうなんだ。それじゃあフランと遊んでくれる？」

大体の予想はつく。

断れば殺される。受けても死と隣り合わせな遊びなのだろう、ロシアンルーレットよりも生き残る確率の低い。

「構いませんよ。しかし、その前に少しお話をしましょう。楽しく

遊ぶためにはお互いに仲良くならないと」

「そうなんだ。でもお話って何を話すの？」

「まずは自己紹介しましょう。こちらはさっき名乗りましたので、貴女の名前を教えてください」

実はさっきから冷や汗が止まらない。話し方や外見からはとても危険など無いように見えるが、本能的な感情では今すぐにここを逃げ出したい気分だ。

「フランだよ。フランドール・スカーレット」

「ではフランドール様。少し注意していただきたい事があるので説明しますね」

「まだ話すの？」

「あと少しですよ。始めに言っておきますが、俺は人間です。フランドール様とは違い、脆く弱い存在。だから、力比べのような遊びはすることが出来ません」

「それじゃあどうやって遊ぶの？　もしかしてフランを騙した？」

一気に悪寒が走る。

ここで引いたら殺される。そう思っ言葉が続けた。

「いえ、フランドール様には違った遊びを楽しんで頂こうと思っています。少し紙とペンをお借りしても良いですか？」

フランは不満そうながらも頷き、机から紙と……クレヨンを持ってきた。

勇輝はそこに、黒い人と白い人。川に船を描きフランに見せる。

「ちょっとしたゲームですね。この迷路を解いてみて下さい。ただし、紙を破ったり何かを描き足したりしてはいけません。そうですね…三十分かけてもからなかったら答えを教えましょう」

「ただの迷路でしょ？ ならフランでも簡単に解けるよ」

そう言つてフランはスタートの場所から迷路の道を指先でなぞり始める。

五分かけて、出来る限り複雑に描いたが普通の迷路だと思っている限り絶対に解けない。

五分が過ぎた。フランはまだ迷路の道を指先でなぞっている。

十分が過ぎた。フランは紙を裏返したり上下を入れ換えたりしている。

二十分が過ぎた。

「無理っ、解けないよ」

諦めたようだ、しかしまだ十分残っている。

「そうですか、ではヒント……というよりちょっと残念なお知らせ

をしましょう。その迷路、スタートからゴールまで普通に繋がっている道は一つありません。頑張って裏技を見つけて下さい」

「……狡いよね、それ」

簡単すぎるものを出されても面白くないでしょう？という言葉に納得したフランだが、残り十分。ゴールまでたどり着くことは出来なかった。

「では正解を教えましょう」

勇輝は紙を折り始める。一度は谷折りで半分に、さらにその半分を更に半分の山折りに。すると…

「あ、道が出来た」

「さすがに無理がありましたかね。ルールは紙を破らない事、折っていけないとは言っていない」

もしかしたら卑怯と言われ、何かされるかと思ったがそんな事は無かった。

「ねえ！ 他には！？ 他には面白いのある？」

どうやら気に入って貰えたらしい。飽きるまでは殺されないか。

とりあえず見ていた感じでは、精神が幼く自分の力の強さを意識していない……いや、相手を殺す事などに罪を感じていないといったところだろうか？

つまり一般常識を叩き込むだけで良い。以外と楽そうだ。

其の伍（後書き）

ああ、もうなんか適当に……

其の陸（前書き）

前回のあらすじ

役立たずはフランのおもちや

其の陸

結局、フランに解けたのは最後の一問だけだった。

二十近く出したが、どれも難しかったらしい。

「解けたよ！ねえ、凄い？」

「はい。フランドール様はとても賢いですね。凄いですよ」

もう地下室に来て四時間程過ぎた。そろそろ戻って言い訳の一つで
もしないといけないだろう。

時刻で言えば夕方の六時、夕食の時間だった筈だ。

「フランドール様、申し訳ありませんが俺はそろそろ戻らなくては
いけません。レミリア様に怒られてしまうので」

「……フランを一人にするの」

「しませんよ。今回は挨拶だけという事だったので許可を貰わな
くはいけません。フランドール様の遊び相手になる許可を」

それでも、フランは納得がいけないといった表情になる。

「明日も来ます。約束しましょう」

そう言って小指を出す。

「何それ？」

「指切りです。絶対を守る約束をする時に使うものですよ」

やり方を教えて、指切りをする。

「ではまた明日。次はもう少し解きやすい問題を考えておきましょう」

地下室の扉を開け、階段へと歩みを進める。

「言い訳を聞こうかしら」

地下から上がってきた所を妖精メイドに見つかり、光の球をぶつけられて気絶。気がついたら最初に案内されたあの部屋にいた。

「衣食住を確保していただいているのに何もしないのでは申し訳ありません。ですので、せめて話に聞いていた妹様の遊び相手になるうかと」

その言葉を聞き、レミリアは一瞬驚いたような、信じられないという表情を浮かべる。

「スペルカードの一枚もないただの人間がフランと弾幕ごっこをしていたの…？いえ、それにしても静かだったし……」

スペルカード？弾幕ごっこ？聞き慣れ無い、というか聞いた事がな

い。

「失礼ですが、スペルカードとは何でしょうか？ちなみにフランドール様とは温厚にクイズで遊んでいただけです」

「フランがクイズ……想像できないわね。スペルカードというのは幻想郷での揉め事や争いに白黒つけるために使う札の事よ。最近は廃れてきたみたいだけど」

つまり、決闘的なものということか。

「弾幕ごつことは？」

「スペルカードを使った決闘の事。ちなみにフランはこれしか遊びを知らなかったわ」

つまりアレだ。死ねる確率は十分にあった訳で原因の六割近くがレミリアにある。

「他の遊びを教えればよかったものを……。別に時間がなかった訳ではないのでしょうか？」

「聞かないのよ。勇輝は運が良かったわ、咲夜は初めてあの部屋に入った時いきなりスペルカードルールで戦う羽目になったから」

死ななくて良かった。本当に死ななくて良かった。

弾幕は何回か見た、妖精メイドが紅魔館に入ってきた野犬のような何かに向けて放っていたり、野犬のような何かの侵入を許した美鈴に放っていたり。

そして、先程も威力が低いものだが自らの身を持つて受けた。かなり痛い、ボウリングの球を投げつけられたぐらいに。

「それで、勇輝は今後どうするつもりかしら」

「明日も行く約束してしまいましたし、お嬢様が許可さえ下されば教育係くらいは勤めることができるかと」

むしろ行かないと次に会ったときに弾幕で…。これ以上は考えないようにしたい。

「良い忘れていたけど幻想郷に住んでいる妖怪はそれぞれ力を持っているわ。少ないけど人間も、咲夜が良い例ね。私は“運命を操る程度の能力”、フランは“ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”。少しは自分がどれだけ幸運な状態が分かったかしら」

咲夜の時と思うが、何故“程度”とつけたがる。全知全能でも求めているのだろうか。

「それはお嬢様が俺を死なないようにしたのでは？」

「さあ、どうかしらね…」

とにかく、運が良かった事に変わりはないようだ。

「では、そろそろ夜も更けていますので下がらせて戴いても良いでしょうか？」

「その前に図書館に行きなさい。私の友人の魔法使いがいるのだけ

れど、…あとは本人に聞けば分かるわ」

「分かりました。では失礼します」

正直、気疲れしているのでさっさと寝たかったが図書館に本を取ってこいとかその程度の用事だろう。

……なら妖精メイドに頼めば良かったのではないだろうか。

しかし、気にしていても仕方ない。さっさと用を済ませて寝てしまおう。

図書館に入った事はないが、場所は大体分かる。

扉が妙に大きかったのを覚えているが、何故紅魔館は扉の大きさを均一にしないのだろうか。分かり易くて良いが。

そうやってあれこれ考えている内に図書館に着く。

重そうな扉は意外と軽く、見かけ倒しのようだった。

中を見れば扉よりも巨大な本棚がいくつもの列になっている。しかも空いている箇所は無く、何万、何十万という本が静かに並べられていた。

「……凄いな」

「えーと、どちら様ですか？」

図書館の様子に圧倒されていると、誰かに話しかけられた。

頭と背にコウモリの翼のようなものがついた赤い髪の少女だ。

「ああ、すみません。数日前からお嬢様にお世話になっています。桜井勇輝です。お嬢様から言われて来たのですが」

「ああ、貴方がそうでしたか。人相が悪いので侵入……何でもないです。パチュリー様がお待ちですので案内しますね」

……まともな人？だと信じていたのだが。

本棚の迷路を案内され、たどり着いたそこには本に囲まれながら読書をしている少女がいた。

其の陸（後書き）

実は紅霧異変の前だったりします。

其の漆（前書き）

前回のあらすじ

図書館でひきこもりを見つけました。

其の漆

本を読んでいた少女が、持っていた本を閉じて勇輝に視線を向けた。

「あなたがレミイの言ってた人間……私にはどこが面白いのか分からないわね」

「初めまして。用件は貴女に聞くようにお嬢様から言われたのですが、どういった事をやればいいんでしょうか」

眠い。それもかなり。

少女…パチュリーは物を見定めるように下から上へと目を動かして、一言。

「才能無し。レミイには悪いけど教える事は何も無いわ」

「そうですか。ちなみに何の才能が無いんですかね？ 家事は全滅していますけどそちらでしょうか？」

少々イラついた物言いになってしまった。

だが、疲れているのに才能無いから帰れ、と言われれば誰だって良い気はしないだろう。

「魔法よ。霊力が人並み以下だからそつちでどうにかしようと思ったのでしょうけど…。やっぱりスペルカードを作るのも無理かもしれないわ」

「スぺルカード……ですか？」

「一応人間でも使えるのよ。ただ、貴方は外から来たみたいだから霊力が弱い。代用に魔法を教えようかとレミイは思ったみたいだけど才能の欠片も見当たらないの。分かった？」

つまり、ここでも役立たず、と。

「霊力は増えたりはしないんですか？」

「鍛えれば少しは上がると思う。でも数年はかかるわね」

「では、力とは生まれ持つて備わっているものなのでしょうか。それとも、ある日突然目覚めるものですか？」

「……大体の妖怪や魔法使いは生を受けたその時から力は持つている。人間は力を持つていても発現せずに一生を終える者がほとんど。確率は幻想郷で産まれたら十パーセント。外はほとんど皆無、変な希望は抱かない方がいいかもね」

と言い終えるとパチュリーがパタンと倒れる。

「！？ 大丈夫ですか？」

「貧血だから……あまり大丈夫じゃないかもしれない」

「……とりあえず生活習慣を見直す事をお勧めします」

パチュリーを放置。図書館から出て自分の部屋に向かう。

勇輝が出ていった後、レミリアは咲夜を呼んで話をしていた。

「信じられる？ あのフランが人の話を聞いて、しかも大人しく人間と一緒に遊んでいたのよ」

「確かに色々引っ掛かる所はありますね。私はいきなりスペルカードルールでの決闘になりましたし」

昔、咲夜が初めてフランに食事を渡しに言った時は地下通路でかなりの規模の弾幕ごっこが繰り広げられた。

レミリアとパチュリーの二人ががりでフランを部屋に押し込んで事態は收拾されたのだが、フランはとにかく気がふれやすかった。

「パチエに弾幕を使えるように指導してもらおうと思ったのだけれど……やっぱり駄目かしらね」

「外から来た人間ですからね……。鍛えても妖精程度の戦力にしかならないと思いますよ」

実際、勇輝は頭の回転は早く手先もそれなりに器用だが体力は平均値、霊力は平均以下。スペルカードを一枚使えば霊力が切れるだろう。

「面白そうな運命が見えたのだけれど……やっぱり見間違いだっかしら？」

「どのような運命でしょう？」

咲夜の問い掛けに、レミリアは楽しそうに答える。

「咲夜がスペルカードルールで勇輝に負ける所」

部屋に戻ってきた勇輝は、テーブルに向かって何かを書いていた。

「……もう数学でいいかな。クイズ考えるの面倒だし」

何問も考えるのは面倒だ。死と隣り合わせなので必死に考えるのだが。

フランドールが地下に軟禁されている理由はその力の恐ろしさ故だったと分かった今、またあの部屋に戻るのも気が引ける。

対策に十字架でも作ってみようか……咲夜が殺しに来るだろう、多分。

それにしても、幻想郷にはまともな生物がないのだろうか？ 妖精に妖怪に魔法使い。咲夜は人間らしいが規格外な力を持っている。

レミリア達の言うスペルカード。自分には使えないらしいがどういうものだろうか。

もう寝よう。考えるのにも疲れた。

明日は……生きていられるだろうか？

さて、夜が明けて日も昇った。

何故、ベッドに血痕があるのだろうか……。

それに頭が少しくらくらする。貧血にでもなったかのように。

「まさか……」

真相を確かめるために咲夜を探す。

意外と早く見つかった彼女の手には赤い液体の入ったビンが。

「おはよう。気分でも悪いの？ 顔色が悪いようだけれど」

「それだけ血を抜かれたら気分も悪くなる。言ってくれば自分でやっただけ……」

「お嬢様が急に言い出したから仕方なかったのよ。三時間前だったかしら」

「三時間前って明け方だろ」

「寝る前に飲まない？ お酒か何か」

「て事はお嬢様は完全に日中寝て過ごすつもりか？ 日光に弱いつて言っても不健康だと思うが」

「たまにこうなのよ。昼間は行動が制限されるから夜更かしして、

昼間ずっと寝てるの」

「……そうか」

もう好きにしたらいいと思う。自分に害が出ないようにしてほしいが。

「あと、お嬢様から伝言。妹様、たぶん日付変更直後から待ってる筈。らしいわ」

咲夜から伝言を聞いた直後、勇輝は地下室に向かって全力で走り出した。

早くも死に一步近づいてしまった気がする。

其の漆（後書き）

現時点で全てにおいて役立たずの主人公（仮）です

其の捌（前書き）

前回のあらすじ

朝起きたら血が……。

其の捌

「……遅いよ」

トーンの落ちたフ란の声に冷や汗が伝う。

「申し訳ありませんでした。フランドール様……」

駄目だ、恐怖で頭が回らない。

「時間は言われてなかったから怒らないよ。今日来る約束は守ってくれたし」

無理だ、目だけが笑っていない。

「時間をお伝えしなかったのも俺のミスです。すみません」

誠意を持って謝ろう。それがほとんど回らない頭で考え出した答え。

「じゃあ、今日一日ずっとここにいたら許してあげる。いいよね？」

「……？ そんな事で良いのですか？」

「うん。だから昨日の続きしよ、今日はどんな問題？」

少し拍子抜けしてしまったが、命が助かったのなら十分だ。

「では最初にちょっと確認を。フランドール様は数字の計算が出来ますでしょうか？」

「それくらいフランにも出来るよ、……得意じゃないけど」

「ではこの問題が解けたら何か一つ、フランドール様の願いを“俺の叶えられる範囲で”叶えてさしあげましょう」

一部強調して言ったのは仕方ない。でなければ弾幕ごっこの地獄を見るか粉々に破壊されるかもしれない。

「ホント？　ならフランが諦めるまで答えをだしちゃダメだよ」

「分かりました。頑張ってください」

とんでもない地雷を踏んだ気もするが、一度宣言した事を訂正する程落ちぶれたつもりはない。

それに、この問題は高校の数学をクイズのように変えたただけ。早々解けるようなものではない。

現にフランは問題の書かれた紙を見て唸っている。

これならしばらくは時間が稼げるだろう。

しかし、ふと思ったのだが食事はどうしたら良いのだろうか。昨日の夜から結局何も食べていない。

……もしかしてこれはピンチなのではないだろうか。

「……あの、フランドール様」

「まだ考えてるから黙ってて。絶対に解けるから」

次は暴力になるかもしれない。黙ろう。

沈黙が続く事一時間。

「フランドール様……」

「黙って！まだ諦めてないから」

空腹を意識したせいか、さっきから胃が悲鳴のような音を響かせている。

そして更に一時間。

「フランドール、様。そろそろ……」

「五月蠅い！集中してるから黙って！」

泣きたくなってきた。

ずっとフランの様子を見ているだけ。暇だし腹が減ったし、いい加減許してほしい。

それから数分経つと、フランに変化が表れた。

首がカクンと揺れているのだ。レミリアの伝言通りなら夜からずっと起きていたのかもしれない。

それだけでなくも解けない問題とにらめっこして数時間経っているの

だ。眠くなるだろう。

「……フランドール様。いくら問題を見つめていても答えは浮かび上がってはきません。一度休憩にしてはどうでしょうか」

「……ん。じゃあ枕」

提案を受けたと思えば、勇輝の足を枕にしてすぐにフランは寝てしまった。

余程寝るのを我慢していたのだろうか。一分もせずに寝息が聞こえてくる。

普通の人間の子供のように無邪気な寝顔は、とてもフランが危険な存在とは思えない程幼さを感じる。

「……その駄メイドさん。死にそうなので食事を運んできてくれませんかー？」

両手を後ろにつき、顔を上に向けると後の扉から覗く咲夜が見えた。

咲夜は音を立てないように扉をゆっくり開けて、部屋へ入る。

「まさかここまで妹様が手玉にとられるなんて思いもしなかったわ。それと、貴方がそういう趣味だという事も予想外ね」

「どんな趣味だ……。というか本当に昨日の夜から何も食べてないんだ、持ってきてくれないか？」

「分かっているわよ。ほら」

咲夜がパンを取り出し、それを渡される。

「それと忠告。妹様はお嬢様と違って少食ではないから、気をつけて」

「干からびるかもな。遺骨はどうなるんだ？」

「死体は森に放り投げておくわ」

骨も残してくれないらしい。

「なら死ねないな。それと、お嬢様に今日はここから出してもらえない事を伝えておいてほしい」

「役に立たないのだから一生ここでもいいんじゃないかしら」

「ストレスで死ねるな、確実に」

咲夜は「馬鹿じゃないの？」と言い捨てて部屋を出ていった。

フランはまだ寝ている。

起こさないように体勢を変え、横になる。

どうせ暇だ。寝てしまおう。

まだ幻想郷に来て一週間も経っていないのだが、色々とありすぎた。

あの平穏な学園生活がひどく懐かしいが、戻れる確率どころか可能

不可能も分からないのだ。考えても仕方がない。

とりあえず今は休もう。

目を閉じると、数十秒で意識は落ちていった。

其の仇（前書き）

前回のあらすじ

フランと寝ました。

其の仇

真つ暗な闇の中、勇輝は意識だけをはつきりさせていながら体を動かせないでいた。

「気分はどうかしら。人の夢に入り込むなんてしたことないから不安なのだけれど」

聞こえてきた誰かの声。

聞き覚えは無いが、声から女性であることは分かる。

「いったい誰なのか……姿は見えない、ただ声だけが聞こえた。」

「もしかして話せないのかしら？ まあいいわ、とりあえず貴方が置かれた状況だけ説明させていただくわ」

置かれた状況……？ どういう事なのだろうか。

「あら、意識だけははつきりしているのね。思っている事が伝わってくるわ」

そうか、夢だからか。……疲れているのだろう。

「貴方が幻想郷に来てしまったのは偶然、貴方が刺されて倒れた場所に境界の歪みがあったから」

境界の歪み……何の事だ？

「それと、これはただの夢ではないわよ。私は現実に存在する、私の力は“境界を操る程度の能力”、夢と現実の境界を繋げてみたのだけれど。信じられる？」

どうせ信じようが否定しようが変わらないのだろう。どうせ幻想郷では異常が普通なのだから。

「良く分かってるじゃない。まだ幻想入りして数日だというのに」
幻想入り？

「この幻想郷に迷い混む事よ。主に私が原因の事だけど」

……おい。

「勘違いしてもらっては困るわ。貴方が幻想入りした事については私は関わっていないの、貴方は偶然にも境界の歪みに触れ、偶然にもこの地域に飛ばされ、偶然にも氷精に気に入られて一夜を無事に過ごし、偶然にも紅魔館に受け入れられ、偶然にもフランドール・スカーレットに気に入られただけなのだから」

……そう言われると随分と都合がいいな。

「……？ 貴方の力ではないのかしら」

そんな都合良く状況を操作できる能力があれば刺し殺されたりしないはずなんだが……。

「ああ、それもそうよね」

それで、いつまでこの状態が続くのだろうか。

「私が貴方の夢から出ていけば目が覚めるのだと思うけれど」

なら出ていってくれよ。別にこれ以上話そうと思うことはないのだから。

「つれないわね。まあ用があるわけでもないから今回はこれぐらいにしておきましょうか」

次第に鮮明だった意識が薄れ始める。

「あと、刺された傷を治したのは私ではないから」

目が覚める前、淡い紫色の服を着た女性が見えた気がした。

「……本当に夢、か」

目は覚めたのに何故か体がだるい。いや、重い。

「……フランドール様、何をしているのでしょうか」

仰向けになっている勇輝にフランが乗っていた。それに、首筋に噛みつかれている。

「お腹が減ったからご飯。いつもは料理されてたけど、無かったから」

料理がなかったら食品を生で食べる子なのだろうか……いや、殺されてはたまらないが。

というか咲夜に血を大量に抜かれているのでこれ以上血を失うのは命に関わる筈だ。しかし、頭はすっきりしているし貧血の症状は出ていない。

まるで、朝に血を抜かれたのは夢だったかのよう……。。

「……とにかく、寝ながら食事をするのはどうかと思いますのでどいてもらえないでしょうか」

「ん、もういいや。それよりさっきの問題を解かないと」

そい言つてフランは勇輝の上から降り、問題の書かれた紙を見る。

「……フランドール様、その問題はこれから考え始めなければ解けませんよ」

このままでは一生考えてしまいそうなのでヒントを出す。

フランもそれに文句は言わず、言われた通りに解き始める。

しかし、夢の中で言われた事。確かに今までの自分の状況は出来すぎている。もしかしたらもつと山奥に飛ばされ妖怪に食われていたかもしれない。チルノに氷づけにされ殺されていたかもしれない。レミリアが問答無用で殺していたかもしれない。フランに殺されていたかもしれない。

ここまでくると最早必然、ここでこうして生活することが決まっていたかのよう……。。

「……え……ねえつてば!」

フランの声で勇輝は我に返る。

「ど、どうかしましたか? フランドール様」

「問題解けたよ、これで合ってるよね?」

見ると、紙の端の方にフランの書いた答えが。

「はい、正解です。よく頑張りましたね」

「じゃあ約束。一つお願いを聞いてくれるんだよね?」

……ああ、そんな自ら地雷を踏むような発言をしていた気がする。

「何でしょうか? 俺に出来ることは限られているのであまりフランドール様にとって有益な事は出来ないかと思いますが」

「大丈夫。簡単な事だよ」

フランはニコニコと笑って、自分の願いを口にする。

「お姉様と結婚してフランのお兄様になって」

死ねと言われたような気がした。

其の仇（後書き）

ちよつと今更な主人公のプロフィール（幻想郷に来る前）

名前 桜井勇輝さくらいゆうき

性別 男

年齢 19

身長 約175

体重 約58

大学の医学部に通っていた。父親は無免許の医師、母親は幼い頃に死去。

手先は器用で頭の回転も早いのだが体力はあまりない。

たまに父親の仕事を手伝っていたため、ある程度の応急措置や対処法などは分かる。

髪は黒く、適当に伸ばしてありそれなりに顔立ちも良い。

このような人でした。

其の拾（前書き）

前回のあらすじ

爆弾発言からの……。

其の拾

「いくら何でもそれは無理かと……」

フランの発言をまだ全て理解出来ない頭を何とか動かして否定の言葉を伝える。

そもそも二人の見た目からして年齢は小学生低学年、またはそれ以下だ。

「どうして無理なの？」

「まず、俺にはその資格がありません。従者という身分ですから。それにお嬢様は幼すぎます」

「お姉様もフランもずっと歳上だよ？」

「は？」

「何百年も姿は変わってないけど、フランはもうあと何年かで五百歳。お姉様はフランより五つ上だし」

「……………ま、まあ年齢は良いとしても俺は従者です。結婚なんてとんでもありません」

詐欺だと思う。見た目の百倍の年齢とかもう詐欺だとは思えない。

「えー、じゃあフランとなら結婚する？ 旦那様でもいいから」

「申し訳ありませんがお嬢様に仕える身ですのでお嬢様の許可がないと出来ません」

それに無理だ。フ란の言っている事が本当なら…。

「それに俺は人間です。だからどうしてもお二人より先に寿命を迎え、死んでしまう。辛いものですよ、身近な存在の死は……」

フ란はそれを聞いて黙る。しかし、納得はいかないようだった。

「ですから、俺の事はただの使い勝手の良い召使いと思ってください。それ以上でもそれ以下でもない、小さな存在として」

考えようによつては拒絶に聞こえるかもしれない。だがこれが最良だ、ここに来て数日、会つて二日の人間を兄や夫と慕つて、それは彼女にとってプラスになるのか？

答えはノーだ。いつ死ぬか分からない程弱く、生きている時間は遥かに短い。

失うと分かっている近づく覚悟もない、小さなお願い程度で決めて良い筈が無い。

「……じゃあ、もういいよ。ここから出て行って、二度とこの部屋に來ないで」

「……申し訳ありませんでした。フランドール様」

本当に、役に立たない男だ。

ここでとどまる器量も度胸も無い、ただ小さな少女を傷ついただけ。ここに初めて来たときよりも重く感じる扉を開けて、部屋を出ていく。

「それで貴方は図書館に来て何がしたいの？」

「弾幕の一つ二つを使えるようにしたいので勉強を。そういう本つてありますよね？」

フランに部屋を追い出されてから丸一日。謝りに行こうと思ったが死亡フラグでしかないのは目に見えている。

真っ向からスペルカードルールでフランと戦い、酬いを受け謝る。それぐらいしか考えなかった。

「あるにはあるけど……その五段上、右から三十二冊目が人間用」

言われて手に取った本の題名は『妖怪に勝てる弾幕入門』、不安だ。

他の本の背表紙を見ると、『美しい弾幕の作り方』や『弾避け基礎講座』や『弾幕の神秘』など、内容に不安のある本が何冊もある。

「その辺りの本は何十年か前に貴方のいた外から来た本が参考になつてらしいわ。誰が書いたのかは知らないけど」

シューティングゲームの本でも拾ったのだろうか……。とにかく、弾幕を使えるようになるなら良い。

「これは持ち出しても良いのでしょうか？」

「駄目。中で読みなさい」

駄目だった。

とりあえず椅子を借りて、そこに座って本を開く。

最初に書いてあったのは弾幕は霊力を使い、攻撃弾を複数用いて作り出す物。……それぐらい分かる。

次に霊力について。人間は幻想郷の中でしか使えないらしい。霊力の概念やコントロールの仕方。

書いてある通りにしてみると、妙な力が体を伝うのが分かる。非科学的だがそれを自分で感じ取っているので否定は出来ない。

攻撃弾の生み出し方。試してみたが綺麗な球体にはならなかった。何度かやってみないと無理かもしれない。

スペルカードについても書かれている。重要なのは名前で、弾幕の形状を記憶させるためのものらしい。

ルールは使うカードの枚数、自機数を決めて、カードが切れるか被弾回数が自機数に達したら負け。

妖怪と違って攻撃弾の形状や打ち所によっては死ぬ。

また、最終的に自機数が同じで終わった場合は弾幕の美しさで勝負

を着けるらしいが、これは第三者がいないと不可能だろう。

「……後は色々試すしかないか」

まだまともに攻撃弾も作れないのだからスペルカード云々は後によろ。

本を元の場所に戻そうとしたら、小悪魔がやっておいでくれると言うので本を預け、自分の部屋に戻った。

「パチュリー様、あの方凄いですね。人間なのにもう力のコントロールが出来ていますよ」

「確かに早いけど、元々の霊力が大した事ないから無駄な努力なんじゃない？」

「あ、あはは……」

という会話があったのを知るわけもなく、勇輝は部屋で攻撃弾を作る練習をする。

銃型の攻撃弾、鎖型の…これは弾なのだろうか？ とりあえず色々と試している。

「無駄な器用さだな……」

一番辛いのは靈力の少なさ。形は色々出来るにも関わらず数が少ないし連続は出来ない。

そして空も飛べなかった。一ミリも浮かない。

これは大きなハンデになってしまふ。相手は立体に動き回るが自分は平面しか移動できないのだから。

かなり前途多難ではあるが、やっていくしかないだろう。

其の拾巻（前書き）

前回のあらすじ

何故か戦闘パートの兆しが。

其の拾壹

弾幕の修行を初めて一週間、満足の行くようなモノではないが一枚のスペルカードを作り上げた。

それ一枚を使うだけでもヘトヘトに疲れるので少ないなんて言っていられない。

つまり後攻になってしまふのだ。疲れた状態で相手のスペルカードを乗り切れるとは思わない。

とりあえず、後は実戦しかない。これ以上スペルカードを増やすのも不可能だ。

が、相手もないのにどうすれば良いのだろうか。

それに、今考えたらこれは逃げていただけなのかもしれない。

謝るならすぐに謝れば良かったのに、こうして理由をつけて、自分の安全を確保すると言いつつ傷つける手段を獲得しているに過ぎない。

本当に駄目な奴だ。

「……今日死んでも、自業自得か」

フランの部屋の前でポツリと呟く。

重い鉄の扉を開けて中を覗く。

壊れた家具、裂かれたぬいぐるみ、明かりの無い暗い闇。

「フランドール様。いらっしゃいますか？」

一歩中に踏み込んだ時、何かが顔の隣を通り抜け、頬を血が伝う。

「来ないでって、……言っただよね？」

そこにいたのは狂気に染まった赤い目をした悪魔。

「申し訳ありません。しかし、どうしてもお話ししたい事がありましたので」

返ってきたのは言葉ではなく弾幕の嵐。

勇輝はそこから弾かれたように通路へ飛び出す。

「フランドール様……ッ！」

「壊れちゃえ、壊れちゃえ、壊れちゃえッ……！」

降りやむ事の無い弾幕の雨を必死に避けるが、今にも当たってしまいそうだった。

体を無理に捻って避ける。その場から身を投げるように安全地帯に飛び込み避ける。

……どうやら、良くも悪くも今回の行動は正解だったらしい。

白衣のポケットから、まだ新しい札を取り出す。

「あはっ、弾幕ごっこ?」

「数は一枚、自機数も一機、負けたら相手の命令を一つ聞く。ですよフランドール様……」

スperlカードを持つ手が震えている。

「ならさっさと壊れちゃえ!! 禁忌『レーヴァテイン』!!」

赤いレーザー状の攻撃、空中に逃げられない勇輝にとってこれ以上無い程に有効な攻撃だ。

それをフランは剣ように使い、振り回す。しかもその後に小さな攻撃弾が続いているのでたちが悪い。

頭を落ち着かせ、冷静に弾幕を避ける計算を立てる。

まずは縦に降り下ろす攻撃、長さは五メートル、幅一メートルぐらいか。それを確認。

次はそれを横風ぎに振るわれる。剣の上は降り下ろした軌跡になるので不可能。床との僅な間を這うように避ける。軌跡に残る弾幕にも隙間はある、ある程度は動ける。

「まだ壊れない……早く壊れちゃえ!!」

再び横風ぎの一撃、今度は歯を返し切り裂くように振るっている。

これは上に飛んで避け、弾幕の隙間に着地。

嫌な汗が全身から吹き出す、当たったら本当に終わりだ。

一度、霊力の使い方を知ってしまったからこそわかる、フランの弾幕の強力さが。もしあのレーザーに触れたら間違いなく触れた部分が消し飛ぶ。

スペルカードの制限時間は一般的なモノなら六十秒前後。それ以下やそれ以上にも可能だが、短すぎても逃げ切られる可能性があるし、長すぎてパターンを覚えられてしまつては疲れ損だ。

まだ三十秒。

フランは軽々と赤い剣を振るい、勇輝を切り裂こうとする。

白衣の一部が焼け焦げた。少しかすつたらしい。

残り二十秒。反応が遅れて髪が少し焦げる。

残り十五秒。息が切れ始める。

残り十秒。体を思い切り捻りた折れ込んで避ける。無理に動いたせいか足首挫くが、避け続ける。

残り五秒。腕に少し攻撃弾がかする、皮を抉られ血が出た。

残り一秒。

「はあ……はあ……」

もう既に肩で息をしているが、勇輝は一分耐えきった。

フランも少し驚いているようで、目を丸くした。

「……はあ……次は、俺の番、です」

ぼろぼろの白衣から取り出したのはさっきのスペルカード。

「行きます。戯符『欠陥迷路の遊戯』」

まず、最初に生み出されたのは無数の鎖型の弾幕。

それはフランを狙うものではなく、二人を囲うための壁となる。

更に鎖は二人の間に幾つもの壁を作る。そして、上空に逃げられないように壁の高さで更に鎖型の弾幕が交差し、人が通れる隙間を埋める。

フランは自分を狙うものではないことを知り、静観していたが唐突に攻撃は始まった。

壁となっていた鎖型の弾幕がフランに向かい、乱雑に弾けた。

一瞬驚いたフランだが、別の通路へ逃げる。しかし、そこには勇輝が放った攻撃弾が飛んでいた。

横の通路に入り避けるが、それはフランの方へと向きを変えた。

「追尾弾!？」

フランは狭くなった通路を飛び、追尾弾を振り切ろうと通路を抜けていく。

幾度となく、壁となる弾幕が弾けたりどこからともなく飛んできた弾幕を避ける。

残りは二十秒。

そこで勇輝に変化が表れた。

「……は？」

膝から力が抜け、床に手をついてしまった。

霊力が足りないのだ。

それに伴い、弾幕の密度は圧倒的に少なくなり隙間だらけになる。

フランを追っていた追尾弾も消滅。

今の勇輝に、ここから勝てるほどの力は無い。

其の拾壱（後書き）

紅魔郷は百回以上ピチュリしました。今ではボムも全て消費できるようになりましたが。

其の拾貳（前書き）

前回のあらすじ

ピンチになった。でもどうせ勝つよね、初戦だし。

其の拾貳

弾幕が薄くなり、勇輝も霊力をほとんど使いきった状態。

「嘘、だろ……？」

おそらく、勝たなければフランは止まらない。そして、勝ちまであと数瞬だった。

結局は自分はただの人間だった。

ろくに弾幕を使えない霊力しかなく、自らが傷つけた少女を止めることも出来ない。

本当に、これで終わってしまうのか？

終わって良い筈が無い。

傷つけた少女を放っておくのか？

そこまで薄情なつもりなど無い。

フランドール・スカーレットを止めたくは無いか？

言うまでも無い。止めたいから、謝りたいからこうして戦いを選んだのだから。

しかし足りない。力が、霊力が。

自分にはそれが足りない。

もしあと数パーセントの霊力があれば。

もうあと数歩分の力があれば。

そんな欠陥が投げれば――

「……………嘘？」

フランに勇輝の弾幕が被弾した。

それだけではない。一度、薄くなった弾幕は最初の数倍の密度へと変わっている。

そして一分が経過したのか、弾幕は全て消滅した。

「俺の勝ちです。………… フランドール様」

「あ…………」

負けたことで我に帰ったのか、フランが申し訳なさそうな顔をする。

その視線は勇輝の腕に向いている。血の流れるその腕に。

「ああ、傷ならご心配なく」

この欠陥である傷は必要無い。

傷が少しずつ消え、何事も無かったように元に戻る。

「えっ……え？」

「どうやら医者っぽい力を授かれたようですよ。 “欠陥を修正する程度の能力”、らしいです」

「何それ狡い」

確かに狡いと思うが、使えるようになってしまったので仕方ない。

「いやあ、色々と面倒ですよ。付け加えた物は一日で消えますし、一日三回の回数制限もあるようですから」

ここまで理解しているのも、知らないという欠陥を知らず知らずの内に修正したため。今日はもう使えないのだ。

「では命令の時間です」

ビクッ、とフ란の体が震える。

勇輝はフ란へと近寄り、ポンと手を頭に置き言った。

「先日の俺の発言。アレを訂正させてください。そしてここからはお願いです」

フ란の頭から手を離し、目の高さを合わせるように屈む。

「俺を、これからもフラン様の遊び相手として部屋に招いてはいた
だけないでしょうか」

フランは頷く事が出来ない。自分が勝手に怒り、今日に至っては話
も聞かずに攻撃してしまったのだから。

「それと、俺は貴女に嘘をつきました」

「へっ？」

突然の勇輝の発言にフランが声を漏らす。

「どうやら、この力の用法を考えた結果……俺、死なないようなん
ですよ」

「え？ちよつと……何で？」

「あのですね。幻想郷に来る前に一度命を落としているのですが、
多分その時から微弱ながら力は使えていたんですよ。予想ですが不
幸という欠陥を修正し、幻想郷への歪みに触れた。幻想郷に着いて
から力はある程度の強さになり、死という欠陥、傷という欠陥を修
正したんでしょう。死が打ち消された俺は死ねない人間となる訳で
すね、歳はどうなるか分からないので明日にでも老化を修正してお
かなければなりません」

ポカーンとしてしまっているフランの頭を撫でる。

「俺は今日のフランドール様の行動を咎めません。ですから、あの
日嘘をついてしまった俺を許していただけませんか？」

「……………たら許してあげる」

か細い小さな声でフランは答える。

「何でしょう？」

「ちゃんと、フランを様をつけないで呼んでくれたら許してあげる」

「そうですか、では」

気持ちを切り替えるように咳払いをして。

「これからよろしく。フラン」

「うんっ！ お兄様」

……………え？

「また随分と派手に暴れたのね、フラン」

勇輝とフランが仲直りした数分後、レミリア、咲夜、パチュリーの三人が地下の通路へと降りてきていた。

フランは勇輝に後ろから抱きつき、レミリアを挑発するように……………。

「お姉様がお兄様を従者なんかにするのが悪いんだから」

「お嬢様。申し訳ありません」

「それよにもよく生きていたわね……スペルカードルールで決闘をしたのでしょうか？」

「数は一枚でしたし、ちょっとした収穫というか力の発現もありましたので何とか。やっぱりただの人間が使うには派手すぎるスペルカードだったようなので」

白衣はぼろぼろのままだが、勇輝には傷も疲れた様子もない。

「それで、力とは何かしら」

「えーと、“欠陥を修正する程度の能力”ですね。色々と制約のよくなものはありますが」

「……狡いわね」

レミリアの発言に後ろの二人やフランも頷く。

「確かに、今日中でしたら霊力も尽きないようですからね……」

今日使ったのは霊力の少なさ、知識、傷の三つ欠陥を修正。

次に使えるのは時計の指針が十二を指した時。

「とりあえず、これからフランの世話役として頑張rinaさい」

紅魔館での生活は、まだ始まったばかりである。

其の拾参（前書き）

前回のあらすじ

序章が終了いたしました。

其の拾参

「紅い霧、か」

「そう、お嬢様は日光に弱いから紅魔館の上空を霧で包むの」

紅魔館に来て2ヶ月。もうすぐ夏という事もあって日の光も次第に強くなってきている。

家事については、やったことがないのにやらされた。という事だったので一通りの説明を受けた今はある程度こなせるようになっていく。

霊力についても、能力が発現したことに影響したのか、一般人以上には増えていた。

パチュリーが何度もあり得ない、あり得ないと呟いていたが今は忘れてしまおう。

「それで紅い霧出すって言うても別に外で遊ぶ訳でもないんだろ？」

「……反射した日光で指が気化したらしいの」

「ああ、そう……」

吸血鬼は力が強い代わりに弱点が多い。

日光や流水、ニンニクに十字架。とりあえず多い。

「じゃあ、俺はフランに呼ばれてるから」

「暴れないでよ」

「……そうならないことを祈る」

実は、あの日から何度か弾幕での決闘をしている。

死なないとわかったフランは容赦がなく、何度か死に目に遭っている。

死なないのだが痛いし辛いし、うっかり回数制限に引っ掛かっていた時は大惨事だった。

便利さが仇になるとはこういう事を言うのだろう。

「あ、お兄様！」

扉を開けると、フランが駆け寄ってきて抱き付いていた。

「フラン、とりあえず中に入れてくれ。それと一度離れてくれ、閉めれないから」

最近では、フランはすっかり勇輝になついている。実の姉であるレミリアよりも……。

「じゃあ今日はこれを使って遊ぶか」

「カード……やった！弾幕ごっこ……！」

「カードだけどスペルカードじゃないから、トランプっていう一から十三までの数字がかかれた四種類とジョーカーが二枚。割と万能で色々な遊び方があるから一日潰すのは訳ないと思うぞ」

まずはババ抜きから。思った以上にフランは顔に出やすく、負ける気がしなかったが手加減して五分五分の勝負をする。

それにしても、紅い霧を出すのは構わないのだが人里に影響は無いのだろうか？

行ったことはないが数百人の人間が住んでいると聞いた。チルノのは数え間違えだろう。

それと、ここは島だったらしい。湖で見たのは対岸であって湖が小さかった訳では無かった。暗くなり始めていたのも影響していたのだろうか。

つまり、空を飛べない勇輝は人里に行けない。泳ぐ、船を作るのは構わないが食われて死なないようにと言われた。

まあ、ある程度信用もされ自由になってきていた。

「フラン。これで上がりな」

「なっ……!？」

十勝九敗、そろそろババ抜きはいいだろう。

「他の遊びでもするか？ ババ抜きだけじゃつままないだろ？」

「えー、フランまだ勝った数負けてるし」

「明日も出来るだろ、次は…」

ダウト、ポーカ―、神経衰弱、ブラックジャック。とりあえず色々やる。

神経衰弱はフランが途中でキレかけたため、今後やらない事にする。

「じゃあ、明日の朝にまた来るから」

「もう終わりー？ お兄様もここで寝たらいいのに」

「一応、他にもやらなきゃいけない事はあるからな」

「じゃあ明日はスペカ作ってきて弾幕ごっこね」

「一週間前にやったばかりだろ……。それも地下通路が崩れかけるまで」

弾幕ごっここの名の通り、スペルカード以外の弾は禁止しているのがキツイものはキツイ。

フランの頭を撫でてから、部屋を出ていった。

「それで、霧は出来なのかしら？ 咲夜」

「はい。お嬢様。先程から紅魔館の上空に展開しています」

「そう……。良くやったわ咲夜」

レミリアは、窓から紅い空を見上げ笑う。

しかし、霧はまだ放たれたばかりであり、当然隙間もいくつかあり、その隙間から夕日の光が射し込み、レミリアの髪に当たり、レミリアの髪が気化する。

「……う、ううう」

レミリアの体がフルフルと震え出す。

「咲夜あ……！」

そして、いつもの気品は何処へ行ったのか外見相応の子供のように咲夜に抱き付き泣き出した。

「大丈夫ですよお嬢様。髪はもう元に戻りましたし、あと少しで霧が日の光を通さないようになりますからね」

妙にうつとりとした表情で、咲夜はレミリアを抱き締めなだめた。

「……ぐすっ……」

そこに吸血鬼の威厳は微塵も無い。そして、そんな部屋に入っている度胸は俺には無い。

「……部屋に戻ろう」

レミリア本人に、フランと遊び終えたらこの部屋に来るように言われていたのだが、こんな所を見たあつては弾幕が飛んで来きかねない。

そつとドアから離れて自分の部屋に行こうとしたら。

「どこへ行くつもり？」

離れたドアから咲夜が出てきた。

「あ、ここだっけ。隣の部屋かと思ってた」

咄嗟に言い訳。咲夜は一瞬だけ疑うような表情をしたが、横を通り抜けていく。

「見なかった振りをしなさい。お嬢様もそれを望んでいるから」

小声だが、確かにそう告げて咲夜は自分の持ち場に戻る。

「勇輝。最近フランと決闘ばかりしているじゃない？」

「いえ。最近は部屋で大人しく遊んで下さる事が多いですよ」

「ふうん……。そろそろ日も沈むわね」

ああ、また嫌な予感がする。

「少し、殺し合いをしてみましようか」

其の拾肆（前書き）

前回のあらすじ

レミリアとやりそいです。

其の拾肆

レミリアの言葉に、フランと初めて会った時の感情を思い出す。

「……殺し合いとは物騒ですね。いくら力が目覚めたと言ってもお嬢様の相手になれるとは思いませんが」

「私も退屈なのよ。まともに行動できるのも夜だけ、ちょっとした余興よ」

余興で命を奪われては堪らないのだが。

「そうね……あと一時間もしたら月も出るでしょうし、中庭に来なさい」

どうやら、本気らしい。

憂鬱だが仕えている身なので文句も言えない。フランの相手をしているが、レミリアの従者なのだから。

「分かりました。殺し合いとの事ですが、攻撃に使うのはスペルカードのみでよろしいのでしょうか？」

「いいえ。相手がスペルカードを使っている時に隙さえあれば攻撃しても構わないわ」

それだけ聞くと、頭を軽く下げてから部屋を出た。

部屋に戻ると、使うスペルカードの確認を始める。

フランとの弾幕ごっこにより、数だけは増えているのだが使い物になるのは一部のみ。

フランと最初に戦った時のスペルカードは、カードの枚数を一枚に制限していたからこそ勝てたようなもの。正直、レーヴァテインで鎖型の霊力弾を破壊されたら負けは確定。

それに消耗も激しい。無駄が多いのだ。

「……逃げたらそれこそ殺されそうだしな」

自分で呟いておいて寒気がしたが、仕方ない。

十枚ほど候補をあげ、白衣に突っ込んでおく。

どうやら、時間も来てしまったようだ。

「スペルカードの枚数は五枚、三回ヒットしたら負け。これでいいかしら？」

「構いませんよ、精々最初一枚で負けないようにします」

霧のせいで紅く見える月に照らされる紅魔館の庭で二人は向かい合っていた。

紅魔館の玄関では、フラン以外のメンバーが今か今かと決闘が始まるのを待っている。

「張り合いがないのは面白くないから……勝者が何か一つ敗者に命令する。というのはどうかしら？」

「随分と面白みのない賭けです。どちらが勝つかなんて分かりきっているでしょうに……」

「もしかしたら勝てるかもしれないでしょう？」

「……既に“もしかしたら”の確率でしかないんですね」

「じゃあ始めましょうか……楽しい余興を」

二人の間の空気が張り詰めたものになる。

最初に動いたのは勇輝。

「解符『トラップパズル』」

最初に展開されたのはレミリアの身長の数倍もある球体の霊力弾。数は十。

レミリアの左右で、五つずつ直列に停止。レミリアは上空に移動するが霊力弾は追うように移動する。

続いて、かなり長く細い霊力弾。槍のようにも見えるそれを展開。数は三十。

まずは二本が、最初の霊力弾の間を通すように横向きに間を貫く。

レミリアも、小さな動きでそれを避ける。

続いて、二本、三本、四本。お互いに干渉しない様に、隙間を埋めるように槍は隙間を埋めていく。

ある程度の位置で停止するのが腹立たしい所だが、それがレミリアの動きを制限し始めた。

レミリアもそれに気づいて、霊力弾を放ち槍を破壊しようと試みる。

しかし、弾けた槍はその小さな破片をレミリアに放った。

「（最初こそ侮っていたけどかなり面倒なスペルね。コントロールも無駄に高い…）」

ここまで精密に操られると気味が悪い。正直な所、レミリアでさえここまでのコントロールは出来ない。

幸いにもスピードは無い、弾けた破片が少し速いが、一方向だけを気にすれば良いので問題ない。

残りは一本。これで相手は一枚消費。

しかし、レミリアは霊力弾の隙間から不敵にほほ笑む勇氣を見た。

「ッ！！」

最後の一本は、レミリアを狙うよう、真っ直ぐに飛ばされる。

全ての槍が横向きに停止している場所に。

そこからは、爆発が爆発を呼ぶように槍が弾ける。

数本破壊したが、二十近くは無視していたのだ。破壊したら次の攻撃に繋がってしまう。進んで破壊したくないのも頷ける。

そんな、楽をしたいという感情を利用し相手の周りを埋めるように爆弾を設置していくスペルカード。

正直、嫌らしいことこの上ない。絶対に嫌われる。知らずに最後まで避けていた人間からは苦情が来るだろう。

四方八方から飛んで来る弾幕。その一つは見事にレミリアに命中した。

ギャラリーからは驚きの声上がる。

「まさかお嬢様が最初のスペルカードで一機失うなんて……」

「お兄様は初見じゃ避けられないようなスペルカードを作るのが楽しいんだって。アレは狡いけど」

何故か地下からフランも出てきている。

「妹様！？ どうしてここに……」

「お兄様が戦う気がしたから出てきたの」

そんな理由で出て来ると思った者はいないし、妖精メイドもこの時間はうるついていないので出て来ないように対応するのは不可能だ

った。

肝心のパチュリーは観戦しに来ていて、レミリアは戦っている。

まあ、実害はなさそうだから良いかと、他のギャラリーは戦う二人に目を向けた。

「まさか私がこうも簡単に攻撃を受けるなんてね……」

「簡単では……無いです、ね。一枚で、これだけ精神的に疲れるのですから」

細かい操作が多い分、精度を上げるために集中を切らさないようにしなくてはならない。

「じゃあ、私も少し本気を出そうかしら」

レミリアがスペルカードを取り出す。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

其の拾伍（前書き）

今更ながら能力についての説明

能力名 欠陥を修正する程度の能力

- ・使用回数は一日三回まで。

- ・取り消す、元に戻す等は一生持続する事が可能だが新たに生み出したり、付け加えたものは日付変更と共に消える。

- ・欠陥と認識できない限り、修正は不可能。

- ・別に代償や副作用は無い。

其の拾伍

レミリアの手に、妖力で作られた深紅の槍が握られた。

どこか、フランのレーヴァティンを思わせるそれは、間違いなく殺すための手段として生み出されたもの。

今更だが、弾幕で競う勝負の筈なのに近接武器を使って良いのだろうか？

「行くわよ」

レミリアがグングニルを横薙ぎに振るうと、大きさ五十センチほどの妖力弾が勇輝に向かって猛スピードで放たれた。

その場から飛び退いて避ける事が出来たが、地面が爆発し爆風が勇輝を襲った。

「驚いている暇はないわよ？」

いつの間にか背後に立つレミリアから発せられた声に反応し、霊力で盾のようなものを生み出す。

簡単にそれは貫かれたが、標準を狂わせる事には成功した。

冷や汗が全身から吹き出す。

「やはり姉妹ですね。少し戦い方が似ています」

「余裕がありそうね。もう少し速さを上げましょうかしら？」

飛べない勇輝では機動力も行動範囲も相手に劣る。それでもここまです避けられるのは才能でもあったのだろうか。

レミリアが正面からグングニルを突き刺そうと振るう。

こちらからも攻撃を仕掛けているが、全て叩き落されていた。

「まずは一回」

突き出したグングニルを引き直さず。一回転。

それによつて生み出された霊力弾が勇輝にヒットし、体を大きく跳ね飛ばす。

「かはっ!？」

腹に直撃したそれは、肺から酸素を押し出し呼吸を狂わせた。

足や手をやられなかったのはせめてもの救いだ。まだ戦える。それに……

「手加減、ですか……」

今、グングニルで足の一本でも切り落とせば勝負はついたも同然だった。

突きに集中していた事もあって、全く反応出来ていなかったのだ。

「従者が刃向かった訳でもないのに壊しては勿体無いでしょう?」

「殺し合いと言ったのはお嬢様でしたがね……」

「あら、その割には最初のスペルカードに殺傷力が無かったような気もするけど?」

どうやらばれていたらしい。

精度を上げるためでもあるが、パワーが無かったのは事実。

「本気を出させたいのなら、勇気も本気で私を殺しに来なさい。でも安心して」

グングニルを構え、妖艶に微笑む。

「今からは殺しに行くから」

レミリアが、一瞬で距離を詰めて来る。

痛みを無視して立ち上がり、霊力弾を放つ。

あっさりと避けられたが、少しスピードは落ちた。

「偽符『サクリファイスドール』!」

スペルカードが、半透明な人型の霊力の塊と化して剣を生み出し、レミリアのグングニルを受け止めた。

「本当に器用ね……医者を辞めて物造りの職人でも目指したらどう

かしら？」

「医者にも手先の器用さなんかは必要なんですよ」

前方からはスペルカードによって生み出された者から、後方からは勇輝が、同時に霊力弾を放つ。

レミリアは、グングニルを消して回避に専念した。

どうせ、あと数秒しか持たないのなら邪魔になると思ったのだらう。

結局、一度も当てられないままスペルカードの効果が切れた。

「思った以上にやるようだけれど、これで終わりにしましょうか」

レミリアが二枚目のスペルカードを取り出す。

「『紅色の幻想郷』」

数十秒後、勇輝はレミリアに敗北した。

「……スペルカードで対抗してもこの結果か」

レミリアの二枚目のスペルカードに対抗するために勇輝も三枚目のスペルカードを使用したのだが、呆気なく負けてしまった。

庭に仰向けに倒れ、先程までの戦いを思い出す。

圧倒的な量と力の弾幕。

序盤は避けていたが、すぐにのみ込まれてしまったのだ。

「暇潰しにはなったわね。もう少し強いかと思っていただけだ。」

「申し訳ないです。期待外れでしたでしょうか？」

起き上がると思ったが、体に力が入らない。

「勇輝の能力で、洞察力や身体能力を向上させたのなら勝てたのではなかったの？ 加減をしていたなら殺すわよ。」

「…言い訳に聞こえるでしょうが、回数制限に達してしまっていたので。二つ修正した後にお嬢様から命令が下りましたので靈力を修正するのが精一杯でした。」

それを聞くと、レミリアは面白くなさそうな顔をした。

「なら、次は万全の状態で挑みなさい。また機会があれば申し付けるわ。」

それだけ言つとレミリアは紅魔館に戻っていき、ギャラリーも解散していく。

だが、一人だけ勇輝に近づく者がいた。

「まさかとは思つけど、お嬢様に勝てるつもりでした？」

「咲夜か。……勝てるとは思わなかったけど、勝つために戦つてた。」

未だに体は動かないので寝たまま話す。

「貴方は外に帰りたいとは思わないの？」

「どうしてそんな話になる？」

「外には吸血鬼も妖怪もいないんでしょ？ 美鈴から聞いたわ」

「ああ、そういう事か。お嬢様やフランにぶちのめされておいて、逃げ出そうって気にならないのか。答えは簡単、既に俺は外で普通に暮らしていく事が不可能だから。霊力やら能力が使える存在が普通じゃない世界で暮らしちゃ駄目だろ」

「……幻想郷から出る方法もあるし、外ではどっちの力も使えないと知っても？」

「お前は俺を追い出したいのか……。まあ、とりあえずは働くよ。向こうで目指す事はあったけど、それをこっちで叶える事は出来るだろうから」

それよりも部屋に帰りたい。こんな荒れ果てた庭で一晩明かすのは嫌だ。

「そう。じゃあ、あと三十分で日付が変わるから庭、元に戻しておいてね」

其の拾陸（前書き）

前回のあらすじとか要らないですよね

其の拾陸

翌日の朝、どうも調子が優れないので部屋で寝ていた。

ダメージも元に戻したし、昨日の疲れは残ってはいない筈なのだが体がだるい。

能力の副作用なんて事は無いのだが、どういう事なのだろうか。

「いつまで寝ているの……？」

「ああ、無断欠勤で悪いけど体の調子が悪くてな。特に病氣って事はないから看病なんかはいらない」

咲夜が起こしに来たのだが、だるさに負けて寝たまま対応する。

「分かったわ。じゃあ、妹様の所まで引きずって行けばいいのね」

「は？ え、ちょっと待て。足掴むな。あの、え……？」

石造りの床や階段を引きずり回され、地下室の前に捨てられた。

「あ、お兄様。…どうしてそんなボロボロなの？」

気配でも感じたのかフランが顔を出し、部屋の中に連れ込まれた。

「フラン。今日は少し楽な遊びで勘弁してくれ。体のだるさに加えて拷問並みの肉体的、精神的ダメージを受けたから」

階段を降りるのがあそこまで危険に感じたのは初めてだった。

「うん、別に良いよ」

しりとりで良いだろう。頑張れば一日を潰せる。

そして、次の日も、その次の日も体の調子は元に戻らなかった。

風邪や疲労でもなく、これといった病気の症状も出ていない。

とりあえず仕事（八割がフランの相手）はこなしているが、何とかしなければならぬ。

能力で打ち消してしまうのが一番楽なのだが、それでは原因が分からないので止めた。

「という訳で図書館への入室許可を頂きたいのですが」

「……分かったわ。それよりも勇輝、勝負の前の約束は覚えているかしら？」

「ええ、……命令でしたよね」

今思うと主が従者に命令するのは当然の事なので、大したリスクは無かった気がする。

「覚えているならいいわ。まだ考えている最中だから」

何を言われるかは知らないが、適当に聞いてこなしてしまえば良いだろう。

入室許可が降りたので、図書館へ行く。

相変わらず多すぎる本の中から探すのは不可能なので、小悪魔に聞いて案内して貰った。

調べるのは風土病や幻想郷特有の植物や虫。

自分で原因が分からない以上は、違った視点から見るとしかない。

知らない土地、知らない力。

自分の知る病ではない原因となるものが見つかるかもしれない。

とりあえず、目を通していくがこれといって有益な情報は得られない。

いや、有益ではあるのだが今知りたい情報はこれといってないのだ。

「貴方、霊力が相当弱くなっているけれど何かあったの？」

通りかかったパチュリーから声をかけられた。

「霊力が、ですか？」

「ええ、人並み以上にはなっていたのに最初に見た時より弱く。妹様にでも何かされた？」

「されていないのでこうして調べているのですがね……。ですが、そういう事なら調べる必要はないかもしれません。管轄外ですし」

霊力なんて、使っていても理解できないようなものだ。無理に改善する必要はないだろう。

「死にはしないでしょうから、しばらく様子を見ることにしますかね」

「どうでもいいけど、本は元に戻しておいてよ」

言われた通りに本を元に戻していくが、やはり体の調子は悪い。

だが、出来ることはないと普段通りの生活をしていった。

「侵入者？ 一体何が目的で……」

数週間が過ぎた紅い霧が月光を紅く染める中、勇輝は咲夜に叩き起こされていた。

「そう。霧が広がりすぎたみたいで止めようとしてきた奴が二人。どっちも人間だけど力はそらの妖怪を簡単に消し炭に出来るくらい」

「……化け物の間違いじゃ？」

「いいから起きる。貴方は一階の階段前で待機。その前にパチュリ様と私もいるけど警戒だけはしておく事」

「了解、まあ俺の所まで来ない事を祈ってるよ」

それだけ聞くと、咲夜は急いで持ち場に行くために部屋を出た。

とりあえず、白衣を着て自分の持ち場である階段に行く。

紅魔館の中は張り詰めた空気が充満していて、いつもよりも騒がしい。

館内には爆発音のようなものが鳴り響いているが、気にしないようにする。

「……面倒な。咲夜は倒されたのか出し抜かれたのか」

目の前には箒にのった金髪の少女が。

「メイドなら巫女と戦ってるんだぜ」

「巫女のせいで医者と魔女が戦いになっちまうのか……」

「医者が人に怪我させるのは不味いだろ？ だから通してくれ」

「生憎、ちょっと前に医者から従者に転職したんだよ。大人しく帰って寝ろ」

「この霧を止めてから寝る」

「……聞き分けのない女の子は嫌われるよ？」

少女がいきなり攻撃を仕掛けてくる。もうスペルカード云々ではなく普通の攻撃弾で。

同情するしかない。つい先程、十二時を回ったばかりだ。

霊力、体力、身体能力を修正。ただ、それを一括りの力として修正する。

これであと二回能力を使う事が可能なのだ。

こちらも応戦するために霊力で武器を作り上げる。

「そんな戦い方する奴は初めて見たんだぜ」

「そうだろ？ 俺も初めて使ったからな、これ」

作り出したのは鎖鎌。それも、異様に短い。

「それと、保険をかけとくか」

そう言つて霊力の壁で少女の入ってきた出入り口以外を塞ぐ。

「しまった……」

「俺を通り抜けてお嬢様の所まで行かせる訳にはいかないからな。倒れるつもりはないけど倒してから行け」

「じゃあ遠慮なく。恋符『マスタースパーク』」

「は、ちよっ!?!」

本当に遠慮の欠片もなく使われたスペルカード。それもデカいレーザー的な何か。

かわせば屋敷が壊れる事は必至。なら手段は一つ。

「っ！ 無理だろコレ……普通死ぬつつの！」

馬鹿高い威力のレーザーを霊力の壁で受ける。

尽きる事はないが、全てと言っても良い程の霊力を注ぎ込んだ。もう受けたくない。

「弾幕はパワーだぜ！」

「馬鹿だろお前！ 俺が一般人なら消し炭になってるぞ！」

「普通じゃない場所で暮らす人間が一般人の筈ないぜ」

「……ああ、納得」

咲夜が思い浮かんでしまったのは申し訳ないと思う。

「じゃあ、決闘といこうか。方法はスペルカードルール。枚数無制限、相手が負けを認めるか戦闘不能になるまで」

「分かったんだぜ。魔符『スターダストレヴァリエ』！」

「少しは落ち着けよこの野郎っ！」

其の拾漆

星形の攻撃弾を避け、叩き落とし、こちらも攻撃を仕掛ける。

「そろそろ帰っては……貰えないな」

「当たり前だ。こんな迷惑な異変を放置して置く訳ないだろ」

お互いに涼しい顔で会話しているのだが、その間には無数の弾幕が飛び交っている。

その一つ一つが一撃で相手を昏倒させる程の威力があり、少しでも気を抜いた方が負けるのはお互い理解している。

「異変？ 何の事だ？」

「とぼけても無駄なんだぜ。この霧が人里に住む人を苦しめて、それが結界の外に出るかもしれないんだぜ」

「……あー、そういう事だったか。俺の体調が悪かったのは霧が原因、と」

紅い霧は人間には有毒。たぶん霊力の量が関係しているのだろう。

だから普段霊力の少ない自分には症状が出て、霊力が多い咲夜には影響が無かった。

「分かったらそこを退いて貰うぜ」

「そいつは無理だな。俺も怒られたくないんだよ」

弾幕の嵐が激しさを増す。

「修正『ラビリンスボックス』！」

勇輝がスペルカードを使う。

少女の上下左右前後を五メートル程の霊力の壁で囲おうとしたが、
間一髪ので脱出されスペルカード一枚を無駄にした。

「幻想郷で一番早い私を捕まえようなんて頭が高いぜ」

「ホントに早いな、当たる気がしない」

「なら退いてくれ」

「断る」

「じゃあ帰るからあの壁を消してくれ」

「お帰りは後ろの通路になるんだけどな」

霊力に……少女の場合は魔力だろうか？それに限界があるのは間違いない。

一方で勇輝にはまだ余裕のある大量の霊力、高い身体能力。更には
あと二回能力使用が残っている。

このまま行けば勇輝の勝ちだ。

「じゃあ帰るから霧を止めてくれ。そしたら大人しく帰るんだぜ」

「悪いけど、俺にその権利は無くてな」

「そうか。なら、魔砲『ファイナルスパーク』」

最初に放たれたレーザーの二倍近くの大きさを持つレーザーが放たれる。

当然受け止めるのだが、レーザーの威力は二倍では済まなかった。

「やべっ、霊力が持たなっ……」

油断した。

大量の霊力を防御に回したが、先程までの戦闘で減ってしまっていたので持たなかった。

スペルカードが何枚も無駄になっていた事も原因だろう。

霊力の盾は割れ、光に飲み込まれる。

「……やったか？」

周りを囲っていた壁が消え、少女は煙の上がる勇輝がいた場所に視線を向ける。

確実に死んだ。そうでなければ目の前にいたアレは化け物だ。

少女がここに来るまでに美鈴、パチュリーを倒して来ているのだが二人ともここまでやる前に決着が着いている。

「あー、死ぬ。絶対死んでた」

「なっ!？」

煙の中から聞こえた声に少女は驚愕した。

少しずつ煙が晴れ、声の主の姿が見えてくる。

「酷えよな。俺だって人間だったのにあんな撃つか？普通」

砕けた床の上で崩れかけた壁に背を預け座り込んでいる勇輝の姿がそこにあつた。

「どう考えても人間とは思えないぜ……」

「それでも全身の骨がボロボロなんだけどな。自身を強化、白衣も強化。それでこのダメージだ、俺はお前が人間かどうか疑わしいよ」

霊力の盾が破壊される寸前に二回、勇輝は能力を使っていた。

一つは、自身の脆さを修正。もう一つは白衣に魔力への耐性の無さを修正。

少女の方も力を使い果たしたのか、箒から降りて座り込む。

「あー疲れた。もう動けないんだぜ」

「人の体をボロボロにしておいて良く言えるな。で、帰る気になったか？」

もう、能力は使えない。どうやらこのままじっとしていなければならぬらしい。

「んー。朝まで寝て行こうかな。どうせ霊夢がもうすぐ来るし」

「図々しいなお前」

先程まで殺し合っていたのに普通に談笑しているのは二人の性格からか。

「お、霊夢」

少女の視線の先には赤と白の巫女装束を着た少女が飛んでいた。どうやら咲夜は負けたらしい。

「魔理沙。アンタ負けたの？」

「勝ったけど引き分けだぜ」

そう言つて魔理沙は勇輝を指差す。

「巫女、咲夜……メイドは生きてるか？」

「さあ、多分生きてると思うけど寝てるわよ」

気絶か永眠か、気絶であつて欲しい。

「家のお嬢様は二階のあの通路の先の部屋にいる。出来るなら殺さずに終わらせてくれ」

「アンタ人間でしょ。さっきのメイドもだけど、どうしてこんな場所にいる訳？」

そりゃあ、好んで吸血鬼と同居する人間はいないだろう。

「咲夜は知らん。俺は外来人だから、どっかで保護して貰わなきゃ食い殺されるだけ。最初はそういう理由だな」

「今はどうして？」

「さあ？ 情でも移ったんじゃないの？」

力は持った。それなのに何故紅魔館に留まるのか。明確な理由は無かった。

その結果、こういった事に巻き込まれているのだが別に恨みなど微塵も無い。

「そう。じゃあ私はここのお嬢様をボコボコにして来るから魔理沙はこいつの見張りね」

それだけ言うと、霊夢は勇輝が指差した通路に飛んで行った。

「見張り……ね」

正直、もう戦えるとは思えない。

「服が汚れちゃったんだけど代わりとかないか？」

とりあえず目の前の少女を先に進めないだけ良しとしよう。

其の拾捌

「へー、便利なのかよく分かんない能力だな」

「そつちこそ、人間で魔法が使えるとは羨ましいよな」

何故か意気投合した勇輝と魔理沙は階段に座り色々と話していた。

「それにしても博麗の巫女、だっけ？そんな規格外なのか？」

「アイツを同じ人間だとは……思えないぜ」

どうやら比べてはいけならしい。

「家のお嬢様も吸血鬼だけど、どう思う？」

「持って一時間」

「ああ、そうですか……」

屋敷内は静かなものだ。どうやら外で戦っているらしい。

「お嬢様は殺されやしねーのかな……」

不吉だが、話を聞いていた限りではその可能性も否めない。

「死んだら私が雇ってやるぜ」

「……あ、忘れてた。ちょっと行ってくる」

フランが地下室にいたのを忘れていた。

万が一にでも今出てこられたら…考えたくない。

「急用か？」

「ちょっと感情的なお嬢様の妹の世話を。趣味は弾幕ごっここの危ない子だ」

痛む体を無理やり立たせ、地下への階段に向かう。幸い、ここからなら直に行ける。

「肩ぐらいなら貸すけど？」

「お構いなく。どうせ多少無理しても日付が変われば全快するよ」

魔理沙も疲れているだろう。むしろそうであってくれなければ幻想郷の人間を人間として見れない。

歩くこと十数分。地下室の扉を静かに開いて中を確認する。

「あ、お兄様だ。もう朝なの？」

どうやら気づいていないらしい。良かった、本当に。

「ちょっと寝苦しくて歩き回ってたら階段から落ちてな。それで目が覚めたから様子を見に来たんだ」

階段から落ちたにしては切り傷や擦り傷が少ないが。

「ふーん……」

少し疑うような視線を感じるが、何とか取り繕う。

「お兄様」

「どうした？」

「お兄様の怪我の辺りに知らない魔力を感じるの」

「き、気のせいじゃないのか？」

少し顔が引きつったのが自分でも分かる。

「それに、お兄様が部屋に入って来た時にお姉様が本気で戦ってるのを感じた」

どうやら、地雷を自ら踏みに来てしまったらしい。

「これだけは教えて。フランのお兄様に手を出したのは……誰？」

自分以外に向いている殺気の筈なのに寒気がした。あのフランと最初に戦った時よりも凄まじい。

「……お嬢様だけじゃ手に余るらしい」

誰とは言わない。今のフランと魔理沙が戦えば……魔理沙は死ぬ。

「分かった。お兄様は大人しくしててね」

すみません、博麗の巫女さん。

少し死ぬ気で頑張ってください、お願いします。

ニコニコと笑いながら部屋を出ていくフランを止めるには、勇輝は色々と足りなさ過ぎた。

「むきゅっ……」

魔理沙と戦い、最終的に本の山に潰されたパチュリーは小悪魔に救出されるも気絶したままだった。

「パチュリー様あ、しかつりして下さい！」

小悪魔が涙目で必死に起こそうとしているのは、つい先程地下室から巨大な妖力の持ち主が出て来たため。

確実にフランだが、だからこそ屋敷の外に出してはいけない。

吸血鬼の弱点を突くには、パチュリーの魔法が必須だった。

紅い月の夜は更けていく。

「くっ……」

レミリアはやはり、苦戦を強いられていた。

「そろそろ、終わりにしようかしら」

霊夢がスペルカードを取り出した。

「私が、人間なんかにつ……」

レミリアは身体中に傷があり、服もボロボロ。

しかし霊夢は服こそ少し破れているが目立つ傷は一つも無い。

一方的という程ではないが、圧倒されているのは間違いなかった。

「霊符『夢想封印』！」

七色に輝く七つの巨大な攻撃弾。それがレミリアを襲う。

レミリアはそれを避けたが、一つだけ勘違いをしてしまっていた。

その攻撃弾が真っ直ぐ飛ぶものだと思ってしまったからこそ、自分の後を追ってきた弾に反応できない。

敗けを覚悟し、レミリアは目を瞑る。

しかし、いつまで経っても弾がレミリアに当たる事は無かった。

「お姉様、勝手に出てきたけど今回は許してよね」

フランがレーヴァティンを使い、攻撃を相殺したのだ。

レミリアは驚きを隠せない。

“あの” 自分勝手なフランが。

“あの” 自分の興味が無いものを直ぐに壊すフランが。

“あの” 精神的に不安定で気の触れやすい…

「お姉様。アレを見て思ったんだけど、フランでも勝てないかもしれないけど……どうする？」

「あー、ヤバイ。幻想郷も今日で終わりかな……」

ボロボロの体を引きずり、魔理沙と庭に出た勇輝は空を見上げる。

二人の悪魔と変わった巫女が向かい合う、紅い空を。

「お前はあの金髪の娘が出てこないように行ったんじゃないの
か？」

「自ら導火線に火をつけちゃったらしい」

「役立たずだな」

否定は出来ない。

空気が張り詰めたものになる。どうやら闘いが始まってしまっ

しい。

「二対一、卑怯とは言わないけど面倒ね」

とは言っても、レミリアは相当消費が激しい。どう考えても勝ち目は無い。

風が吹いた、それを切っ掛けに弾幕が飛び交う。

レミリアとフ란の二人の弾幕を、霊夢は危なげながらも的確にかわしていた。

フ란は早くも当たりそうになってしまった。

吸血鬼の体は人間よりは遥かに丈夫だ。だが、それを些細なものに変えてしまうほどの威力を持った攻撃を霊夢は撃ち出していた。

博麗の巫女として生まれ持った才能と力。それが人間と妖怪との差を無くしている。

そして、勇輝と魔理沙は思い知らされる、彼女達との差を。

攻撃の質も、量も彼女達と比べたら赤子同然の力。

勇輝はフ란と、レミリアと戦った事がある。だが二人とも本気では無かった。

もし二人が最初から本気を出していたら、勇輝は今生きてはいない

だろう。

恐ろしくも美しい、弾幕の嵐。

それも長くは続かなかった。

レミリアが限界を迎え、被弾してしまったのだ。

力なく地面に落ち、体を叩き付けてしまう。

そして、ここからは不運としか言いようが無かった。

目の前の敵の強さに冷静さを失ったフランの、容赦の欠片もない攻撃がレミリアの倒れている場所に向かっていった。

其の拾仇

何故だか、分からなかった。

レミリアがやられて、地面に落ちて、フ란の攻撃がレミリアに向かって行つて…。

どうして俺は走っている？

吸血鬼がアレで死ぬとは限らないのに、自分の方が死ぬ確率は遥かに高いのに。

レミリアの腕を掴んで、思い切り投げる。

魔理沙と戦った時に使った身体能力の強化、どうやらかなり役に立ってしまつたらしい。

身体がもうどうなっているのかすら分からない。神経に異状でもあるのだろうか？

目の前に妖力の塊である光の弾がある、あれ程速かつたのに今はとてもゆっくりに感じた。

だけど身体は動いてはくれない。

上空のフ란がとても、後悔したような表情をしている。

レミリアは何が起つたのか分かっていないような顔、魔理沙は驚いているようだ。

巫女さんは後方にいるからどんな顔をしているか分からない。

死なないが、身体が再生する訳では無い。

能力は既に使い切ったし、身体が残るかすら分からない。

走馬灯というやつだろうか、まだ考えている時間がある。

何故レミリアを助けたのか答えは考えなくても、なんとなくわかる。

助けたかったのだ、人を。

レミリアは吸血鬼じゃないか、そう思う自分も居るが、会話をし関係を持った彼女を切り捨てる事は出来なかったようだ。

目を閉じる。

医者としてではないが、目の前の命を救うことが出来た。それで良いのではないか？

そういう行為を続けていく事が目標で、その手段として医者を目指したのだから。

昔の自分のようにはなりたくなかったから。

そして、フランの攻撃は地面と一緒に勇輝の姿を抉り取った。

その時、勇輝の存在は幻想郷から消え去ってしまった。

後日、紅い霧は消えレミリアは霊夢へ謝罪。紅霧異変は終結した。

「お嬢様、体の調子は如何でしょうか？」

数日後、紅魔館は以前……勇輝が来る前と変わらぬ生活が送られていた。

フランはあれから一度も出て来ていないし、食事も摂っていない。

美鈴は包帯が取れていないものの、門番の仕事を再開している。

パチュリーは相変わらず図書館に引き籠り、小悪魔はその世話を。

そしてレミリアは……。

「咲夜、あれはもう出来ているの？」

「はい、人里から先程運んで屋敷の裏に」

「そう、着いてきなさい」

後悔していた、あの紅い霧を使った事を。

咲夜から日傘を受け取り、屋敷の裏へ。

そこには墓石が設置されていた。「y u k i - s a k u r a i」と刻まれている。

勇輝の名前は分かるが、文字は知らない。

今までに何人も人間の死を見てきたが、こういったものを作ること
は無かったので平仮名は止めておいた。

十字架だと近づけないので、ローマ字の刻まれた日本風墓石と奇妙
なものになってしまったがこの際それは置いておく。

「咲夜、少し一人にして貰っていいかしら？」

咲夜は無言でその場を立ち去る。

それを確認すると、レミリアは墓石の前に屈んで話し始めた。

「勇輝。何故勝手に死んだのかしら？」

答えは返ってこない。

「貴方の能力なら、万が一私が死んだとしても生き返らせる事が出
来たんじゃない？」

確かにそれは可能だっただろう、勇輝も一度生き返った身だったの
だから。

「勝手に来て、勝手に居なくなつて……どこまで私たちを困らせれ
ば気が済むのかしらね……」

最初は、手頃な食料としてしか認識していなかった。

「いつもフ란の相手ばかりしていたわね、咲夜に聞いた限りだと面白そうな事をしていたらしいじゃない？」

実は、咲夜に何度も監視をさせていた。そして自分でも能力を使つて見ていた。

フ란はとてもよく笑っていた。楽しそうに、幸せそうに。

「まだ一度も私とは遊んでいなかったのよね……」

レミリアも、数百年生きていようと本質は子供だ。

我儘で、だけど紅魔館の当主としてそれを隠し大人のように振る舞つて。

「そういえば、命令は忘れてはいないわよね？」

答えは無い。それにレミリアは耐えられなかった。

「……………なさい」

絞り出したような声、だがそれは更にレミリアの感情を揺さぶる。

「戻つて来なさいよ！ 従者でしょう？ 主の命令を聞かないでっ…………私をこんな気持ちにさせてっ…………」

本当は羨ましかった。勇輝に甘えているフ란が。

本当は近寄りたかった、だけど無駄なプライドがそれを許さなかった。

「どうして……答えないのっ……！」

レミリアは泣き崩れる。

名を刻まれた墓石の前で。

「お嬢様っ！」

「咲夜……？」

いつもとは違い、冷静でない咲夜が駆けてきた。

「仕事をサボったあの中国が、人里でっ……」

……本当に冷静さを失っている。

「白い奇妙な服を着た男の噂を！」

レミリアは目を見開く。が、直に冷たいような、何か恨むような表情に変わり……。

「お嬢……様？」

「咲夜、屋敷をトラップだらけにしないで」

墓石を思い切り壊し、咲夜に告げる。

「ですが……」

「あの馬鹿だった場合、次は無い事を教え込まなければいけないの」
レミリアはそれだけ言うたとさつさと屋敷に戻ろうとする。

「お嬢……分かりました」

日傘ではつきりとは見えなかったが、笑っていた。

「トラップは軽めでいいわね」

咲夜も屋敷に戻る。

残されたのは、下に何も埋まっていない壊れた墓石だけ。

「凄いな、チルノ」

紅魔館への道で、最大の難関は湖だった。

飛べるように能力で補えばいいのだが、どうなるか分からないのであまり使いたくない。

なので、偶然見つけたチルノに湖を一部凍らしてもらった。

「当然よ、あたいは天才なんだから!」

「ありがとうな、また今度も頼むよ」

最初の餌付けが良かったのかもしれない。人里で傷を癒している時に貰ったお菓子で素直に聞いてくれた。

とにかく、紅魔館に向かわないといけない。

湖を渡り、森を駆け抜けて紅い建物を目指す。

あの場所に、帰るために……。

其の貳拾

「さあ、説明して貰おうかしら」

屋敷に入ったと思ったら、急に視界が反転し逆さづりにされ縄で巻かれてレミリアに差し出された。

「えーと、死んですらいませんでした」

言った瞬間、頬をナイフが浅く切り裂いた。

レミリアの隣に立つ咲夜の仕業だ、次を構えている。

「勇輝がふざけた返答をすると咲夜がナイフで攻撃するわ、次は足よ」

二人共本気だった。

「フランの攻撃が当たる瞬間、地面にスキマのようなものが現れそこに落ちました。そこで幻想郷の管理者の一人だと言う妖怪に会い、人里に飛ばされたんです。勿論、紅魔館に送るように頼んだのですが聞き入れてはもらえませんでした」

八雲 紫と名乗る妖怪に会った。何処かで会った気がしたが気のせいだったのだろう。

自分に興味があるらしく、偶然起きていたので助けたらしい。

「そう……。それで、何か言いたい事はないのかしら」

「言いたい事ですか？……ああ、お嬢様が無事でなによりです」

言った瞬間、レミリアが椅子から立ち上がり勇輝の側に近寄る。

そして、勇輝の頬をつねった。

「おひょうはは！？」

何故頬をつねられているなか分からない。そして力が強い、物凄く痛い。

「勇輝は私を心配させておいて、まだそんな態度をとるのかしら？
この口が悪いの？ それとも勇輝の頭には何も詰まっていないのかしら？」

そう言い終えると、レミリアは手を離れた。

「申し訳ありません。では、どう言った反応をしたら良かったのでしょうか……」

咲夜から二度目のナイフの投擲。

体を捻って避けたら、縄を切り裂いたのか巻き付いていた縄が落ちた。

「本当に馬鹿ね」

それだけ言って咲夜は部屋を出ていく。

「今から三つ数える前に何か言いなさい、言わなかったり下らない返答をしたら従者から奴隷に格を下げるわ」

レミリアの発言に勇輝は動揺する。

何を言うべきか。検討が着かないのだ。

そして、レミリアの目は本気だった、間違えば奴隷どころかミンチにされそうな。

「一つ」

思い出せ、ミンチになりたくないのなら。

「二つ」

早く、早く何かっ……。

「三つ。さて、遺言はなにかしら？」

「……お嬢様」

勇輝は慌てるでもなく、静かに口を開いた。

「心配をお掛けしてしまい、すみませんでした。それと、しばらく紅魔館を離れてしまっていた事、深く反省しています。不甲斐無い身ですがこれから従者としてお仕えしてもよろしいでしょうか？」

その返答に、レミリアは満足したような表情をして。

「駄目よ。勇輝は今日でクビね」

「はい？」

「従者どころか奴隷にもいらないうらいだわ。だから…」

レミリアは勇輝の手を握り、告げる。

「あの日、私の勝ち取った命令の権利、覚えているわよね？ 今日、今から勇輝は私の友人として接しなさい。勿論、呼び方はお嬢様ではなく名前で」

少し呆氣にとられてしまった。

何か変わった事を言われるとは思ったが、ここまで予想外だとう反応して良いのか分らなくなる。

一番ありえそうだと思ったのは家畜だった。虚しいが。

「何？ 拒否は駄目よ。これは勝負で勝ち取った公平な権利だっていうのは勇輝も認めたでしょう？」

「いえ、そのような事に使われるとは思ってもみなかったのです…」

「友人に敬語で話すの？ フランにはあれだけ砕けた話し方をするのに」

「え？ ああ、クビなんて言われたからマイナスなイメージしか浮かばなかったんだ」

「……切り替えが早いのね」

「そういう性格なんだ」

とは言っても敬語で話していた期間が長かったのでたまに戻りそうだが。

「それで、俺は従者じゃなくなったらしいけど住む場所はどうなる？ 人里にも面識ができたから出ていく事はできるけど」

「あの部屋を使っているわよ。どうせ余っているのだし」

金持ちの余裕というヤツか。

「じゃあ、そうさせてもらおう。フランにも会ってくるよ。もしかしたら自分のせいだと思い込んでショックを受けてるかもしれないし」

そう言うと、レミリアは嫌な事を思い出したかのように。

「アレは……病んでるわね」

どうしよう、行きたくない。まだ生きていたい。

だが時間が経てば経つ程に状況は悪化してしまうかもしれない。

「とりあえず、生きて帰ってくる……」と思う

「そこは言い切りなさい。それと……」

レミリアに腕を掴まれ、組み伏せられる。

勇輝の上で馬乗りになり、その幼い顔を近づけてくる。

「あの二人が食料庫を破壊してたみたいで、ストックが無くなってお腹が空いているの」

首筋に噛み付かれる。

注射器の採血とは違う感覚に、背筋に鳥肌がたった。

フランにも一度直接吸われたが、あれは傷口から出た血を飲んでいただけだった。

十数秒の間、二人は無言だった。

「ん。もういいわよ。小食な方みたいだからこれで十分」

「……従者はクビじゃあなかったのか」

「ええ。でも友人が困っているのに見過ごさないでしょう？勇輝は確かに自分に出来る事ならやりかねないので反論できない。」

「実は普通の人間と同じ食べ物でも死なない程度の生活が送れるのだけれどね」

「は？ いや、じゃあ今の行為の意味は？」

「無駄ではないわよ。人の血を吸わなければ妖力が落ちてしまうもの」

「そう……。じゃあ、フランの所に行くよ」

「分かったわ。あと……」

レミリアがその小さな腕で勇輝の頭を抱きしめた。

「……おかえりなさい」

「ただいま。でいいのか？」

フランは鎮めるのに半日程費やした。二度と無茶はしないと誓おう。

其の貳拾（後書き）

これで紅魔郷は終結ですね。

多くの方に見ただけでるようで嬉しいです。

幼稚な文章や表現であるかもしれませんが、これからもお付き合いいただけたら幸いです。

其の貳拾巻（前書き）

とりあえず新章的なモノをスタート、春までこんな感じですよ。

其の貳拾巻

「これはどういう事かしら？」

「あ！？それ…」

レミリアに呼び出されて来てみると、頭に鳩を乗せたレミリアがいた。

「そいつは伝書鳩だ。人里にいた時に捕まえてなつかせたんだよ」

「だから、どうして鳩が紅魔館の、私の頭の上にいるのか説明して」

確かに伝書鳩は用意したがレミリアの頭の上に乗るような飼育をしたつもりは無い。

「えっと、人里には医者がいなくってな。十年ぐらい前に死にまったらしくて代わりに診察や治療をする事にした」

「その連絡方法がこれ？」

「里に住むのが一番楽なんだけど、フランが何を言うか分からないからな…」

「住めばいいじゃない？」

「へ？」

「フランは説得してあげるから、人里に住めばいいじゃない。週に

一度帰ってくるのが条件だけど」

そういえば従者ではなくなったのだし、特に縛られる必要は無いんだ。

「じゃあ、一度里に行ってみて考えてみるよ」

鳩の足に巻かれた紙を外し、鳩を両手で抱えて部屋を出る。

先に近くの窓から鳩を飛ばし、自分の部屋からバッグを持ち出す。

バッグには紅魔館で使うことはなかったが、手入れはしっかりした医療器具が入っている。

流石に薬品は無いが、診察するだけなら問題ない。

紅魔館から人里までは歩いて二時間ほどかかってしまう。湖も渡らないといけないのでチルノを捜さなければいけないので更に時間にかかる。

人里からの手紙によれば、畑仕事の最中に人が倒れたとの事だ。熱中症だろう。

最悪、命に関わるので急がなければいけない。

「能力を使うか…」

しかし、どういう欠陥を修正したらいいのだろうか？

飛べない。は人間として欠陥ではないように思い込んでしまってい

るからか、出来なかった。

そう考えると身体能力や霊力も欠陥ではない気がするが、実際に足りない危機があったので欠陥と認識出来ている。

「…落ちればいいのか」

が、そこまでの度胸は無い。失敗したら今度こそ死ねる。

「あれ？勇輝だ」

湖に出た所でチルノに会った。今日は運が良い。

しかしその隣に黒い球体がふわふわと浮いている、触れないでおこう。

「ちょっと人里に行きたいんだけど、頼めないか？」

「分かった。お礼はお饅頭でね」

チルノが湖の一部を凍らせる。これで人里に向かう事ができるのだ
が…。

「チルノ…こいつは何がしたいんだ。というか何だこれは」

黒い球体が背中に体当たりしてくるのだ。威力がないので痛くはないが、鬱陶しい。

「ルーミアだけど、それが？」

「…質問が悪かったな。この黒いものは妖怪ですか、教えてください」

「うん、妖怪。確か人食い妖怪」

逃げた。聞いた瞬間に全力で湖の凍った部分を走る。

しかしついてくる。何故かスピードを上げて。

「…恨むなら自分の行いを恨めよ」

手に霊力を集め、黒い何かに向けて放つ。

黒い何かは自分からも当たりに行き、当たって弾けた。

「……妖怪は子供が多いのか？」

黒い何かが霧散し、中から小さな少女が出て来て。

湖に落ちた。

「やっちまっ たっ！」

急いで鎖型の霊力弾を作り、落ちた少女を引き上げる。

この湖、魚型の妖怪が腐るほどいるのだ、しかも肉食。

どうやら被害は無かったようだが、目を回して気絶していた。

「おーい、起きろー」

頬を軽く叩いて目が覚めるのを待つ。

「…うん」

どうやら気がついたようだ。

「……誰？」

そしてさっきまでぶつかって来たことを覚えていないのか、初めて見たような顔をする。

「あっちの館に住んでる人間。名前は桜井勇輝」

「そーなのか…。…食べていい？」

「駄目だ」

「そーなのかー」

……チルノとは違うタイプだが、この子は、馬鹿だ。

適当にあしらって人里に向かう事にした。

チルノが早く見つかったお陰で、時間があまりかからなかった。

しかし、ゆっくりしていたら患者がどうなるか分からない。

身体能力を修正し、急いで人里に向かった。

「先生！こっちです」

人里に入って直ぐに呼び止められ、倒れた人の場所へと案内された。連絡があつてから一時間も経っている。速足に患者の元に向かうと、五十代ぐらいの男性が木陰に寝かされていた。

「……熱中症ですね。過呼吸になつたりしませんでしたか？」

「いきなり倒れて、直ぐに気を失ってしまいましたので……」

「なら良かった。暫くは過度な運動はさせないでください、特に日中は。それと今からでも水と塩分を摂らせて下さい」

「塩ですか？」

「はい、汗で体の塩分と水分が不足した事が大きな原因なので」

「分かりました！」

そう言つて倒れた男性の娘だろうか、女性が近くの家に向かって走つていった。

とりあえずは大丈夫だろう。そう思つて次の目的地に行こうとしたが。

「先生！」

さっきの女性があわてて戻ってきた。

「どうかしました？」

「その、塩を切らしてしまっていて…。元々、幻想郷には海が無いので湖から少量だけしか採れなく、妖怪も出るので…」

「そうでしたか……。一先ず、親御さんでいいのかな？この人を家に運びましょう。日陰で風通しの良い部屋にお願いします」

そう言つて、勇輝が男性を背負う。

思つたより軽い。自分の力が上がっているからか、男性が本当に軽いのかは分からないが。

恐らくは両方。食料は自給自足、妖怪も出る。これでは満足に食事を取れる事の方が少ないだろう。

「ここでいいでしょうか？」

案内されたのは寢室。冷暖房が無いのでこういった位置に寢室があるのだろう。

「はい、申し分ないですよ。では起きたら十分な水分を取らせ、休ませて下さい」

「はい、ありがとうございました」

これは困る事も多そうだ。

勇輝は女性に一礼してからある場所に向かった。

其の貳拾貳（前書き）

色々と投げ遣り気味。あまり気にせずお読み下さい。

其の貳拾貳

「久しぶりだな、今日はどうした？」

「二人目の患者を見に来たのと、一つ慧音さんをお願いがあるんです」

上白沢慧音、半人半獣であり人里の私塾で教師をしている女性だ。

以前、紅魔館に行く前に人里に立ち寄った時に面識を持っていた。

「ああ、大抵の事なら引き受けるぞ。あの時の借りも返せていないしな。但し、一般常識の内で頼む」

「常識かどうかは微妙なところですが、空いている家屋がないか教えて欲しいんです。それと、可能ならそこに住みたい」

「？ 何の為に」

「病院とまではいきませんが、診療所を開こうかと思ひまして。だからと言つては難ですが、可能な限り里の中心……それに少し余裕のある広さが望ましいですね」

「それなら丁度良い物がある」

随分と早く、軽く一軒家を持つことになった事に物足りなさや不安を感じるが、この際どうでもいいかと気にしないようにする。

案内されたのは少し多きめで庭もある、少し洋風な建物。

「ここは昔いた医者が使っていた建物でな、そいつには子供も兄弟も居なく、ずっと空き家になってしまっていたんだ」

「……それは随分と都合の良い……というか、医者の一人や二人いてもおかしくないですよ」

里の広さは半径五キロ、人口は三百程度。むしろ年単位でいなかったことの方が疑わしい。

「無理もないんだ。里の者は皆、田や畑、家畜の世話で精一杯。年寄までな。それに子供には任せられんだろう？」

「……そうでしたか。一応聞きますが年間の死亡者数と出生数は分かります？」

「詳しくは分かんが、死亡者は二十前後、出生数は七、八ぐらいだな」

「死亡者の内、七割が病死。ぐらいですか？」

「後は妖怪の被害だ」

「どうやら思った以上に深刻らしい。」

生まれてくる人数の倍以上の人間が死んでいる。これでは遅かれ早かれ里は死ぬ。

「慧音さん。ありがとうございました。少し建物の中を整えてから挨拶に回ります」

「ああ、頑張ってくれよ」

慧音を見送ると、建物の中へと入る。

中は特に壊れた箇所は無く、変に変わった所は見つからない。

「埃は多いが……特に何もないな」

だが、あまり時間をかけるのは得策ではない。

欠陥である埃、汚れ、弱くなった木材等を能力で修正。

荷物を書斎のような部屋に置く。

どうやら診療所の役割も兼ねてくれていたようで、ロビーや診察室。その他には寝室、書斎、リビング。

前の家主の私物は残っていなかった。

外見もだが、中も洋風な作りになっていた。これは嬉しい誤算だ。

今更だが、幻想郷はどこにあるのだろうか。

言語からして日本、しかし里は武家屋敷やこのような洋風な建物があり、それでいて外との通信や流通は無い。

それに、紅魔館も……いや、気にしたら負けだろう。

挨拶回りをしていて、こんな若いのに大丈夫か？とか何者なんだろう

う。そんな反応が返ってくるかと思ったがそれは違った。

「そうかい、それは助かるねえ。時間があるならお茶でもどうだい？」

ある人には歓迎され。

「貴方はあの時の！ 本当に先日はお世話になりました、これで恩を返せるなんて思ってもいませんが持つて行ってください」

ある人にはもう……感謝しかされなかった。

実は人里に立ち寄った（妖怪に上空から落とされた）時に病にかかった子供を治療したのだが、それがこういった結果をもたらしたのかもしれない。

外では見ない病だったが、以前に紅魔館の図書館で読んだ知識が役に立ち、無事に助ける事が出来たのだ。

そのせいでフランに……思い出すのも嫌だ。

とりあえず、挨拶回りを終えて診療所に帰る。

何やら外の品物を扱った店もあったので今度見に行くとう。

「……飯、どうするかな」

次の問題。衣と住はどうにかなった。食はどうしようか。

通貨は外と変わらないので数日は持つ。が、それ以降はどうしたら

良いだろうか？

毎日のように病人が来る訳でもないし、里の人に分けて貰うだけというのは申し訳ない。

先程も、少しの米や野菜を貰ったのだが三日分ぐらいだろう。

副業を始めるか、自給自足をするか。どちらかを選ぶしかない。

「ん？」

足音がした。今いるのは書斎だが、木造のせいか音が伝わりやすい。

それに、足音はここに近づいてきているのだ。

数年空き家だったというし、誰かが来ることは無いと思うのだが…。

それに、何時間もかけて全ての家に挨拶回りしてここに住むことを告げたのだ。

と、言う事は患者だろうか？しかし取り付けた呼び鈴は鳴っていない。

ガチャツという音がしてドアが開く。そこにいたのは…。

「……勇輝？ あれ、死んだはず……そもそも何でここに」

黒い服に白いエプロン、そして大きな帽子の少女。

「魔理沙……お前何しに来たんだよ」

「ここは私の勉強部屋みたいなものだぜ。勇輝は何で生きてんだ？」

「死んでないんだよ。逃げたんだ。それに、今日からここが俺の家だ」

「就職難か、大変だな」

「いやクビになった訳じゃねーよ。それと、お前の家は？」

「あるぜ。魔法の森に」

「ん？じゃあ霧雨店って道具屋は？」

「知らないぜ」

何か聞いてはいけないような空気なのでこれ以上の詮索はしないでおく。

「他に私物が無いのに本だけ残ってんのはおかしいと思ったけど魔理沙のだったか……」

よく見ると、本のタイトルは怪しい物ばかりだ。全てが魔法に関係しているようだ。

「勇輝が住むんじゃ仕方ないな。本は少しずつ持っていく事にするよ」

「別に構わないけどな。本は一冊しか持ってないし、大体の事は暗記するように心がけてるからな」

「そうか？　ならそのままにさせてもらっぜ」

少し話をして、魔理沙は家に帰って行った。が、何かを思い出したように戻ってきて一冊の本を持って行った。

……そういえばレミリアに住む場所が見つかった事を報告しなければならぬ。

其の貳拾参

目を開けると、知らない天井だった。

「……ああ、住む場所変えたのか」

里に住み始めて二日目。時計が無いので時間が分からない。

寢室から出て、まず始めに向かったのは書斎。目的はその机の上にある大量の書類が何か。

「……さっぱり分からん」

実は、昨日魔理沙が帰った後、能力を使ってある知識の欠陥を修正して紙に書いて残したのだが、理解できたのは三割程だった。

そこに書かれていたのは薬品の作り方、材料、材料の取れる場所。

材料の名前だけ書かれていて、どんな姿形をしているのかまったく分からないのだ。

大学で取り扱ったり、紅魔館の図書館で見た図鑑に記されていたものは辛うじてわかるだけ、そしてその材料だけで作成できる薬は二種類。

傷薬と、胃腸薬。

「…傷薬はともかく、胃腸薬は」

そんな頻繁に腹痛の患者が現れるのか……無いな。

診療所を開いたからと言って、診察しか出来ないのでは役に立たないし生活費が稼げない。

幸いにも傷薬の作り方は分かるのだ。それを優先して作ろう。

傷薬の材料が書かれた紙を拾い上げ、確認する。

薬草が数種類。採れる場所は……。

「妖怪の山か、博麗神社周辺の森。後は霧の湖周辺か……」

妖怪の山、霧の湖の場所は分かるが博麗神社はどこに在るか分からない。

住んでいるのはあの巫女さんだろう。きっと神社周辺には妖怪が近寄らないで、安心して薬草が摘めそうだ。

あの巫女さんに近づく妖怪なんて……無謀を通り越して自殺志願者だ。

そうと決まれば場所を聞きに行く。慧音は私塾を開く時間だろうし、適当に見つけた人に聞けばいい。

薬草を放り込むための鞆を持ち、診療所の玄関の掛札を『本日休診』にして出ていく。

掛札は夜に作った。別に暗くなって明かりがなくて他にやる事がなかった訳ではない。

診療所を出てすぐに、一人の男に会った。

「少し聞いてもいいでしょうか？」

「はい？」

何故かブラウン管テレビを運んでいたが、そこは聞かない方がいいのだろうか？

「博麗神社つてどこにあるか分かります？ 昨日越して来たばかりでどこへ向かえばいいのか分からなくて」

「それなら東の端だ。歩くなら二日、飛ぶなら半日で着く」

「……マジかよ」

二日は…そんな診療所を空けるのは医者としてどうなんだろう。薬草を探す時間も含めて五日。駄目だ、そんなに空けられない。

「知り合いに数時間で行ける女の子がいる。頼むか？ 今日来るかは分からないが」

「…ああ、頼むよ。診療所の桜井だ。診療所で待てばいいか？」

「香霖堂の森近霖之助だ。別にどこで待とうと構わない」

「香霖堂…ああ、あの店か。見て待っていてもいいか？」

「邪魔さえしなければ」

この無愛想な奴が店員とは……まあ小さな里だし良いのだろうか。それと電気もなく電波も通じないのにそのテレビは何に使うのだろうか。

霖之助の後に続き、香霖堂へと向かった。

「凄いモンだな、これは……」

香霖堂に並べられていたのは勇輝が見慣れた、外で使われている物。霖之助はブラウン管テレビを空いている場所に置くと、レジの置かれたカウンターの椅子に腰を降ろし、置いてあった新聞を読み始める。

……子供なら泣いて逃げかねない空気の重さだ。

「ここの商品はどうやって仕入れてるんだ？」

「稀に幻想入りしたものを拾っている。使える物も、使えない物も」成程。見た感じ電化製品もそれなりに有る、それに外から来た身としては目ぼしい物ばかりだ。

まずパソコン。アレさえ使えたらいろいろと楽になる。薬品のリストや患者のカルテ、そういったものが作りやすくなる。

次にエアコン。もはや現代人には必須だった物。

残念ながら発電機は無いようだ。あればセットで借金して……土下座してでも買った。

「……残念だよな」

思わずため息を吐いてしまった。

「何が残念なんだ」

「ああ、俺、半年ぐらい前に幻想郷に来ただけどさ、こいつらが使えたらよかったのになーって思ったんだよ」

「使用方法が分かるのか！？　どうやったら使えろとか、使うために何が必要なのかとか」

「まあ、一応は」

「じゃあ、さっき拾ってきたそのテレビというものはどうしたら情報を受信できるようになる」

「そいつは無理だな。発信元の電波が幻想郷まで届かない……携帯も圏外だったし」

「そうか……ならこのストーブは？」

「これは、ここに石油を入れてここに電気を通せば……」

「電気か……。雷を使うのか？」

「ぶっ壊れるぞ。発電機があれば良かったんだけど……」

「作れないのか？それは」

「いや、作り方が……」

分からないなら、能力を使えばいいじゃないのか？

「……分かるな、うん」

「本当か！」

「ただ、材料がな……」

材料の取れる場所も、加工方法も能力で知れば……。

「希少な物なのか？」

「何とかかなりそうな気がしてきた」

レミリアに医者を辞めて職人になれと言われた事もあったが、副業でそれも良いかもしれない。…本職の方に申し訳ないが。

片手間で自家発電を一から作るとか、どんな天才だよ。

「森近。協力して発電機を作らないか？ 勿論二台」

「是非頼む。協力は惜しまない」

この日は人知れず、幻想郷現代化計画が発案された日となった。

「仲良いな……何時の間に勇輝と香霖は仲良くなったんだ？」

「あれ？ 魔理沙。昨日以来だな」

「知り合いか。なら丁度いい、箒に乗せて行ってもらえ」

「え？ その女の子って魔理沙なのか？」

確かに紅魔館で戦った時に箒に乗っている所を見たが…早かったな、弾幕が追いつかないのだから。

「勇輝は私に用があったのか？」

「んー、博麗神社まで行きたかったんだけど。頼めるか？」

「いいぜ。私は幻想郷で一番速いから神社までなら直ぐ着くぜ」

「それは頼もしいな。それよりもこの店に用があったんじゃないのか？」

「無い。香霖は品物を売る気も無いしな」

……エアコンを診療所に取り付ける夢が一步遠のいてしまった瞬間だった。

其の貳拾参（後書き）

気にしたら駄目です。色々と…。

其の貳拾肆

「境内には……あまり来たくなかったんだけどな」

魔理沙にしがみついて箒に乗り、夕方に迎えに来るからと境内に落とされた。

実は少し巫女さん恐怖症を患っている。原因は言わずともあの時の事だ。

殺されそうになったのはフランだが、その二人を圧倒していた巫女さんを怖がっていけないのだろうか？

魔理沙に負けた自分を攻撃しなかった所を見ると、戦闘狂ではないようだ……妖怪と間違えた。なんて理由であの世に送られる気がする。

しかし、随分と古い神社だ。見た感じでは百年以上前からあるのではないだろうか？

折角だし、お参りをしてから薬草を摘みに行こう。

財布を取り出して中を確認すると、小銭が殆ど無かった。

仕方ないので五百円玉を賽銭箱に放り込む。そして鈴の付いた紐に手をかけようとした時……

「ちょっと!」

後ろから肩を掴まれた。まったく気配を感じなかったので体がビクツと震えてしまう。

「今、いくら入れたの……？」

カクカクと不自然に強張った首を回して肩を掴む相手を見ると、あの時の巫女さんだった。

「五百円……です」

「ありがとうっ！」

物凄く感謝されました。

更に、お茶まで出していただきました。

「ああ、そうなんだ……」

話を聞く限りでは、こんな場所にある神社に来る物好きは妖怪だけらしい。人間は道中の妖怪が恐ろしくて近づかない。つまり、賽銭による神社の収入はゼロ。

「それで勇輝さん。どうして博麗神社に来たの？」

賽銭の影響か、さん付けで呼ばれてしまっていた。まあ年も上だろ。うから違和感はない……はずなのだが。

霊夢と同じか年下の魔理沙、見た目少女のレミリアには呼び捨てにされているのでこう……何かむず痒い感じがする。

「ああ、紅魔館を出て人里で診療所を始めたんだけど、薬がまだなくてな。その材料の薬草を採りに来たんだよ」

「……医者、つまりは……」

霊夢がブツブツと何かを呟く。お金、とか収入、と不穏な単語が飛び出す辺り、相当金銭面に厳しい。

まさか脅迫されて金を搾り取るつもりではないだろうな。なんて考えてしまう。

湯飲みの中のお茶を飲み干して立ち上がる。

「じゃあそろそろ行くよ。お茶ありがとう」

薬草は自然に影響が出ないくらい取るつもりなので、時間は多い方がいい。

「ちょっと待って!」

ガシッと、霊夢が白衣を掴む。

「私も手伝っわ。どうせお客さんは来ないし、神社の周りは妖怪だらけだから」

「……はい?」

妖怪が、多い?

少ないと思ったからこんな遠くまで来たのですが。

ちよつと霊夢さん？もしかして妖怪退治サボってませんか？

なんて不満を感じながらも素直に手伝ってもらう事にした。

もちろん霊夢の考えはこうである。

「医者ならお金持ち、つまり仲良くなれば遊びに来て、神社に来たら賽銭を……」

勇輝が薬草を探している時、ずっとこんな事を呟いていたとか。

そして時間は過ぎていき、太陽が降り始めていった。

「……昼飯、考えてなかったな……」

爆発音の鳴り響く森の中で、空腹を感じ辺りを見回す。

木、草、妖怪、巫女さん。食べられそうな物はない。

それにあの御札は何なのだろう。木に突き刺さるし、妖怪が爆発する。

怖い。下手な銃弾の流れ弾より怖い。

何か妖怪の腕らしき物が転がっているが見なかった事にしておこう。

人型以外の妖怪はあまり見た事が無かったのだが、今霊夢が相手しているのは全部それだ。

人型の妖怪に比べ、知恵も力も断然劣るらしい。

それにしても空腹だ。

……妖怪って、食べるのかな。

しかしそこは現代人としての理性で抑える。ゲテモノは珍味だとか
旨いとか言われても未確認生物は食べちゃいけない。

考える、宇宙人やユーマは食わないだろう？目の前の熊みたいな生
物だった欠片はそれと同じ。どうせならちゃんとした熊を食え。

……あれは、林檎？

林檎的な果物が生っている。

近づいて一つ採ろうとする。

「キシヤアアアア！！」

顔があつた。妖怪だ。

「……刺されて来たせいか夢見心地だよな、反応が」

最近自覚が出てきたのだが、チルノを見たときやレミリアを見た時
の反応が尋常ではないくらい薄い。

グロテスクな物はよく見ていたが、未確認生物を見たのは幻想郷に
来てからだ。

幻想郷では確認出来ているとか、そういう事はこの際気にしないで
おく。

「霊夢！ 薬草も必要な数集まったから一度安全な場所に行きたい
んだけど、神社に行つて良いか？」

未だに妖怪を倒し続ける霊夢に聞こえるよう大きな声を出す。

「ん？ もう終わりでいいの？」

疲れのまったく無い声で霊夢は答える。どうやら霊力は有り余る程
の量らしい。

妖怪の屍は百を超えているのだが……。

それと、人の恐怖心や畏れによって産み出された妖怪は屍が自然消
滅した後に復活するらしい。放つておいても問題ないのだ。

薬草を詰め込んだ布袋を背負い、霊夢の後に続いて博麗神社へと戻
った。

神社に戻つてからは、二人でお茶と和菓子で和んでいた。

「そついえば勇輝さんはどうやって此処に？」

「魔理沙に送つてもらった。俺は飛べないからな」

能力を使えば一時的に飛べない事も無いだろうが、飛べなくても苦
労しないので飛べないままで良いと思つていた。

しかし、こつやっで薬の材料を集めるには飛べない事は不都合にな
っていくだろう。

「それなら、私が飛び方を教えようか？」

閑話壺（前書き）

紅霧異変の時の話。

実は本編に入れるのが面倒で書かないつもりだったのは言わない約束。

閑話巻

レミリアの身代わりになり、死を覚悟した。

ゆっくりと流れる時間。勇輝は目を閉じ、自分の最後を迎えようとする。

すると、地面が消えた。

重力に従い落下していく、慌てて目を開けると…。

「ッ!？」

視界に広がるのは眼、眼、眼。赤黒い空間の中に張り付くように存在する無数の眼。

開腹手術は見た事があるが、その時よりも嫌悪感と恐怖心を抱いた。

思わず胃の中から何かが込み上げて来るが、何とか抑えた。

足は付く。しかし、まだ底は無限に続いているように感じる。

上も、下も、前も、左右も。同じ、無限に続く赤黒い空間だ。

「気味が悪いな……、これが地獄だつたりするののか？」

「人の空間を地獄呼ばわりなんて酷いですわ」

「……………」

後ろから声がしたので振り向くと、両端にリボンの付いた出入口？があり、そこから女性が出てくる。

「初めまして、人間さん」

扇子で口元を隠しながら話す女性は、どこか神秘的なものを感じさせる。

「アンタ、どこかで会った事あるだろ。その声は聞き覚えがある」

「会ったのは初めてですわ。話すのは初めてではないですけど」

「前とは口調が違うな、夢に入り込んだと言ってた奴だろ？」

普通に話しているが、警戒心は微塵も緩めてはいない。

目の前の妖怪には、フランやレミリアを凌ぐ程の妖力がある。自分からしたら三人共化け物である事に変わりはないのだが。

「そう警戒しなくてもいいのよ？私は今の所、貴方をどうこうする気はないもの。ただ、興味があつたから助けただけ。口調はそういう気分だったの」

「……幻想郷に入った理由なら仮説は出来てる」

「そう？ 聞かせて貰っても？」

「まず、刺された時。ここで自分の運のなさを怨み、微弱ながら能力が発動した。多分、不幸という欠陥を修正し、消し去った」

幻想郷の外では能力も、霊力も、妖力も、魔力も極僅かな力でしかない。だが、何故か能力が発動し、欠陥を修正したのだ。

「だから、幸運にも幻想郷へと繋がる歪みに倒れこんだ。幻想郷なら能力は十分に発揮できるからな」

歪みはそこにあつたのか現れたのかは分からないが。

「そして、死ぬという欠陥を修正した。無意識だったから上手く修正ができていなかったんだな。再生や不老不死ではなく、死という不祥事が起きなくなった。傷を元に戻したのはこの後だろ」

「それが、貴方の能力……」

「今回もそういう事だろうな。俺の能力は元に戻した事や消した事は日付が変わってもリセットされない。不幸が起きない俺は、幸運にもお前が見ている時にレミリアを庇っていた」

補足だが、能力についての知識は付け足したモノになるが、声に出す事で新しい記憶、知識として残っている。

「次はアンタの事を聞かせて貰いたいんだけど。どういう存在で、何が目的なのか」

「私が気に入ったのは、貴方の能力の副産物みたいなモノという事ね……。まあそれも良いわ。私は八雲縁、幻想郷に古くから居る妖怪で一応、外との境界を管理している形になるわ」

「へえ……。じゃあ、俺を助けたのに特に理由は無い訳だ」

それなら、能力によって幸運しか起きなくなってしまった結果のようなものだろう。

幸運にも程度があるだろうが……。でなければフランにボコボコにされた日々、レミリアと戦う事になったあの日の説明が着かない。

打ち所が良かった。程度の幸運だったのだろう。

「これも貴方の力で誘導されているのなら気に入らないけれど、今の会話の中で私からの好感度は上がったわよ？」

「どこに上がる要素があったのか分からない」

「頭の回転も早いし、芯が通った眼をしている。それに私相手でも尻込みしないでそれだけ話せているでしょう？」

「最後のについては強制的に身に付いたようなものだから。親父と一緒に危ない薬を使う組に治療しに行った事もあるから……」

物怖じしていると見下され、つけ込まれる。

堂々としていないと逆に危ないのだ。そういった意味でも父親は尊敬できる。

「あと、本当に誘導されているか確かめる方法もある」

不幸が起きない。一見、欠陥では無い気がするが十分な異常だ。それを元に戻してしまえば良い。

「じゃあ、やってみて貰えない？」

「今日は無理だな、使用制限回数に達してるから。それに体もボロボロなんだ、休ませて欲しい」

紅魔館に帰って寝たい。

「じゃあ……」

紫が薄く笑うと何か不思議な感じがした。

「今日と明日の境界を少し弄らせて貰ったわ。これなら能力が使えるでしょう？」

「……便利な能力だな。先に傷だけ戻しても良いか？」

「どうぞ」

紫の承諾を得る事が出来たので、身体の状態を元に戻す。

折れていた骨や、擦り傷が消えたのを確認し、自分に起きている不幸の起きない欠陥を修正。

「これで俺の無駄な幸運は消えた。何か変化は？」

「……特に無いわね」

「じゃあ、今から俺をどうするつもりだ？」

「私の家に持ち帰ろうと思ってるわ。もう少し貴方について知って

みたいし」

「……心なしかさっきよりも積極的になってる気がするけど、気のせいだよな？」

「つまり、私に好かれる事が貴方にとっては不幸だったのかしら」

「そういう訳じゃないと………思いたい」

「冗談よ、招待しようと思っていたのは最初から。興味が有ったのも伝えたと思うけれど」

紫はからかう様に笑った。そこから真意を読み取る事は出来ない。

「一応、命の恩人からの招待だ。後からが怖いけどお邪魔させて貰うよ」

其の貳拾伍

霊夢が飛び方を教えると言って数十分。勇輝は浮く程度までは出来るようになっていた。

霊夢には空を飛ぶ程度の能力がある。つまり、勇輝が霊力をコントロールして飛ぶのとは訳が違い、そういった面倒な事を必要としない。

つまり……。

「まだ飛べないの？ 普通これだけ教えたら飛べるわよ？」

うる覚えな飛行方法を元に教えられている訳であって勇輝の飲み込みが遅い訳ではない。

以前に図書館の本で得た知識が霊夢の助言に補足を付け、何とか真上に浮く程度までは成長したのだ。

「いや、今まで何の支えも無く宙に浮くなんてしたことないから随分な進歩……」

「それで？ 後はさっき言った通りに霊力をコントロールして移動するだけでしょ」

思いの外、霊夢は厳しかった。

「いやっ、浮くだけでも相当……」

「その程度で？」

イラッとしたのは言うまでも無い。

難易度としては、割り箸の口を付ける方を下にして立てるぐらい？

慣れれば簡単らしい。だが自分が自由自在に空を飛べるとは思えなかった。

時は流れ、太陽も沈み始めた頃には白衣を着た男が境内でうつ伏せに倒れていた。

「情けないわね。これぐらいで疲れるなんて才能無いんじゃないの？」

返事は出来ない。それ程に精神は疲労している。

「魔理沙の話だと弾幕を作る才能はあるのよね……。けど靈力もそんなに高くないし、飛べないし……」

「……酷い、言われようだ」

「だって魔理沙と引き分けたんでしょ？ それなのにここまで飛ぶのが苦手だなんて信じられないのよ」

確かにまだ秒速五十センチほどの速さでしか飛べないが、一日でこれなら問題ないと思う。

霊夢自身は能力によるものだし、妖怪は飛べない方が少ないぐらいなので普通の人間がどの程度の成長スピードか分かっていないのだ

ろうか。

「おい、迎えに来たぜー！」

魔理沙の声が聞こえるが、勇輝にはその姿を確認できない。うつ伏せだから。

「あれ？ どうして勇輝はこんな所で寝てるんだ？」

「急に地面が恋しくなったんじゃないの？」

「……そんな趣味があったのか。まあ、止めるつもりはないぜ」

「変な誤解はしないで……欲しい。疲れたんだ、朝から何も……食べないし」

そんな地面に顔を擦り付ける趣味は無いし、そんな趣味を持つ人間はこの世にいない……と、思いたい。

そういえばお茶と和菓子は腹に入れた気がするが、朝から夕方まで動いてそれだけでは持たない。

「じゃあ霊夢、コイツは貰ってくぜ」

「落とさないようにね。特に無駄に強い妖怪の巣とかに」

「……え？」

落とされるのか？ 可能性があるのか？

「大丈夫だぜ、箒に縛り付けてくから」

ここは日本だったよな。基本的人権の尊重はどこに行ったんでしょ
うか？

「じゃあ縄がいるわね……。これでいい？」

細い、切れそう。それに、それは糸です。

「仕方ないな。鎖とかが良かったけどこれで我慢するか」

「お前等……俺を何だと思って……」

問答無用。箒に糸で縛り付けられ、更に魔理沙にしがみつき、博麗
神社を後にした。

「……そういえば魔理沙は魔法使いだったよな。やっぱ俺より長く
生きてるのか？」

神社に向かった時とは違い、ゆっくりと飛ぶ箒の上で思い出したよ
うに尋ねる。

「何いつてるんだ？ 私は普通の魔法使いだぜ。パチュリーみたい
に妖怪化はしてないぜ」

「成程、まだ人間なのか……。ん？ パチュリーと知り合いなのか

？」

「本を貸して貰ってるぜ」

紅魔館の図書館は本が多い。それにパチュリーが管理をしているのだから魔法に関するモノも少なからず有るのだろう。

能力が使えるようになってからは傷んだ本を元に戻す為に何度も出向いていたが、最近に入っていない気がする。

「それで、結構時間も経つけど人里までは後どれくらいかかる？」

「何言ってるんだ？ 人里には向かってないぜ」

「は？」

何を言っているんだコイツは、という視線を全力で送りつける。

「今から人里に行くと私の帰り道が妖怪だらけになるんだ。だから向かうのは魔法の森だぜ」

「聞いてない！ 魔法の森って……下手したら俺、死ぬじゃねえか！」

「あ、そうだったな」

「何の対策も無いのかよ……。あれ？ 一応死なないよな、俺。永遠に苦しみ続けるのか？」

この歳で死より辛い地獄を味わう事になるとは……。幸運スキルが

消えた事も関係しているのだろうか。

「能力で何とかならないのか？」

「不安要素が多い。どこまでが有害でどの程度まで無害なのか分からないし、妖怪も近寄らないくらいなんだろう？」

「たぶん、普通の人間にとっては魔力自体が有害。森には鬼くらいだったら入って来るぜ」

「不安しか無くなったんだけど？」

「魔力への抵抗力とか上げられないのか？ 私だって人間だしそれくらいは出来るだろ」

「魔法を使えるか使えないかは大きな違いだろ……。無理そうだったら森の外で夜明けまで外で待つよ」

妖怪に食われないために、寝る暇が全く無い夜が明けるまで。

「……あ、きつと大丈夫だぜ」

魔理沙が何か思い出したように口を開いた。

「私が作ったマジックアイテムの中に、一時的に魔法使いになれるアイテムが」

「副作用は？」

途中で遮るように尋ねる。きつと口く物では無いだろうから。

「使った分だけ、下痢になる」

「……仕方ないか」

其の貳拾陸

魔法の森。

魔力が大氣中に満ちていて、魔法使いには極楽、その他には地獄に感じる森。

「ゴホツ……既に、苦しいんだけど……」

魔理沙の家に来たのだが、空氣中にわずかな毒でもあるかのような苦しさをを感じる。

表現としては、一酸化炭素の充満する煙の中だ。普通に死ぬ。

「ちょっと待ってて……あれ？どこに仕舞ったんだっけな……」

魔理沙の言う、一時的に靈力を魔力に変換して疑似魔法使いになるマジックアイテム。十数分の間見つからない。

本やガラクタのようなマジックアイテムが部屋中に散乱している。数分前までは足の踏み場があったのだが今は床が微塵も見えない。

「早く……死ぬ」

「……え？早く死にたいのか？」

「違っ……」

虫の息とは今の自分の状態を表すのに最適な表現だと思う。

「お、あつたぜ」

勇輝が倒れてから三分。魔理沙がガラクタの山から腕輪のような物を取り出した。

それを魔理沙から受け取り、プルプルと震える手で左手の腕にそれを通す。

通したと思ったら電流のような衝撃が体中に走り、虫の息だった為に声すら上げられずに悶絶した。

「大成功だぜ」

「ホントに死ぬ……生きて帰れない……」

息苦しさは消えたのだが、どうも納得いかなかった。

夕食は作らされた。普通、こういう場合は手料理を振る舞ってくれるのではないのだろうか。

何故かと聞いたら、

「タダ飯を食う気なら追い出すぜ」

その通りなのだが、納得がいかない。

紅魔館で上げた家事スキル。外では何一つやろうとしなかったのが最初はアレだったが、今では一人暮らしでも困らない程度には上が

っている。

正直、料理については能力で知識を得てしまえば作れる。それを咲夜に言ったらナイフを投げられた。

しかし、材料が米やキノコ、僅かな調味料しか無いのに何を作れと言うのだろうか。

最終的に炊き込みご飯になったのだが、魔理沙からの評価は普通、霊夢の料理の旨い。

しかも、取り分が八対二だった。当然魔理沙が八割である。

「……紅魔館が恋しいな」

食器を洗いながらそんな事を呟く。水道は無いので桶に水を入れ、そこで洗う。

紅魔館では掃除こそ面倒だったが、少しの家事とフランの遊び相手、レミリアの話し相手、パチエリーからの頼み事。それさえやっていたら衣食住には事欠かない。

……別にニート願望がある訳ではない。実際、人里で診療所を始める事が出来て嬉しく思っている。

が、この扱いは不満しかない。

食器は外で洗っている。今はまだ夏、暗くはなったが蒸し暑い。

そつえば、今日はまだ能力を使っていない。

リスクが無いのは大いに助かるが、いざという時に使えませんでした、では困るので使用は最低限にしている。

ストックが出来ないので使わなければ損。そんな気がするが、今は妖怪もいないし薬品のリストも作れな……傷薬を作ろう、体力や気力を全快の状態にして。

薬草は布袋に入れ、魔理沙の家のドアの横に置いてある。

魔理沙も女の子だ。紅魔館のように広い家では無いので屋根の下で寝ようとすると同じ部屋になってしまう。それは避けたい。

やましい気持ちがある訳ではない、世間体を保つ為だ。

「勇輝ー、生きてるかー？」

皿洗いを押し付けた本人が家から出てきた。手伝う気は目に見えて無い事が分かる。

「今の所は生きてるよ……。魔理沙は何時ぐらいに寝るんだ？」

「襲ったら殺すぜ」

「命を賭けてまで性欲を満たす気は無いから安心しろ。寝る前に外に出ておきたいから時間だけ聞いておきたいんだよ、既に寝る気みたいだな」

魔理沙はいつものエプロン姿ではなく、パジャマを着ている。

帽子も被っていないし、髪も卸してあった。

「まさか……死ぬ気か？」

「違う。家の中に寝れる場所が無いだけだ」

「自殺は良くないぜ」

「人の話を聞けよ」

「寝る場所はあるぜ、ベッドの下だ」

「お前、俺を人間として扱ってないだろ。ペット感覚で接してないか？」

「ベッドの下だからペットか……そんなに面白く無いな」

「……一度解剖してみるか？脳の回路に異状があると思うんだ」

「このペド野郎！」

「喧嘩売ってんのかお前！」

気力は全快の状態に戻した筈だったのだが、精神的疲労がとんでもない。

「いやあ、からかえる相手は少ないから重宝してるんだぜ。一応」

魔理沙と親しい人物を思い浮かべてみる。

霊夢、林之助、パチュリー、里の年輩者方……本当だ、からかえる奴がない。

「限度を考えてくれ……。いくら俺でも怒る時には怒る。仏じゃないから許さない時もある」

呆れた声で呟く、しかし魔理沙は過剰に反応した。

「その……悪い。勇輝は面白いから、えっと……」

借りてきた猫のようにシュンとして、視線を泳がせる。

こんな落ち込む魔理沙は初めて見る。…知り合ってから日が浅いの
で当然かもしれないが。

「……私の事、嫌ったか？」

恐る恐る、といった感じに魔理沙が尋ねてくる。

「嫌ってはない。気軽に話せる相手は欲しいからな。魔理沙は結構好きなタイプだし」

「なっ……！？」

魔理沙が顔を真っ赤にしてから気づく。自分の爆弾発言に。

「性格の相性的な意味でな？ 決して容姿だけとか、そういう事ではなくて……」

「つまり全部！？」

駄目だ。解釈がそっちの方向にしか行っていない。

思春期の女の子を甘く見ていた。ここまで恋愛方面に思考が持っていられるとは…。

ベッドに引きずり込まれそうになったのは夢に違いない。目が覚めたら元に戻る…と良いと思う。

其の貳拾陸（後書き）

←実際にあったかどうか分からない会話。

「告白までしておいて往生際が悪いぜ！」

「落ち着け！寝ろ、これは夢だ！」

「だから寝ようとしてるぜ、二人でな」

「婚期を逃した人みたいになってるから！頼む、一人で寝てください！」

「そんな…一人でしろだなんて」

「何を！？」

「言わせるなんて変態だぜ」

「だから何する気だよ！？」

其の貳拾漆

魔理沙は寝た。

月の位置からして、11時から12時といったところだろう。

月明かりで、どこか神秘的な雰囲気のある森を壁に持たれながら見ていた。

「……半年、か」

幻想郷に来て半年。外はどうなっているのだろう。

行方不明になっているのは間違いないし、ひょっとしたら死んだ事になっているかもしれない。

親しい友人もいたし、父親との仲も良かった。

割り切れていたと思っただけ、未練はまだまだある。

それでも、この幻想郷なら自分の知識が、経験が十分に発揮できるのだ。

帰る方法なら知った。だけど、この外ではあり得ない好条件で医者として生きていける場所を捨てられない。

「……結局は自分の欲か」

ポツリとそんな事を呟いてしまう。

医者になるために勉強し、なれるだけの学力はつけた気でいた。

薬剤師もいない、設備の整っていない場所では力不足である事を知った。

だけど、ここでは自分しか医者がいない。他に頼るべき存在がない。外ではこうは行かないだろう。小さな病院なら人が来ないし、大きな病院ではサポートとして付けられるのが目に見えている。

だから、ここでなら百パーセントの力を出せる気がする。

誰の指図も受けず、邪魔をされず、人の為に力を使える。

その考え方が正しいとは全く思わない。

患者だって、助けてもらえるなら誰でも良いのだ。

だけど、俺は……桜井勇輝は自分で助けたい、そんな独占欲が出てしまっている。

背凭れにしていた家の壁から離れ、森を歩く。

早く今の考えを消してしまいたい、それだけで。

自分が地面を踏みしめる音、風で草木の揺れる音。それだけが森の中で響く。

一度抱いてしまった嫌悪感は直ぐには消えてくれない。何も考えな

いように前に進む。

そして……。

「さて……。どうやって戻ろうか」

当然、考えなしに進めば迷う。

直進だけしていれば良かったとか、目印を用意しておけば。そんな今更の後悔はしていないが戻れないのは問題だ。

更に、今の自分はついてない。

不幸と幸運はバランスがとれていると聞いたことがある。良い事もあれば悪い事もある、というアレだ。

迷信染みていると思うが、ここは幻想郷。外の常識は全く役に立たない。

「……やっぱりだよクソ野郎」

目の前には異形の生き物。

大きさは三メートル、頭は牛、体は蜘蛛。牛鬼とか言うヤツだろうか？

あの獅子舞の原点的な……。

そして補足。魔力を持たない存在にとって魔法の森の空気は毒に近い。

それを気にせず森を歩けるのは魔法使いか、毒をもつものかもしれない程の力を持つ存在…。

「……人語は、理解出来るか？」

冷や汗をかきながらも声を絞り出す。

しかし、返ってきたのは身の毛もよだつような咆哮。

十中八九、捕食対象にしか見られていないという事だろう。

だから逃げた。全速力で。

牛鬼は予想外だったのが、一瞬遅れて後を追いつ始める。

二足と八足、どちらが速いかは言うまでも無いだろう。

想像できない方は、普通のサイズの蜘蛛が走るところを思い浮かべて貰いたい。牛鬼はあの速さで足を動かしている。新幹線と良い勝負では無いだろうか？

何が言いたいかというと、滅茶苦茶恐いのだ。

新幹線並の速さで三メートルの蜘蛛が追いかけてきたら失神モノだとは思わないだろうか。

勿論、牛鬼の姿を確認した瞬間に身体能力は上げた。

人外のスピードで走っているが、やはり何度も捕らえられそうにな

った。

ここが森でなかったら既に自分は食い殺されているだろう。

自分の胴より太い大木をへし折りながら、牛鬼は血走った目で追ってくる。

……逃げ切るのは、不可能だ。

こちらの体力にも限界はあるし、撒くことは出来ない。

下手に逃げて魔理沙の家に出てしまえば魔理沙が危なくなる。

「……あ、忘れてた」

飛んで逃げればいいのではないだろうか？

上手くはないが、十分に浮けるようになった。アレが飛べると思わない。

直ぐ様地面を蹴って跳躍し、さらに靈力をコントロールして上昇。

地上から十メートル程の位置で停止する。

下から牛鬼が睨み付けてくる。どうやら助かつ……らなかった。

「嘘だろオイ……」

心臓が今までに無い程に強く鼓動を打ち始める。

牛鬼、牛頭に蜘蛛の体。

見た目の通り糸も使づらい。

自分の足には牛鬼の糸が巻き付いている。避けられなかった、反応すら出来ていない。

牛鬼は糸を引き、地面に叩きつけようとした。

だが、ここは森だ。

「がッ……！」

地面に到達するまでに何度も木とぶつかり、その回数分、当たった箇所から嫌な音が聞こえた。

右手は肘から折れ、アバラは折れ、足は曲がる筈の無い関節の無い場所で曲がった。

痛みで悲鳴を上げる事さえ出来ない、性格的な事もあったが。

牛鬼の下まで引きずられていく。糸を切るために霊力の刃を作り出そうとしたが、痛みでコントロールが出来ない。

牛鬼の目の前に引きずり出され、その足の一本を頭蓋に突き立てられた。

即死。

もし誰かが見ていたならそうとしか思えない光景。

トマトを潰したように赤い液体が飛び散り、地面に赤い華を描く。

悲鳴は無い。口など既に無いのだから。

牛鬼は突き立てた足をソレから抜き、次は腹に突き立てる。

再び吹き出す鮮血。臓物は潰れ、幾つか出てしまっていた。

牛鬼は骸にしか見えないソレを口へと運び、一飲みにした。

其の貳拾漆（後書き）

完。

……冗談です、うん。

其の貳拾捌

一人の少女が魔法の森を歩く。

人形を近くに侍らせる魔法使いの少女、アリス・マーガトロイド。

元々は人間だが、何年も前に魔法使いとなった彼女は、この森で、あまり外に出ないようにして暮らしていた。

何か用がある訳でも無いのに、こうして外に出ることは珍しい。

そして、目の前には…。

「気紛れで外を歩いていただけなのに……運がないわ」

何かを食い殺したばかりであろう牛鬼の姿があった。

しかし、アリスの表情には焦りも絶望も無い。ただ、面倒な事になった程度の呆れた顔。

牛鬼がアリスに喰らいつこうとする。しかし、見えない何かによってその行動は阻まれた。

「結界は……分らないからそうしているのよね」

牛鬼は力任せに障壁を越えようとしているが、この程度の妖怪の力で壊れる程アリスの結界は弱くなかった。

ここで、何故スペルカードルールが存在するかを少し説明する。

本来、能力を持った人間でも妖怪には敵わない。

敵うとしたら、特別な役割を果たしている博麗神社の巫女だけだろう。

そこで、博麗の巫女がスペルカードルを作り、幻想郷での人と妖怪の争い事をそれで解決するよう取り決めたのだ。

つまり、弾幕勝負ではなく能力と妖怪本来の力で闘った場合は圧倒的に妖怪の方が上。

そして魔法使いも妖怪と同等。妖怪同士の戦いにスペルカードは本来必要ない。

「話を通じないなら、スペルカードは使わなくても良いわよね」

牛鬼の下に魔法陣が浮かび上がる。

そして、牛鬼は内側から弾けた。

「え……？」

アリスはまだ、何もしていなかった。人形の張った障壁に牛鬼の破片が当たって落ちる。

そして、牛鬼の中から生まれたように出て来る男を見て、警戒心を最大まで引き上げた。

「……汚ねーな、トラウマモノだ」

元に戻した体の調子確かめるために、手を握ったり閉じたりする。問題ないようだ。

牛鬼に食われ、飲み込まれた時にも意識はあった。頭は確かに潰れていたし、出血も致死量を超えていたのだ。

これが死なないという事なのだろう。痛みは感じていたのでトラウマになりそう。蜘蛛を見たら全力で殺したくなるぐらいには。

一応人間のつもりだったが、これではゾンビか何かに思える。……
勿論、自分が人間の枠に当てはまるのに変わりは無いが。

「何物なの？その蜘蛛の子供って訳じゃないんでしょう？」

「ん？ ああ、悪い。気づいてなかった」

声がしたかと思うと、こちらを睨みつける少女の姿があった。

多分、この森に住む魔法使いの一人だろう。浮いている人形にはもう何も言わない。

「答えて。貴方は妖怪？ それとも別の何か？」

「能力持ちの人間だよ。少し変わった能力の、ね」

未だに疑うような視線をぶつけてくる少女。どう考えても今の自分は怪しいので仕方ないのかもしれない。

「勘違いはしないで欲しい。魔法使いに知り合いがいてな……そいつの家に厄介になってたけど散歩中にコイツに襲われて食われたんだ」

そう言いながら牛鬼の亡骸を指差す。

「じゃあ、どうして貴方は生きているのかしら。こういう知識の殆ど無い妖怪は獲物を殺してから食べるんだけど」

「殺したつもりだったんだろうさ。頭を潰されて腹を貫かれたからな」

自分で言っておいてその時の痛みを思い出してしまう。しばらくはトラウマが続きそうだ。

痛みや蜘蛛に過剰反応してしまうだろう。

「そんな体験して生きてる時点で人間じゃないわよ」

「不死者なんだよ、不死身じゃないけど」

残るのは意識のような物だけなので不死身と言うにはどこか違う気がする。間違いないと思う。再生も自動ではないのだから。

「じゃ、俺は行くから」

「その格好で里に降りたら寺子屋の半獣が襲ってくるわね」

「慧音さんが？ 一応知り合いだし、そんな事は……」

「アレの里への愛情は普通じゃないわ。多分、血塗れで武器を持っていたら人間にも容赦しないわね」

今の自分の格好を確認してみる。

穴の空いた血生臭いシャツ、その上に自分の血で赤く染まったボロボロの白衣。

帰りは薬草を入れた布袋を持たなければいけない。

「……ああ、危険な雰囲気しか出せないな」

「それに、能力持ちなら存在が凶器みたいな奴もいるから尚更ね」

弾幕の特徴から全身凶器のようになっていて自分はどうでしょう？
鎖や鎌や剣に槍。もう大体の武器は瞬時に作り出せるようになってしまった。……フランのせいで。

「……何か着れる物は無いでしょうか？」

この格好で里に帰る度胸は無かった。

「条件次第で用意していいわよ。どんな内容かは貴方が領けば話し、断るなら話さない」

「随分と足下を見た交渉だな。それじゃあ簡単には答えられない」

「別に命を取ったり奴隷にしたりはしないわ。人間に出来る範囲は心得ているもの」

「……なら、決まりだな」

仕方ないが、こうするしか無い。

「断る、服は諦めるよ。布を被っていけばいいし、明日には元に戻せる」

「まあそうでしょうね。御使いを頼もうと思ったんだけど仕方ないわ」

……断らなければ良かったなんて思っていない。少し自棄になりた
い気分だが。

「そういえばまだ名乗ってなかったな。桜井勇輝だ、里で医者をや
っている」

「アリス・マーガトロイドよ。人間だった魔法使いをしているわ」

其の貳拾仇

「おおっ……」

魔法の森の、ある魔法使いの家に勇輝は招待されていた。

「どう？　これだけ揃えるのには一年かからないけれど相当なモノでしょう？」

「驚いたけどさ、……何で人形？」

アリスの家、その中には棚、テーブル、イス。あらゆる場所に人形が敷き詰められていた。

「私の魔法は人形を媒介にしているの。だから使えば壊れる時もあるし、基本的にこれだけ生きていればやりたい事も無くなってくるわ」

「それで暇さえあれば人形を作るって事か」

「あれ？　どうして自作って分かるのかしら」

「全部雰囲気似てる。それに魔法使いに一年でこれだけの人形を買っただけ収入があるとは思えない、そんな推測だけだよ」

「……まあ、拾ってきた曰く付きの呪いの人形もあるから無闇に触らないように」

何故アリスの家に来る事になったのかは、少し時間を遡る事になる。

「じゃあ、俺はそろそろ戻る事にするよ」

これ以上森を歩いていて、また妖怪と出会ったら次は無いのだ。身体能力の強化、身体の復元、牛鬼を内側から殺すための霊力増幅。既に三回、能力を使ってしまった。

「そう？　夜は妖怪の時間だから気をつけなさいね」

「……え？」

聞いてない。そんな事だれにも教えてもらってない。

「まさか知らなかったの？　妖怪は昼より夜の方が妖力も高まるし、気性も荒くなるの。一定以上の知力がある妖怪は朝も行動したりするけど今みたいな妖怪は基本的に夜に行動するの。でも里は結界で囲まれているし、神社には入るだけ無駄。私達魔法使いの家にも妖怪避けの魔法が掛けられているから野生の獣が被害に逢うのよね」

「……つまり、無謀にも夜に散歩をしていた俺は」

「生け贄同然の餌ね。一度食べられたんでしょ？」

フランは朝から次の日の朝まで遊ぶし、レミリアはランダムで朝か夜に行動するし、美鈴は一日中寝ている。

これで分かる筈がない。

「はあ……。うん、大人しく帰る。もう夜は外に出たくない」

そう言っアリスに背を向けると、夕食に満足に有り付けなかつた腹から男とは思えない程可愛らしく音が…。

「……………」

「……………良かったら私の家に来る？夕食の残りならあるけれど」

「お願いします」

そして現在に至る。

人形だらけの部屋で、人形が飛び交うのを見ながら食べ物が出て来るのを待つ。

もうこういつた物に抵抗が無くなってしまった自分が怖い。なんて馬鹿な事を考えているといかにも洋食と言った感じの食事が運ばれてくる。人形によって。

魔理沙は基本的に和食しか食べないらしいが、アリスは洋食派なのだろうか。

……名前の問題か？ 違うと思うが。

運ばれてきた物はとても美味しかったです。色々な意味で涙が出そうになった。

「どうだった？ 他人に食べさせる事はあまり無いんだけど……」

「十分旨かったよ。……悪いな、会ったばかりなのに」

会って数時間の内に、女の子に家に招待され食事を作って貰うなんて経験は普通出来ないだろう。

幻想郷に来てから普通に生活出来た試しが無いのでここでは普通かもしれないが。

「じゃあ、お礼と言っては何だけど勇輝の能力を教えて。どうして不死者なのかも。タダでは悪いと思ったんでしょ？」

「……最初からそのつもりだったって顔だな。別にいいけどさ。……欠陥を修正する程度の能力。それが俺の力だ、死なないのは死ぬって概念を消したからだな」

「……本当に人間？」

「最近は自分でも怪しくなってきたけど人間だよ、一応」

「言い切れないのね」

「悲しい限りだよ。つい半年前まで普通の学生だったんだけどな……」

「あ、やっぱり外から来たの？」

「やっぱり？」

「人里で貴方を見た事はないし、そんな格好してる人はいないか

ら」

「それは血で濡れたって意味か、この服の事なのかどっちだ」

「両方」

そう言つてアリスは楽し気に笑う。

「……じゃ、そろそろ帰るよ。もう遅いし、長居するのも悪いから」

「私は別に構わないわよ？ 勇輝は思ったよりも面白いし」

「そう言つて貰えるのは嬉しいけど、それじゃ俺の気が済まないから……正直、寝たいし」

「じゃあ、借りを作つておかなきゃね」

アリスが手をかざし、何かを呟くと魔法陣が勇輝の足下に現れ、体を潜らせるように上昇する。

「血が……」

魔法陣が通つた後から服が元に戻っていく。

「魔法使いにも服ぐらい直せるのよ」

「便利なモンだな……。で、借りはいつ返せばいい？」

「利子が大きくなるまで取っておいてあげる」

「……早い内に返せるようにしておくよ」

二、三言話してからアリスの家を出る。

家から一歩出た所で、霊力をコントロールするのに集中した。

歩いていくのは危険。飛ぶ意外に安全な道は無い。

ゆっくりと目を開ける。

「……行ける」

ゆっくり、少しずつ体を浮かせる。

未だに、浮いてから移動する事が出来ないがアリスの人形を見て気づいた。

アリスの人形は糸で操って飛ばしている。しかし浮かせたり、行動させるのは魔力。それだけでは何のヒントにもならないが、要は見方だ。

糸で引いているように見えた。浮いているモノを動かす方法はいくつもある。その一つが……

「身近に居すぎて気づかなかったな……」

翼。浮くのは霊力のコントロールによるものだが、移動は翼を動かした時の風圧によるもの。

霊力で作り出した翼は蒼く、透き通った色をしていた。

「当然霊力を使い続けるし、まだ上手く動かせないか……」

しかし、これなら速く飛べるし使いこなせば細かい動きも出来る。
霊力の密度を高めたら防御にも使えるだろう。

「さて、帰るか……」

魔理沙の家で薬草を持ったら里に戻ろう。書き置きぐらいは残して。

其の参拾（前書き）

。そつ言えばユニークアクセスが一万を超えました（2011年9月）

読んでいただいている皆様には感謝してもしきれません。

其の参拾

冬になった。

これと言った事件も起こらず、坦々と時が流れたのである。

診療所もようやく軌道に乗ってきて患者の数も増えて来ている。喜ぶ事では無いのだろうが素直に嬉しい。

また、慧音の寺子屋の子供達の身体測定は此处でやっている。機具は林之助から奪っ…貰った。

発電機の作製に協力しているのだから文句を言われる筋合いは無い。計るのは身長、体重、座高だけ、中学生くらいの女の子の体重を計ろうとしたら慧音に頭突きを食らったのは忘れる事は無いだろう。

そして……。

「あのさ……此处、一応病院なんだけど」

「いいじゃない。神社は人は来ないし寒いもの」

「私の家は暖炉は有るけどマジックアイテムを詰め込んでるから使えないんだぜ」

病院には暖炉があつた。それが原因で巫女と魔法使いが残念な程に入り浸っている。

更に……。

「咲夜、お茶は？」

「申し訳ありませんお嬢様。この家には紅茶の葉が一枚足りとも有りませんでしたので……」

紅魔館からも二人、暇人が来ていた。

そして四人はあたかも自分達の家であるかのようにくつろいでいる。待合室となっているロビーでの事だが、他に患者もいないので文句が言えない。言ったら論破された。

この診療所に足りていないのは金銭、薬、機具の三つである。

患者が居ないのは今は昼時であり、休診時間となっているからであるだけで、信頼性が無い訳ではない。

一応、料金体制としては診察はネギが一本買える程度の料金。

薬の処方が、モノによるが風邪薬だと米が二合買える程度の料金。

重傷、重病では入院させる。料金は症状にもよるが、足の複雑骨折で大抵のコミックスが大人買いで全巻買える程度の料金。

瀕死の場合は能力による治療。自分の実力とは言えないので極力使いたく無いのだが、命と天秤に架ける事は出来ない。料金は漫画喫茶で半年暮らせる程度。

何が言いたいのかと言うと、厳しいのだ。金銭的に。

とてもこの疫病神的存在達の相手をしている場合では無い。

サプリメント等が作れたら収入も安定するのだろうが、そうすると必要な薬を作る時間が足りなくなってしまう。

「あ、年越せそうに無い」

年末年始は休診としている。が、働かないとその日の食事も危ないときがある。

現在の蓄えは、一週間分の食料を買える程度。休診は十二月三十日から一月三日まで、年末年始に質素な食事だけで済ませないといけないのは悲しすぎる。

「何言ってるの？ 勇輝は正月は紅魔館で過ごすに決まってるじゃない。ねえ、昨夜」

「はい、予定ではそうなっています」

「は？」

聞いてない。

「このチビっ娘は何を言ってるんだ？ 勇輝は私と霊夢と一緒に神社で年を越すんだぜ」

それも聞いてない。というかそれなら何の問題もない気がする。

「あんな神社では年を越す前に凍え死ぬんじゃないかしら？ 紅魔館は温かいけれど」

魔理沙に向けての言葉なのに霊夢への暴言にしか聞こえない。現に霊夢の拳がプルプルと震えている。

「あんな辛気臭い屋敷で悪魔なんかと過ごしたらおみくじで大凶を引くぜ」

「問題ないわよ、あの神社におみくじは無いもの」

霊夢がハッ、と何かに気づいたような表情に。

しかし、位置的な問題としか思えないので今更おみくじを導入しても無意味だと思う。

「俺は別に構わないけど。年末は博麗神社、正月は紅魔館で……」

「お嬢様、……です。……だから……」

「……それもそうね。なら私は正月に勇輝を連れていく事にするわ」

「分かったぜ。じゃあ年末は私達が借りていくぜ」

咲夜が何か言っていたが気にする必要は無いだろう。

丸く収まったので良しとし……。

「桜井先生はいらっしゃいますか？ 年末年始についての会合について連絡……したい、のですが……」

間が悪すぎる。確か里の纏め役の一人である爺さんの孫だった筈だ。
レミリアと魔理沙に睨まれて畏縮してしまっている。

数週間前に能力持ち、更に妖怪と闘える力があり医者という役割。
そんな理由で纏め役の一人に選ばれたのだが、今回は本当に間が悪
すぎる。

「えーと、日時だけ教えていただけませんか？行けるかは……分
からないですけど」

「はい。明日の正午から年末についての打ち合わせ……後、里の財
政についてです。年末年始は宴会になるだけでしょうから不参加で
も問題無いです。では失礼しましたっ！」

必要な連絡だけ済ませ、逃げるように帰って行く。何だか気まずい。

「それより、もう直ぐ仕事を再開する時間だから手伝つか帰るか
してほしいんだけど……」

咲夜はともかく、他三人は役に立ちそうにないのでお帰りいただき
たい。

「じゃあ今日は休みだな。これをドアに掛けてくればいいんだろ？」

魔理沙が手にしているのは『本日休診』の掛札。

「ちよっ……」

止める間もなく駆けだした魔理沙。

「勇輝、これで勝負しなさい。負けっぱなしでは吸血鬼の名が廃るの」

レミリアが将棋を何処から取り出し、スペルカードを構えて強制的に付き合わせようとする。

何故こういう時だけ連携して来るのか不思議でならないのだがこのままでは生活が危ない。

二つ名がよく休む不死の医者、なんて感じになったらお終いだと思う。

「魔理沙。それだと勇輝が困るだろうからこっちにしたら？」

霊夢が取り出したのは『御用の方は博麗神社に賽銭を』と書かれた掛札。患者を殺す気だろうか。

「いえ、こっちにしては？」

咲夜が取り出したのは『御用の方は献血を行って下さい』と書かれた掛札。患者を何だと思っているのだろうか。

「……分かったから、居てもいいから仕事だけはさせてくれ」

その日、午後に来た患者はいなかった。

其の参拾（後書き）

この小説での人里について

基本江戸時代。たまに中世ヨーロッパ（香霖堂等）

民間は繋がっているかのように隣接している。診療所は中心部で孤立。

診療所の間取りは「ひぐらしのなく頃に」の入江診療所をベースに地下は無い。

後は基本皆様の想像にお任せします。

其の参拾巻（前書き）

PVが10万を超えました（2011年9月）

其の参拾巻

「……………」

空気が、重い。

里の中心部にある一番大きな屋敷の一番広い座敷で里の重役達と一緒に介していた。

勇輝は実感する。自分が此处に座るのは場違いだと。

長老、大手道具店の店長、寺子屋の教師、とりあえず自分よりも立場も年齢も上の人達ばかり。

いくら暴力団の方達の前に出た事があるとは言ってもこの空気は慣れないし好きになれない。

「……そろそろ始めてもいいのでは？」

十数人の内の一人が声を挙げる。

「そうですね。アレは出席する方が少ない。居るも居ないも同じだろう」

どうやらまだ誰か来ていないようだが始まるらしい。

長老を奥に、二列に向かい合って並んで座っているのだが、勇輝の席は一番出前の右側。隣は慧音が座っている。

あの会話を切っ掛けに、里の事について話し合いが始まる。

秋の農作物の収穫量について。家畜について。各自の経済状況について。

どれも重要そうな話なので口は出さない。新入りがあれこれ言うのは気分も悪いだろう。

「ところで桜井殿。診療所の方はどうですか？」

……何も話さないつもりでいたのに一人の爺が話を振ってくる。

「里の皆さんが健康なので目立った仕事はありませんね。設備もそれなりに揃い始めているので大抵の病なら対処できるかと……。勿論、何事も無いのが一番ですが」

「それは頼もしい限りですね。少女を何人も連れ込んでいると噂を聞いたので心配していましたが」

一人の男性が皮肉げに会話に混ぜてくる。アレは……。

「お子さんが気になりますか？霧雨さん」

魔理沙の父親だ。

「いえ別に。あの魔女とは縁を切っていますので」

「育児放棄ですか、器が知れますね」

少し話ただけだが確信した。コイツは自分の嫌いなタイプだ。

「勇輝、少しは考えてモノを言わないか……」

慧音から小声で注意されるが、それを聞くつもりは無い。

「放棄とは人聞きが悪い。アレは自らの意思で家を出ましたし、存在が危険なんですよ。いつ妖怪になるか分からない」

確かに、魔法使いになった人間は歳を取るのが遅くなり、百年もすれば妖怪と言えるだろう。だが、実の子供に言っていい筈がない。

しかし、感情的になっても仕方ないのは十分承知している。

だがら、この放ちような無い苛立った感情は…修正しよう。

もう自分は子供ではない。

自分の行動に責任を持ち、回りと共生していかなければいけない。

人命に関わる仕事に就くなら尚更だ。

「そうですか。まあ、他人の家庭にあれこれ言う必要は無いですね。それと訂正ですが少女を連れ込んでいる訳ではありません。以前世話になった対価として吸血鬼に血液を提供、博麗の巫女や魔法使いの少女とは友好的な関係を築いて異変解決をスムーズに行って頂く為でしたが、問題がありますか？」

感情の込もっていない声で坦々と話す。それで興が削がれたのが魔理沙の父親は顔を背けた。

他の重役達もそれを察したのか、議題を次へと進めていった。

「勇輝、さっきのは不味かったぞ……」

話し合いが終わり、それぞれが帰宅しようと席を立った後、慧音に話しかけられた。

「何がですか？」

「お前が歪み合ってたのは道具店の店主で、この人里では屈指の権力者なんだ……」

「別にあの店から機材を買っている訳では無いですし、そこまで徹底的に対立する気は無いんですけどね」

「風評の問題だ……。誰も霧雨店に嫌われたくは無いからな」

「来る者は拒まず、去る者は追わずです。命より対人関係を重視するならそれも良しですよ」

「……本気で言っているのか？」

慧音が見逃せ無い、といった表情になる。まあ、医者発言では無かっただろう。

「命は……平等で不平等ですから。人は理性が高い分、そこを割り切ります」

生きたいと願う、死にたいと願う。正反対だが、どちらも同じ。苦しみから逃れたいだけ。

生き地獄を味わうくらいなら死ぬ。なんて考えも少なくはないだろう。

本当に死を理解しているかどうかは別だが。

「慧音さん。俺って結構、残酷な性格してますよ？……必要となれば、さっきまで此処にいた奴等を殺すくらいには」

午後からの診療所は変わらぬ様子を見せていた。

「気候が変化したからでしょうね……。栄養を付けてしっかり休ませて下さい。必要なら薬を出しますが、どうします？」

子連れの女性に問い掛ける。

薬はやはり高価だ。だからこそ、簡単に手を出せない人がいる。

「おいくら、なんでしょうか？」

「失礼ですが、職種をお聞きしても？旦那さんのでも、貴女のもいいですが。あと、家族の人数もお願いします」

「主人は畑仕事です。家族は主人と、私と、この子。あと主人の両親で五人家族です」

「なら、これぐらいですね」

紙に書いて女性に渡す。

「これだけで良いんですか？」

「薬を買わせて栄養失調になられては立つ瀬がありませんから」

今渡した紙には本来の六割程度の金額しか書かれていない。

だが、小売りでは無いので売値は言い値で良いのだ。

「これなら大丈夫です。お願いします」

「分かりました。五日分用意しますので待っていて下さい。説明書も付けておきますので」

これで本日七人目の患者。少し多い方だ。

いつもは五人以下だが、本格的に寒くなってきた事が原因なのだろう。

薬を渡し、料金を受け取った後、誰も居なくなつた待合室でソファに座る。

考えたのは慧音に言った事についてだった。

其の参拾貳

十二月二十四日。世間で言うクリスマスイヴの日。

当然、診療所は営業中である。

「……………暇だ」

誰も来なかったとしても、だ。

薬も材料分は生成してあるし、道具の手入れや診療所の掃除も終わった。

勤務中なのに、仕事が無い。

「……………暇だ」

ごそごそと、白衣のポケットを探ると一枚の紙が出て来る。スペルカードだ。

もう何ヶ月も使っていないし、作っていない。

他にやる事も無いし、偶には異変対策を試みるのも一考だろう。

今まで作ってきたのは相手の戦意を奪うような、もとい、もう二度と見たくなくなるようなスペルカードを目標としてきた。

空が飛べなかった分、回避範囲が狭かったし弾を放つ位置も地上からに限られてしまっていたからだ。

だが、今は空が飛べる。……とんでもない量の霊力を使うが、その欠陥は既に対処する事が出来ている。

つまり、空中戦で十分な効果を発揮し、尚且つ決定打に欠けていた弾幕の密度を上げるのが理想。

紙と鉛筆を用意し、相手の動きを計算に入れて弾幕の配置を決めて書き込む。

時間を忘れ、勇輝はスペルカード製作に没頭した。

「……うわぁ」

自分で作っておいて、吐き気のする弾幕が出来た。

気持ち悪い、絶対に相手に使われたくない。使われたら土下座をしてでも止めてもらいたい。

今日作った他の数種類のスペルカードと比べても、一番最初に出来たこれに比べたら易しいものだ。

……魔理沙や霊夢は力づくで突破してしまうかもしれないが。

窓から外を見ると、既に空は赤くなっていた。

そういえば、明日は紅魔館に行く日だった。週に一度の帰還だ。

クリスマスだし、何かプレゼントでも持っていた方がいいのだろうか。何の用意もしていないが。

レミリアには血、咲夜にはナイフ、パチュリーには本、小悪魔には栄養剤の試作品。フランは弾幕ごっこで良いだろう。

行く前に其処らで買って行こう。……何か忘れてる気がするが、忘れているのだから大した事ではないと思う。

「……………あ」

紅魔館の前まで来て美鈴へのプレゼントを忘れていた事に気づく。

寝ているし、気づかなかった事にして紅魔館の庭を通り、大きな扉を叩く。

「……………!……………?」

出迎えは妖精メイド。何か言っているが未だに理解出来ない。

しかし荷物を指しているの、持っていこうか？みたいな事だろう。

「これは土産だから自分で持ってくよ」

それを聞いて納得したのか、妖精メイドは仕事に戻っていった。

空を飛ぶ方法を得てからはチルノを探す必要も無くなり数十分で行き来できるようになってからは紅魔館に来るのも近所に遊びに行く。

という気分になっていた。

最初に向かうのは図書館。パチュリーに本を渡すためだ。

相変わらず巨大な扉を押して、中に入る。

「パチュリーいるか？」

呼んでみるが返事は返ってこない。いつもなら小悪魔辺りが駆け付けて来るのだが…。

パチュリーがいつも座っている椅子にも、たまに何かを作っている研究室にも姿は無い。

「仕方ないか……」

パチュリーや小悪魔は後にして、レミリアと咲夜に渡しに行こう。

図書館から出て、長い廊下を歩きレミリアの部屋の前に着く。

しかし妙だ。気配が無い。

「レミリア、いるか？」

返事はない。ノックしてから中を確認してみたが、やはり誰もいなかった。

寝室にも行ってみたが、誰もいない。

食堂にも行ったが、妖精メイドが働いているだけで咲夜やレミリア、

パチュリー、小悪魔の姿は無い。

「……フランの所に行くか」

地下室から出られなくなりそうだが、他に見つからないのだから仕方ない。

長い廊下を歩き、長い階段を下り、長い地下通路を歩いていく。

……こんなに長かっただろうか？

しかし辿り着くには辿り着いた。

「フラン、入るぞ」

重いドアを開けて、中を確認する。そして……。

「どうしてこうなった……」

落ちた。ドアを開けて中を覗き込んだら床に穴が開いて落ちた。

しかも穴は閉じ、霊力弾では壊せない程の結界で完全に閉じ込められる。

まさかとは思うがレミリア達の仕業だろうか。……とりあえず、落ちた先の暗い通路は蠟燭の明かりで照らされていた。しかし7、8メートル間隔で配置されており薄暗い。

落ちた穴からは出られそうになかったので、10分ほど前へ前へと進んでいた。

分かった事は二つ。壁、床、天井は結界により防御されている。破壊して脱出するのは魔理沙でも不可能だろう。

もう一つはここが迷宮のような作りになっているという事。通路は分かれ道がいくつもあって、どこも似たような作りになっている。

そのせいで感覚が鈍ってきている。それに気力が削がれてしまっている。

何か変化が無いと精神的に参って……。

「……フラン？」

フランが両膝を抱えて通路で蹲っていた。

「……っ！？お兄様あ！」

こっちに気がついた途端に、涙目になりながら走り寄って来て抱きついてくる。

「どうしてこんな場所が……。というか何でフランも落ちてんだよ」

「外からお姉様の悲鳴がしたから、外に出たの……。そしたら」

レミリア、お前もか……。

「壊して出るとかは出来ないのか？」

「ここもフランの部屋と同じ結界が張ってあるから……」

「じゃあ、ここが何か分かるか？」

「侵入者殺しの迷宮」

「いや、部屋の前に作るなよ」

「作ったのはフランじゃないし、お屋敷が出来た時に作られたらしいんだもん」

「じゃあ何で今更……」

「間違えてフランが作動させちゃった」

……どうやら吸血鬼はバ……計画性が無いらしい。

とりあえず、出口を探さなければ話にならないのでフランを引き摺って再び進む事にした。

其の参拾貳（後書き）

どうしてこうなった……。

其の参拾参

「……なあフラン。こっちで本当に合ってるのか？」

「……もう少し、もう少しだよっ！……たぶん」

あれから一時間。地下の迷宮を二人で彷徨っていた。

「勘弁してくれよ、いい加減荷物を持つのも苦痛に感じるし、気が狂いそうなほどストレスが急激に貯まり始めてる」

「だって今まで一度も落ちた事無いもん！落ちるなんて思ってなかったから出口だって分からないよ！」

「……言いやがった。分からないって認めやがった」

フランに頼っていたら……二度と日の光は拝めない。

「……仕方ない。能力を使うか」

足りないのは……欠陥しているのは知識。だがそれだけではまだ足りない。

空間を把握する程度の能力を……。

「フラン、こっちだ」

「あれ？ お兄様道分かるの？」

「お前よりは分かる、とりあえずはこつちだ」

能力で得た力で分かったのはこの迷宮の構造と現在地。それと迷宮の中で迷う数名の位置。

ロールプレイングゲームの地図のような感覚だ、大体の道は分かる。

数分歩き続けたところで遭難者二名を発見した。

「勇輝さん！ それに妹様も。どうしましろう、パチュリー様が…」

倒れたパチュリーとオロオロしている小悪魔だ。

「今日は喘息の発作か… どうしてここに落ちたのかは知らないけど今は良い。脱出するからパチュリーを背中に乗せてくれ」

とりあえず膝をついて姿勢を低くするが、パチュリーは立ち上がる。

「けほつ。大丈夫… それに、貴方の背中に乗ると… 死ぬわ」

パチュリーはチラッとフランに視線を移す。

ああ、本当だ。何か禍々しいオーラを放っている。

「じゃ、じゃあ私が肩を…」

小悪魔がパチュリーを支える。

「だけど二人は何で落ちたんだ？ フランの部屋なんて行かないだろ？」

「ここに落ちる穴は幾つもあった……レミィとフランの部屋にある起動装置を、両方とも作動させなきゃいけないの。私たちは図書館から落ちたわ」

つまり、吸血鬼姉妹のせいでこの騒動が起きている訳だ。

「道は分かっているんだけどさ、人間の形をしていない生物がこの中にいる理由は？」

「ここは、最後の抵抗手段として作られたから……けほつ。不死の怪物が徘徊しているの、お腹を空かせた状態で。頭を潰しても半日で再生するから、戦わないのが賢明ね」

何故屋敷の中にそんなものを作るのかは措いておくが、とりあえず…。

「じゃあ、あっちの方で……」

指で指した方向から爆発音が響く。

「戦ってるのがレミリアでいいんだよな？」

コクッ、とパチュリーは首を縦に振った。

「咲夜、コレはどう壊したらいいのかしら？」

「頭を潰せば問題ないと思います」

目の前にいる……ケルベロスのような何かに向けてグングニルを振るう。

頭を二つ切り落としたが、残りの一つがレミリアに食らいつこうとした。それを咲夜のナイフが貫く。

レミリアのドレスは既に深紅に染まっていた。

「まったく、母様も厄介なモノを用意して逝ったのね。音を聞きつけて雑魚が湧いてくるし」

「お嬢様ですが、妹様も入口を開いているなんて思ってもいませんでしたから……」

頭を失ったにも関わらずピクピクと動くケルベロスの何かを、放たれたレミリアの圧倒的な妖力の塊が消し飛ばす。

「恐らく紅魔館の住人は全員落ちているわね、でなければ此処の意味が無いもの」

「穴は紅魔館の通路という通路に配置されていますからね。まあ、一人は地上で寝ているんでしょうけど」

「さっき新しく霊力を持った奴が落ちたわ。きっと勇輝ね」

「……死なないでしょうか？」

「アイツも不死だし、能力も温存しているでしょう？」

「それもそうですね」

レミリアが紅い液体と肉片で汚れた通路を踏み、歩を進める。

咲夜もそれに続くが、五歩と進む前にその歩みを止めた。

「あら、さっきのよりは強そうじゃない」

目の前には獅子の頭、鷲の翼、蛇の頭の尾を持つ体高四メートルはあるキマイラが…。

「……間違いなく、こっちな」

真っ赤に染まった通路。レミリア達を通った後だろう。

「お兄様……。フランも、思いつきり何か壊していいよね」

血を見て発狂し始めた娘までいる。病んだ少女はお断りだ。

「出てきたら思いつきり遊んでいいから今は我慢しろ」

小悪魔の顔が青ざめて来ている。この中では一番戦闘力が低いからだろうか。

「あ、出て来た出て来た」

フランがわくわくしながら通路の先に視線をやる。

「……ゴーレム？」

石で出来た巨体で壁や天井を削りながらこちらに向かって歩いてくる。

「あーあ、これじゃ赤い出ないし面白くないや。お兄様に譲ってあげる」

本当に残念そうに溜息を吐きながらフランは後ろに下がる。

だから、面倒臭そうに溜息を吐いてからこう言った。

「おい、冗談も程々にしろ。頼む、戦ってくれ、俺はまだ死にたくない」

極力他人に任せたい。能力が使えるのはあと一度しかないのだ。

「むー。お兄様の頼みなら仕方ないか……」

フランが右手を開く。

「ぎゅっ」

フランが開いた右手を力強く握る。するとゴーレムが爆発して粉々に砕け散った。

「……いや、最初から使えよ」

と言いつつ、アレが自分に使われる事が無かった事に心の底から安心していた。

其の参拾参（後書き）

公式設定では無いので細かい事はお気になさらず。

其の参拾肆

どれぐらい時間が過ぎただろうか……。

「……吐き気がしそうだ」

噎せ返るような濃い生き物の血の匂い。それが通路に充満していた。レミリア達に追いつくどころか、キマイラと遭遇してから殆ど出口に近づけていない。

原因は襲ってくる妖怪……いや、これは使い魔だろう。目の前の人や妖怪を殺す事だけを命じられ、それ以外の自由を奪われた哀れな使い魔。

「パチュリー、フランもそろそろ疲れ始めてる。今は感情が高ぶってるから問題ないけど切れたら戦えないぞ」

「そういう場所なの。ここはレミイのお母さんが作った最後で最狂の砦。私は話でしか知らないけど、死んでも尚ここまで強力な使い魔との契約を続けられるんだから相当……今のレミイの五倍は妖力があつたと思うわ」

「……。何でそんな強いのにここまで手の込んだ迷宮を作るんだよ」

「負けたのよ。大昔に西洋からこの幻想郷に入った時に。吸血鬼は数名、相手は鬼や天狗、そして博麗の巫女。幻想郷と吸血鬼の総力戦になつたらしいわ」

話しながらもフランの援護のために霊力で武器を形作り、使い魔達に放つ。

「だから子供の為に、か？」

「分からないわ。レミイはあまりお母さんについて話さないから……」

背後からトカゲのような使い魔が食らいついてくるが、霊力の槍でその頭蓋を貫く。

しかし、そのまま勇輝を食い殺そうと顎を止めない。しかし、フランの能力によって内側から弾け飛び、肉と血液を撒き散らす。

「ちつ、数が多くなって来たな。フランの能力は一体ずつが限界。俺や小悪魔じゃ持て余すし、パチュリーは体が……」

……パチュリーの体の調子を良くしたら良いのでは？

「フラン！ ちょっと時間を稼いでくれ！」

フランに能力ではなく、広範囲を攻撃できる妖力弾に変えて貰おうとしたが……。

「お兄様を食べていいのはフランとお姉様だけなのに……お前等が食べようとするなんて……」

駄目だ。変なスイッチが入っている。話を聞くどころか声も届いていない。

だから、隣で必死に応戦している小悪魔に目をやり、ポンと肩を叩く。

「頼んだ。お前しか頼れる奴がないみたいだ」

「ええっ！？ 無理です、私死んじますよ！」

使い魔の鳴き声やフランの戦っている音がうるさくて何も聞こえない。だからパチュリーに話しかけた。

「体の調子が良ければどの程度戦える？」

「そうね、少なくとも魔理沙に後れを取らないぐらいには戦えるわ」

「十分だ」

今日の最後の一回の能力。それでパチュリーの体のあらゆる病、弱さ…欠陥を修正する。

通常の状態ではない、最高の状態にまで。

「……！行ける、今ならレミィを簡単に泣かせられるわ！」

酷い表現だ。しかし例えが例えだけに期待が持てる。

パチュリーがフランの横に並び、微笑む。

「少しだけ、本当の魔法を見せてあげるわ……そう、見えるのは一瞬だけ。貴方たちは……」

――一瞬で死んでしまうのだから。

刹那、パチュリーの前に浮かび上がった魔法陣から業火が吹き出し、使い魔を一掃した。

「す、凄い……」

小悪魔の口からそんな言葉が漏れる。

緋色の炎は一瞬で使い魔たちを灰へと変え、消滅させる。

いつも見ている病弱なパチュリーからは想像もできない、圧倒的な光景。

「ああっ！？フランのおもちやが……パチュリー何するの！」

しかしフランは不満そうな声を上げる。

「フラン、今そんな事を言つと流水を頭から浴びせるわよ。それにここから早く出たいでしょう？」

「むー」

「拙いわね……」

「申し訳ありません。お嬢様」

咲夜は致命傷では無いが、動きに制限が出てしまうような傷を負っ

ていた。

咲夜のメイド服は返り血で赤く染まっている。しかし、その一部には自分の血も混ざっていた。

その強さから忘れてしまう事もあるが、咲夜は人間だ。体は妖怪より遥かに脆い。相手の一撃が致命傷になってしまう程に。

未だ立って戦えているのは実力、才能。そしてレミリアの従者としての気概によってだろう。

「咲夜、少し下がって休んでいなさい」

「ですがお嬢様っ！」

「私を過小評価しているんじゃない？ 偉大なる吸血鬼の力。その後ろで拝んでいなさい」

レミリアはグングニルを使い魔たちに向ける。

「母様には悪いけど、お前等は肉片へと変えてやろう……二度と復活できない程細かくな」

「……近いな」

薄暗い通路の先から伝わってくる、直接胸を抉られるような威圧感。それは今迄に一度だけ経験したモノであり、この館の主である吸血鬼の物。

「ええ、レミイの妖力ね。それより大丈夫なの？ 体力自慢には全く見えないわよ」

「小さな子供を背負って走れないんじゃない男としてどうかと思うけどな」

そう、今はフランを背負って走っている。

やはり能力の多用や、ハイになっていた反動だろう。疲れて寝てしまった。

「お二人とも、私は心配する対象に入らないのですね……」

小悪魔が何か言っていたが、構っているほど余裕はない。

「その荷物は小悪魔に預けたら？ さすがに走りにくいでしょう？」

「いや、これぐらいは何ともないから。それより……」

見えてきた。深紅の弾幕が飛び交う戦場が……。

其の参拾肆（後書き）

ああ、予定より長く……。

其の参拾伍

「レミリア！」

やっと追いついた。

しかしそこは地獄絵図。使い魔だったものが散乱し、床は赤い水溜まりが幾つも広がっていた。

そこに立つ者はレミリアただ一人。

「勇輝！ 咲夜が怪我を負ったわ。早く治してちょうだい！」

「っ！」

紅い床の上に、壁にもたれながら座る咲夜に駆け寄る。

脇腹に少々深い切り傷、足も筋肉を切られている。このまま放置したら死んでしまうだろう。

「咲夜。正直、どれくらい持ちそうだ？」

出血が傷の大きさに対して少ない。恐らく能力で血液の流れる時間を操っているのだろう。

「そうね……、意識は持って五分。死ぬのは十分後じゃないかしら」

拙い。能力がもう使えない今、診療所で治療を行うしかない。

「応急処置はしてあるな……。レミリア、悪いけど全速力で診療所に向かう。護衛はフランが付いて来てくれ。フラン、頼む。起きてくれ」

「ん……。どうしたの、お兄様？ フラン、まだ眠たい……」

「フラン、お願い。咲夜を助けて欲しいの」

レミリアの真剣な声を聞き、フランは目を擦り意識を覚醒させる。

「……分かった。フランはお兄様の邪魔をするゴミを壊せばいいんでしょ？」

「ああ、それでいいよ。それとパチュリー、出口は分かるか？」

「ええ。図書館でこの地図は見たから。それに今の私は出来ない事の方が少ないわよ？」

「よし、じゃあ咲夜。ちょっと背中に乗ってくれ」

咲夜は黙って勇輝の背中にしがみつく。

通路は狭い。フランはともかく、勇輝は霊力の翼をフルに使えないので飛んでいく事は至難だろう。

だったら、何か乗れるものを作り出せばいい。

以前レミリアと戦った時に、霊力に人の形を与えるスペルカードを使用した事がある。その応用だ。

しかし、いくらなんでも自動車やバイクなんて複雑な物が作れる筈がない。

とりあえず、時速三十キロ程出たらいいのだ。

イメージは狼。それも大きな。

折角だ。白紙のスペルカードに記録して使用してしまおう。そうすれば少しは余裕が持てる。

「創造『シェイドクリーチャー』」

「おー、速い速い。飛んでたら追いつけないかも」

予想以上に速かった。大きさは三メートルもあるし、スペルカードによって動作はループしている。そこまで精密なコントロールは必要ない。

形の維持のためにとんでもない量の霊力が消費されていくのが分かる。人が乗っても形が崩れない程の密度があり、大きさもかなりなので無理もないが。

しかし、霊力切れの心配は無い。

以前は霊力の少なさを欠陥とし、量を修正していた。しかし今は霊力が“減る”という事を欠陥とし、修正しているのだ。

だが良い事ばかりでもない。元々の霊力の量を超えるような出力が

出ないのだ。

つまり、霊力の翼を使っている時は単発で霊力弾は放ててもスペルカードを使用できない。この狼を作ったスペルカードを使っている限り、霊力弾は作れない。

だからこそ、フ란の護衛が必要不可欠だった。

フ란が落ちないように勇輝がフ란を囲うように乗り、咲夜はその背に抱き着く。

使い魔が見えたらフ란が能力で倒し、他の使い魔が集まってくる前に霊狼で駆け抜ける。

これなら出口まで二分で着くだろう。しかし、問題はここからだ。

既にこの上は紅魔館ではない。壁や床も加工された石造りではなく、剥き出しの岩壁となっている。

空間を把握する程度の能力によれば、出口は霧の湖の水中。当然肉食の妖怪が泳いでいるし、以前鯨がいるのを確認した。

そして、今の三人にの衣服には血がべつとりと染み付いている。

「ここか！」

目の前に半径2メートルほどの池が見える。霧の湖に繋がっているのだろう。

「お兄様、ここ行き止まりだよ？」

「……ああ、フランは外に出た事無いのか」

なら、湖も知らないだろう。

霊狼を消し、違うスペルカードを取り出す。

「咲夜、傷に触れると思うけど我慢な。それと、泳ぐから潜る前にしっかり息を吸い込むように」

「え、ここお風呂じゃないよ？」

フラン、風呂は泳ぐ場所じゃない。

「行くぞ……。惨符『一本道の鬼ごっこ』」

開発した中でも、三本の指に入るほどエグイスペルカード。四方が二メートルの通路に敵を閉じ込め、両側の出口から大量の霊力弾を送り込むというもの。

本来なら出口は両方自分の前に作るのだが、今回は湖の上だ。

一時的に作り、使っているだけとはいえこの『空間を把握する程度の能力』は便利だ。

距離まで分かるのは嬉しい誤算だろう、そのお陰でこうしてスペルカードを最大限利用できる。

水上まで二十メートル。……息が持つか心配だが、行くしかない。

そして、霊力の通路の中に肉食の魚が入っていないとも言いきれない。

意を決し、三人は水の中へと飛び込む。

「ん？ アレ何だろ」

霧の湖の上、そこには妖精がいた。

「チルノー。どうしたー？」

肉食の妖怪もいた。

「ルーミア、ほら、これ……」

チルノは湖から突き出るように現れた霊力の柱のようなものを指差す。

「何これ？ 食べられるの？」

「あたいの感じや、これはアレね……アレよ！」

「……そーなのかー」

「とりあえず凍らせよつと」

「……！？」

通路の先の水が凍り始めた。拙い、あの馬鹿を計算に入れていなかった。

フランに目配せすると、フランは頷き右手を掲げて開く。

視線を上に戻すと同時、氷が粉々に砕け散った。

水面まであと少しだ。もう、スペルカードはいいだろう。

フランに見えるように上を指差し、通路を消し去ると同時、背負っていた咲夜を腕で抱き、霊力の翼を作り出し浮上した。

翼が水を持ち上げ、水が舞い上がる。その時に悲鳴のようなものが聞こえたが気のせいだろう。

「フラン！ 俺は診療所に向かう！」

「フランも行く！ どうせお家への帰り方分からないもん！」

咲夜は気を失っていた。急がなければ……。

霊力の翼を羽ばたかせ、人里へと急いだ。

フランが気化しそうになり、慌てて赤く染まった白衣を被せたのは余談である。

「……とりあえず、命は助かるか」

診療所で咲夜の傷の縫合を済ませ、輸血をしながらベッドに寝かせた。

赤い白衣は水を張った桶に突っ込んである。

傷痕は大きく目立つし、足の神経にも損傷はあるだろう。悔しいがこの設備ではどうする事も出来ないなので能力に頼るしかない。

「お兄様の家、ちっちゃくて可愛いね。キレイだし」

フランはさっきから診療所の中をぶかぶかのシャツ一枚でうろろろしている。血塗れの服でいるのはどうかと思ったので着替えさせた。咲夜もメイド服から着替えさせたが、不可抗力だった。やましい気持ちは微塵もない。

死にかけた患者に欲情する医者がいたら、医者を辞めた方がいいだろう。

「フラン、頼むから大人しくしてくれ」

診療所に入るまでに何人もの人に見られた。しかも吸血鬼と共にいるのだ、直に慧音や妖怪嫌いの人間達がやって来るだろう。

「桜井殿、話がある！」

玄関の方から声がする。

「来たか……。フラン、咲夜を見ていてくれ。それと何が聞こえても、里の人間が何をしようと大人しくしててくれ、頼んだぞ」

「うん……。でも、お兄様が危ない目に遭うようなことはしないでよ」

「……ああ、約束する」

「桜井殿、お聞かせいただきたい。何故悪魔の従者を助けるのですかな？」

「やって来たのは十人。若い男が七、重役が二、そして慧音だ。」

「何故か？愚問ですよ、俺が医者だからです」

「そういう意味じゃねえ！ どうして妖怪の見方をするのかって聞いてんだー！」

男の一人が声を上げる。血の気が多いようだし、献血でもしてやろうか……。

「アイツは人間だ。助けていけない理由は見つからないな」

「悪魔に魂を売ったんだろ、だったらもう人間じゃねえ！」

……ああ、駄目だ。

物事を感情的に、まるで自分の考えが正しいとでも協調されると思

っている。

自分を中心に世界が回っているとしても勘違いしているのか。

「……おい。餓鬼か、お前は？」

「っ……」

男は面を食らったような反応をする。突然、今まで呆れ顔で話していた相手が威圧感を含む声色で罵倒してきたのだから無理もない。

そして当の勇輝の眼光は鋭く、声には感情が無い。

「偏見で物事を判断するな、吐き気がする。それにお前が邪魔をするなら、俺はお前を殺す。患者一人を馬鹿一匹排除するだけで救えるなら安いモンだ。答えろ！ 邪魔をするのか、しないのか！」

「……チッ」

男は舌打ちをする。だが、そうするべきでは無かった。

いつ取り出していたのか、勇輝は手でメスを弄ぶ。そして、それを俺の足下に投げる。

ドッ、という音と共に半分以上を気の床に沈ませたメスを見て、慧音以外の九人から冷や汗が流れた。

「俺はさ、二択で質問してんだよ。理解出来なかったか？」

「し、しない……。邪魔はしねえよ」

怖じ気づいた男から視線を外し、重役に目を向ける。

「里に危害は無い。それに咲夜はある程度友好的に里と接していた筈だ」

「ああ、治療は構わない。しかし、被害が出ないという確証が欲しい」

「……博麗霊夢を呼ぶ。それで文句は無い筈だ」

「分かった、それなら皆納得してくれるだろう」

これで里との交渉は済んだ。だが……。

「まだ何かありますか？ 慧音さん」

「……少し、話がしたい」

其の参拾伍（後書き）

ああ、まだ終わらない……。

そして文字が多くなってしまった。

其の参拾陸

「それで、話って何でしょうか？」

診察室では咲夜が寝ている。二人は待合室で向かい合って座っていた。

「お前は……。お前は何のために医者になったんだ？」

「……………」

「私には分からない。だが、少なくとも人を救うために医者がいると思っている。……どうしてあんな事を言った？」

「……………少し、昔話をします」

十三年前の事だ。

父親がいつものように、表向きに病院に行けないような人達の所へ朝から治療に行った日の昼。

当時六歳だった勇輝は、既に父親の仕事を見たり、勝手に資料を漁って勉強をしたりしていた。

周りの子供より大人びていたが、ヒーローに憧れたり、親の仕事に興味を持つなど年齢相応の感性を持っていた。

しかし、その日は唐突に訪れてしまったのだ。

母親と二人、何も変わった所の無いマンションの一室で母親に甘えながら休日を過ごしていた。

「勇輝、大きくなったらどんな事がしたい？」

今はもう、顔も思い出せなくなってしまった母親。

どういう訳か、小さな頃の自分の写真や映像はあるのに、そこに母は一度も写っていないかった。

「んー。父さんと同じ仕事がしたいかな」

「そうなの？　ならいっぱい勉強しないといけないわね」

「大丈夫だよ。クラスではテストも一番できてるもん」

「そうだったわね。勇輝は頭も良いし、しっかりしてるからきっとなれるよ」

子供の将来の夢を聞いている。そんな普通に微笑ましい時間だった。

だけど、母親は倒れた。

その症状から、勇輝は母親が重い病気にかかっていることを理解した。だから、病院に連絡を入れた。

「母さん！　もう直ぐだから、あと少しで救急車が来るから！」

最適とはいえなかったが、父親の部屋から薬を持ち出し、その病の苦痛を和らげる処置を行った。小学生であつた身から考えると、これ以上ないぐらいの判断だつた。

救急車が来たのは十五分後。母親は病院へと運ばれた。

「君、お父さんは今何処にいるか分かるかな？」

母親を担当したのは初老を迎えた白髪 of 男性の医者だつた。

「分かんない。父さんは電話も持っていないし……」

医者は困つたように、ボールペンで机を叩く。

「君のお母さん。恐らくは過労による貧血、……つて言つても分からないよね」

「分かるよ！ でも違つ、母さんは貧血じゃなくて……」

「ははっ、賢い子だね。でも、症状は貧血で合っているんだよ。今日一日、点滴をしながら入院すれば直ぐに良くなるから」

「話を聞いてよ！ 母さんは違つ病気なんだ！ 早く治療しないと……」

「大丈夫だよ。お母さんの病室まで案内してあげるからね」

医者は看護師を呼んで、勇輝を連れて行くように指示する。

勇輝は不満だつたが、本物の医者が言うなら気のせいかもしれない。

そう思つて、一晚中母親の傍で寝ずに看病をしていた。

次の日の朝。母親が冷たくなっている事に気づいた。死因は、虚しくも勇輝の思つていた病による物であつた。

「と、まあこんな所ですね。あの時、親父がいたら母さんは助かつたかもしれない。それに自分にもう少し知識と自信があつたら、助けられたかもしれない。それが医者になつた理由です」

慧音は何も言わない。ただ、勇輝の話に聞き入つたいる。

「だから、俺は自分の患者は全力で助けます。二度とあの時の状況を作り出さないように。誤診も失敗も許されない、絶対に死なせてはいけない……それだけです」

「……他人を、犠牲にしてもか？」

「場合によります。俺の中では、治療に当たつた患者の命が最優先です。例えるなら二十人分の命でしょうか？ そういう事です。大勢を救うための少数の犠牲、正しいと自信を持つては言えませんがどね」

「だけどそれでは……ッ！」

「理屈じゃないんです。言ってみるなら枷ですね、幼いあの時の自分が架した……」

慧音は何も言わず、診療所を後にした。呆れられたのか、黙認され

たのか。どちらにせよやる事に変わりはない。

とりあえず、里の人間たちを納得させるために霊夢を呼びに行くことにした。

「て訳だ、明日まで診療所にいて欲しい」

「嫌よ。面倒じゃない」

「飲み食いは好きなようにしていいからさ」

「よろこんで行くわ」

話がつくのに、モノの数秒もいらなかった。

「お兄様……」

フランは戸惑っていた。

聴こえていたのだ、勇輝の過去の話が。

それに、その話は自分に話されたものではなく、それでいて他人が聴くには重すぎる話。

フランは勇輝を気に入っている。寧ろ好意を寄せていると言ってもいいだろう。

初めて、自分から逃げずに共にいる事を選んだ存在。

姉のレミリアでさえ隔離という処置を取っていたのだから、その反動もあるのだろう。

勇輝がストッパーになっているという事で、紅魔館の中なら自由に
して良いという許可も貰えた。

あらゆる方面で自分を救ってくれた存在なのだ。

だから力になりたいと思う。けど、自分にはそれができない。

壊す事しかできない自分には、人を治す事はできないのだ。

眠る咲夜を見ながら、フランは右手を血が出そうなほどに握りしめた。

其の参拾漆

冬の博麗神社。

いつも巫女以外に人影の見えない、人里の人間は何故この位置に建っているのかも分からない静かな神社。

しかし、今日この日は賑やかな声と人気で騒がしくなっていた。

里の医者、桜井勇輝もその宴会の席に招待されている。そんな彼の、此处に着いてからの第一声は……。

「酒臭え……」

彼は生前というか、外で普通に暮らしていた際、十九歳という大人の一步手前の年齢であった。

当然、飲酒喫煙はした事がない。成人式にすら出る事が出来なかった。幻想郷に入ったせいだが。

そう考えると、何故あのタイミングだったのかと自分の運の無さを嘆きたくもなるが、この際どうでもいい。

幻想郷に来て、あと数ヶ月で一年だ。そして年齢も二十を迎えた。

その事は周りに話していない。そもそも、身体は十九で成長どころか老化も止めている、そして周りには見た目小学生低学年の長く生きている吸血鬼。何十年も紅魔館で図書館に籠っている魔法使い。年齢は分からないが、周りからの反応を見るとかなり年上扱いされ

ている節のある半獣。

……こんな面子の前で、自分二十年生きましたよ。なんて報告を試みる、殺される。

きつと、許されるのは霊夢や魔理沙にだけだ。だけど奴等は口が軽い。

「おい、勇輝ー。飲んでるかー？」

顔をアルコールで赤くさせながら、上機嫌で魔理沙が近寄ってくる。開けたばかりの、中身が大量に入った酒瓶を“両手に”持ちながら。

「んー、まあ少しずつ。あんまり酒は強くないみたいだから」

身体が成人してないから、という訳ではなく体質の問題なのでこればかりはどうにもならない。

「なんだと、私の酒が飲めないってか？」

「いや、そういう訳ではなムグツ!？」

酒瓶ごと口に酒を注ぎこまれる。

飲まなければ窒息死。そして、短時間での大量のアルコール摂取は……死ねる。

「おーおー、飲めるじゃないか」

駄目だコイツ、早く何とかしないと……。

いや、本当に何かしないと死ぬ。少なくとも、明日素晴らしく鬱になるような頭痛に見舞われる。

酒に弱いのは欠陥だったのか……、いや、それは個性というヤツであって酒に強い人間が優れているなんて事はない筈で……。命の危機が迫っている。

でも、死ねなくなってるんですよね。また苦しみ続けるんですか。

「はっ……！」

何時の間にか宴会用に敷かれたシートの隅の方で座っていた。さっきまで中心部にいた筈だが。

「少しは断る事を覚えたらどう？ 将来、尻に敷かれる事になるわよ」

「咲夜か、助かった」

「別に良いわよ、助けたのはお嬢様の相手をさせるためだから」

「ああ……」

咲夜にあの時の怪我の面影はもう無い。後日に能力で傷を元に戻したお陰で、その日からメイドの仕事に復帰している。代償は違う方面でそれなりにあったが。

余談だが、あの地下迷宮はパチュリーの手によって何重もの結界と行程を一つずつ解除した場合のみ使えるように設定された。二度と

行きたくない。

紅魔館からも、総出で宴会へと出席していた。残っているのは小悪魔だけである。

普段、図書館から一步でもないパチュリーですら宴会に参加していた。美鈴も忘れられずついて来ている。

「勇輝、早くこっちに来なさい」

「お兄様ー、早くー！」

フランはあの日、咲夜を診療所に運んだ際に何の問題も起こさなかった事もあって勇輝に会いに来る場合のみ外出を許可された。勿論、監視に誰かつけるのが条件だが。

紅魔館メンバーの周りには、日本酒ではなくワインの瓶がいくも置かれていた。正直、空気を壊しているように見えなくもない。

見渡してみると、この宴会の席の食べ物の方がおかしい。

まず、飲み物と食べ物の方が九対一なのだ。この時点で常識離れしている。

そして、“宴会”であるのに和と洋の方が半々なのである。決してパーティーではなかった筈だ。

料理を作っていたのが咲夜と霊夢なので仕方ないのかもしれないが、見栄えとしてはどうかと思う。

「夜なら外でも自由に行動できるのにね……これじゃ傘の下しか居られないわ」

「なら夜になってから来たらどうだよ……」

「私がもう言ったわ。レミイが貴方に会うつて聞かないのよ」

それで気化されたらどんな反応をしたらいいのだろう。

「別に良いけどな。俺の家でやる訳じゃないから片付けも雑で良いし」

「あー、お兄様が霊夢に喧嘩売って……」

「やるよ!? 少なくとも自分の出したゴミぐらい完璧に片付けるよ!?!」

霊夢に喧嘩を売ったら消し炭になる。魔理沙の魔砲が可愛く見えるぐらいの攻撃で。

「でもさ、何で昼から宴会するかな……」

「日付もおかしいわね」

「……やっぱり数え間違えとかじゃなかったか」

「ええ。今日は十二月三十日、大晦日の前日よ」

そう、今日は大晦日ですらない。その前日だ。

宴好きな巫女が、前日の昼から宴会を始めたのだ。

正直に言おう、迷惑だ。掃除がしたかった。

大晦日は忙しくなるだろうと、今日掃除を終わらせる予定だった。

そんな事を考えていると、酔った霊夢がこんな事を言い出した。

「よし、皆酔って来たところで各自、秘密の暴露を始めるわよー
」

其の参拾捌

「また唐突な……」

霊夢は酒瓶片手にふらふらと紅魔館メンバーの方へ近寄ってくる。駄目だ、完全に出来上がっている。

よく見ると、霊夢は魔理沙ともう一人、誰かを引き摺っていた。

魔理沙と似た金髪に、カチューシャをした頭……どこかで見た気がする。

「霊夢……。秘密を話し合うのは別に構わないけど、まだ日が傾き始めたばかりよ？ 年明けまで持たないんじゃないかしら」

「なに言ってるのよ、最後は弾幕ごっこにきまつてるでしょー」

無理です。貴方達のような化け物と一般人を一緒にしないで下さい。

霊夢がビシッ！ と勇輝の顔を指差す。

「まずは勇輝さんから、はいどーぞ！」

「んな無茶な……」

「五秒以内に言わなかったら全員のスペカで挟み撃ち」

「はっ？ いや待て、死なないけど死ぬよ俺」

「じー、よーん」

「分かった！ 分かったから！」

仕方ない、こうなったらアレを言うしか……。

「実は、外界にいた時は彼女がいました……」

殴られた。誰とは言わない、ただ五人ぐらいに同時に殴られた。

「嘔吐くなよ、何か言え」

「……家の診療所、庭にお墓を建ててあります」

手紙を届ける際に妖怪に襲われた鳩の。幻想郷で伝書鳩は使つてはいけない。

「はい、じゃあ私ね。家の神社、私の代になってから賽銭が五百円しか入ってませーん」

言ってから足で地面を蹴りつける霊夢。もう駄目だ、寝てしまえ。

「次は私だな。……図書館から借りた本の半分は勇輝の書斎に置いてあるぜ」

魔理沙、お前は どうして そう……。

「じゃあ私ね。五百年生きているけれど……背が、何百年も変わってないわ」

レミリアが持っていたグラスを砕く。……後悔するなら言わないでほしい、そして物に当たるのをやめてほしい。

「じゃあ次フランね。えっと……あ！ お姉様の部屋にお兄様のしやしつ……」

フランが何か言いかけた所でレミリアが口を塞ぐ。

その後も、秘密の言い合いは続いた。咲夜は……。

「お嬢様の下……ではなくパン……。そうですね、月に一度くらい掃除の手を抜きます」

パチュリーは……。

「体は弱いけど、流行り病には罹った事が無いわ」

美鈴は……。

「何度も……仕事中に寝ました」

と、馬鹿正直に答えるか適当に当り障りの無い事を話していく。

そして、彼女の番になった。

「まだ言っていないのは私だけ？」

「あれ？ アリスか？」

「気づいてなかったの？ 最初からいたんだけど……」

此処に着いてからは、直ぐに魔理沙に絡まれ霊夢に飲まされ、魔理沙に絡まれてレミリアに絡まれた。

とてもではないが、周りよく見る暇は無かった。……と、思う。

「なんだよー、勇輝とアリスは知り合いだったのかー」

もう真面に立ってられない魔理沙は放置。

「じゃあ言うわね。私……何年か前まで人形だけが友達でした」

……重いんだけど。

「でも今は人間の友人が持てたわ……普通ではないけれど」

「失礼なー、私は普通の魔法使いだぜー」

「あんな魔砲が連射できる奴が普通なら幻想郷は既にねーよ」

そして二周目に続く。

日が沈み始め、空が赤くなる頃には勇輝以外の全員が酔いつぶれていた。

「……賑やかな奴等だな」

断り、逃げ続けていたらほとんど飲んでいない。むしろ助かるが……。

「幻想郷はどうかしら？　桜井勇輝君」

いきなり背後からかかった声に、年甲斐もなく肩をビクツと震わせ
てしまう。

「妖怪の賢者様が何か用で？」

振り向いたそこにはスキマ妖怪。いつもの様に怪しげな笑みを浮か
べながらスキマから足を出し、座っていた。

「冬眠する前に宴会でも参加しようと思ったのだけれど……どうし
て夕方に終了しているのかしら？」

「昼からやってたからな。夜になればまた始めるんじゃないか？」

「そう……、じゃあ春まで待つ事にするわ」

「本当に冬眠するのかよ」

人間じゃないが、姿は人のそれと同じ。……どう冬眠するのだろう。

「それで、答えは決まったの？」

「当然。それに、あの時に話した筈だけど」

「まだ何も知らない状態で聞いたんだもの、今聞いたら答えが変わ
っているかもしれないでしょう？」

「変わらないさ。利用されても構わないし、あの約束も数年の内に
は果たすよ。身体も幻想郷に馴染み始めたみたいだからな」

「あら？ 気づいていたの？」

「自分の身体の状態ぐらい把握してるよ。一見、外界にいた時と変わらないけど」

霊力、妖怪、能力、異変。外界では存在しないものに触れてきた今、自分は“普通の”人間の枠から外れてしまっている。

既に、霊力を“普通に扱えてしまっている”自分は幻想郷で生きていくしかないのだろう。

「それに、日に日に霊力が増えているんだ、嫌でも分かる」

「……もう、外界で貴方は忘れられた存在になっている。血の繋がった親からも、親しかった友人からも、貴方が桜井勇輝だと認識されない。そして、貴方がいたという記録さえ世界から抹消される」

「上等。やりたい事は見つけた。生きる目的もある。こっちで仲良く、面白可笑しく話せる友人も出来た。俺はそれで十分、俺が生きている理由なんてそれだけで良い」

「……ふふつ。やっぱり貴方は面白いわ。この幻想郷を作っていた時以来かしら、ここまで気分が高揚するのは」

「あの約束も、やるなら徹底的にやるぞ。二度と俺に頼みたくなくなるくらいには」

「へえ……。まあ、死なない程度にやってちょうだい」

「死なないってか、死ねないんだよね……。死のうと思えば死ねそうだけど」

「生と死の境界、弄ってあげましょうか？」

「冗談じゃない。俺はまだやりたい事がある」

「そうね……。じゃあ、改めてようこそ、幻想郷へ」

其の参拾捌（後書き）

閑話入れたら妖々夢。さて、暴れようか。

閑話貳

まだ、勇輝が紅魔館で働いていた時の事だ。

「パチユリー様が、ですか？」

「ええ、何でも外にはどんな本があるのか聞きたいらしいわ。フランには咲夜が言っておくから勇輝はパチエの所に行きなさい」

「分かりました。それと嬢様、咲夜に俺が寝ている間に血を抜くのを止めて貰えるように言っではくれませんか？ 起きたら頭がくらくらしてしまつて……」

「咲夜はそんな勇輝の姿を見て楽しんでるみたいよ？」

「……そうですか」

諦めよう。時間を操る相手に対応出来る奴がいたら、それはとんでもない化け物だ。

不満な気持ちを拭いきれないまま、勇輝は図書館へと歩いていった。

「あ、勇輝さん。パチユリー様がお待ちですよ」

図書館に入つてすぐに、小悪魔が近寄ってくる。

何度か入っているが、ここは迷う。

「了解、案内してくれると助かるんだけど……」

「良いですよ。その為に待機していたようなものですから」

小悪魔に続いて、山のような本棚の間を歩いていく。

「大変そうだな……こんなデカイ図書館で働くなんて」

「私はもう慣れてますから。それに、私からしたら……お屋敷で一番危険な職場に平気な顔をして出向く勇輝さんの気が知れません」

「貶してないか？」

「まさか、誉めてます。勇者ですよ」

「……ハア。転職を考えようかな」

本気で出ていく事を考えた。恐らくはフランがキレて、咲夜に連れ戻される。

お先真つ暗、せめて少しぐらい人里に行かせてくれても良いと思う。未だに人里へは入った事が無いのでどんな場所かは分からないが、普通に暮らしたい。

「遅い」

開口一番に出た言葉はそんな厳しいものだった。

「申し訳ありません、パチュリー様。何分、屋敷に慣れていないも

のですから」

「まあ良いわ。急ぎの用では無いし」

そう言うと、パチュリーはテーブルの上に積まれた本を移動させ、空いたスペースを作る。

「そこに座って」

「失礼します……」

言われた通り、指示されたイスに座る。

「今日聞きたいのは外界の本についてよ」

「と、言われまして中身を完全に記憶している訳ではありませんので役に立てるかどうかわかりませんよ？」

「欠けた知識は能力で補えるんでしょ？」

「ああ、成る程……」

「それで、外界にはどんな本があるの？ 偶に幻想郷に流れて来る物もあるけれど、他にどんな物があるか知りたいの」

「一応確認して措きますが、流れて来た物にはどのような本がありますか？」

「まずはコレね」

パチュリーが取り出したのは、現代にはないような紙を糸で纏めた歴史を感じさせる本。

タイトルは……『書新体解』。

「つて解体新書!？」

何て物が流れて来ているのだろう。日本で初めての解剖学の医学書、読みたい。

「そんなに有名な物なの？　じゃあどうして幻想郷に流れてきたのかしら……」

「名前は有名ですが、その形に問題があります」

「そういう物なの……？　じゃあ、次はこれなんだけど」

……同人誌ですね。それもボーイズラブの。

「それは捨てて下さい。お願いします、それだけは世界から抹消して下さい」

その後も、無駄に驚かせる本ばかりが紹介されていった。

「これで全部ね。それで、外界には他にどんな物があるの？」

「何、と言われましてもね……。取りあえず、漫画に関してはこの数千倍はあると思います。小説も数百倍、図鑑も同じくらいでしょう」

「そんなに……、じゃあ貴方の読んだ事のある本を全て複写して出来るでしょう?」

ジャンルが偏りそうだ。そして趣味が丸分かりになる。

「大した本は読んだことが無いのですが、それでもよろしいでしょうか?」

「どうせ、この漫画という物ばかりなんでしょう? それでいいから書きなさい」

「……了解しました」

著作権は……まあ大丈夫か。

能力で記憶の欠陥と、絵をそっくりそのまま写せるように画力を修正。

……最後に紅魔館で医者らしい事をしたのはいつだったっけ。

「……漫画を描くために紙四千枚とペンの用意をお願いします。丸一日かかりますが良いですよね?」

徹夜してやつと一種類。しかしコミック十数冊分を一日で描くのだ、早いには違いない。

パチュリーは言われるままに道具を用意する。

後にパチュリーは語る。あの時の勇輝は明日世界が滅亡するのではないかという気迫でペンを走らせていたと。

「……………」

「そんなにならなくても良かったのに」

書き上げたのは半分以下。しかし多いのには変わらない。

パチュリーは纏めて置かれた紙の束の一つを手に取り、読み始める。

現在、午後十一時半。あと三十分で日付が変わる。

パラパラと紙が捲られる音だけが図書館の中で響いていた。

「……………どうしてこの漫画なの？ 他にもあったと思うんだけど」

「……………いや、何となくです。孤島での惨殺とか、解ける筈のない文書とか、魔女とか。とりあえずコレなら続きは書かなくても許されるかと思ひまして……………最初は」

「そう……………。じゃあ、続きお願いね」

「え、あの……………」

「もう一日くらいなら借りてられると思うから」

「俺の精神的な問題なのですが……」

「能力、使えば良いでしょ」

「……はい」

閑話貳（後書き）

紅魔館での何気ない話の一つ。出番が少ない人の救済とも言える閑話です。

どういう漫画を描いていたかは……分かる人には分かるでしょう、前作のが面白いですが。

其の参拾仇（前書き）

東方妖々夢・春雪異変。次の幻想をお楽しみあれ。

其の参拾仇

幻想郷も、何度目になるか分からない春を迎えてから数十日。

まだ、雪が降っていた。

「……異変、なのか？」

幻想郷に来て早一年。患者の来ない診療所の所長であり、人里唯一の医者である桜井勇輝は窓越しに雪が降るのを見ていた。

今は五月。本当なら桜も散り始める季節だ。

ある日を堺に患者の来なくなった診療所は設備ばかりが充実していた。

他の家屋には見られない電子機器が幾つも置かれているが、やはり勇輝以外に人はいない。

「……異変を解決してみるか」

やる気の無さそうな表情で、勇輝は診療所を後にした。

人里の道は雪が積もっており、歩く者は少ない。

子供が数人遊んでいるが、特筆する所は無いだろう。

「勇輝？ こんな所で何をしている？」

「慧音さんじゃないですか、お久しぶりですね」

あの気まずい会話も今となっては昔の事、二人の関係は以前と変わらないものになっていた。

「今から会合の筈だが……。何処へ行くつもりだったんだ？」

「紅魔館、魔法の森、博麗神社ですね」

「……また厄介な場所ばかりだな」

「ほら、ここまで冬が続くなんて立派な異変じゃないですか。異変と言ったらこの三つでしょう？」

「博麗神社は分かるが後の二つはどうしてだ？」

「紅魔館は前回の首謀者がいますし、魔法の森には霧雨魔理沙がいますからね。異変についての先輩には話を聞いて損は無いですから」

「そうか、じゃあ他の者にもそう言うておく」

「お願いします。異変は俺が霊夢、それか魔理沙が解決するでしょうから待って下さい」

「ああ、期待している。……それと、やはり診療所の方は」

「大丈夫です。必要としている患者は来てくれますから。それでも、あの時から減り続けているのは間違いないですけどね……」

「……。そうか、では異変の解決、頼んだぞ」

「はい。まあ期待せずに待っていて下さい」

誤算だった。

「……死、ぬ……………」

厚着してくるのを忘れた。とんでもなく寒い。

現在、霧の湖の周辺を散策中である。

理由は紅魔館に行く事と、もしかしたら犯人かもしれない奴に会うため。

「寒い……凍る……………」

これで本当に死んだら…………いや、死ねないのか。

冷凍されるだけ、解凍は自分で出来る。

「まさかコレが冬眠…………ッ！」

違うだろ。

と、ふざけた事を考えていたら目的の人物が凍った湖の上に倒れているのを見つけた。

よく見ると湖の氷が割れていたりする。戦闘の後だろうか。

「おーい、生きてるかー？」

倒れている人、ではなく妖精に話しかけると、弱々しくも答えが返ってきた。

「また……負けた」

……さて、霊夢の仕業か魔理沙の仕業か。

とりあえず、チルノが負けたのに気温が変わっていない所を見ると、どうやらチルノは今回も無関係らしい。

助け起こさずに、紅魔館に向かうことにしよう。

「させないよっ！」

「早いな、復活」

「ゆーきになら勝てる！ 弾幕ごっこで勝負よ！」

「いや、この前俺が勝った……」

「いいから勝負！ あたいが勝ったら今すぐにお菓子を勝ってくる
こと」

「じゃあ俺が勝ったら俺の周りの冷気を抑えてくれ」

「いいよ、勝つのはあたいだから」

「枚数は二、機数は一。それでいいな？」

「分かった。氷符『アイシクルフォール』！」

……あ。

「……使うスペル、間違えただろ」

勇輝が立っていたのはチルノの目の前。対してチルノの使ったスペルカードは両サイドから挟むように“一定以上の距離離れた”相手を狙う弾幕。

何も言わず、霊力の弾を一つ、右手で作り出す。

勝敗は決した。これ以上無いほどに呆気なく、虚しく……。

少しだけ寒さが抑えられた後、今度は飛行して紅魔館を目指した。

本日、既に能力は二度使用している。

いつもの事ながら、半日経っていないのに回数制限に達するのは勿体ない気がしたのだ。

用途だが、身体の総合的な修正。それと霊力、体力の減少を修正した。

詳細を言うと、妖怪に劣らない身体能力と強度。尽きない体力と霊

力だ。

十分過ぎる気もするが、周りに化け物しかないものでこれでもまだ不安だ。

さて、紅魔館が見えてきた……。

「咲夜が解決しに行った？」

「ええ、今朝早くに出て行ったわ」

まさか咲夜が異変解決に動くとは思っていなかった。

「咲夜は花見が好きだから……」

「いや、そんな理由でかよ」

まあ、レミリアに聞くのも咲夜に聞くのも同じだろう。

「じゃあ聞きたいんだけどさ、異変を解決した事ってあるか？ それと、冬が長引いている原因とか」

「異変に関わったのは二度だけ。どちらも起こした側よ。原因はそうね……春を盗んでしまえば冬のままになってしまうんじゃないかしら」

「季節を盗むなんて意味分からねえよ……」

「それが幻想郷よ。外界とは隔離され、外では有り得ない事が多々起きる。実感はあるんでしょう？」

「……ああ、外での常識は通用しないんだっとな」

となると、何か痕跡のような物が残っているかもしれない。

降雪機のように露骨な物ではないだろうが、所々に春が来なくなる原因が。

「助言としては……目の前で起きている事を疑わない事。ぐらいかしら」

「要はとりあえず理解するのは諦めて認めてしまえ、と」

「……あ、うん。それでいいわ」

其の肆拾

「手掛かりが……無い」

もう昼を過ぎている。しかし、一向に異変については分からず、飛び回るばかり。

そして迷っている。

空に目印がある筈なく、自分の直感に従い進んでいたら今どこを飛んでいるのか分からなくなってしまった。

地上を見れば雪や樹木。同じ風景がずっと続いている。

「しかしアレだな。ここが日本だなんて信じられなくなってくる」

自分が住んでいたのは建物ばかりが建ち並び、木は公道に立つもの、草はコンクリートの間から生えているもの。山なんて遠目にしか見たことがない。

しかし、此処はそれが満ちている。いや、今までと真逆なのだ。

外は人の住み処で溢れかえっている。だが、ここでの勢力図では人間など気にならない程でしかない。

と、感傷に浸っている場合ではない。

とりあえず東に向かおう、博麗神社がある筈だ。

だが東がどつちか分からない。空は雪雲で覆われていて、太陽の位置が分からないのだ。

「ん？ 此処は……」

以前見たことのある、人里から離れた場所にある小さな民間。

しかし、住んでいるのは人でも、獣でも無い。

そして、民間の中から煙が上がった。

「さて、運べそうな日用品を探しますか」

「うつ……本当に持つてくの？」

スペルカードルールでの決闘に勝利した博麗霊夢はマヨヒガで日用品の物色を始めていた。

今日、偶々マヨヒガにいた式である橙は侵入者を閉じ込めようと思ったが、その明らかに空き巣を働こうとする態度を見て迎撃戦を挑んだが、敗北。

「紫様と藍様に怒られる……。けど私じゃ……」

そんな時、数ヶ月前に出会った者の霊力をマヨヒガの入り口から感じた。

「あつ！ 異変の犯人がこの家の入り口に！」

「え？ 本当？」

霊夢が出入口へと向かった後、橙は……。

「すみません勇輝さん。これも紫様と藍様のため……」

「さて、八雲家の誰かはいますかねーっと……」

マヨヒガには一度だけ来たことがある。例の紫に助けられた時だ。

本家は別の辺境にあるらしいのであまり期待は出来ないが、誰かいるのは間違い無いのだ。

「まさか勇輝さん。貴方が犯人だったなんてね……」

「え？」

いきなり目の前に現れた霊夢。更に、その手には弾幕ごっこの弾であるう霊力の御札。

「賽銭の恩があるけど仕方ないわ……。さっさと春を返してもらわよ！」

「いや、意味分かな……」

「問答無用！ 弾幕勝負よ！」

「……まあ、良いか。異変を解決するのは本来俺の仕事じゃないし、暇を潰せるなら」

きつと人間相手になら手加減……してくれそうに無いな。咲夜は全治三週間だったらしいし。

時間を操って一日で治したらしいが、今はどうでもいい話だ。

「ルールはスペルカードルール。枚数は五枚、機数は三。立会人は……猫、出てきなさい！」

「私には橙という藍様に貰った名前が……」

何処からか現れた式の妖怪。ああ、原因はコレか……。

「橙、今度会ったら紫にチクる。当然藍にもな」

「そんなっ!？」

少しは反省したらいいと思う。

「外で良いよな？」

「ええ、ここじゃせまいもの」

さて、暇潰しで異変解決をしようと思ったたら大変な事になってしまった。

自業自得だが、相手はレミリアを瞬殺できる。

しかし、今の桜井勇輝は普段の桜井勇輝では無い。

霊力は減らない博麗霊夢並みの霊力。身体能力も吸血鬼並みで体力も減らない。

体も、人間とは思えない程に強固だ。

しかし、弾幕による勝負でそれらは少しのハンデにしかない。

如何に相手の虚を突き、美しく恐ろしい弾幕を作り出せ、相手を翻弄出来るか。

それがスペルカードルールの大前提だ。

正直に話そう。勇輝のスペルカードは相手に当てる事が大前提となっている。

つまり、美しさもへったくれも無いエグい弾幕が殆どなのだ。

枚数が決まっているこの勝負、どちらも機数を残したまま勝負が終わった場合に勝てる自信は……無い。

だが、こっちは霊夢のスペルカードを見たことがあるし、今なら避けられると思う。

しかし、話によれば霊力の翼は体の一部として扱うらしい。これは誤算だった。

経験値、状況、スペルカードの種類、その他色々から叩き出した勝率は……。

「じゃあ……始めっ!」

橙の声と同時に、霊夢が十や二十では済まない霊力の御札を飛ばしてくる。

勇輝はまだ飛んでいない。それに、霊夢の弾にはいくつか追尾してくるものが混じっている。

「勝率三十パーセントの戦い。少しは粘らせて貰おうか」

取り出したのはスペルカード。エグさは上から七つ程。

「道化『奇術・ペテンバインド』!」

お馴染みの鎖状の弾幕。

それが霊夢の放った弾を打ち消しながら空へと伸びる。

幾つかは霊夢を狙って行くが、簡単に避けられている。

「勇輝さん……もしかして、物凄く弱い?」

「いやいや、まだここからがメインだつて」

ここで、勇輝の弾幕のちょっとした欠点を話しておく。

勇輝は魔法陣の類いを使えない。つまり、弾を放つ起点は勇輝自信

だけだ。

だから、相手は勇輝だけに集中すればいい。

だから、危機察知能力が余程高くない限りこのスペルカードの真意には気づけない。

「ちょっとした挨拶だ。怪我をしたら診療所に、ってな」

其の肆拾（後書き）

どうしてこうなった……。

レティは出番無し。すみません。

其の肆拾巻（前書き）

むう
∴ PCで書かないと遅くなりますね。

其の肆拾巻

鎖状の弾幕は空中をウネリ、霊夢を襲う。

更に勇輝が球体の弾幕をいくつも放っているので鬱陶しい。

だが、避けられない程ではない。

故に霊夢はスペルカードで応戦せず、通常弾を放ちながら勇輝の弾幕を掻い潜る。

勇輝も弾幕に集中しながらも、霊夢の放った弾を自分の弾幕で潰していく。

「すごい……」

その声を漏らしたのは橙。彼女の主人達も規格外の強さではあるが、目の前の二人はそれに匹敵する。

ましてや、二人は人間だ。どちらも普通とは言えないが。

だけど、霊夢には余裕があるように見える。

才能も、経験も、力も。勇輝は霊夢に劣っている。それを能力で補っても霊夢に全力を出させる事すら出来ない。

「……そろそろ、か」

張っていた罾が霊夢を陥れるまであと数秒、それまでスペルカードを使わせてはいけない。

霊夢がスペルカードを使えばこの弾幕は意味を成さなくなってしまう。

「鬱陶しくなってきたわね……」

霊夢も弾か鎖という事で、動きが次第に制限されている事に苛立ってきていた。

スペルカードを温存すれば、後々有利になる。

普通なら相手の体力が減るまで出来る限り攻撃を緩めず、疲れさせた所でスペルカードによる攻撃を放つ。

それが、最も効率的な戦い方だというのが一般論。

だが、相手のスペルカードに自分の強力なスペルカードをぶつけ、戦意を削ぐという戦法もある。

早い段階でスペルカードを無効化すれば、プレッシャーをかける事が出来る。だが、時間が経てば経つほど苦し紛れの一手という印象が生まれてしまう。

だから霊夢が勝負を有利に進めるためにはこのスペルを逃げ切らなければならぬ。

見た目そこまで危険なスペルカードではないが、弾か留まるという

のはやはり鬱陶しい。

「……仕方ないわね」

霊夢が一枚のスペルカードを取り出した。

勇輝もそれを確認する。

「チツ、まだ早いがやるしかないか」

勇輝が霊力の鎖に、上乘せして更に多くの霊力を込めた。

「へっ!？」

声を上げたのら霊夢。

それも当然だ、自分の身体が拘束されているのだから。

「そいつは鎖と一緒にばら蒔いてた霊力の糸だ。アリスが人形を操るモノと同じ様な糸だけど、鎖に絡み付けて霊力を上乗せした。見えなかったのは太さが黙視出来ない程だったから、な」

説明をしながらも次の手順に移る。

霊夢の周囲に弾幕を張り巡らせ、それを全て霊夢の方向へ放つ。

……のが目的だったのだが。

「夢境『二重大結界』!」

霊夢を中心とした結界に全て掻き消された。

だが、それだけでは終わらない。結界の中から霊夢は次々に弾幕を放つ。

「人が通れるスキマが……」

無い。無理、避けられない。

勇輝も負けじともう一枚のスペルカードを取り出す。

「焉戯『デッド・イレギュラー』!」

霊力で生み出すのは刀、剣、槍、鎚、鋸、矢、針、釘、鎌、その他様々な殺傷力を持つ物。

「物騒だけど、仕方ないんだよな……」

無数の武器を浮遊させ、更に霊夢の強力な結界を砕くために巨大な槍を作り出し、構える。

さっき勇輝が使ったスペルカードの意味は表に現れない呪縛。そしてこのスペルカードの意味は、想定外の死。

見た目が派手、ストレス解消用のスペルカードだ。

だが、威力は十分。

誤って殺さないように、霊力を調節する。

霊夢も何かを感じ取ったのか、次のスペルカードを用意した。

作り出した槍は幅一メートル、長さ八メートル。

もう兵器に見えるそれを、霊夢の結界目掛けて投げ飛ばした。

「大結界『博麗弹幕结界』ッ!!」

霊夢がスペルカードを使用する。

先程の結界よりも強力な結界は勇輝の放った槍を弾き、全ての弹幕を無効化した。

だが、護りに徹した結界は弹幕を放つことなく消滅する。

お互いにスペルカード二枚。だが、どちらも被弾はしていない。

「まさか、ちょっと前までともに飛ぶことも出来なかった勇輝さんがここまで出来るなんて思いもなかったわ」

「自分でもビックリしてる。実はスペルカードを一枚使われた時点で負けると思ってたんだよね……」

「じゃあ、一機だけ貰うわ。神霊『夢想封印 瞬』」

霊夢が再びスペルカードを使う。

「ッ!？」

気付いた時にはその場から弾き飛ばされていた。被弾したのだ。

地面を転がるが、上がった身体能力で直ぐに体制を整える。

「速い……見えもしねえよ」

背中に痛みを感じる、動きに影響は出ないがそれでも先手を取られた事によって焦りが生まれてしまう。

「後ろよ」

背後からした声に、霊力の翼を作り出しその場から逃げる。

見えたのは砕け、砂煙を上げるさっきまで自分の立っていた地面と霊夢の姿。

しかし、直ぐに霊夢の姿は消える。

どうしたらいい？

何をしたら勝てる？

アレを使えば……いや、アレは今使すべきではない。

能力を使うか？ 何を修正しろと言っのだろう。

考えろ、冷静に。把握しろ、現状を。見出だせ、活路を。

「……さて、勝ちに行くか」

勇輝は、次のスペルカードを手にした。

その口につつすらと笑みを浮かべ、背後に回り込んでいた霊夢に視線を移し、その符の名を読み上げる。

「医術『引導渡し 魔薬の投与』」

其の肆拾式

そのスペルカードは、今までのどの弾幕よりも異質だった。

霊夢も動きを止める。

確かに、勇輝は符の名を宣言した。しかし、弾幕どころか弾の一つ見当たらない。

不発？ それとも未完成だった？

違う。この弾幕は発動し、正常に霊夢を追い詰めている。

「また見えない弾幕？」

「当たり前だ。さっきとは全く違うけどな」

霊力の翼を炎のように揺らめかし、空中で留まる勇輝。

霊夢は十メートルほど離れた場所で浮いている。

前後左右上下、どこにも勇輝の弾幕があるようには見えず、勇輝もただ滞空しているだけ。

「なら、対処法はこうね」

霊夢が弾を無造作に撒き散らす。

何に当たる訳でもなく、霊夢の弾幕は上空へ、遠く離れた山へ、マ

ヨヒガへと飛んでいく。

勇輝にも放たれたが、それは勇輝自身にかき消された。

「どうした？ 何も変わってないぞ」

「……そういうつもりなのね。いいわ、こっちから攻めてあげる」

霊夢はこのスペルを捨て弾だと考え、自分が攻めるために弾幕を放つ事にした。

先程見せられた見えない霊力の糸。あれで疑心暗鬼を誘い、精神と体力を削り取るスペルカード。

頭のいい勇輝の事だ、そういった規格外の行動もとって見せるだろう。

「良いのか？ もしかしたら危険な賭けになるかもよ？」

「それでも何もしないよりはマシよ！ この異変、今すぐ解決させてもらうわ！」

……そういえば犯人扱いをされていた。なら、ちょっと揺さぶりを掛けてみよう。

「本当に解決できるのか？」

「……どういう事よ」

「いや、俺を倒したからってこの異変が収まるとは限らないし。そ

れに、俺が死んだらずっとこのままかもよ？」

黒幕ではないから倒されても異変は収まらないし、この“異変という欠陥”は能力で解決できるものかもしれない。そして、犯人に検討がつかなかった場合はずっとこのままかもしれない。

嘘はついてないし、包み隠さず真実を話してもいい。

「脅迫のつもり？ 別に殺さない程度に痛めつけられて拷問されてもこのままにしておくって事ならそうなるかもしれないけど」

「拷問で……」

「あ、でも医者なら痛覚とか麻痺させられそうね……。社会的に抹殺？」

「自分の感覚を麻痺させる医者なんて……いそうで怖いな。けど、俺にはそんな技術も薬もないから無理だ。社会的抹殺は断固拒否する」

ただでさえ小さな里で変な噂が広まったりしたら……死ねる。

「だったら早く異変を……あれっ？」

霊夢の体がガクツと揺れた。

「やっと効いてきたか。そこら辺の妖怪なら一瞬で昏倒するかもしれない量だったのにな」

「何を、したの……？」

霊夢が辛そうに額を押さえる。

「簡単だ、このスペルカードは毒を撒くように俺の霊力を気化させ、相手に吸収させる。許容量を大きく超えたら……まあ、そんな症状になるんだろうな」

「そんな……、私が今の戦いで使った霊力は勇輝さんの霊力の合計よりも遥かに多かった筈よ。それに、勇輝さん自身も強力なスペルカードを何枚か使っている。それに、その羽だって相当の霊力を……」

「そんな欠陥。とつくに修正してあるよ」

「そう。能力で……」

だが、これで負けるような霊夢ではない。

霊夢は四枚目のスペルカードを取り出した。

「霊符『夢想封印 集』！」

放たれたのは七つの巨大な弾。これは一度、見た事がある。

そして、これが避けられるようなモノでは無い事も、知っている。

「銃符『ロシアンルーレット』！」

勇輝が放ったのはレーザー状の弾幕。

放つ方向、威力、本数は撃つてみないと分からない。だが、霊夢の弾幕を消せる威力の攻撃を瞬時に撃てるスペルカードはこれしか持ち合わせていなかった。

本数は大当たり、二十。

威力はそこそこ、魔理沙の魔砲の五分の一程度のモノが何本がある。

方向は……ゴミだ、霊夢のいる方向とは逆。つまり真後ろに十。

しかし、その内の一本が霊夢に当たる。威力は相当低かったが。

霊夢が被弾した事によって、悪夢の様に追いかけてくるデカイ弾幕は消える。

これで、お互いに残り一枚。

次が最後の攻防になるだろう。

霊夢はスペルカードで霊力を消費し全快状態に近い霊力。そして、勇輝は体力も霊力も減っていない。

お互い、二機と一枚。どちらか被弾した方の負けとなる。

二人は最後のスペルカードの名を口にする。

霊夢は空を埋め尽くすような無数の弾幕を、勇輝は相手の虚を突くようなトリッキーな弾幕を。

霊力の弾が交差し、弾け、相手を打ち落とそうと襲いかかる。

霊夢は少しきこちないが、確実に勇輝の弾幕を避け。

勇輝は危なげながらも、器用に翼を縮小、拡大とさまざまに操作し避けていく。

時間にして数分。だが何時間にも感じる攻防の中。

同時に、同じ個所に、同じような形状の弾幕が被弾した。

「引き分けです」

橙が降りて来た二人に向かってそう宣言する。

「引き分けって……そうならないようにアンタがいるんでしょ」

「でも引き分けです！」

橙の内心では、引き分けでないと自身の危険が迫っていることに恐怖し、引き分けで勝負が終わったことに安心していた。

霊夢が勝てば霊夢に何をされるか分からないし、勇輝が勝てば勇輝に何をされるか分からない。

「で、俺が異変の犯人として扱われていた理由は？」

「コイツがそう言った」

「……私、猫の妖怪なので勘違いを起こす事が」

「殴るよ?」

「すみません。集めてた春を渡すので勘弁して下さい」

そう言うと、空中で舞う桜の花弁を渡される。……ああ、どういう原理で浮いているのだとか、何故こういう形で春が……認めよう。これが幻想郷の春だ。

「え、勇輝さん犯人じゃないの?」

お気楽な巫女は今更知ったらしい。

其の肆拾参

「成る程ね。悪いのはこの猫、勇輝さんは無関係……何で言わなかったのよ」

「暇さえ潰れるなら誰が相手でも良かったんだよ。一番ハードな奴に当たったけどな」

霊夢に状況を説明しながら少し休憩をとっていた。橙は霊夢によって気絶させられている。

「でも、勇輝さんがあんなに強いなんて思ってなかったわ」

「……良く言うよ。本気なんか出してなかった奴が」

霊夢は本気を出していない。出しているなら勇輝が五体満足でいられる筈がない。

スペルカードルールは人間と妖怪が対等に戦うための物だが、やはり死の危険はあるのだ。

「私だつて知り合いを本気で殺しに行くような真似はしたくないもの。それがお賽銭を入れてくれた人なら尚更よ」

「……どこまで賽銭にこだわっているのだろうか。」

「はあ……じゃあ、俺は異変解決からはリタイアかねえ。精神的に疲労したし」

「何言ってるの？ 私の春も預けるから異変の解決、お願いね」

「はい？」

「だって、暇なんですよ？ 私は神社の雪掻きもやらないといけないし、巫女なのに神社を空けるのは何だか申し訳ないし、疲れたから」

「異変解決も仕事だろーがよ……」

「魔理沙だってそろそろ気づいてる頃だし、私の分は勇輝さんがやってくれるんでしょ？」

そういえば咲夜も異変を解決するために紅魔館を留守にしていた。

だったら二人ぐらい抜けても問題無いのでは？

「それと、私の感だけど犯人は妖怪じゃないと思うのよね。そつれつぱい奴を打ち殺したけど何の関係もなかったから。あと、空の上の方が暖かった気がするわ」

「そんな事言われたらサボれなくなるだろ……まったく面倒な」

春を持っていて、異変解決のプロからの有益な助言。

他二人が感づいていなかったら幻想郷は冬のままかもしれない。

「ん？ 外界ってどうなってるんだろ。冬のままなのか？」

「そんな訳ないでしょ、結界で隔離されてるんだから。外からは認

識も干渉もできないわ」

まあ、そうでもなければ此処は見つけられているだろうし、大惨事になっているだろう。

ただでさえ環境問題が話題なのに冬が明けないとなれば……あれ？
特に問題が無い気がする。

「まあ良いや。どうせ診療所に人は来ないし、少しは人間様のお役にたつて診療所の信頼を上げるとしますかねー」

「……随分と投げ遣りだけど、何かあったの？」

「ん？ ああ、古臭い場所に住んでる奴等はやっぱり頭も固いのかなーと再認識したんだ」

「答えになってないわよ……」

「いやあ、咲夜を治した時にさ、やっぱりアイツは怪しいだの、紅魔館に血を売ってるだの、本当は毒薬しか扱わないだの変な噂が流れたんだ。で、人が来ない所か寄り付かなくなつた訳」

「……まあ、里の人たちは臆病だから。幻想郷では人より妖怪や神、妖精の方が多いし」

「それでも来る奴は来るんだけどなー、少ないからさ。収入は安定してないから食事も儘成らないし、薬は無駄になるし、暇だし」

「じゃあ、尚更異変を解決した方が良いんじゃないの？」

「……妖怪専門の医者ってどうなんだろ」

吸血鬼って病に罹るのだろうか？ あと、人型でないものは勘弁だ。

「あ、そうそう。異変を解決するとお金も入るから」

「なっ………本当か!？」

「魔理沙は家出してるから貰った事は無いけれど、私は何度も貰ってるわ。じゃなきゃ生活できないし」

確かに賽銭無し、参拝客皆無の神社では収入は得られないだろう。

「仕方ない、金のためってなると人聞きが悪いがやるか」

「思いつきりお金のためよね。目がそう言ってるわ」

「失敬な、半分は里のためだ」

「………半分は認めるのね」

「せめて、もう少しでいいから人間と妖怪の仲を良好にできたら一番楽なんだけどな」

「別に、妖怪でも友好的に接している種はいるわよ？ 天狗や河童が代表的な例ね」

「成る程、吸血鬼だからか」

なら、レミリアにも何かしてもらっしか無いのだろうか。………外に

出てくれるのが心配だ。

「んじゃ、異変を解決するとしますか。空でいいんだよね？」

「感だけどね」

「……やっぱ、もう少し地上で探索してみるわ」

そこまで感だ、なんて言われたら信憑性が薄くなる。もう少し論理的な根拠が欲しかった。

幻想郷の魔法の森。そこでは二人の魔法使いが何かを相談していた。

「つまり、この花びらを集めれば暖くなるんだな？」

「ええ、大量に撒けば春になるでしょうし、纏っていれば自分の周りだけ暖かくなる。春度とでも言っておきましょうか」

「ふーん。どうでも良いけど、寒くなくなるなら何でもいいぜ。花見もやりたいし」

「これを、どこかの誰かが纏めて盗んで行ったんでしょうね……じやなきや、この時期に雪はおかしいし……」

「やっぱり異変か……よし、行くぜアリス」

「何処に？」

「そうだな……私としては春を持つてゐる奴を片っ端から潰して行けば良いと思う」

「……まあ、宛も無いしね」

二人の魔法使いも、異変を解決するために動き出した。

異変解決にここまでの人数が関わる事が吉と出るか、凶と出るのか。

それはまだ、誰にも分からないし、誰も考えていなかった。

其の肆拾肆

「ヤバいな、暗くなって来やがった……」

幻想郷を飛び回り、春を盗んだ犯人を探していたが、日は沈み始め、雪原は緋色に輝いている。

雲の隙間が多くなり、夕陽が射し込むその景色は神秘的だが、どうじに勇輝を不安にさせる。

晴れてきたが、それでも雲は多い。夜目が聞かないのでは探しようが無いのだ。

「急がないとな……」

勇輝は霊力の翼を更に力強く動かし、速度を上げる。

空には冬なのに、桜の花びらが一枚だけ舞っていた。

「……お前、その春をどうするつもりだ？」

魔理沙は目の前の人物を睨みつける。

「どうするって……集めただけよ？ 妖精を蹴散らしたり、妖怪を蹴散らしたりして」

睨まれた咲夜は動じる事無く、淡々と答える。

彼女からしたら、魔理沙とアリスは異変を解決しようと動いている時に、関係ないと言えない程の量の春を集めている邪魔者。

咲夜の目的は、紅魔館周辺を春にする事。幻想郷全体は二の次だ。

つまり、一定量の春が得られるのなら誰から奪っても良いし、他の場所が冬のままだろうと良いのだ。

そして、魔理沙からすれば咲夜は前回の異変の犯人の一人であり、多くの春を集めている怪しい人物。

前科がある分、疑いやすいのもあるだろう。

アリスは宴会の時に会っただけなのだが、それでも咲夜が集めた春は犯人と疑える程に多い。

「魔理沙、私がやるから下がっていて。知り合いならスペルカードも知られているでしょう?」

アリスが魔理沙の前に出る。

「おう、頼んだぜアリス。アイツは時間を操る能力とナイフを使ってくる」

「そう……なら、八割程度で足りるかしら?」

八割……つまり、全力は出さない。

その挑発とも言える言葉に、咲夜は眉をしかめる。

「随分自身があるようね」

「メイドに負ける程弱いつもりは無いもの」

「ただのメイドじゃ無いわよ？」

「じゃあ、どんなメイド？」

咲夜はナイフを両手の指の間に挟み、構える。

「貴方を一瞬で亡骸に変えるメイド」

咲夜がナイフを投擲する。

真っ直ぐにアリスに向かって行くが、アリスはそれを簡単に避ける。

「じゃあ、私からも攻撃しようかしら」

アリスは何処からか人形を取り出し、それを操る。

二体は剣を持ち、四体は魔力の弾を撃ち出す。計六体の人形。

咲夜は剣を持った人形二体をナイフで貫き、残り四体が放つ弾を時間を操る訳でもなく避けていく。

しかし、そう簡単に事が運ぶという事は無い。

ナイフが突き刺さっている剣を持った人形が咲夜に向かって飛んでいく。

「成程、バラバラにでもない限り動かせるのね」

再び、咲夜は剣を持った人形にナイフを投擲する。今度はバラバラに砕け散るように。

「……何処にナイフを隠し持ってるのかしら」

アリスが若干不満そうな声で呟く。

咲夜が使うナイフは霊力の物と金属の物の二種類。今使っているのは金属のナイフだ。

だが、本数が有り得ない。絶対に。

アリスは壊れた人形の糸を切り、次の人形を取り出す。

「早く終わらせないと、お嬢様に叱られるから……悪く思わない事ね」

咲夜がスペルカードを取り出す。

「幻世『ザ・ワールド』」

次の瞬間、アリスを囲むように無数のナイフと弾幕が現れる。

「っ!？」

アリスは人形を盾にし、辛うじて避けるが第二派といった感じに再び弾幕は現れる。

時間を操ると魔理沙から聞いていたが、これは酷い。

もし、咲夜がどこかの医者のように魅せる事を考えずにスペルカードを作っていたら既にアリスは負けている。

何とか避けていくが、やはり危ない気だ。

今にも当たってしまいそうだが、アリスは何とか避けていく。

「仕方ないわね……。操符『乙女文楽』」

アリスもスペルカードを発動させる。

人形からレーザーや弾幕が放たれるが、咲夜には当たらない。

「弱いわね。あの巫女よりも、家のお嬢様よりも。そして、私よりも……」

咲夜は余裕を持った声でアリスを挑発する。

前回の紅霧異変で、霊夢にこそ敗北したが咲夜は魔理沙に勝るとも劣らない実力を持っている。

時間を操る程度の能力。

時の流れを早く、遅く。そして停止させる。単純だが恐ろしいほどに強力な能力。

倒せるとしたら、避けようがない程に圧倒的な弾幕を使つか、カウ

ンターを狙うか、不意を衝くしか無いだろう。

「メイド秘技『殺人ドール』」

咲夜が次のスペルカードに切り替える。

余談だが、決闘前にスペルカードの枚数や機数を指定しなかった場合、機数は一、枚数は無制限での勝負が暗黙のルールとなっている。
無数のナイフがアリスに迫る。

「そんな直線的な攻撃……っ!？」

真っ直ぐ迫っていたナイフに対して、横に逸れる様に移動したがナイフの軌道が曲がった。

「単純にナイフを投げる訳無いじゃない。そんな事も分からなかった?」

「くっ、呪詛『首吊り蓬莱人形』!」

再びアリスはいくつもの人形を取り出し、咲夜の飛ばしたナイフを打ち落としていく。

時には人形の腕が落ち、頭が飛び、胴体が碎け散るがナイフがアリスに当たる事は無い。

だが、アリスは既に負けを確信していた。

「降参して春を渡してもらえるかしら」

背後から聞こえる声と、首筋に当たる金属の冷たい感触。

「……負けたわ」

アリスは思う。ああ、本気でやっておけば良かったかもしれない。
と。

其の肆拾肆（後書き）

弾幕勝負で咲夜的能力は狡いと思う。

それをボコボコにする霊夢は人間では無いと思ッ……………。

其の肆拾伍

アリスを下した咲夜は、観戦していた魔理沙に向き直る。

「貴女も私の邪魔をするのかしら？」

「当然だ、アリスが戦ったのに私が逃げたら立つ瀬が無いんだぜ」

咲夜だって消耗している筈だ。というのが魔理沙の考え。

それは正しいのだが、今考えるべきなのはそこではない。

「じゃあ、さつさと始めましょうか。お嬢様の世話もしなきゃいけないし」

日は沈み、僅な月明かりが二人を照らした。

「暗い……寒い……」

幻想郷を飛び回って数時間。

襲ってくる妖精を倒しながら犯人の手懸かりを探していたが、一向に何も見つからない。

霊夢は空が怪しいと言っていたが、考えて見ると空に城が浮いている訳でもないし、四六時中留まる厚い雲がある訳でも無い。

……帰って寝てしまおうか。

「最後に雲の上だけ見ておくか……」

翼を軽く振るって上昇。一気に雲の上まで飛び上がる。

黒い雪雲の上には都会では見られない輝きを放つ満月。心なしか近い気もする。

辺りを見渡して……。

「人、だよな……アレ」

空を飛んでいる三つの人影。怪しい。

夜だし、冬だし、何より今は異変の真っ最中。

決めた。尾行しよう。

「……ふう」

霊夢は机に布団をかけ板を乗せただけのコタツに湯飲みを乗せ一息吐く。

まだ外は冬、異変は解決されていない。

「遅いわね……」

一日。霊夢が異変を解決するために動き、解決にまでかかった最長時間だ。

紅霧異変の際は一夜にして解決している。

霊夢は湯飲みが空になっている事を確認すると、コタツから足を出して立ち上がる。

そのまま神社の物置小屋へと向かい、陰陽玉を持ち出した。

異変の際に弾幕勝負で負けた者は解決まで手を引くのが筋だが、生憎霊夢は引き分けただけ。

霊夢は境内から空を見上げる。

黒い雪雲の、その向こうを。

「恋符『マスタースパーク』!!」

夜の幻想郷の空に七色の魔砲が放たれる。

魔理沙と咲夜、知り合って数ヶ月になるが、まともに戦うのはこれが初めてだった。

そして、咲夜は焦りを表情に出しながら戦っていた。

魔理沙のスペルカードは恐ろしく強力な物が多い。

何より、レーザーを主体にしているのが咲夜にとっての誤算だった。通常の弾幕と違い、レーザーは速く、しかも軌道が分からないのだ。アリスの場合は人形の位置を確認し、そこから自分に向かって直線的に放たれるだけだった。

しかし、魔理沙は咲夜の動きに合わせてられる。

更に、そのレーザーが広範囲に及ぶ巨大な物となれば状況は悪くなる。

アリスの時のように後ろをとつても、魔法陣からレーザーが飛んでくるかもしれない。

時間を止め、移動した先はレーザーが放たれる軌道の上かもしれない。

そんな思いが、咲夜を攻めに回らせなかった。

「メイド秘技『操りドール』！」

「恋心『ダブルスパーク』！！」

そしてコレだ。

放ったスペルカードが全て魔砲に掻き消される。

ナイフも消耗品であるが故にやる気を削がれる。

咲夜は時間を止め、ナイフを回収していたのだがそのナイフが破壊されてはどうしようもない。

勝てない。そんな言葉を思い浮かべてしまう。

実力的には魔理沙に勝っている。だが、相性が悪かった。

そもそも、魔理沙ほど鬼畜な戦法を取る人物がこの幻想郷にいろっうか？

嫌になる程に魔砲を乱射され、自分のスペルカードが掻き消される。

嫌になる。何を使えば勝てるのか分からない。

だが、それも永遠ではない。

「ハアっ、ハアっ……くっ……」

魔理沙にも、限界はある。

魔理沙が霊夢に敵わないのもコレが大きく関係していた。

魔理沙のスペルカードは霊夢のスペルカードさえ掻き消す事ができる。だが、魔理沙が霊夢に弾幕を当てる前に魔理沙の魔力は底を尽いてしまうのだ。

咲夜のナイフが尽きるのが先か、魔理沙の魔力が尽きるのが先か。

「いい加減、降参したらどうだ……？ 吸血鬼のお嬢様が待ってるだろ？」

息も絶え絶えになっているが、魔理沙は挑発に出る。

ここまでに使ったスペルカードは十を越している。疲れて当然だ。

「そうしたいけど……貴女は春を譲ってくれないんでしょう？」

「当然だ。私がこの異変を解決するんだからな」

「だったら私に構ってないで犯人捜しでもしたらどうかしら？」

「お前が犯人かもしれないだろ」

「私は犯人じゃないわ」

「犯人はいつもやってないって嘘を吐くぜ」

「……疑われた人間は全員そう答えると思うけれど」

「なら交渉決裂だな」

「交渉なんてしていたかしら？」

「今自白するか、倒されてから自白するか」

「……それは交渉じゃなくて脅迫よ」

溜息を吐きながら咲夜はナイフを取り出す。

魔理沙は魔法陣を展開し、咲夜の攻撃に備えた。

「さて……」

尾行を開始して早数十分。

分かったのは三人が女の子で、楽器を持っている事。

……自分は何をしているんだろう。

こんなストーカー紛いの事をして、相手に関係ありませんでした、では立場が無い。

いや、こんな時間にこんな高度の場所にいる人物が普通である筈がないのだが……遣る瀬無い。

しかし、無関係という事は無かったようだ。

三人が向かった先に有ったのは巨大な門。

何故浮いていられるのか、飛行機に当たったりしないのか。そんな事は幻想郷だからと結論付ける。

霊夢の感は当たっていたようだ。あの門には強力な結界が張っている。

三人は門の前まで飛んで行くと、各々の楽器を……演奏し始めた。

「……………帰っていいか、コレ」

其の肆拾陸

「いい加減、当たれよっ！」

「嫌よ、死ぬじゃない」

未だ戦い続ける咲夜と魔理沙。しかし、魔理沙の体力は限界に近かった。

魔砲も威力が落ちて来ている。それは、この場にいる全員が分かっていた。

咲夜も攻めに回る回数が増えてきている。このままでは魔理沙の敗北は確定だ。

「くっ……何で当たらないんだ」

魔理沙は自分の弾幕に少なからず自身がある。

勿論、それは咲夜も認めているし、勇輝も敗北したのだ。

では、何故こうも当たらないのか。答えは簡単だ。

魔理沙のスペルカードの一枚、魔砲『ファイナルスパーク』。相当な威力を持ち、それはレミリアやフランの妖力に劣らない霊力を手にしていた紅霧異変時の勇輝に全力の防御をさせ、尚且つそれを破壊するまでの攻撃力を持っていた。

だが、あの時勇輝が魔砲を受け止めず、避けていたらどうなってい

ただろうか？

勇輝は立場上、紅魔館を破壊されるのを防がなければならなかった。だから、あの時回避ではなく防御を選んだ。

もし避ける事が許されていたのなら、勇輝は上昇した身体能力で簡単に避けていただろう。そして、魔力の尽きた魔理沙を簡単に倒していた筈だ。

つまり、魔理沙のスペルカードは相手が避けれない時、または戦場が極端に狭い時に全力を出す事ができる。しかし、四方八方全てが逃げ場となる空ではその威力も宝の持ち腐れでしかない。

だが、仮に数で勝負するスペルカードを使っていたなら咲夜は既に魔理沙を倒していただろう。

勿論、魔理沙にそこまでの考えがあった訳では無い。

いくら攻撃が速くても、直線的にしか進まないレーザーなら注意していれば避けられる。

拳銃と同じだ、銃口さえ見ていれば弾の飛ぶ方向が分かってしまう。

「そろそろ先に進みたいんだけど……。今ならまだ見逃してあげるわよ？」

咲夜も、結構な量の霊力とナイフを消費してしまった。

本来なら異変解決のために協力するべきであるのに、お互いの足を引っ張り合い、果てには戦線から外してしまおうとしている。

「誰が逃げるかよ。私はお前から春を奪って、その後に犯人を見つ
けるんだ」

そもそも、春を何故奪うのか。犯人が奪っているから、盗られない
ように？

違う。寒いから、自分の周りだけ春になればいいから。そんな私欲
で奪い合っているに過ぎないのだ。

「じゃあ……」

魔理沙の視界から咲夜が消える。反射的に魔理沙は上に逃げると、
さっきまでいた空中を何本ものナイフが通過する。

まだだ、魔理沙は素早く移動を続ける。

まるで魔理沙を追うようにナイフが一瞬前まで魔理沙のいた空間を
貫く。

魔理沙は全力で箒を走らせながらスペルカードを取り出す。

「光撃『シュート・ザ・ムーン』……」

いくつもの魔法陣。その中心からレーザーが放たれ網の様に交差し
ていった。

「っ！」

咲夜がレーザーに動きを制限され、その動きを停止させた。そして

咲夜の姿が魔理沙の目に入る。

「貰った！ 魔砲『ファイナルスパーク』！！」

魔理沙の魔砲が咲夜を飲み込んだ。

かの、ように見えた。

「時符『プライベートスクウェア』」

咲夜は無事だった。魔砲による傷は一つも無い。

咲夜を囲う様に存在していた透明の立方体が砕け散る。

「何だよ……それ……」

魔理沙は驚愕し、目を丸くした。

勇輝の防御さえ押し潰した魔砲が完全に防がれたのだから。

「時間を操って生み出した結界……みたいなものかしら？ 勿論、
時を超えられるほど強力な攻撃だったのなら私は負けていた所かこ
の世から居なくなっていたでしょうけど、そこまでではなかったよ
うね」

咲夜の手には再びナイフが握られる。

「どうする？ 刺されて死ぬか、降参するか」

魔理沙は……。

「どうなっ てんだろな……アレ」

門の前で演奏を始めた三人を遠目に見ながら勇輝は溜息を吐く。

人の敷地前で大合奏……迷惑にも程がある。

問答無用で攻撃を放つても良い気がするが、ここは堪えて措こう。

果たしてあの三人は異変の関係者なのか、それともただの迷惑な奴等なのか。

とりあえず話をしよう。

「なあ、お前等……」

「？ 珍しい、生きてる人間がこんな所にいるなんて」

答えたのはバイオリンを持った金髪の少女。

「単刀直入に聞くけどさ、此処で何してんの？」

「リハーサルだよ、宴会での演奏の」

宴会……。いや、その前にリハーサルは野外でやらないのでは？

「じゃあ、この門が何か分かるか？」

「冥界への扉だよ、開いた所は見ただ事がないけれど」

……コイツ、テンションがやたらと低い。

「なら、この中に入る方法とか分かるか？」

「上を飛び越える」

「……随分と簡単な侵入方法だな」

まあ、入り方も分かった事だし、この冥界とやらの犯人がいるだろうからと三人に背を向け……。

肩を掴まれた。

「まあ、何かの縁だと思って演奏を聞いて逝きなよ」

「そうそう、私たちの演奏を聞いていられる人間なんて滅多にないんだから」

「聞いてけ〜」

何か、寒気がする。というか、聞いていられる人間がいらないとはどういう事だろう。

「あー、お断りす……」

顔の真横を弾幕が通過する。

「ゆっくりしてってね」

其の肆拾漆（前書き）

今回、読んでいて非常にイライラする場面があります。お気をつけ下さい。

……リア充、ぶっ潰す。

其の肆拾漆

冗談じゃない。

演奏を聞かなかったら弾幕勝負、そんな無駄な事をしている場合ではないのだ。

よって……。

演奏を聞いていた。

とりあえず適当に理由をつけ、門から離れた場所に移動して貰ったのだが少し困った事がある。

能力の効果があと数十分で切れるのだ。

それに、何だかやる気が無くなったり無駄な高揚感が込み上げてきたりと調子がおかしい。

が、そこは医者の方端くれ。呼吸法やらちょっとした思い込みで感情の操作など軽いものだ。

それよりも、問題は霊力だ。切れたら絶対に落ちる。間違い無く落ちる。

浮くことは普段の霊力で可能だ。しかし、時計の無いこの場では秒単位で自分の霊力量に変化が訪れる事が分らない。よって急には対応出来ない。

そして、やっと一曲の演奏が終わる。

「あれ、この人まだ大丈夫そうだよ？」

おいキーボード、どういう意味だ。

「本当、自殺まではいかなくても鬱病ぐらいはかかると思ってたのに」

バイオリンの人、それはどういう意味ですか？

「ハイになってるようにも見えない……」

トランペット、だからどういう意味だ。

だが、今はそれどころではない。

真剣な顔で、真剣な声色で、三人に告げる。

「演奏を聞かせて貰った身で申し訳無いけど、三人に頼みがある。俺を、側で支えて欲しい」

落ちないように。

「えっ……」

最初に反応したのはバイオリンの人、何故か顔が赤い。アレか、男性恐怖症みたいな感じの。

「三人でだなんて……」

次に反応したのはトランペットの人。いや、女の子が男支えるのに一人二人じゃ無理だろ。そして何故か顔が赤い。照れる要素が見当たらない。

「……？」

キーボードの子は他二人を見てきよんとしていた。まあ、普通の反応だと思う。

「ええつと、本気なの……？」

「他に考えられないからな」

「じゃあ、どうしてそんな考えに？」

上擦った声で照れながら聞かれる。こっちまで恥ずかしくなってくるから止めて欲しい。

「俺には三人が必要だったから」

協力してもらわないと真つ逆さまに落ちるとか、笑えない。

そして、この三人はまだ演奏し続けるだろう。第六感がそう言っている。

よってあの門を数分で突破する事も不可能だが、辿り着く事すら出来ないかもしれないこの状況では目の前の三人に助けを求めるしかない。元凶だとしても。

ここでお前等の所為だけどな、なんて抜かしたら打ち落とされる気がする。

「でも、私達は幽霊だし……」

初耳だ、まあこの際は関係ない。

「触れ合えるんだから関係ない」

そう、落ちないように支えてくれるなら天使でも悪魔でも妖怪でも良い。

「でも……」

「頼む、この通りだ」

頭を下げる。……まあ、死なないんだけどこの高さから落ちたら痛いじゃ済まないから。

三人は目配せをする。

キーボードの子は未だに分かっていない様で、二人に耳元で囁かれてから何故か顔を赤くする。

そして、三人は頷きあった。

「分かったよ、私達はこれから君のすぐ傍で君を支え続ける。でも、その……平等にして欲しい」

体重の掛け方だろうか？

「初めからそのつもりだよ。じゃ、いいか？」

「ええっ！？　ここで！？」

「いや、ここでしないで何処でするんだよ」

「でも、心の準備が……」

「もう、限界なんだ」

「わ、分かった。じゃあ初めは何をしたらいいかな？　こんな事、初めてだから」

「ああ、まずは……」

「ハア……」

咲夜は夜の空を飛びながら溜息を吐く。

結局、魔理沙は一步も退かなかった。だが、限界を迎えた魔理沙では咲夜に勝つ事どころか、スペルカードの使用すら儘ならない。数分の抵抗を示した後に被弾し、敗北した。

咲夜も、あそこまで抵抗するとは思っていなかったし知り合いを殺す程冷徹に物事を運ぶ事は出来ない。

アリスの時以上に疲弊した咲夜が向かうのは、紅魔館。

魔理沙とアリスから奪った春ではまだ足りない。そして、春が無いのは奪った奴らが原因であり、やはり大量の春を持っている。つまり、結局は犯人を懲らしめる事になるのだ。

少し疲れた、それにレミリアの事が気になる。

だが、咲夜は目の前を飛ぶ人影を見て顔をしかめる。

「……………」

「おおっ」

「ん……………」

「悪い、でも後少しだから」

結局、勇輝が三人に抱き着く形となった。

説明をすると、話が違つ。という表情をされたがこちらとしては知った事では無いし、承諾もしたのだ。

フツ、と自分の力が抜けるような感覚。時間だ。

腕を解き、三人を解放する。

「悪かったな、もう大丈夫だ」

自分の霊力を再確認し、それを総動員して浮く事に専念する。

「ああ、良いんだ。私達が誤解しただけで……うん。私が悪いんだ……」

なんか、とてもネガティブだった。

他二人も納得がいていないようだった。

「プリズムリバー三姉妹をたぶらかして……抱き着いてその反応……」

トランペットの人、命の危機が迫っているのに欲情するのは頭の中が万年桃色の奴だけだ。

「じゃ、俺はそろそろ……」

「あ、まだまだ演奏は終わってないよ」

キーボード……テメエ。

その後の演奏は何故かトランペットがメインだった。

其の肆拾捌

「そっか、だから勇輝は私達の演奏で変に影響を受けなかったんだね」

「……ああ、次は耐えられないけど、な」

いつの間にか、夜が明けていた。

長時間の霊力のコントロール、感情の抑制、睡眠不足。倒れそう。

能力を使えば良いのだが、感情を抑えるのに精一杯で上手くいきそうになかった。だから終わるまで待っていたのだが……。

「……目眩がする」

もう、限界だった。

「大丈夫？ ごめん、長い間演奏を聞いてくれる人は久しぶりだったから……」

「いや、貴重な体験が出来たから気にしなくて良いよ。演奏も上手かったと思うし」

聞き流していた……というか集中して聞いたら駄目になると思ったので真剣に聞く事はしていなかったが、下手ならここまで人の感情を揺さぶる事は出来ないだろう。

音楽が人に与える影響は思った以上に高い。

ゲームをやっている時も、無音とBGMがかかった状態では緊張感がまるで違うのが簡単な例えだ。

「何も返せないのは悪いんだけどさ、地上の春を取り返しに来たんだ。だからあの門の中に行きたい、お礼はまた今度で良いか？」

「ちょ、ちよつと待って……」

バイオリンの人、もとिल्ナサがトランペットの人、メルランとキーボードの子、リリカに詰め寄って小声で話し始める。

今のうちに能力を使わせて貰おう。

身体能力は吸血鬼並、霊力の量は霊夢並に……。両方を“力”に置き換え一回の能力使用で修正する。

身の回りに基準となる人物が出来た事によって大分この作業が楽になった。普段とはまた違ってくるので百パーセント出し切る事は出来ないのだが。

更に、霊力と体力の減少を修正……。

「……ふう」

集中するために閉じていた眼を開け一息着く。

この能力に必要なのは明確なイメージ。欠陥を見出し、修正後のイメージを固める。

ある程度大まかでも使えるが、やはり明確にした方が後々分かりやすい。

不死を元に戻さないのも、その後どうなるか分からないからだ。

フランとの約束の事もあるが、やはり死ぬかもしれないというのが大きな原因だった。

「決めた。勇輝……」

ルナサが決心したように話しかけてきた。

「私達と、スペルカードルールで勝負して欲しい」

……あれ？

「これは……」

霊夢が見つめる先には巨大な門、それも結界で守られた……。

しかし、霊夢にとってその程度は些細な事でしかない。

「確か……冥界、だったかしら。来た事なんて無かったし、来る必要も無かったから覚えてないのよね……」

普段から異変を警戒している訳では無く、神社の掃除と縁側でお茶を飲むだらけ切った生活を送っている霊夢には博学という言葉はあり得ない程に似合わない。

勘でスペルカードを避けたり、勘で犯人の居場所を突き止めボロボロにする霊夢にとって知識が必要ないのも確かなのだが……。

「門番の一人ぐらい雇えば良かったのに……紅魔館のより真面目な奴を」

霊夢が結界に触れ、目を閉じる。

次の瞬間には、結界はガラスの割れるような音と共にバラバラに碎け散っていた。

「さて、春を奪……取り返しに行こうかしら」

何故言い間違えたのかはこの際置いておき、幻想郷最強の巫女が冥界。白玉楼へと入って行った。

「申し訳ありません。お嬢様……」

ボロボロのメイド服を身に纏った咲夜はレミリアに頭を下げる。

「どうしたのかしら？ 昨日は帰って来ないし、そんなボロボロの姿で……」

「ええ、実は……」

魔理沙を退けた後の事である……。

咲夜は目の前を飛ぶ人物を見て顔を顰めた。

「博麗、霊夢……」

異変解決のために飛んでいるのだろうが、霊夢はこっちに向かって飛んで来ていた。

「アンタ、また異変を起こしたの？」

霊夢が呆れたように咲夜に話しかける。

今の咲夜には疑われても仕方のない程の量の春があり、しかも向かっていたのは紅魔館だ。

「違うわ。私は屋敷の周りだけ春にしたいのよ、だから必要なだけ春を集めていたの」

「あ、そう。なら……」

霊夢はニコリと笑って、その清々しい程の笑顔で。

「私が異変を解決して幻想郷全体を春にするから、その春を渡しなさい」

どこの盗賊だ。

「渡すも何も、犯人から取り返せばいいじゃない」

「だって寒いじゃない。少しは貢献しなさいよ」

横暴にも程がある。

「なら、私も明日犯人を潰しに行く予定だったから貴女は神社でゆっくりしていたら？」

「最初はそのつもりだったんだけどね……勇輝さんに私の春も預けたし」

「なら勇輝に任せるか返して貰えばいいじゃない」

「だって、遅いじゃない。それに勇輝さんって相手が病人とかだったら向こうにつくかもしれないでしょ？」

それは無いと思った咲夜だが、まあ霊夢が聞く筈もない。

「なら、力づくで奪ってみたら？」

そんな事を言ったのが間違いだった。

「それで、負けた上に全て春を没収されたと……」

「はい、申し訳ありません」

「別に良いわよ。島に桜は無いし、花見は神社でやろうと思っていたから」

「そうですか……」

「でも、勇輝が異変解決を、ね……。咲夜、勇輝が失敗した時の準備をしておいて」

「……ああ、了解いたしました」

何を了解したのか、それを勇輝が知る事になるのだろうか。

其の肆拾仇（前書き）

非チートを目指した筈だった。だけど幻想郷がそれを許してくれなかった。

其の肆拾仇

「ルールはお互いに三機、私達は三人で三機ね。枚数は六枚、それで大丈夫かな？」

「いや、こっちは八枚だ。人数の違いは大きいからな」

「あ、そうだね。分かった、それで良いよ……それと、もう一つ」

「何だ？」

「枚数を増やす代わりに、勝った方が、負けた方に一つ命令できる。お互いに納得できる物ならどんな命令でも」

「んー、まあ良いんじゃないの？ 負けるつもりはないし」

この状況で枚数を増やした所で不利なのは変わらない。

だから……。

「最初から本気でやらせて貰う」

霊力の翼を作り出し、スペルカードを取り出す。

「解符『トラップパズル - Lunatic - 』」

レミリアに一撃入れたスペルカードの改良型スペル。より悪質になったそれを三姉妹に向けて放とうとするが……。

「…………あれ？」

ポフツと音を立てるだけに終わってしまう。

ここで勇輝は思い出す。霊力の翼とスペルカードは両立出来ない事を。

霊夢との戦いではどうかしていたのだ、気分がハイになっていたからだろうか？

三姉妹が哀れむような視線を向けてくるが気にしない。

霊力の翼は移動用、なら以前の戦い方に戻すまでだ。

空に、いくつもの霊力の板が現れ、その内の一つに勇輝は足を着ける。

この弱点だらけの足場だが、スペルカードの使用を上空にするには仕方ない。

「変わった戦い方だね…………」

「よく言われる」

三姉妹は各々の楽器を媒介に弾幕を放つ。

威力はそれほど高くないが三人が同時に放つ分、量が多い。

宙に浮かぶ足場を移動しながら淡々と避けていく中で感じる。

……あれ？ 余裕で勝てそう。

思えば今まで相手をして来たのは化け物ばかりだった。

魔砲を遠慮なくぶっ放してくる魔法使い。

気の触れやすい、戦闘狂の吸血鬼。

上記の姉の吸血鬼。

時間を止めてくるメイド。

スペルカードルールを忘れて凍らして来そうになる妖精。

実験と称してスペルカードを次々に撃ってくる引きこもり魔法使い。

もう人間では無い強さの巫女。

……初めて、まともなスペルカードルールでの決闘になるのではないだろうか？

ああ、もう自分から当たりに行っても良いと思えるぐらいの弾幕。

もう抱きしめても良い。こんなまともな弾幕が見れる日が来るなんて思ってもみなかった。

だって当たっても痛いので済みそうだ。絶対に命の危険が無い。

音符型という所も、何だか可愛らしく思えてきた。

刺さらないし、骨が折れないし。ああ、なんて素晴らしい弾幕なのだろう。

「……ルナ姉、どうしよう。私、あの人に当てれる気がしない」

「うん。私もこの勝負が無謀だったと思えて来た……」

「ね、姉さん。勇輝がなんか凄い楽しそうに避けてるんだけど」

今までがおかしかった。何が楽しくてあんな命の危機を感じながら弾幕を避けなければならなかったんだろう。

「どうする？ スペルカードでも使うか？」

「言われなくてもっ！」

「じゃー私から。鍵霊『ベーゼンドルフアー神奏』！」

リリカのスペルカードが発動。それは一般人から見たらもう避けるのを諦めなくなる弾幕だったが……。

「えっ？」

これがスペルカードですか？ と言わんばかりに簡単に勇輝は避けていく。

リリカは開いた口が塞がらない。そんなリリカを押しつけてメルランが前に出る。

「リリカなんかじゃ駄目ね、私がお手本を見せてあげる。管霊『ゴ

「ストクリフォード」

このスペルも、常人が見たのなら顔を引きつらせるような弾幕だった。

だが、勇輝はそれを楽しそうに避けていく。

「次は私が……。偽弦『スードストラディヴァリウス』」

ルナサの放ったスペルカードを勇輝は避けようとしないう。

「まあ、これぐらいか」

勇輝を囲う四枚の霊力の壁。それにヒビを入れる事さえ出来ずにルナサの弾幕は消えていく。

「嘘……」

三人は目の前の光景が信じられないようだった。

ここで勇輝が普段使うスペルカードを使えば、鬼畜以外の何者でもないだろう。

だから、作った中でも数少ない魅せるためのスペルカードを勇輝は使う。

手加減をするなど、どれだけ偉くなったつもりなのだろうか。何てレミリア辺りに言われそうだが、あの三人とは敵対した訳では無い。それに、医者がケガ人を出してどうするっていうのだ。

だけど、負けるつもりは無い。

「弹幕『命知らずの大乱祭』」

三姉妹は顔を引きつらせる。

勇輝が生み出した絶望的な量の弹幕が辺り一帯、前後左右上下を囲い球状に。

「さて、弹幕に色を着けるのって意外と面倒だという事を知ったこのスペルカードだけど……最後まで立っていられる自身はあるか？」

色取り取りの無数の弹幕。それが渦を巻くように中心、ルナサ、メルラン、リリカ、勇輝の四人に迫ってくる。

祭りでスーパーボールすくいというのを見た事があるだろうか？
あんな感じた。

「でも、これじゃ勇輝も……」

「祭りを楽しむなら全員でつてな。この弹幕の動きはランダムだし……俺も避けるしかないんだ」

「ルナ姉、これ拙くない？」

「私、降参してもいいかなーって……」

冷や汗をかくメルランに、諦め気味のリリカ。

数十秒後、三人は被弾し勇輝の勝利で決闘は終了した。

其の伍拾

「負けたよ。強いんだね、勇輝は……」

「周りが化け物しかないからな」

今更だが、自分が十分戦えるだけの力を持っている事を認識できたのは良い経験になっただろう。

かと言ってこれから戦う事になるであろう異変の犯人がレミリアより弱いとも言えない。

もしかしたら霊夢と同等の実力を有しているかもしれないのだ。

「じゃあ、その……命令を決めて貰えないかな？」

「ああ、そんな約束してたな」

しかし、実質勇輝が使用したスペルカードは二枚だし、勝利したのも勇輝だ。

何かルールに不備がありますか、と聞かれても機数も枚数も変わらない訳で、勝った方が命令、と言われても頼もうと思っ事は何も無い。

「じゃあ、俺の命令を聞くな。つてのは？」

「それじゃあ私達が納得出来ない。勝者なんだから貞操を奪うくらの事を言ってくれないと……」

「いや、何処の外道だよ」

自分がどんなイメージを持たれているのか非常に問いただしたい。

「じゃあ……。演奏だ、俺が聞きたいなーって思った時にまた演奏して欲しい。これなら良いか？」

「……まあ、それなら」

どうして消極的な物になるにつれて不満そうな顔をされなければならぬのだろうか。普通は逆だと思う。

「私達は霧の湖の近くの廃墟に住んでるから、聞きたくなったら何時でも来て」

「ああ、そうさせて貰う」

妹二人がルナサを呼ぶ。

三人が地上に降りていくのを見てから、勇輝は空中に浮かぶ巨大な門の方へと飛んだ。しかし……。

「……どんな化け物を通ったらこうなるんだよ」

結界は消え、門が破壊されていたのだ。

中に入ってみると、終わりが見えない程続いている階段となっていた。

「ここを上るのか…… ストレスの溜まりそんな道だな」

紅魔館もそうだが、同じ風景が延々と続くと精神的に効いてくるので少しは変化をつけて欲しい。

侵入者はいいが、自分たちまでおかしくなっては元も子もないというのに。

「歩くのは…… 無謀だから飛んで行くしかないな」

こうして、勇輝も冥界へと足を踏み入れた。

「貴女、人間ね？」

「そう言うアンタは人間っぽいけど人間じゃないわね」

桜の花びらの舞い散る白玉楼の庭。そこでは霊夢と、この白玉楼に仕える魂魄 妖夢が対峙していた。

長い階段の上では桜の木が立ち並び、一本の道となっている。

「貴女の持ってきたなけなしの春。全て幽々子様のために奪わせて貰う！」

「じゃあ、立てなくなるまで遊んであげる」

霊夢の言葉を合図に、両者の弾幕が交差した。

「……まさか、こんな弱点があったとは」

勇輝は長い階段を一段一段、踏み締めながら上を目指していた。

勇輝の飛行方法。霊力のコントロールで浮いた後に霊力の翼を動かした風圧で移動する。というものののだが、場所が悪かった。

斜め上方向に移動するのは思ったより難しい。

少しの距離なら良かったのだが、こつも長いとボロが出てしまうのだ。

さっき、思い切り階段に突っ込んだ。

決めた、ここではもう飛ばない。足があるのだから歩いて上る。

赤くなった額を押さえながら、勇輝は階段を上り続ける。

「くっ……！」

妖夢が刀を振るい、霊夢の弾を両断する。

劣勢にはなっていないが、攻勢には出ていなかった。

妖夢の役割は、この白玉楼の庭師兼、主人である西行寺幽々子の護衛。

何が言いたいかというと、攻めた事が殆ど無い。

そして、相手はあの霊夢、しかも勇輝の時のように手加減をしている訳では無く全力で妖夢を潰そうとしている。このまま消耗戦が続くのはちよつとした事情で避けたい妖夢。

「……………ちっ」

霊夢が舌打ちをする。

攻め手であるというのに、全くと言っていい程に決定打が入らない。

そして、刀を使う相手と戦うのも初めての経験でありその戦闘スタイルが見えないのだ。

間を開けず。余裕を与えず。その圧倒的な数の弾幕で妖夢を撃ち続ける。

妖夢は二本の刀で霊夢の放った弾を切り裂いて行く。

両者が攻めに、守りに持てる力全てを使い攻防を繰り返していた。

だが、勘違いしてはいけない。

攻める側、守る側。いくら拮抗してようと有利なのは攻めている方なのだ。

この勝負に制限時間が、ハンデが、何か特別なルールがあったのなら守る側が有利になっていたのかもしれない。だが、これは真正正

銘の決闘。

どちらかが諦めるまで、どちらかが倒れるまで、どちらかが死ぬまで続く真剣勝負。

そして、現実というものは非情である。

霊夢の放った弾幕。それは妖夢には当たっていないが地面や桜の木に被弾している。

当然、地面に当たれば道が砕け爆風が上がる。木に当たれば花は散り、その幹には抉られたような傷がつく。

たった数枚。重さ十グラムにも満たない桜の花びらが妖夢の視界を遮ってしまった。

「っ！？」

霊夢の弾幕が妖夢の小さく軽い体を弾き飛ばす。

「くっ……」

刀を地面に突き刺し妖夢は踏み留まる。

「獄界剣『二百由旬の一閃』！」

妖夢がスペルカードを使う。

だが……。

「…………ふう」

霊夢は通常の弾幕で妖夢のスペルカードの弾幕を吹き飛ばした。

「興が冷めるわね。これなら勇輝さんのが強かったんじゃないかしら」

妖夢の刀を持つ手は無意識の内に震えていた。

其の伍拾巻

「この程度で異変を起こすなんて思い上がりも甚だしいわね。何が目的だったの？」

膝をつき、刀で体を支える妖夢を霊夢は空中から見下ろす。

「私は、幽々子様の願いを叶えるよう努力するだけ……。それ以外の目的なんて持ち合わせていないっ！」

妖夢が己の刀、楼観剣を構え直し、霊夢を睨みつける。

「ハア……主犯じゃないなら引っ込んでいて欲しいんだけどね」

霊夢は溜息を吐くが、その次の瞬間から放たれる弾幕は加減など一切無い。

妖夢は長刀で弾を切り裂き、弾の間を縫うように霊夢へと向かう。

刀を振るうなら足場が有った方がいいのは百も承知。だが、霊夢が飛んでいる以上は妖夢も飛び上がる事が必要となる。

しかし、霊夢がそれを許す事はないし、そこまで妖夢は無謀でもなかった。

妖夢にできるのは倒されないギリギリの所で踏み留まり、霊夢が諦めるのを待つことだけ。

妖夢は目の前に迫った弾幕を大きく避け、後ろに下がる。

霊夢は鬱陶しいという表情になるが、攻め手を緩める事も更に強める事もしない。

そんな時、妖夢は霊夢の後ろの階段から現れた人物に気付く。

「え、どういう状況？」

勇輝は上がって直ぐの場所で何故かボロボロの白衣を纏って呟く。

「勇輝さん、そいつの相手お願いね」

妖夢の意識が勇輝に向いたことによって、その隙に霊夢は白玉楼へと飛び去る。

「……………は？」

ポカンとした表情で勇輝は回りを見渡し状況を確認する。

倒れる木々、割れた地面、刀を持つ殺気立った少女。

成る程、霊夢が暴れた後だ。

「まさか仲間が来るとは思いませんでした。それに、その格好を見る限り相当激しい戦いを越えてきたようですね」

霊夢が去った事に少し安心した妖夢が刀を鞘に戻しながら勇輝に話しかける。

「激しいって言えば激しいんだけど……………うん」

調子に乗ってジャンプしながら階段を上っていた時に転けた時の傷だと言っているのだろうか……。

まさか使い魔的な存在がいるとは思っていなかった。いきなり攻撃されて何段転げ落ちただろうか。

「ここより先に、これ以上誰かを通す訳にはいきません。大人しく去るか……」

妖夢が刀の一振りに手を掛ける。

「ここで倒されるか!!」

ダンツと地面を蹴る音と共に妖夢が接近してくる。

その速さは素人には到底反応できない程。だが、レミリア並の身体能力を持つ今の勇輝にはそれを避けることは不可能でもない。

タンツと軽い音と共に勇輝は後ろに飛び退く。

「……………あつ」

階段の方へ。

目の前は刀、後ろは嫌になる程に転がった階段。

妖夢もこの行動は予想外だったようで目を丸くしている。

まあ、前後左右が駄目なら。

「飛べば良いだけか」

霊力の翼を作り、それを大きく羽ばたかせる。

「っ！？ 成る程、思っていたよりずっと強いみたいですね……」

霊力の翼を見て、妖夢は勇輝に対する認識を改める。

感じ取ったのは膨大な霊力。それを実体を持つ形に仕上げ扱いこなしている。

「過大評価をありがとう。先に進んだ巫女と比べたら蟻とゾウぐらいの差があるけどな」

「……ゾウ？」

「あ、知らないのか。じゃあトカゲと竜ぐらいの差が……」

「それってもう人間じゃないですよね……」

「……恐くて言えるかよ」

「所で貴方はここに何の用があつて来たんですか？」

「えーと、暇潰し」

「生きた人間が、冥界で？」

「冥界だったのか。……いよいよ幻想郷が何なのか分からなくなっ

てきた」

「暇なら地上で潰して貰えませんか？」

「冬に家でゆっくりしていたら飽きるだろ？」

「……貴方も邪魔をするんですね」

「お前等が迷惑をかけてるんだろ？」

「それでも、私は幽々子様のために西行妖を満開にする」

「……なら、力づくで止めさせて貰うしかないな」

妖夢が抜刀し、勇輝はその手に霊力の槍を作り出した。

「アンタが今回の異変の主犯でいいのよね？」

「あら？ 妖夢は負けてしまったのね……」

「あのままやってたら勝ったけど、今は他の人が相手をしているわ」

「そう……。それで、貴女はどうして異変を解決しようとするのかしら？」

「迷惑だからに決まってるじゃない」

「相手の事情も知らず、考えずに？」

「必要ないわ。人に迷惑をかけてまでやる事に口クな事はないですよ」

「そうね。そうかもしれない……。だけど、これは私にとって重要な事。妖夢のおかげで西行妖が咲くまであと少し、そしたら下の骸が誰のものかもはっきりする」

「……それに何の意味があるのよ」

「失った記憶と、自分の末路」

幽々子は扇子を開き、口元に当ててから続ける。

「この冥界には、地上から来た物が二つだけある。白玉楼と、西行妖。……白玉楼は生前に私が住んでいた屋敷。だけど西行妖は何故ここに持つて来られたのか分からない。もしかしたら、失われた私の記憶に関係しているのかもしれない」

「だから何？ そんな事がどうしたっていつのよ」

「自分の記憶が無いって、意外と惨酷な事なのよ？ 家族がいたのか、どういう暮らしをしていたのか、何故死んでしまったのか……。私は、それが知りたい」

「……だとしても、私は博麗の巫女としてこの異変を解決する」

まだ花のついていない西行妖が風もないのにザワザワと揺れる。

「どうしても邪魔をするというなら」

「どうしても異変を止めない気なら」

両者が構え、戦闘の姿勢に入った。

「花の下で眠るがいいわ、紅白の蝶！」

「花の下に還るがいいわ、春の亡霊！」

其の伍拾巻（後書き）

最後の台詞は東方妖々夢より抜粋。こつこつ展開ってテンションが上がります。

其の伍拾貳

ガキイインと、金属同士が強くぶつかりあう音が白玉楼へと向かう道に響く。

「凄いですね、この刀で切れない所か形がぶれもしないなんて……」

「放出と凝縮を繰り返してるだけで実際は削り取られてるけどな」

ギチギチと音を立てながら槍と刀が擦れる。

だが、勇輝にとってそれは全く意味を成さない。

勇輝の持つ霊力の槍から、妖夢に向かって棘のようなものが飛び出る。

咄嗟に飛び退いた妖夢だったが、その白い髪が数本だけ舞う。

「……決まった形が無い武器。厄介ですね」

「反応出来たお前も達人クラスだと思うぞ？」

槍が霧散し、次に握られたのは双剣。

「スペルカードで戦うのが普通らしいけど、お前はこっち（近接戦闘）の方が向いてるみたいだな。手加減って訳じゃないけど合わせてるよ」

寧ろ、弾幕よりもこっちのが分かりやすい。

ちよつと弾幕に追い詰められるのとはまた違った恐怖があるが、我慢できない程ではない。

「（あれ、この人って良い人……？）」

妖夢は妖夢でズレた思考をしているが、両者やる事は変わらない。

「さて、特定の武器が無いのは申し訳ないけど、少しお付き合いして貰いますか」

「……………」

勇輝の軽口に、妖夢は無言で刀を構える。

「ほいつと」

「っ！？」

先に仕掛けたのは勇輝。

その、本来手数で相手を翻弄するためにあるであろう双剣の一本を妖夢に向かって投擲。

しかし問題無い。勇輝の武器には限りが無いのだから。

妖夢は飛んで来た短剣を刀で弾く。

霊力で作られた武器故に、役割を終え短剣は霧散し消えた。しかし、もう一本が妖夢の眼前まで迫る。

同じ軌道で顔に向かって投げられた事で出来た死角に飛ぶ短剣を、妖夢は体を捻り、姿勢を低くしながらもう一本の刀を抜刀し叩き落す。

「ん？ 何で避けなかった？」

「貴方の武器、弾幕としても使えそうでしたし、何よりここまで器用に靈力を操る人が飛ばした靈力を後から操れないとも限りませんから」

「へえ……」

なら、数で勝負を仕掛けよう。

勇輝の周囲に十、二十と短剣が生み出され、それが一斉に妖夢へと襲い掛かる。

妖夢は二本の刀を器用に使い、全ての短剣を叩き落とし、弾き飛ばす。

「無駄です。その程度では私に致命傷を与える事は到底出来ません」

「みたいだな。つか、大ケガはさせる気ないんだよね……どうせ靈夢が終わらせるだろうし、それまでお前があっちの援軍に行かないようにしておけばそれで十分そうだな」

「随分とお仲間を信用しているんですね」

「いや、アイツより強い生命体が存在するって信じられないだけだ」

聞かれたら何をされるか分かったものではないが、実際そうなのだから仕方ない。

「……………」

妖夢にも思う所があるのか黙りこんでいた。

「あまり険悪な雰囲気で戦うのも好きじゃないし、自己紹介でもしておこうか」

一度武器を消し、体から力を抜いて戦う姿勢を崩した事をアピールする。

「俺は桜井 勇輝。人里で医者をしている」

「……魂魄 妖夢、です」

何のつもりか分からない。という表情をしながらも妖夢は名乗る。

勇輝としてはちょっとした暗示をかけたただけなので相手が名乗りさえすれば良かった。

名前も知らない奴が死んでも気にならないが、少しでも認識のある人間を殺すのには恨みでも無い限り戸惑いが生まれる。

と、普通の人間なら少しは効いてくれるのだが……。まあ、なるようになるだろう。

「じゃあ、仕切り直しといこうか」

「残念ですが、もう貴方は負けていますよ」

「は？」

間の抜けた声を出したと共に、勇輝は体に違和感を感じる。まるで何かに締め付けられているような……。

「何だ、この白い餅みたいなの？」

「私は半人半霊、人と幽霊のハーフなんです。その子は私の半身でありながら巫女の弾幕にビビッて逃げていた薄情者の半霊ですよ」

「……苦労してるな」

何というか、苦労人から漂うオーラを感じる。

「そう思うならこれ以上問題を起こさないで欲しいです」

「問題を起こしたのはそっちだろ」

「と、とにかくこれで動きは封じました！ 降参するなら今の内ですよー！」

「とは言われてもな……」

腕が使えないだけで足も霊力も使える。

霊力で棒を作り出し、それで半霊を突く。すると半霊は慌てて妖夢の方へと逃げて行った。

「なっ、何してるんですか！？　これじゃあ私の正体がバレただけじゃないですか！」

妖夢が半霊に怒鳴っているのを見て、やはり苦勞していると勇輝は再認識する。

白玉楼の前庭では激しい弾幕合戦が繰り広げられていた。

幽々子の霊力や身体能力はレミリアには劣るが、それでも特徴的な弾幕によって現在にはほぼ互角の勝負をしていた。

「亡舞『生者必滅の理　- 死蝶 -』」

幽々子がスペルカードを使う。

霊夢はそれを時には避け、時には自分の霊力弾をぶつけ相殺する。

「霊符『夢想封印　散』！」

霊夢も仕返しのようにスペルカードを使った。

霊夢の弾幕は幽々子の弾幕を飲み込むように拡散し、そのいくつかが幽々子を襲った。

「くっ……」

幽々子は目の前に迫った弾を自分の霊力をぶつけて相殺。

ここまでに使ったスペルカードは霊夢が三枚、幽々子が五枚。被弾はお互いに無し。

どこかの医者モドキのように暇さえあればスペルカードを考えるような事をしていない彼女たちのスペルカードの総数は十数枚。このままいけばルール上、幽々子の敗北となる。

幽々子は焦りながら、次のスペルカードを取り出した。

其の伍拾参

再び桜並木の道では金属がぶつかりあう音が響いていた。

「はっ！！」

妖夢が刀を横風ぎに一閃する。

それを勇輝は屈んで避けると左手に靈力の塊を作り出し、それを妖夢にぶつけようと腕を伸ばす。

妖夢は体勢を崩しながらも後ろに飛び、勇輝に時間を与えず踏み込み、斬りかかる。

それを勇輝は右手に持つ剣で受け止め、左手には新たに槍を作り出す。

妖夢はもう一振りの刀を抜き、即座に月を放つが勇輝は体を回転させてそれを避け、そのまま槍で妖夢を突く。

妖夢は半霊で槍の軌道を変え、それをやり過ごした。

一進一退の攻防。時間にして数秒だが二人はその何倍にも感じていた。

勇輝に殺す気は無いが、当たれば間違いなく戦闘不能になる一撃をお互いが繰り出している。

妖夢も接近戦を維持しようと、必死で食らいつくような猛攻を続け

る。

このままでは埒が明かない。

そう思い、勇輝は妖夢との間に分厚い巨大な霊力の壁を作り出す。

妖夢は咄嗟に反応し、後ろに下がって刀を構え直す。

勇輝は白衣のポケットから一枚の紙を取り出し、溜め息を吐きながら。

「どうも普通に戦ってたら進展が無いみたいだから、急遽スペルカード戦に切り替えさせて貰うな」

その言葉に、妖夢もスペルカードを取り出し警戒を強める。

「行くぞ……。映符『禁忌 レーヴァティン』！」

「……え」

何処かで吸血鬼が使っていたようなスペルカードと同じようなスペルを使った勇輝。

妖夢は妖夢で弾幕と思っていたのに巨大な紅い大剣を振り被られて固まってしまう。

月に一度の頻度でフランと弾幕ごっこをしていたせいで完成してしまったスペルカードの一枚。

名前の通り、人のスペルカードを真似たスペルカード。正直反感が

色々な所から来そうだがこの際気にしない。

勿論、こんな大胆なスペルカードは性に合わないのでフランが使った時より威力は劣るのだがやっぱり世間一般から見たら泣きたくない恐ろしいスペルカード。

伊達に紅魔館に通っている訳では無いのだ。

まずは妖夢に向かってレーヴァティンを思い切り振り降ろす。

妖夢は避けるが、地面は砕けレーヴァティンが五十センチ程埋まる。

やっぱり人のスペルカードは加減が分かり辛い。

それに、フランが振り降ろしていたら地面が熔けていた筈だ。

「な、何がスペルカード戦ですか！ 思いっきり剣を振り降ろしてるじゃないですか！」

「いや、これは俺のスペルカードじゃ無いし。それに槍を使う奴だっているんだからそいつ等に文句言ってくれよ」

最初に見た時は少し間違えば致命傷だったからなー、と少し昔の事を思い返し、レーヴァティンを振り回す。

妖夢は不条理だ、こんなのおかしい。という表情になりながらもレーヴァティンを避ける。

追い打ちに弾幕も放っているのだが、それも当たらなかった。

「そつちがその気なら……。人鬼『未来永劫斬』！」

一瞬、妖夢の姿がぶれる様に見えたと思えばレーヴァテインが碎け、辺りの弾幕が掻き消されていた。

「……おい、お前も十分規格外じゃねーか」

僅かに見えた抜刀術による風の斬撃。

勇輝の頬を血が濡らす。少し切れていたようだ。

「被弾一、ですね」

「いや、弾じゃねーだろ」

「これが私のスペルカードですから」

まあ、弾幕に決められた形など無いので良いのだろう。そもそもこの勝負に被弾数は関係ない。

それに、一度使ったスペルカードを同じ戦いで使用するのには御法度だ。あのスペルカードが出て来ないなら楽なものだろう。

「医療『キープアウトルーム』」

仕切り直し、と言った感じに次のスペルカードを使う。

テープのような、包帯のような形に整えられた霊力が辺り一帯の桜の木に絡みつき妖夢の動きを制限する。

「こんな物ならっ！」

妖夢が刀で霊力のテープを切ろうとする。

テープは簡単に切れた、しかしその新たなテープが飛び交い妖夢の行動範囲が更に狭くなっていく。

「こんな事ならさっきのスペルカードを残しておけば良かった。か？」

後ろからした声に妖夢が振り向いた。

勇輝は振り向いた妖夢を押し倒し、動けないように組み伏せ喉元に霊力の短剣を突き付けた。

「まだ戦う気はあるか？」

妖夢は悔しそうな表情をするが、目を閉じて一言。

「……私の、負けです」

妖夢が負けを認めると、辺り一帯に張り巡らされていたテープは霧散した。

「んじゃ、奥で戦ってる霊夢と犯人を見に行くか」

妖夢の上から退き、手を差し出す。

「……変な人ですね。さっきまで戦っていたのに」

妖夢もその手をとって立ち上がる。

白玉楼の前庭。

そこでは未だ霊夢と幽々子が激戦を繰り広げていたが、押しているのはいるのは幽々子だった。

「どうしたの？ 何やら疲れが出ているようだけれど」

「別に、アンタを倒した後に休むからお構いなく」

霊夢の霊力は桁外れの量だが、無限ではない。

先日からレティ・ホワイトロック、橙、勇輝、咲夜、リリーホワイ
ト、少しだけ妖夢。その他妖精等との戦いの後、幽々子との戦いに
挑んでいる。

紅霧異変の時は魔理沙がルーミア、チルノ、小悪魔、パチュリー、
勇輝を。霊夢が美鈴、咲夜、レミリア、フランを撃破している。ま
た、美鈴は二人で同時に撃破していた。

そして不眠。

中でも勇輝との戦闘では犯人だと思っていた節があり、大量の霊力
を消費している。

「博麗の巫女を、ナメんじゃないわよ！」

霊夢がスペルカードを使う。これが最後の攻撃だと残った霊力の殆どを使って。

「っ！？ まだそんな余力が」

霊夢の弾幕が幽々子の弾幕を消し去り、幽々子を襲う。

幽々子は己の弾幕で相殺しようとしたが、幽々子の霊力も然程残っていないかった。

「負けっ……」

そして、勝敗が決した。

其の伍拾肆

勇輝と妖夢は白玉楼への道をゆっくり歩いていった。

「んで、結局春を集めてた理由は妖怪桜を咲かせるため……馬鹿だろ」

「幽々子様は唐突に物事を決めてしまうので……」

事情徴収と称した雑談をしながら自分達の足で歩いて行く。

勇輝はポケットに手をつ突っ込みながら桜を見る。

右を見ても、左を見ても満開の桜。これが幻想郷から奪った春による物なのかは分からないが、外界では見る事が出来ない程多くの桜の木だった。

「で、その西行妖だっけ？ そいつが封印されてるって事は桜事態が危険な物って可能性は？」

「それは無いと思いますよ。所詮木ですし、幽々子様のお話では桜の木の下にいる存在を封印しているらしいんです」

「……そんな桜の木を咲かせて何の得があるんだか」

勇輝の呟きに妖夢は表情を曇らせる。

「本来なら、無礼と分かっているとしても私が止めるべきだったんでしょね……」

「だろうな。一番近くにいた訳だし」

そこで会話は途切れ、無言のまま二人は進む。

しかし、唐突に二人を言い様の無い悪寒が襲った。

「っ!？」

勇輝は全身の毛が逆立ったかと思う程の悪寒に体を強張らせる。

「まさか……幽々子様っ！」

妖夢が勢いよく走りだし、勇輝もそれに続いた。

「ふふっ……あはははっ!!」

幽々子は満開になった西行妖の前で狂ったように笑う。

幽々子の近くには霊夢が倒れており、先程の勝敗を物語っていた。

あのまま、正式なスペルカードルでの再選なら霊夢が勝利していた。

だが、幽々子の能力、“死を操る程度の能力”がその勝敗を歪めてしまったのだ。

そして、霊夢の持っていた春は魔理沙が、アリスが、咲夜が集めた

物。その量も並では無かった。

「霊夢！」

駆け付けた勇輝が倒れる霊夢に近寄り、安否を確認する。

「……………っ！」

脈が、無い。

「お前、何をした？」

幽々子を睨みつけ、勇輝はいつもの言葉からは信じられない程に低い声で言う。

「死んでいるのでしょうか？ 私が殺したんだもの」

「……………そうか」

刹那、幽々子の体が大きく後ろに吹き飛んだ。

「一応、霊夢の代わりに蹴っとく」

少し遅れてきた妖夢は勇輝が幽々子を蹴り飛ばしたのを見て刀を抜いた。

「妖夢、ちょっとコイツを避難させてくれ」

霊夢を両手で抱え、妖夢の元まで歩き、地面にゆっくり降ろす。

「何をするつもり……うつ」

妖夢が刀を落とし、頭を抱える。

「これは……西行妖の妖気、こんな……」

息苦しそうに妖夢が呟くが、そんな事は意に反さず勇輝は西行妖の方へ歩く。

僅かに紫掛かった桃色の桜の花びらを咲かせ、妖気を振りまく西行妖。

それを眺めていると顔の横を何かが掠め、髪の毛が数本落ちる。

蹴り飛ばされた幽々子が西行妖を支えにふらふらと立ち上がった。

「……どうして、何も蘇らないの？ 桜は咲いたのに！」

困惑したように叫ぶ幽々子。勇輝はそんな幽々子に近づいて行く。

西行妖の花びらが勇輝の白衣を裂く。まるで勇輝を警戒し、拒むように。

さつき髪を切り落としたのも花びらなのだろう。

「おい、西行寺 幽々子。お前はまだこの木に未練があるか？」

「私が欲しいのは私の記憶……西行妖の下で眠る存在に用があった。でも……」

「なら、この木は要らないな」

勇輝が霊力によって巨大な鎌を作り出す。

それは普段の青い勇輝の霊力とは違い、ただひたすら黒かった。

「そこを退け、西行寺。お前の記憶の欠陥はその内に修正する。その前にこの木の排除だ」

木の直ぐ傍、幽々子の隣に立ち、この巨大な妖怪桜を勇輝は見上げる。

次に、幽々子を見るが目の焦点が合っていない。疲弊した体でこれだけの妖気に当てられているからだろうか。

「……ハア。人の生き死にでここまで感情が揺れるのは医者としてはどうなんだか。これじゃ親父に馬鹿にされるな……」

まだ甘い。

そう思つて鎌を振り被り、西行妖に引導を渡そうとする。

鎌は勢い良く迫り、西行妖の幹に刺さり、その刃が西行妖を切り倒す。

その筈だった。

「……おい、何してんだ」

幽々子が鎌の柄を掴み、それを止めていた。

顔は下を向いていて表情は窺えない。

「邪魔をするなら……っ!？」

勇輝の体が宙に浮いた。

止まった思考のまま目線を前に向けると、弾幕を展開している幽々子の姿が。

「おい！ お前っ……」

勇輝の言葉など聞こえていないかのように幽々子が弾幕を放つ。

皮肉にも桜の花びらを模したその弾幕は西行妖の意志を具現している様に見えた。

しかし、勇輝もそれなりに修羅場は踏んでいる。

体制を持ち直し、幽々子の弾幕を避けながら状況の確認をする。

まず、幽々子の姿を確認したが一目で異常が確認できた。

瞳に生気が全く感じられない。あれは廃人と同じ目だ。

恐らくは無意識での行動。少なくとも、今自分の意志では動いていない。

妖夢や霊夢の姿は無い。言った通りに避難してくれたのだろう。

推測するに、西行妖は自らが意志を持ち、人を狂わせ惑わせる妖怪。しかも妖力だけならレミリアやフランをも凌ぐ程だ。

「ったく。俺も甘いね、犠牲者が出ない戦い方を真っ先に考えるなんて……」

勇輝は霊力の鎖を作り出し、それを纏う様に伸ばしていく。

春雪異変最後の戦いがここに始まった。

其の伍拾伍

青い鎖は西行妖と他の桜の木を繋ぎ止め、更に複雑に絡まっていく。幽々子は自身の近くを鎖が通ろうと、顔色一つ変えずに淡々と勇輝に向かって弾幕を放つ。

張り巡らされた鎖は保険。万が一の可能性も考えての事だ。

だが、その数パーセント以下の可能性の事態も無く事は進みそうだった。

幽々子の体を鎖が拘束し、その隙に勇輝は西行妖に切りかかる。

「っ！？」

勇輝は西行妖の鞭のように振り回された枝に弾き飛ばされ、己の張った鎖を巻き込みながら後ろに下がらされる。

枝が動くとは……本当に妖怪、もう植物に分類してはいけないだろう。

「ゲホッ……何だよ、自分で動けんのか」

脇腹を抑えながら立ち上がる。今ので骨が数本折れた。

しかも、臓器に……肺や心臓に近い位置の骨だ。しかし関係ない、自分は死なないのだ。

が、身体は動かなくなるだろうから早めに決着を着ける必要がある。
ヒュンツと風を切る音と共に西行妖は枝を振るう。

違う目的で張った鎖だが、こういう意味でも役に立った。

身近にあった鎖をその吸血鬼並に上がった身体能力で思い切り引つ張り、西行妖の枝の動きを止める。

「あぐっ……！！」

幽々子の呻き声。鎖は連なっているが故の事態に慌てて勇輝は鎖を放したが、直後に西行妖の枝に弾き飛ばされた。

「……っそう何度も直撃はしねーよ」

咄嗟に作り出した大剣で受け止めたが、着地の衝撃が骨に響く。

しかしこのままでは拙い。西行妖が枝を振るえば幽々子の体が引き裂かれかねないのだ。

「なら……。映符『神槍 スピア・ザ・グングニル』！」

レミリアのスペルカード。レーヴァテインと対抗する槍を西行妖に投擲する。

威力は十二分。破壊力は絶大。

紅い槍は西行妖の枝によって少し軌道をずらされたがその太い幹を僅かに抉った。

西行妖が悲鳴を上げるかのように花びらが舞い散る。

「映符『恋符　マスタースパーク』！」

魔理沙の十八番とも言える魔砲が西行妖の枝を数本消し飛ばす。

舞い散る桜の花びらは白玉楼の庭を埋め尽くしていく。

「映符『メイド秘技　殺人ドール』！」

無数の霊力のナイフが西行妖の至る所に突き刺さる。

「映符『咒詛　首吊り蓬萊人形』！」

霊力で形作られた人形が西行妖に無数の傷をつけ。

「映符『人鬼　未来永劫斬』！」

風の斬撃が一番太かった枝を切り落とす。

「映符『霊符　夢想封印』！」

七つの色の巨大な霊力弾が西行妖を薙ぎ倒す程揺さぶった。

ザアアアつと西行妖は揺れ、桜吹雪が巻き起こる。

連続してスペルカードを、それも強力な物ばかりを使用した所為か鎖は千切れ霧散していく。

「まだ、倒れないか……」

枝は半分ほど無くなり、幹には無数の傷がつき、花びらは殆ど散っても西行妖は倒れない。

そして、西行妖と勇輝の間に幽々子が割って入る。

「人質のつもりか？」

答えは期待していなかったが、幽々子が口を開く。

「貴様は何故このような事をする」

西行妖の代弁か。未だ幽々子の瞳に生气は無い。

「決まっている。お前が邪魔だからだ」

「我は貴様に危害を加える気は無い。何故貴様は我を消そうとする」

「それは手を出さなかった奴が言えるセリフだ。それに、お前は危険だ。人を狂わせ、操り争わせる。とてもじゃないが放置したら医者の名折れだろ？」

「この娘ごと我を消すか？」

「まさか、消えるのはお前だけで十分だし……死出の旅に付き添いは無粋だろ？」

「笑止。貴様が我の前で散るがよい。『反魂蝶 - 狂咲 - 』」

西行妖が弾幕の名を告げた。そして視界を埋め尽くす程の桜の花びらを模した弾幕が勇輝に襲い掛かる。

勇輝は白衣の中から何かを取り出し、右手に。ポケットからはスペルカードを取り出し、左手に。

「……解剖学『解体神書』」

瞬間、勇輝の位置はさつきと真逆。幽々子のいる側とは反対方向に移動しており、西行妖は縦に切り裂かれていた。

「な……あ、ああっ!？」

幽々子を介して西行妖が悲痛な叫びを上げる。

「何だ、まだ意識があるのか」

手でメスを弄びながら勇輝は顔だけを西行妖に向ける。

ギギギ……と音を立てて左右に分かれていく西行妖。

糸が切れた人形のように幽々子の体は地面に倒れ、その後西行妖を大きな音を立て倒れる。

「ゴホッ……。内臓に骨が刺さりやがった」

咳と共に吐き出される大量の血液。壊死しかかっているのか折れた骨はもう痛まない。

「まずは、霊夢の死の修正を……」

そう言いながら、勇輝は自らが作った血の水溜りに倒れ込んだ。

「……………んあ？」

間の抜けた声を出し、勇輝は目を冷ます。

何度目になるか分からない致命傷を負い倒れた所までの記憶はある。
ついにオート修正でも働いたのだろうか？

掛けられていた布団を除け、周りを見渡す。

武家屋敷の一室、と言った所だろうか。

白衣も元通り。体には傷一つ無いし、だるさも感じられない。

布団から立ち上がり、暗い部屋に薄明かりを射し込む襖を開ける。

開けてたそこは縁側になっていた。空を見上げると地上で見るより
遥かに大きく見える月があった。

月の位置からして、もう日付は変わっているようだった。

「……………西行妖」

白玉楼の前庭。そこには何事も無かったかのように佇む月光に照ら
された西行妖の姿があった。

其の伍拾伍（後書き）

やり過ぎた。けど後悔はしていない。

其の伍拾陸

「どうしてコイツが……」

あれだけ攻撃し、あれだけ傷付けた西行妖は何事も無かったようにその満開の枝を夜風に揺らす。

裸足である事も気にせず、庭をフラフラと歩いて西行妖の側へと寄る。

そして、屋敷とは反対側の根本に座る人物に気付いた。

「西行寺……。これはどういう事だ？」

「あら？ 目が覚めたのね。……どうしてそんな不機嫌そうな顔をしているの？」

「状況が分からない。西行妖は元に戻っているし、庭も荒れた様子が全く残っていない」

「私が目を覚ました時にはこうよ？」

「……霊夢は？」

「生きているわ。今は博麗神社に居ると思うけれど」

置いていかれたらしい。

「……まあ、細かい事は良いか」

能力についての知識なんて既に明確ではないのだ。

大方、範囲的に対象をした欠陥の修正。それが冥界自体を修正対象としたのだろう。

「これは返しておくわね。寝ている人間に刃物を渡すのは危ないから預かっていたけど」

幽々子が袖に手をやり、中からメスを取り出し勇輝に渡す。

「悪いな。……で、記憶はどうする？ 何なら今直ぐにでも戻してやるけど」

「必要無いわ。全てでは無いけれど、西行妖に中てられて分かった事があるから」

「そうか。じゃあ俺は何もしないでおく」

「聞かないの？」

「聞いて欲しいのか？」

「普通は聞くものじゃない？」

「……なら聞き流してやるから話せ」

勇輝も幽々子の隣で西行妖に背を預ける。

「私は、生前にこの能力を嫌っていた」

幽々子が少し暗い声で話し始める。

「私の一時の感情の揺れで人が死ぬ。口喧嘩をした相手が死ぬ。隣に座って談笑していた友人が死ぬ。……私はこの力を今ほど制御出来ていなかった」

幽々子の声は次第に重く、沈んで行く。

少し間を置いて。

「だから、私は自害した」

「……………」

夜風が一度だけ強く吹き、西行妖の花びらを散らす。

「だけど、私の変わった友人が霊体として私を此処へ連れて来てくれたの。彼女は妖怪だったけれど、何より大切な友人だった。その時、生前の私の記憶は消えた。消されたのかもしれないけれど」

「…………この下にいるのは西行寺、お前か？」

「…………ええ。だから、思い出せた。少し遅くなっちゃったけれど」

恐らくは霊夢の事だろう。

幽々子はその自分の嫌う力で、霊夢を一度“殺して”しまった。

「思い出すために、知るためにやった事が思い出そうとしていた事と真逆なんだもの。……貴方には感謝してもし切れないわね」

「そう思うなら最初から異変を起こそうなんて考えるな。……全く、異変に関わるとロクな事がねーよ」

「私は得る物があつたわ。何も失わずに……」

「俺はそろそろ失いそうだ。常識の認識が変わってく」

「幻想郷に非常識は存在しないわよ。ここでは何が起ころうとも不思議じゃないもの」

「……ハア。それでもホームシックにならない程度にして欲しいな」

「あら、外人なの？」

「知ってたろ、絶対」

「可能性としては考えていたけれど……。でも、あれだけの力を持った外来人を私は見た事が無い」

「……そもそも、外人つてのはどういう扱いなんだ」

「私の友人……八雲 紫って妖怪なんだけど、紫が気まぐれで攫ってくるか、元々特別な力がある人間がこの幻想郷に入ってくるの。大抵は半日もしない内に妖怪の餌になるらしいわ」

「俺は能力の影響で襲われなかったからな……」

「落ちた場所も良かったんじゃないの？ 妖怪の山なら天狗に食われているし、魔法の森なら狂い死にしていたと思うけれど」

「成程、紅魔館の近くには妖怪も少なかったって事か……」

「紅魔館？」

「吸血鬼の館だ」

「……一番危険な場所だったんじゃないかしら」

「って言われても生きてるしな……」

確かに恐ろしい場所ではある。主にフランとかフランとかフランとか……。どうして西行妖を元に？」

「それと、これだけは聞いておきたいんだけど……。どうして西行妖を元に？」

「知らん、無意識にだ。それにコイツは妖力が微塵もないし、もう妖怪桜じゃないから元に戻したとも言えない」

「でも、ありがとう。この桜は私の友人でもあったから……。まさか自分の死体が埋まっているとは思ひもなかったけど」

「知るかよ、大体俺だって桜を元に戻す気は無かったんだ」

「そっいえば貴方の名前をまだ聞いていなかったわね。何て言うのかしら？」

「……桜井 勇輝。お前は別に名乗らなくても良い、世話役から聞
い」

「私は西行寺 幽々子よ。今回は世話になってしまったわね」

「おい、人の話は最後ま」

「何かお礼をしようと思うんだけど、何か希望はあるかしら？
妖夢をお嫁に、以外なら聞いてもいいわ」

「……花見の席にでも呼んでくれ。絡み酒をしてくる人間のいない
花見に」

「あら？ その程度の事でいいのかしら」

幽々子が立ち上がり、勇輝に詰め寄る。

「……じゃあもう一つ、今後俺の話は最後ま」

「却下」

「何を言わせたいんだ、お前は……」

「そうね……。抱か」

「言つかバ」

「あ？」

「……花見だけで良い。それだけで十分だ」

殺気が尋常では無かった。もう二度と口にしようとは思わない。

「夜も更けて来たわね。今日は泊まって行って、妖夢もお礼が言いたいと思うから」

「帰らせてくれそうにないしな」

「分かってるみたいね」

そう言う幽々子の声は先程までの沈んだ声を忘れさせるほど弾んだ物だった。

其の伍拾漆

「……朝、か」

白玉楼で目を覚ました勇輝は立ち上がろうと布団から出て、立ち上がる。

「あれっ……？」

しかし、身体が思う様に動かないで尻餅をついてしまう。

試しに手を閉じたり開いたりしてみる。しかし手は震え、思う様に動かす事が出来ない。

「筋肉痛か……いや、違うな。じゃあこれは……？」

まさか能力に副作用でもあったのだろうか。でも、だとしたら既に確認を終えているだろう。

能力の副作用ではない。しかし、筋肉痛でも過労での立眩みでもない。

そんな事を考えていると後ろの襖が開く音がする。

「もう朝ですがお目覚めに……どうしたんですか？」

妖夢だった。布団の上で座ったままの勇輝を見て何か疑問に思った様で尋ねてくる。

「……立てなく、なりました」

妖夢に肩を貸して貰い、客間に案内される。

朝食、と聞いていたがそこには朝に食べるには……というか三人では食べ切れない程の量の料理が並べられ、幽々子は既に席に着いている。

「あら、どうかしたの？」

「どうやら歩けなくなってしまったみたいです。それで私が」

「成程ね。そういう理由をつけて妖夢にセクハラを……」

「なら杖でも何でも用意してくれ。俺もその方が気が楽だから」

とは言っても食事のために座るので今直には必要ないのだが。

「他に何人ぐらい食べに来るんだ？ 人数が人数なら待ってるけど」

「心配しなくても全員揃っているわ」

「……見えない幽霊とかいるのか？」

「私と、妖夢と、貴方の三人。これで全員」

「食い切れないだろ」

……三人で、それも朝から消費できる量ではないのだが。

「やっぱりそれが普通なんですよね……ええ、薄々は気づいてたんです。私が極度の小食ではないですよね……」

妖夢が何やらぶつぶつと言っているが勇輝は聞き取れない。

しかし、その疑問は食事が始まって直に解消された。

「……妖夢、西行寺は何ていう化け物なんだ？」

「普通の……普通より力の強い幽霊、だと思いますけど」

「いや、明らかに体積と食ってる量が……」

アレでしょうか、全身が胃なんだろうか。だから頭のネジが数本ぶっ飛んでいるのだろうか。

とりあえず黙々と料理を胃に詰め込んで行く幽々子を見て、二人は非情に疲れた表情をしている。

「んぐ……はむっ……」

幽々子はそんな二人を視界の片隅にも入れないで食事続ける。

何というか、見るだけでお腹いっぱいになりました。

「で、問題はこっちか……」

妖夢が稽古用に使っていた木刀を杖代わりに白玉楼の庭へ出ていた
勇輝は思いつめた表情で現状を把握しようとする。

昨日、いや今日の深夜か。その時には少し足元が覚束ない程度だった。

あれは精神的な疲れからだと思ったのだが、それではおかしい。

能力で冥界全体の欠陥を修正しているなら勇輝に疲れは残っていない筈なのだ。

しかし、今は一人で立つのも辛い。

「勇輝さん、身体はどうですか？」

後ろから聞こえた声に振り替えると、妖夢が心配そうな顔をして立っている。

「大丈夫ではないな。それに原因が分からないから手の打ち用がない」

「そうですか……。後、一つ聞きたいんですか良いでしょうか？」

「答えられる事なら」

「昨日よりも弱っているんじゃないですか？ 失礼ですけど、勇輝さんから感じられる霊力は昨日の半分……いえ、十分の一もありません。とても同一人物とは思えないんですけど……」

「ああ、それは俺の能力……。ん？　もしかしたら」

可能性の話だが、脳の神経伝達速度と身体のパフォーマンスにズレが出来てしまったのではないだろうか。

二日間も吸血鬼並の動きを続けていて、急に普通の人間の身体能力に戻ってしまったら？

それでもなくても、脳は戦っている間の事を記憶している。故に動きに誤差が出てしまう可能性がある。

使用していた時間、それに能力値の差から考えて……。

「最低でも三週間はそのままか……」

ガクリと頂垂れる勇輝を見て妖夢は慌てる。

「あの、やっぱり聞かない方が良かったでしょうか！？　分かりました、忘れます！」

「あ、いや違う。原因と症状が分かっただけで寧ろ感謝してる」

「本当ですか？　それなら良いのですが……」

上司（幽々子）がアレだからここまで真面目なのか、部下（妖夢）が真面目だから上がアレなのか。

どちらにしても妖夢の苦勞は絶える事は無いだろう。

「それと、地上まで降りたいんだけど送っていつて貰えないか？

予想してなかった反動で靈力が使えなくなってるんだ」

使えるが、これ以上何か身体に問題が起きたら困る。それに、この推測が明確な原因かどうかは分からないし下手に脳を修正して廃人になったらお終いだ。

「それぐらいは……。此方としても迷惑を掛けてしまったんですし」

「助かるよ。でも男一人抱えて行けるか？ 知り合いを呼んでくれても良いんだけど」

「いえ、これでも日々鍛えてますから大丈夫です。それに……言い難いんですが勇輝さん、普通の男性より弱そ……ほっそりしているので」

ああ、どうせモヤシだよ。勉強ばかりしてましたよ、でも偶には鍛えてましたよ？ 父親の診察は命懸けのものがあつたので。

言い様の無い劣等感を感じながらも、妖夢に支えられ勇輝は白玉楼を後にした。

其の伍拾捌

幻想郷の春はあっさりと戻ってきた。

桜の木も待ち望んでいたかの様に咲き誇り、満開となっている。

まあ本来ならば散って葉をつけている時期なので何とも言えないのだが。

幽々子を降したのは霊夢だが、報酬を受け取る権利は勇輝に譲っていた。

里の人には、勇輝がいなければ自分は死んでいたし、幻想郷に春が来る事は無かったと説明したらしい。

複雑な気持ちで報酬を受け取ったが、一度受け取ったら手放す事は出来なくなっていた。これだけあれば一年は持つ。

診療所も信用を完全に取り戻す。という事は無かったが以前来た患者が自分を心配して来てくれたので少しは認められたのだろう。

やはり妖怪、それも人間の益になる事のない吸血鬼と関わっているという事が大きいのだろう。そこから改善していかなければ駄目なのかもしれない。

だが、今の自分にそこまでの力が無いのは知っている。幸いにも時間だけは無限にあるのだ。少しずつ、僅かでも進歩して行ければ良い。

そして……。

「「乾杯!!」」」

ここ、博麗神社では盛大な花見が行われていた。

例によって勇輝は魔理沙に箒に縛り付けられ、ここまで運ばれて来ている。

白玉楼の戦いからまだ三日。全員が戦いの跡を残していない訳ではないが、暗い表情の者は誰一人としていない。

更に、白玉楼の住人も参加していた。

目に見えた謝罪をしてはいなかったが、そこまで険悪な空気になっていないので気にする必要もないだろう。

一方で、何処から聞きつけたのかは知らないがプリズムリバー三姉妹もこの席で演奏をしていた。聞いている者はいないが……。

しかも、一曲ごとに感想を求めて来るので面倒だ。飲んでいる所は見えないが酒が入っているのだろう。

そして見たことの無い、頭に角が生えている少女は誰だ。さつきから酒しか飲んでいない。

「……………ハア」

思わず吐いた溜息に通り掛かった霊夢が反応する。

「どうかしたの？ まさかとは思っけど花見が嫌って訳じゃないわ

よね？」

「せめて日時の報告と身体の調子を伝える機会は欲しかったな。後は……酒以外の飲み物を用意してくれたら良い」

「水があるじゃない」

「お茶とか、そういう物が欲しい」

「なら本殿で入れて来たら？」

「茶葉どころか台所の場所も分らないんだけど」

「適当に行けば辿り着くでしょ」

「……………そうですね」

先日用意した簡易型松葉杖を支えに立ち上がると、霊夢はハツとして。

「やっぱり私が入れて来るから勇輝さんは待ってて」

パタパタと小走りに霊夢は本殿に向かっていく。少しは気遣いができるらしい。

一般レベルの思いやりがあったなら自分は家でゆっくりしていられる訳だが。

しかし、この満開の桜を見ずに夏を迎えるのも勿体無い気がする、少しは感謝しておこう。

「勇輝！ 何でまた女が増えてんだよ！？」

酔った魔理沙に後ろから勢いよく抱き着かれ転倒、鼻を打った。

「何しやがる……」

「だってよ、私がいるってのに勇輝の周りに女ばっか集まるからさー」

酒臭いし顔が赤い。駄目だ、完全に酔っている。

「別に意識して増やしてる訳じゃないから安心しろ。それと退け、服が汚れる」

少し強引に魔理沙を退かし、松葉杖を持つ手に力を入れて立ち上がる。

魔理沙は不満そうな顔をしていたが、アリスに呼ばれて渋々と去って行く。

「お兄様……」

勇輝の背筋が凍る。

恐る恐る振り向くと、日傘を差した少し精神面が危ない状態のフランが。

「何、してるの？ 今、誰かに抱き着かれてたように見えたよ？」

蛇に睨まれた蛙。浮気の見つかった夫の様にその場から動けない。というか動いたら殺られる。

「フラン、さん？」

「お兄様は自覚が足りないんだね。でも大丈夫、フランは許してあげるよ。ただお兄様、少しは考えて行動して欲しいな。いくら可愛い女の子がいても、フラン以外を見たらフランだって嫌なんだよ？それにね、最近は弾幕ごっこもあんまりやってくれないから少しイライラしているんだ。あ、気にする必要はないよ。お兄様が忙しいのはフランが一番良く知ってるもん。それと……」

「あの、何かスミマセンでした。明らかに俺が悪いとは思えないけど」

フランは生気の消えている目で勇輝をじっと見ながら。

「向こうで、話そうか。お兄様」

断ったら、どうなってしまふのだろう。

着いて行く以外に、選択肢は存在しなかった。

「フラン、お使いご苦労様」

「レミリア……。まさかお前がフランに」

「ええ、勇輝が女を侍らせてにやけているって言うてみたら」

「お姉様、言われた通りに連れて来たから良いよね？」

何を許可したのだろうか。

「ええ。今日は勇輝を連れて帰りましょ」

……生きていられるのか。

遠くに目を向けると、不意に白衣を引つ張られ引き摺られてしまう。

「あんな所にいたら容態が悪化するんじゃない？」

「霊夢……、助かった」

一時的にだが。

「はい、これ」

霊夢が持っていた湯飲みを渡してくる。

「お、ありがとう」

受け取ってから近くの桜の木の下に腰を下ろし、お茶を……。

「下剤は入ってないよな？」

「そんなの買うお金があつたら茶菓子でも買うわよ」

それもそうかと納得し、お茶を飲みながら桜を見る。

長い冬はもう終わった事を実感しながら。

其の伍拾捌（後書き）

終わった。色々やってしまった感のある章ではありますが、第参章・春雪異変はこれにて終了となります。
たまには長いあとがきを…… いらない？ そんな殺生な。

其の伍拾仇

診療所の書斎の中にカリカリとペンを走らせる音だけが淡々としていた。

「……………こんなモンか」

書き上げた書類を積み上げ、勇輝は背筋を伸ばして一息吐く。既に身体の不調も消えているようだ。

窓の外からは蝉の鳴き声がしている。

エアコンの効いた診療所は恐らく幻想郷の何処よりも快適に夏を過ごせると思う。

問題は……。

「どうして診察希望者がこんなに増えたのか……」

積み上げられた書類……ではなくカルテに視線をやり、勇輝は溜息を吐いた。

幻想郷の夏は、以前にも増して暑かった。

『休診中』の掛札を後に、勇輝は里のある場所へと向かう。

その恰好はいつも通りの白衣で、暑いのか不機嫌そうな顔をしてい

た。

「あれ、先生じゃないですか。今日はどちらへ？」

通りがかった茶屋のお婆さんに呼び止められる。

「いえ、少し自分の仕事に思う所があったので前々から誘われていた副業をと思ひまして……」

冷たい空間を求めて来る健康な人間を相手にする暇は持ち合わせていない。というのが本音なのだろう。

答える勇輝の表情は若干不機嫌そうで、お婆さんはそれを察したのか苦笑いしている。

勇輝と霖之助で暇さえあれば作っていた発電機と配線コード。幻想郷を駆け回り必要なガラクタを集め、勇輝の能力で直しては分解し、部品にして制作していた。

とりあえず太陽光とモーターでの発電の二つが出来たので、立地条件的に勇輝がソーラーパネルを獲得している。霖之助は水力か風力で迷い、未だ使っていないとか。

強引に奪ったエアコンや冷蔵庫は今では診療所に欠かせない物になった。これで易々と取り返される事もない。

という勇輝の思惑に天罰でも下されたのか、診療所は仕事にならない仕事で溢れている。

冬場は火を起こせばいいが、夏はそうはいかない。涼む方法といえ

ば水遊びぐらいだろう。

だからこそ、エアコンは魅力的だった。

そして勇輝は目的の場所へと辿り着く。すると……。

「あ、白いお兄ちゃんだ！」

「せんせー、今日は女の人といっしょじゃないのー？」

「……………俺って里の子供にどう思われてるんだろうな」

寺子屋に入って直ぐ、その生徒に目をつけられる。

副業とは、寺子屋の教師だ。

「ん？ 勇輝じゃないか。何か用でもあるのか？」

寺子屋の奥から慧音が顔を出す。

「えーと、前々から誘われていたので少し見学でも、と」

「丁度良かった。私はこれから竹林まで行く予定でな、自習にするつもりだったんだ」

「え……………」

「そんな訳で、あと二限らしいけど代理で俺が教えるから形だけで

もしっかりやるように」

「『『えー』』」

大ブーイングだった。

確かに本来は自習になる筈の時間だったが、ここまであからさまな反応をされると腹が立つ。

少し青筋を立てながらも勇輝は。

「とりあえず適当に問題を出してやる。しかも……」

何か企むような、誣いて言うならこれから人を嵌めてやろうという様な笑みを浮かべ。

「全問正解出来たら、家の診療所で好きなだけ涼んで良い。それも毎日だ」

生徒達のテンションは一変し、やる気に満ち溢れた。子供は素直な物だ。

「せんせー、嘘じゃないよな、絶対だよな？」

活発そうな男の子が疑うような言葉を希望に満ち溢れた声色で尋ねる。嘘って言ったら泣くと思う。

「勿論、俺はそんなに汚い大人じゃないからな」

おおーっと歓声が上がる。

しかし、桜井勇輝は……狡かった。

「じゃあ、一問目だ。それとちょっと訂正な、誰か一人でも正解したらその問題は全員が正解だ、全員が間違えない限りは続けられる。相談も許す」

黒板に文字を書き始める。まずは無難な所から……。

『 $2685 + 4672 + 7564 = ?$ 』

「さ、答える。制限時間はないからゆっくり考えていいぞー」

生徒全員の顔が引き攣った。コイツ、半端なく汚い大人だ。と言わんばかりの視線を向けて。

二十数人の生徒が一斉に一つの机……卓袱台？の周りに集まり解き始める。

生徒の年齢は五、十四と言った所だろう。バラつきはあるがそれなりに仲は良いようだ。

十分が経過し。

「14921！」

「はいお疲れ様。じゃあ次な」

書かれていた問題を消し、新しく問題を書き始める。

『博麗神社の昨年のお賽銭の総額はいくらでしょう?』

生徒の数人が、涙目になった。

ここでゼロと答え、それをあの巫女に聞かれてしまったら……。

「少し横暴だからヒントだ。去年、俺が一枚だけ入れてたな」

凄い結束力を見た。人海戦術みたいなものだろうか？ 一円から五百円まで答えた所で終了。

「んじゃ、次な」

『はくれいじんじゃ。を漢字で書け』

五人が間違いかどうかを確かめる犠牲となったが、これも正解した。

「次は……」

『紅 美鈴。の読み方を答えろ。尚、これは名前である』

驚いた事に、正解者が出る事は無かった。

何故か、申し訳ない気持ちになった。

今度、紅魔館に行く時には差し入れでも持っていこう。

その後、生徒達も気に入ったのか問題は続き、慧音の年齢を予想し

る。という問題を出した所まで覚えているのだがそこからの記憶が飛んでいる。

思い出さないのが賢明だと直感的に感じている。

其の伍拾仇（後書き）

新章スタート。しばらくほのぼのした感じで続きます。

其の陸拾

霊夢は今、窮地に立たされていた。

「そんな、これじゃ、もう……」

博麗神社の家計は既に底を尽き、食べるのにも困るほどに金欠だったのである。

「という訳で勇輝さん。看護師の募集はしてない？」

「却下。勉強してから出直して来い」

診療所は珍しく賑やかである。

「何ですよ？ これでも手当ならそこそこ出来るし看病だってできるわよ」

「今は病人は少ないし、薬を作るぐらいしかやる事がないんだよ。だから知識が無いなら何の役にも立たない。……紅魔館でメイドでしたらどうだ？」

「嫌よ。妹の方の弾幕ごっこの相手になるのが目に見えてるから」
「それもそうだ。」

「でもな……」

この人里、今まで医者無しでやってきたことも関係しているのか病気に罹る人間が殆どいない。

健康なのは良いのだが、これでは診療所の意味が無い。

エアコン目的に来る健康な人間が殺到したので今は窓から入る風が頼りな診療所は、再び人気が無かった。

「じゃあ、他に仕事が出来そうな所は無いの？　勇輝さんなら心当たりの一つや二つあるでしょ？」

「獵師や山菜を採りに行く人の護衛、とかは？」

「か弱い女の子に紹介する仕事じゃないわよね……」

「いや、だって霊夢は人外な」

「何か言った？　まさか私が人外だなんて勇輝さんが言う筈無いわよね？」

「……分かったよ、研修生として雇う。給料は日払いで二食分、昼飯はこっちで出す。これなら文句は無いだろ？」

「流石勇輝さん、話が分かるわね」

「けど、三日様子を見て使えないって判断したら飛ばす。他を当たってくれ」

「大丈夫よ、むしろ私が必要になると思いなさい」

こうして、霊夢を看護師として雇った。のだが……。

確かに巫女の衣装では違和感があると言ったのだが……。

「霊夢、その服は何処から調達してきた？ 言え、製作者を殴らないと気が済まない」

何故ナース服を来ているのだろう。それもピンク色の。

「えっと、外界の看護師の制服が丁度あるって霖之助さんが……」

あの外来物マニアは服まで拾って来るのか？ 変態以外の何者でもない。

「……まあ良いか。じゃ、ロビーの掃除。その後には出入口の掃除をしてくれ。患者が来たら受付まで案内、健康な妖怪が来たら……話次第では追いつ返す」

「分かったわ」

掃除は能力を使えば一瞬なのだが、人の手でやるのも良いだろうと任せる。

勇輝は薬の調合をするために奥の方の部屋へ。

「……から……でしょ」

「……も……じゃ……ない」

薬を作り始めてから数十分。出入口の方から争う様な声が聞こえてくる。

「……ハア」

溜息を吐きながら立ち上がり、出入口の方へ歩いた。

「だから、勇輝さんに雇われて妖怪が来たら追い返すように言われてるって言ってるでしょ！」

「私は勇輝に話が有って来たの。それを追い返すのは横暴だと思わない？　ねえ、咲夜」

「そうですね。それに、こちらとしては一刻を争う事なので。貧乏巫女には理解出来ないかもしれませんが」

「む、そこまで言うなら話してみなさいよ。内容によっては通してあげる」

霊夢は依然としてドアの前に立ち塞がる。

レミリアと昨夜は、どうしてこうなったのか、という呆れた表情をした。

「血のストックが切れたのよ。だから勇輝に貰いに來たの。これは
正当な仕事の依頼だと思うけれど？」

「なっ……。させる訳無いでしょ！？ 大体、吸血鬼って血を吸わ
なくても生きてられるでしょうが！」

「妖力が落ちちゃうじゃない」

「落ちれば良いのよ！ ロクな事しないんだから！」

「とは言われてもね……」

勇輝を最初に拾ったのは紅魔館。よって幻想郷に措ける勇輝の立場
は未だ紅魔館一行に含まれる。

勇輝が人里に住み始めてからまだ一年経っていないので、住民票も
ないのだ。

つまり、未だレミリアの傘下である。お互いにそうは思っていない
が。

「とにかく、勇輝さんは今忙しいから帰るなり他から吸血するなり
したら？」

「悲しい事に非番なんだよね。何もやる事が無い」

霊夢は後ろからした声に振り替える。

「悪いレミリア。先週に血を届ける予定だったな。……フランは？」

「あの子なら何とかトマトジュースで騙しているわ。もう限界だ
ど……」

「直に用意する。中で待つてくれ」

冷や汗をかきながら早足に戻って行く勇輝を見て、霊夢は不満そう
な顔をした。

二人が血を持って帰った後、霊夢は勇輝に詰め寄った。

「どうして吸血鬼に血を渡すのよ。力を削げば異変が起こされる心
配も無いし、勇輝さんならそれぐらいの話をつけれるでしょ？」

「長い間世話になった。っていうのもあるけど、どうせ俺が断つて
も他の里の奴から咲夜が血を持っていくだろうし、それなら俺が渡
した方が安全だと思わないか？」

勇輝には失ったものを元に戻せる力がある。だが、他の人間ではそ
うはいかないだろう。

「……それは、そうだけど」

「里も俺も被害は無いんだ。それで良いだろ？」

そう言われてしまえば霊夢は何も言えない。

「じゃ、掃除頼んだ」

ボンと霊夢の肩を叩きながら書斎へと向かう。

霊夢は未だ、何か納得のいかないような、気に入らないといった表情をしていた。

其の陸拾巻（前書き）

ユニークアクセスが五万を突破しました（2011/11）。読んでいただいている皆様に感謝です。 読ん

其の陸拾巻

「……………へっ？」

「だからさ、一々神社から来るのは面倒だってなら泊まり込みでも構わないって事なんだけど」

幸いにも寝室と診察室はかなり離れているので気兼ねする事は無いだろうと思つての事だ。

「でも迷惑じゃ…………」

「別に。飯なんかも一人分だけチマチマ作るのは性に合わないし、何より材料の保存を考えなくて良いから寧ろ楽だから」

診療所の冷蔵庫には切り掛けの野菜がゴロゴロ入ってます。

「な、なら私が料理するから。それで貸し借りなしって事で」

「…………いや、請求なんてしないぞ？」

「そう？」

どこまでもお金優先の霊夢だった…………。

材料的に簡単な物を何品か、という夕食だった。そういえば一週間ほど買い出しに行っていない。

「……………」

「どうしたの？」

「いや、普通に食べれるものが出て来たなー、と」

「馬鹿にしてるの？」

「レミリアとか、西行寺とかスペルカードの決闘が強い奴って料理が出来ないイメージがあって」

「人間じゃないからじゃない？」

「………そういえば根本から違うな」

初見の時は驚いたレミリアの羽も、今では慣れきってしまっていて偶に妖怪だという事を忘れてしまう。

「それで、寝室と診察室……。あ、霊夢は寝室を使ってくれ」

「？ 普通は勇輝さんが使うんじゃないの？」

「いや、薬とか置いてあるし、間違えて作った毒薬なんかもあるから危険だろ？」

「………流石に毒薬が転がってる場所だと寝られないわね」

「そこまで強くないけどな。幻覚作用と覚醒作用、あと心酔作用があるだけで」

俗に言う麻薬である。外界で作った事あるなー、と調査を進めていたら出来てしまった。

気化しないようにビンに詰めて栓をしてあるが、万が一にでも割ってしまえば廃人コース確定だ。

量は……二百ミリぐらいあった気がする。

今度妖怪にでも試してみようか、もちろん人型では無い物に。

「布団とかシーツは替えた方が良いか？ ベッドが駄目なら敷布団も出すけど」

「そこまでして貰わなくても大丈夫。そのままで良いわ」

「分かった。後、風呂は用意した方が良いか？ 水は張ってあるから火を起こすだけになってるけど？」

「ならお願い」

水の入った桶の中に食器を入れ、勇輝は裏口に向かう。

「火を起こしてくるから。熱かったりぬるかったら言ってくれ」

この診療所。フローリングに窓はガラスの洋風なのだが、風呂だけは和風なのだ。

ガスは無いし、電気で温めるにしても、夜はそこまでの電力が供給出来ない。

何より、水道が無いので数年かけても作成していくしか無いだろう。今は発言力が無いので無理だが。

壁の向こうは浴室、という位置まで移動し纏めてあった薪をくべて火を……火を。

月を雲が多い、灯りが殆ど無い外。診療所には照明器具が付いているが、外までは届かなく暗い闇の中である事を思い出す。

「火打石、台所だ……」

ライターが懐かしい。きっとアレは世紀の大発明の一つだったのだろう。

それに、火の勢いを上げるために枯草も要る。紙は勿体無く使えない。

台所へ向かおうとし、裏口のドアに手を掛けた所で……。

「さて、貴方にはこれから一役買って貰いましょう」

何者かに肩を掴まれ、闇の中に引き摺りこまれた。

「……遅いわね」

身体にタオルを巻き付け、寝室で風呂が沸くのを待っていた霊夢だが未だに火が入っていない。

まさか火が起こせないと言っのではないだろうか。

そう思った霊夢はさっきまで来ていたナース服では無く巫女装束を来て勇輝を探す。

案の定勇輝の姿は浴室の外には無かった。

霊夢は溜息を吐きながら書斎を、寝室を、台所を、ロビーを、診察室を、庭を探す。

「……………いない？」

何処にも勇輝の姿は無かった。

まさか、急病の患者でも出たのだろうか。そう思った霊夢は大人しく寝室に向かい、普段勇輝が使っているベッドに入る。

胸騒ぎがするのは年の近い異性の布団で寝る緊張からか、それとも悪い事の前兆なのか。

慣れない事をして一日を過ごした霊夢は、強い睡魔によって微睡んでいた。

「……………まだ帰ってないのね」

翌日、窓から入る日の光で霊夢は目を覚ました。

台所へ、診察室へ、書斎へと足を運んだが勇輝の姿は無い。

大方、診察が夜だったからと泊まり込みなのだろうと霊夢は結論づけ、勝手に朝食を作りそれを食べる。

それから一時間が経った。まだ勇輝は帰らない。

更に一時間。もう寺子屋が三時間目に入る時間だが勇輝は戻らない。

そして、ここまで来て漸く霊夢は気づく。

勇輝の身に、何かあったのだ。と……。

それからの行動は霊夢自身でも驚くほどに速かった。

博麗神社に陰陽玉を取りに帰り、再び人里へ。

最初に向かったのは香霖堂だった。

「霖之助さん！ 昨日の夜、勇輝さんがどこへ行ったのか知らない？」

「勇輝、か？ 最近は店にも来てないからな、一週間は顔を合わせしていない」

「じゃあ、昨日の夜に人が倒れたとか、急病で倒れたって話は無かった？」

「聞いてないな。勇輝がどうかした……？」

霖之助が言い終える前に霊夢は香霖堂を飛び出していた。

もしかしたらと、少し出掛けただけではないかと、再び診療所へ向かう。

「どうした霊夢、受付の仕事ぐらいしててくれよ」

霊夢は身体から力が抜け、へなへなと地面に座り込んでしまう。

診療所の前で勇輝と鉢合せになったのだ。

「ほら、さっさと着替えて仕事しろ」

いつもと変わらぬ声や仕草で霊夢の手を取り立たせると、勇輝は診療所の中へと入って行く。

霊夢はその場から動かない。いや、動けない。

勇輝の来ている真っ白い汚れ一つない白衣。

それからしたのは、濃い血の匂いだった。

其の陸拾巻（後書き）

章題詐欺じゃないですよ？

其の陸拾貳

勇輝が診療所から消えた。

その直後まで時間は遡る事になる。

「……これはこれは。大賢者様が何の用ですか」

以前にも来た事のある、とある妖怪の空間。

そして、勇輝の目の前にいる胡散臭い笑みを浮かべる幻想郷の大賢者。八雲 紫。

「言っただでしょう。一役喰んで貰うって」

「……………厄介事ですか」

呆れた表情で溜息を吐く勇輝をスルーし、紫は説明を始めた。

数十分に渡る説明を聞き終え、勇輝は更に深い溜息を吐いた。

「それでも忙しい身なんですけど、やらないと駄目です?」

「別にやらなくても良いわ。けど、それをこなしたならご褒美をあげる」

「それは俺にどんな利益が?」

「そうね……………」

次に紫の口から発せられた言葉に、勇輝は目を丸くし息を飲んだ。

「分かりました。必ずやり遂げますよ、例え多くの人から反感を買ったとしても」

そんな会話があつた二日後の朝、勇輝は診療所でいつも通りに仕事をする。

「霊夢、その薬草取ってくれ」

「あ……うん」

霊夢が浮かかない顔をしているのは夜に出掛けた、もとい連れ去られた事からだろうか？ と予想しているのだが、まあ何でも良いだろうと思ひ聞いていない。

重要な事なら聞いてくるだろうし、言い辛い事なら言わないでも良いだろう。

それに、例の要件は異変に関わった事のある者には話すな。というのが紫との約束だ。

「それで霊夢、二日目になつたけど印象は？」

「……へっ？ あ、えっと、患者が来ないって本当だったのね」

「健康なんだよな、幻想郷の人達は……。まあ、生活態度を見れば

当然なんだけど」

外界と違い、身体を動かしていない時間の方が少ないくらいの生活を送る里の人達には当然体力がある。

そして、この鎖された里の中。人が密集していないだけあつて流行り病がまったく見られないのだ。

空気感染する伝染病なんかでも来ない限りは村が死滅する事はないだろう。

「んで、霊夢の勤務態度だけどな……」

そう言いかけた時、診療所のドアが勢いよく開け放たれた。

「おい医者若造！ 妖怪に襲われて怪我人が出た、速く来い！」

怒鳴りこむように入ってきたのは屈強そうな体つきの男だった。

「……分かりました。少し準備が必要なので出血をしているなら止血、あまり動かさないようお願いします。場所は？」

男は場所だけを告げると、さっさと走って行ってしまう。

「さて、久々の大仕事だ霊夢。包帯、あと布を持って来てくれ。後は俺が準備する」

「ちょっと待ってよ！ あんな言い方で、それも命令するように言ってきたのに何も言い返さずに行くの!？」

「ああ。別に泣きながら頭を下げて頼まれても、刀を突きつけられて命令されてもやる事は変わらないからな。それよりさっさと支度しろ、死人が出る」

いつも以上に真剣な表情の勇輝に霊夢は言葉を詰まらせた。

そんな霊夢を放置して、勇輝は医療器具をリュックに詰め込んでいく。

「肩から胸にかけて切られた後……傷の深さは二、三センチ。骨で止まったのか、これなら……」

倒れ、血を流す男に近づくとメスで衣服を裂き、傷口を見る。

横にいる霊夢も、生々しい傷は見慣れていないのか嫌悪感を隠せていなかった。

「先生よお……俺あ、助かんのかい……？」

まだ意識はあるようで、弱々しくも怪我を負っている男は勇輝に聞く。

「はい、必ず助けます。だから少し休んで下さい」

ニコリと、この場にいる誰もが真剣な顔つきを、絶望的だという表情をする中で勇輝は微笑んだ。

「霊夢、これから俺が言う物を三秒以内に取り出して渡せ」

何人もの人が見守る中、勇輝は手術を始めた。

野次馬は傷口を、流れる血を見て顔を顰めたが勇輝は顔色一つ変えずに治療を進めていく。

止血を、輸血を、縫合を慣れたような手付きで淡々と進めてくのを
見て、霊夢はふと疑問に感じる。

そんなに深い切り傷の人の身体を見る機会はあるのだろうか、と。

幾らなんでも、ここまで戸惑いなく速い処置が出来る物だろうか。

それこそ、何度も練習を繰り返していなければ……練習？

思い出したのは先日の昼、勇輝からした血の臭い。

「……………ふう」

勇輝が肩の荷が下りた。と言った感じに一息吐く。どうやら終わったようだ。

「この方の親族か、親しい方っていますか？　これからどうするか
の相談をしたいのですが」

野次馬の間から一人の女性が手を上げながら出て来る。

「じゃあ、傷の事からですけど……」

霊夢は少し下がった所から勇輝を見る。

付き合いは長くはないが、人柄はこの一年に満たない間でも良く分かった。

変に不器用で、分け隔てなく人や妖怪と接し、困っていたり危なかったりする者を損得を気にせずにかけてしまふ。そんな印象だった。だからそんな事は無いと、そう信じたい。だが、霊夢は勇輝の能力を思い出す。

欠陥を修正する程度の能力。

使い様によつて、力を得る事も、傷を癒す事も、失った物を取り戻す事も出来る力。

そして、その力は人の命さえ繋ぎ止めるのを霊夢は知っている。

言い様のない不安を、疑問を抱えながらも、霊夢は診療所の研修の最終日を迎える。

其の陸拾参

幻想郷の、とある森の中。そこに二人の男女が向かい合って立っていた。

「答えて。勇輝さん、貴方は……人を殺した事がある？」

霊夢は否定して欲しい、ある訳がないと笑い飛ばして欲しい。そんな思いを抱きながらもその問いを声に出して言った。

勇輝の答えは――。

「……ああ、あるよ。もう、何人も」

――霊夢が、一番聞きたくない言葉だった。

手術を終えた勇輝は白衣に棒を通して担架の代わりにし、ケガ人を運ぶ。

「あまり揺らさないようにお願いします。傷口が開かないとも言いきれませんが」

内臓や重要な血管は傷ついて無かったが、大怪我である事には変わり無い。

「それぐらい誰でも分かるに決まってんだろ、上手く行ったからって調子に乗るんじゃないやねえよ」

反対側を持っているのは診療所まで勇輝を呼びに来た男だが、相変わらず厳しい態度である。

それでも呼びに来た時ほど声に嫌味は無く、それなりに感謝しているのかもしれない。

そのまま怪我をした男の家まで行き、ある程度の説明をして痛み止めの薬を渡す。

お金の管理は男がしているらしいので、代金は来週にでも相談するという事になって解散となった。

「どうした霊夢、慣れない光景で疲れたか？」

診療所に帰る道で、ずっと黙っている霊夢に話しかける。

「……へっ？」

「いや、どうかしたのかって……」

「えっと……」

霊夢は視線を泳がせ戸惑っているような声を出す。

「まあそれは置いて、どうだ？ 今日みたいな事はこれからもあるだろうし、流行り病なんかが広まったら忙しさは数十倍だ。それでも良いなら看護師、続けてもいいぞ」

「……じゃあ、その前に一ついいかしら」

霊夢は何か思いつめた様な、決意したような目で勇輝を見る。

「少し、二人で話しておきたい事があるの」

そして森まで移動し、二人は向かい合う。

「……その人たちは、どうして死ななければならなかったの？」

「生きていける見込みが無かった。それに、もう表では存在しない事になっていた奴等だよ。……勿論、俺だって」

「言い訳なんかしないでいい！ どうして殺したの！？ その人達で実験もしたんでしょう？」

勇輝は目を見開く。隠していた事の確信を突かれた様に。

「……他に、方法が無かったんだ。夢を叶えるために」

「私はそんなやり方を認めない。誓って。私が勝ったら、二度と医者をお名乗らないって！」

霊夢がスペルカードを取り出す。

勇輝は能力を使っていない、今は脆く、弱い存在だ。

「……無駄だよ。俺は勝敗に関わらず医者を辞めない。それが犠牲

「なった奴等への手向けだから」

勇輝はスペルカードを使おうとも、弾幕を作り出そうともしなかった。

「……………どうして何もしないの？」

「どうして何かしないといけない？」

「……………この期に及んでまだ戦わないって言うの？」

「言っただろ？ 意味が無いんだ、ここで戦うのは」

「それじゃ私が納得いかない！」

「……………いや、そんな事言われてもな」

「人を殺して、死体で実験して…………。ならどうして医者なんて名乗るのよ！」

「確かに誇れるような事じゃないけどさ、霊夢。じゃあお前は俺の何を知ってるんだ」

「……………？」

「俺は親父に連れられ……………いや、自分から付いて行って何人も死にかけた奴らを見た。腕が切り落とされた奴、銃弾が内臓を突き破った奴、目も耳も利かなくなつて死にたいと願う奴。救えた人だっている、けど人の身で、ただの人間には救えない奴だっているんだ。だから引導を渡し、次の糧にする。お前はこれを全て否定できる立

場にいるのか？」

勇輝は苦虫を噛み潰したような表情で語る。

勇輝も幻想郷に来る前まで、そこそこに修羅場を潜っていた。

父親の助手として、自分の技術を磨くため、知識を広げるために色々な事をした。

選んだ道は、卓上の勉強だけではどうしても足りない事だらけだったのだ。

それを聞いた霊夢は、膝から力が抜けて草の上に座り込んでしまう。

「それじゃあ、死ぬ寸前の人しか殺してないって事……？」

「は？ いや、当たり前だろ。健康な人間の身体の構造は図説で足るし」

「じゃ、じゃああの日の夜は何をしてたの！？」

「……狩り」

「は？」

「良いよ、全部話すよ。八雲 紫って妖怪は知ってるか？」

「ええ、勇輝さんが寝込んでる間に一悶着あったから……」

「そいつがさ、人と妖怪の仲を深めるために夏祭りを開けっ言う

んだよ。村の上の方には自分から言っておくつて。んで、屋台をいくつか作るうって話になって木材を取りに行ったら熊に襲われて…鍋にした」

何の反動があるか分からないので身体の強化をせずに、少ない霊力をフルに活用しての戦い。二度と夜目も利かないような場所で作業はしないと誓った。

「……そうだったの」

霊夢は大きな溜息を吐く。自分の取り越し苦労だったと安心して。

霊夢はふと思う。自分は何故こんなにも安心しているのかと。

「で、看護師はどうする？」

さっきまでの重苦しい空気はどこへ行ったのか、勇輝は軽い調子で霊夢に聞く。

「遠慮するわ。ストレスで死にそう……」

三日でこれだったのだ。これ以上心配させられては適わないと霊夢は断る。

「そっか。まあ、餓死する前に来るなら何か食べる物ぐらいは出すよ」

そう勇輝が笑いながら言うのを見て、霊夢も思わず笑った。

其の陸拾参（後書き）

思った通りに書けない……。そしてお祭りフラグを立てました。

おみこしワッショイおみこしワッショイ……博麗神社って何を奉
てるんでしょう？

其の陸拾肆

暑い夏の日。人里は例年よりも忙しく、賑わっていた。

変化として、外界から来た一人の変わった青年が住み着いただけなのだが、今……。

「だから、題賢者から任された事で調子に乗っている訳では無く祭を行う方針として出し物がこうなってくるって言ってるだけじゃないですか!!」

その青年は大勢の大人の前に立ち、声をあげて口論していた。

「じゃが、いくらなんでも不確定な事が多すぎる。その冥界から来る御仁は大賢者様のご友人だと言うが、吸血鬼は信用出来ん」

「そこは博麗の巫女を付けるという事で話を着けたばかりです。私はこれが失敗したとしても身の安全を確保出来ますが、皆さんは違うでしょう?」

勇輝はイライラした口調になりながらも言葉を続けていく。

こんな話し合いになったのも、今朝の紫の話に原因があった。

「大賢者様。一体どうなされたのです? 何年ぶりにお越しにいただいたと思えば、こんな朝早くに皆を呼び出して……」

今、この広場には里の一割程の人が集められていた。

そして、まだ時間帯は早朝。普段なら寝ている者も少なくとも無いだろう。

紫は一度辺りを見渡し、咳払いを一つして。

「今日は、皆さんにとっても素晴らしいお話があつて来ましたの」

胡散臭い口調で、胡散臭い笑みを浮かべながら言った。

「今年から、人と妖怪の親睦を謀るための祭を開催する事を義務付けますわ。必ず夏の間に行い、最低十名の人外が参加する。それが最低限の決まり事です」

その言葉に、一部以外の人々は顔を青くする。

里の中にも半獣、半妖はいるが数は十に満たない。

つまり、里の外に住む妖怪に声をかけなければならないのだ。

「責任者はソコの桜井 勇輝が務める事。また、この祭が開かれなかった場合、最低限の決まり事が守られなかった時は……。里を覆っている私の結界を解かせて貰いますわ」

そして、現在に至る。

「声をかける予定は紅魔館のレミリア・スカーレット、フランドー

ル・スカーレット、パチユリー・ノーレッジ、紅 美鈴、小悪魔。魔法の森のアリス・マーガトロイド。白玉楼の西行寺 幽々子、魂魄 妖夢。これで八人、そこに上白沢 慧音、森近 霖之助を含めれば十名。良いですか、妖怪の山と繋がっている人間が居ない以上はこれが限界です。安全だと河童を呼ぶ伝も無い、吸血鬼が恐いのも分かりますが、これ以外に方法が無いので納得して下さい」

勇輝が言い終えた所で霖之助が手を挙げる。

「知り合いに天狗がいるんだが、それもこういった事に目がない様な天狗なんだが声を掛けておくか？ 欠席が出ないとも限らない」

霖之助がそう言うと、何かの店の店主から声が上がる。

「ウチの店に、偶にだが来る風見 幽香という妖怪がいるが……」

どうやら妖怪を呼ぶのにそこまで抵抗の無い人も居るようだ。

「なら頼みます。では催し物についての相談ですが……」

今、この場には一家から一人の代表者が総出で集まっているため部屋が狭い。

稗田という里の代表的な人の屋敷だが、五十人以上は厳しかった。

「屋台は各商店が開き、他に希望者が居れば内容によって許可を出す。そこに問題がある方は……？」

部屋は静まり返ったまま。異存は無いようだ。

「……ではメインイベントですが」

これは人と妖怪の友好関係を良好にするための祭。よって誰でも参加出来る物にしたいのだが……。

「寺子屋の子達に先程希望を聞いたのですが……」

勇輝は呆れた表情で告げていく。

- ・弾幕王者決定戦
- ・スペルカード対戦会
- ・弾幕迷路大会
- ・トラウマを植え付ける大会
- ・終わり無い弾幕合戦

「と、ロクな案が出なかったので皆さん何か考えて下さい」

勇輝は言い終わってから慧音を見るが、目を逸らされた。

しかし、他の人の反応は……。

「いや、それで良いだろ。俺達に危険はねえし」

「……っ！ そうだよな。俺達には関係ないし！ 強制参加って言っても出れるのは桜井と慧音先生だけじゃねえか！」

ここぞと言わんばかりに賛同していく人々。まったく薄情な奴等である。

「むしろ、ここで博麗や桜井が優勝すれば里は安泰ではないのかのう？」

「『それだっ！』『』『』」

「落ち着いてくださ……。落ち着けよお前等っ！」

收拾が着かなくなってしまった。これでは……。

「先生、会場はワシ等で作るんで」

「里の外れに開けた空き地があっただろ？　そこなら観戦も……」

「先生、頑張つて下さいね。息子共々応援しますので」

……勇輝は、これ以上何かをいう事は出来なかった。

忘れていたが、この里の文化レベルは江戸と明治の間ぐらい。娯楽は少ないのだ。

弾幕ごっこの観戦。これ以上の娯楽は幻想郷に存在しないのかもしれない。

勇輝も、一度だけ観戦者の立場に立ったことがある。霊夢とスカレット姉妹との決闘だ。

殺し合いだったにも関わらず、魅了され、言葉を失う程にそれは美しかった。

だが……。

「……今は能力を使わないようにしてるんだけどな」

普段の状態で相手出来る程、他の面子は力を抑えてくれそうに無いので勇輝は祭りの事務をしながら、弾幕の創作に勤しんだ。

其の陸拾肆（後書き）

秋が、遠い……っ？

其の陸拾伍

紫が祭を開けと宣言してから一週間。

現在は八月の上旬にあたる時期なのだが、里では暑さに負ける事無く人々が大通りを行き交っていた。

勿論、祭の準備のためである。

畑の世話、家畜の世話、商店の経営。それぞれに仕事がありながらも皆が祭を成功させようと取り組んでいた。

一方で、勇輝はと言うと……。

「……今更だけどさ、ルナサ達が演奏するつてのがメインでも良かった気がするんだよね。ほら、花見の時に幽霊がいただろ？」

「それをどうして此処に来てから言うのか分からないけれど、要するに弾幕ごっこがしたくない。」と」

紅魔館でレミリア達に祭の事を告げていた。

「いや、冥界での一件以来人体の欠陥の修正に抵抗が出来てな。そもそもこの能力が指す欠陥が“不足”なのか“欠落”なのか。それとも両方なのか、また別の事なのか。今考えると説明できるような物じゃないんだよね。修正も“改善”なのか“改造”なのか分からないし」

「使えれば良いじゃない。困る訳でもないでしょう？」

「まあ、使って死ぬなんて事は無いんだけど動けなくなるのは困る」

「でもフランとの弾幕ごっこは続けてるのよね」

「新しい戦い方の模索中だ。如何に少量の霊力で、僅かな身体能力で戦えるかの」

勇輝は咲夜が入れていた紅茶を飲んで一息吐く。

「それにしても、何を考えているのかしらね。今更になって人と妖怪の仲を取り持つ祭を開こうだなんて……」

「それについては大体の推測が出来る。紅魔館に博麗、それに白玉楼、後は魔法の森か。ここまで強力な面々とパイプのある存在が人里に居るんだ。もし、そういう思惑が以前からあったとしたら俺が里に住みついてる間に形にして置きたいんだろうな」

「霊夢は分かるけど、亡霊共や魔法使いは大した事無いでしょう？」

「霊夢は……、たぶん今なら負けないんだろうけど西行寺に一回負ける。それに魔理沙は言わずとも分かるとして、アリスだってそこそ出来ると思うけど」

「安心しなさい。咲夜が二人とも負かしているわ」

「……………何してんだよ、お前等は」

これ以上殺伐とした仲にならなくても良いだろうに。

「とにかくさ、案内ぐらいはするから来てみなよ。少なくとも紅魔館で紅茶飲んでるよりは面白いだろうから」

「……そうね。勇輝が弾幕ごっこに参加するなら、もう一度相手をするのも悪くない」

そう言いながらレミリアは紅茶の入ったカップに口をつける。それを見る勇輝の顔は引き攣っているが。

「じゃあ、次に誘う奴等の所にも行くから今日はこれぐらいにしておくよ」

「その前に、勇輝。何故知り合っていくのが女ばかりなのか説明して行きなさい」

「……………比率の問題だと思う」

そうであって欲しい。でなければ生まれつき女難の相があるのだろう。

霧の湖の近くの廃墟である洋館。洋風なその建物からは昼夜問わず楽器が鳴り響く。

外界なら心霊スポットになるだろうこの場所も、幻想郷ならば「ああ、幽霊がいるな」と軽い認識しかされない。

「と、いう訳だけどさ。どうする?」

この洋館に住む幽霊。プリズムリバー三姉妹も一応は縁があるので声をかける。

「行きたい、けど……」

「里はちよつと、……ねえ？」

「え、行かないの？」

どうもリリカを除く二人は渋っているようだった。

「人里がどうかしたのか？ ……襲ったりしてないよな？」

「そ、そんな事はしてないよ！？ ただ、死んでからは人が多い所には行った事がないんだ」

どうやら不安らしい。そう言うルナサの手は少し震えていた。

名前からして死んだのは外界だろうか？ それは定かでは無いが、一般的な幽霊の捉え方をしているのかもしれない。

霊力を扱って空を飛んでいるような人間なら気にしないだろうが、一般人からしたら幽霊も恐怖の対象なのだ。

「なら、幽霊って事を隠せば良いんじゃないか？ 分かる人には分かるだろうけど、俺からしたら普通に人と変わらない様に見えるし」

「そう、かな……？」

人と変わらなないと聞き、ルナサの顔が綻ぶ。

「メインにはならないけど、弾幕ごっこの休憩中に三人の演奏をしても良いと思うしさ。まあ、気が向いたらで良いから」

それだけ言って、三人の元を後にする。

里に戻る途中、チルノとルーミアと、あと一人妖精がいたのを見かけたがスルーした。

あの二人は呼んではいけない。そんな気がして……。

里に戻ると、祭の準備は結構進んでおり屋台も形だけは出来ていた。

「あやや、もしかしくなくても最近人里に住み始めたというお医者様、で良いですよね？」

診療所に向かって歩いていると、誰かに呼び止められる。

振り向くと、黒い髪 of 里では見ない服を着て、頭に変わった防止のようなものを乗せた少女がいた。

「合ってるけど……。ああ、天狗か、森近の言ってた」

「どうも、私はこの『文々。新聞』の記者をしています。射命丸文です」

そう言っ文は新聞を差し出してくる。

「……………あ、そう」

何かが壊れる音がした。きっと天狗へのイメージが粉々になったのだろう。

「いやー、最近はお方の噂で持ち切りですよ。紅魔館を落とし（恋愛的な意味で）、冥界に殴り込みに行き、更には博麗の巫女に喧嘩を吹っ掛ける。とても面白いです」

「褒めてるのが馬鹿にしてるのか……。馬鹿にしてるな、うん」

「さて、ここからが本題なのですが……」

その先に続いた言葉を聞いて、勇輝は苦笑いするしかなかった。

其の陸拾陸（前書き）

PVが50万を突破しました。皆様に感謝です。
(2011/11)

其の陸拾陸

「……勇輝、今にも死にそうな面してるけど何かあったのか？」

「……魔法の森の、瘴気………」

「あ、そういえば普通の人間だったな。忘れてたぜ。あれ？ でも死なないらしいから………」

魔理沙とアリスに連絡をしようとして森に入って数十分、魔力に体を蝕まれ苦しむ青年がいた。

「いやー、焦った焦った。何で能力使って無いんだ？」

「人体への使用を控えてんだよ。悪いと思ったなら定期的に里に来い」

魔理沙に引き摺られ、例のマジックアイテムを装着するまで苦しみ続けた事もあって、口調の割に勇輝の声に覇気はなかった。

「死ぬ気で私に会いに来るなんて……そんなに寂しかったのか？」

「こんな辺境で暮らす奴が何言ってるんだか……、ただの連絡だよ」

「チツ………」

「………近々、里で祭をやるんだ。それで、人外を十名以上参加

させないと八雲　紫が里の結界を解く。ここまでは良いか？」

「祭？　収穫祭は秋にやるもんだぜ？」

「ああ、夏祭りって幻想郷には無いのか。まあ、人と妖怪の仲を良好にするのが目的らしいから大した意味は無いと思うけど」

「祭、か……。宴会するのに態々なんで里の危機になってるんだ？」

「どうやら、幻想郷での祭と、これから行う祭には大きな差があるらしい。」

「収穫祭は秋に里が一体となって宴会でもしていたのだろう。」

「説明するとだな、屋台を並べたりちよっとした催し物をする。んで、人と妖怪の親睦を図る。それを、祭って名目でやるんだとさ」

「里の奴等は勇輝の言う事に何の疑問も持っていなかったが、紫が任せたのだからコイツには何をしたら良いのか分かっているのだろう。と丸投げだったに違いない。」

「……へー、つまり勇輝は私の事を人じゃない、と。そう言いたいのか？　流石に私でも堪忍袋の緒が切れそうになるんだが」

「違う、本題は今から話す。メインイベントだけど……弾幕ごっこだ」

「詳しく聞かせてくれ」

即座に答えた魔理沙の顔は、いつになく真剣だった。

「成程、了解したわ」

魔理沙からマジックアイテムを購入してから、適当に書かれた地図を貰い、数時間かけてアリスの家に辿り着いた。

反応は呆気ない物で、説明を終えると即座に了承して貰えた。

「何だ、意外と抵抗ないんだな」

「私は人里に出入りもするし、特に被害を出してないもの。私にまで敵対心を抱かれていたらスキマ妖怪はこんな提案はしないと思うし」

「ああ、そういえば何度か里で会ったな」

「まさか忘れていたの？」

「……気苦労が、多くてな」

「……………そう」

可愛そうな物を見るような目で見られた。

「って訳だ。じゃあ、暗くなる前に帰りたいからこれで」

「里まで送って行きましょうか？」

「お構いなく。少し練習も兼ねてるから」

「……………?」

翌日、勇輝は博麗神社へ。

「おい、コイツ鬼じゃなかったのか？　なんで神社に住み付いてんだよ」

「萃香の事？　あれは住み付いてるんじゃないく、ここなら日が当たるってお酒を飲みに来てるだけ」

「…………いや、神社だろ？」

「森の中よりは良いんじゃない？」

確かに森の中で飲むのはどうかと思うが…………。

「ん〜？　あれ、霊夢が男になった」

萃香と呼ばれた小さな鬼が勇輝を見ながらそんな事を言い出す。

「霊夢はあつちだ」

「ん？　…………おお、霊夢だ」

見た目幼女なのだが…………大丈夫なのだろうか？　瓢箪を傾け酒を飲み続ける鬼から視線を逸らし、霊夢に話し始める。

「前にも言った祭の話なんだけどさ」

「祭！？ 宴か！ 宴会か！」

「何なのお前！？ 飲んでるか黙って聞かどっちか選べよ！」

祭に反応した萃香に若干苛立ちながらも勇輝は話し始める。

「って訳でさ、霊夢はそっちの方でも頑張って欲しい」

「良いけど……。誰が参加するの？」

「レミリア、フラン、咲夜、魔理沙。こいつらは確定だと思う」

「……相当面倒なメンバーね」

「俺も出る事が決定してる。不本意にだけど」

「……勇輝さんが優勝したら良いじゃない。それで色々丸く収まるでしょ？」

「勝てる気がしない」

「……無理そうね」

能力を使えば互角にまで持ち込める可能性はあるが、後の反動が分からない今それは避けたい。

「分かったわ。たぶん萃香もついてくると思うけど……」

「それって大丈夫なのか？」

「悪さはしないですよ、お酒でも渡しとけば」

そんな事で良いのだろうか。

少し不安だったが、霊夢が見張ってくれるだろうと信じ、博麗神社を後にした。

翌日、冥界の白玉楼で。

「って訳なんだけど」

「……その屋台には、食べ物はあるのかしら？」

「半分ぐらいは食べ物屋台だと思うけど……」

「妖夢、すぐにお金を用意しなさい。里に行くわ」

「待て西行寺、祭は三日後だ」

「……………そうなの」

露骨に残念そうな顔をする幽々子。春風異変の時のカリスマ性は微塵も見られない。

「そういえば、八雲 紫とは知り合いつて言ってたけど、あの人普

段は何してるんだ？」

「ここに来て一緒にお茶を飲んだり、お菓子を食べたり……」

「大変そうだな、妖夢が」

「あの子が大変なの？」

「……いや、何でもない」

苦労しているだろう妖夢に目を向けると、目を細めどこか遠くを見ていた。

其の陸拾漆

祭の日は訪れた。

里にはいつもの倍以上の活気があり、行き交う人々は皆楽しそうにしている。

一方で、稗田家の前に特設されたテント。そこには浮かない顔をした勇輝と霖之助の姿があった。

二人の前のテーブルには、欄が作られた一枚の紙が。

「……森近、俺はコイツらを相手に正気を保っていられるのかな」

「……スマン。俺の口からは言えん」

その紙には……。

博麗 霊夢

霧雨 魔理沙

レミリア・スカーレット

フランドール・スカーレット

パチュリー・ノーレッジ

十六夜 咲夜

紅 美鈴

チルノ

アリス・マーガトロイド

伊吹 萃香

西行寺 幽々子

魂魄 妖夢

風見 幽香

橙

八雲 藍

……何を間違えたらこうなってしまうのだろう。

そして、主催者は勇輝という事になっているのだがこの弾幕ごっこ大会、ルールも組み合わせの決め方も勇輝は知らない。

全て、射命丸によって決められる事になったのだ。

フェアじゃない、不公平だ。そんな理由をつけられ、勝手に審判や司会を手配してしまったあの天狗は何を考えているのだろうか。そんな事を考えながら、勇輝は参加受付のリストをもう一度見る。

殆ど全員が知った顔、その大半とは一度は弾幕を撃ち合った。

ただ、一人だけ種族も能力も、その力量がどれ程のモノなのか分からない奴がいるが。

こうして考えると有利な事に変わりないのだが、今の自分……桜井勇輝の力のみで渡り合える可能性は低い。

能力に頼り、力を上げた状態で互角。だが、この能力の全てを把握できていない今はやはり使いたくは無い。

少ない霊力、乏しい身体能力、多少狡賢い頭脳。これらでどこまで

行けるのだろうか。

「……さて」

「どうした？」

溜息を吐いた勇輝に霖之助が声を掛ける。

「いや、男なら腹を括ろうと思ってな」

それだけ言つと、勇輝はリストに、自分の名を書き記した。

「さあやって参りました！ 妖怪だらけの弾幕大戦。司会は私、天狗の射命丸が務めさせていただきます」

祭一日目、正午。昼食を取らせても貰えないまま弾幕大戦とやらが開かれる。

竹で作られた二重の囲いの中、参加者が一堂に会している。

囲いは半径三十メートル程の円形で、高さは二メートル程。そこから更に五メートル離れた場所に観客とリングの仕切となる柵が作られていた。

殆どが空中戦の弾幕ごっこで、この柵の高さでは意味を成さないが恐らくルールに関係してくるのだろう。

「ルールは簡単、この柵の中でスペルカードルールでの決闘を行っ

て頂きます。ですが、ヒット判定は私を含めた三名の審判で行います。勿論、弾幕以外でもそれが攻撃であればヒットであり、自爆はヒットになりません。審判が一人でも判定を出したらヒットです」

つまり、審判の言う通り。で勝ち負けが決まる。

「肝心のスペルカードの枚数は十枚！ 持ち機は三！ それと、相手に直接能力を使用する、明らかに死人が出る弾幕の使用、これらは反則行為として即失格になるのでお気をつけ下さい」

意外と簡単なルールに勇輝は拍子抜けする。そんな時、霊夢が手を上げ質問した。

「柵の中つて事は、高さに制限はあるの？」

「あやや、失礼しました。人間の肉眼で見える程度なら大丈夫です」

アバウトな答えに霊夢は眉を顰める。

所で、日傘を差している者が三人、炎天下でフラフラしている魔法使いが一人、溶けそうな妖精が一匹いるのだが大丈夫なのだろうか？

「えー、本日は八試合行う予定なのでさっさと行きます。組み合わせですが……」

第一試合	霧雨	魔理沙	V S	チルノ
第二試合	十六夜	咲夜	V S	魂魄 妖夢
第三試合	桜井	勇輝	V S	伊吹 萃香
第四試合	紅	美鈴	V S	風見 幽香

第五試合 博麗 霊夢 VS パチュリー・ノーレッジ
第六試合 橙 VS 八雲 藍
第七試合 西行寺 幽々子 VS アリス・マーガトロイド
第八試合 レミリア・スカーレット VS フランドール・スカーレット

……悪意を感じる組み合わせである。

第六、第八試合など普通の感性をしている者が組む筈もない。

「では、審判の紹介ですが……」

射命丸が観客の方に向かって手招きをする。すると、人込みを掻き分けて霖之助と、もう一人小柄な少女が出て来た。

「香霖堂店主、森近 霖之助さんと稗田家当主、稗田 阿求さんです」

……あの天狗は何をしてんだ。よりもよって一番権力のある家の子を選ぶなんて。

「それと、BGMをその幽霊楽団に担当して貰いますが大して取り上げる事でも無いので省略します」

射命丸が指差す方向には暴れるメルランを抑えるルナサとリリカの姿が。紹介のされかたに文句でもあるのだらう。

射命丸含む審判たちは、無駄に頑丈そうに作られた四畳程の小屋に入り、射命丸が叫ぶ。

「では、一試合目の選手以外は観客席に入ってください！」

魔理沙とチルノだけを残し、他の面子は一つだけ作られた出入口から出ていく。

ふと、勇輝は魔理沙と視線が合った。

「――」

魔理沙が何かを言うが、それは勇輝には聞こえない。

しかし、口の動きで大体の事が勇輝には分かっていた。魔理沙はこう言ったのだ。

必ず勝つ、だからお前も先に進めよ。と。

其の陸拾捌

「一回戦がお前とはついてるぜ。これなら三分で終わる」

魔理沙がチルノに挑発的な言葉をかける。

「三分で負けるのはお前でしょー。あたいはさいきょーだから、手加減してあげる」

まるで去年の事を覚えていないチルノを見て、魔理沙は苦笑いする。

紅魔館に向かう途中で撃墜された事を。

射命丸が声を上げ、宣言した。

「それでは、試合開始！」

「恋符『マスタースパーク』！」

魔理沙が開始と同時に魔砲を放つ。

「おおっと、魔理沙選手。不意打ちのスペルカード攻撃だーっ！
コレは酷い、汚い。流石魔理沙選手！」

射命丸の声など届いていないかのように観客は啞然とし、魔理沙の魔砲を見る。

彼等の認識する弾幕ごっこは、こんな不意打ち紛いのスペルカードをいきなり放つ様なモノでは無かったのかもしれない。

「ふふん。弾幕なんてあたいには効かないもんね！」

魔理沙の魔砲は、避けられた訳でも弾かれた訳でも無いのにチルノには届かない。

本来、妖精は人間よりも脆弱。取り柄と言えば何度でもそこに自然がある限り蘇る事。

だが、チルノには“冷気を操る程度の能力”という物がある。

凍り付き、氷柱と化した魔砲をチルノは砕く。

霊力とは凍るものなのか、以前チルノに勝負を仕掛けられた時にそう思った勇輝だが、凍ってしまうのだから仕方ない。

いきなりスペルカードを一枚消費してしまった魔理沙。だが、魔理沙は笑っている。

「やつぱり、今までのままじゃ駄目か……。なら、少し本気を出してやるぜ」

箒に又借り、魔理沙は上空へ。チルノはスペルカードを。

「あたいのスペカを見せてやる！ 凍符『パーフェクトフリーズ』！」

チルノが大量の弾をばら撒き、上空を埋め尽くす。しかし……。

「……【反則】」

阿求が紙を掲げ、チルノに反則を取った。

「おっとチルノ選手、弾幕が柵の範囲外に出てますね。減点です、残り二機ですね」

「ほえ？」

あの？（バカ）はルールを理解していなかったらしい。

決闘は柵の中で、当然弾幕もその中から出てはいけない。

「つーか、何で稗田は口に出して言わねーの？」

「……………【大きな声が、出せない】」

人の呟いた声は聞こえるらしい。

勇輝の後ろでは、「ああ稗田様、あんな楽しそうに……………」と何処かの婆さんが手を合わせていた。やはり幻想郷に常識人は居ないのだろうか。

そんなチルノの反則等は些細な事で、弾幕ごっこは続いて行く。

上空に展開されたチルノの弾幕は凍り付いたかのようにその動きを止める。

「これでチェックメイト！」

チェックメイトと言いたいのだろう。言えないなら言わなければ良

いのに。

そんなチルノが続けざまに、魔理沙に向けて大量の弾を放つ。

しかし、魔理沙に小細工など通用しない。

「弹幕はパワーだぜ。恋心『ダブルスパーク』！」

魔理沙の背後に現れた二つの魔法陣から二本の魔砲が地上に向けられ、放たれた。

チルノの展開した弹幕が動き出そうとするが、魔砲によって掻き消され、飲み込まれていく。

「うつ……、ならもう一度っ！」

チルノは再び魔砲の“一つ”を氷柱へと変える。

「ばーか、今度は二つだ」

魔理沙の声がチルノに届くと同時、チルノは魔砲に飲み込まれた。

地面が魔砲によって碎け、砂煙が舞った。

勇輝は目を逸らす。かつてアレを受けた身として、アレを凝視するのは辛い。

「おおっと！ 魔理沙選手の攻撃が文句なしにヒットオオ！ チルノ選手、耐えられるか？」

砂煙が晴れ、チルノの姿が見えてくる。

目を回しふらふらしているが、まだダウンしてはいない様だった。

「それで終わりだと思ったたら大間違いだぜ？」

チルノの背後の砂煙の中から、箒を振り被った魔理沙の姿が現れる。そのまま箒を野球のバットの様にフルスイングし、チルノを打ち上げた。

「……ヒットだ」

霖之助がヒットの判定を出す。これで、チルノの残機はゼロ。

魔理沙がガッツポーズをすると、観客席から歓声が上がった。

「えー、尺が押していますので早速次に移ります。十六夜 咲夜選手、魂魄 妖夢選手、リングに入ってくださいーい」

初日は試合数が多い。このペースでいかないと終わらないのだろう。

咲夜が柵の中に入って行く。……別に上手い事考えたつもりは無い。

しかし、妖夢の姿が無い。勇輝は辺りを見渡すが、人が多い事もある。妖夢を探し出す事は出来なかった。

「あれ？ 妖夢選手、いませんかー？」

射命丸が飛び上がり、上空から見渡そうとする。

「……居ないですね。不戦敗になっちゃいますよー？」

「……あの馬鹿、まさか」

「幽々子様！ 私の出番、二回戦なんですから急いでください！」

「でも妖夢、あのお店のお菓子を食べていないわ」

「明日にして下さいよ！ 大体、幽々様が出場するように言ったんじゃないですか！」

「んー。でも私は紫に参加するように言われたのよね」

「巻き込んだだけ！？」

食べ物の入った紙袋を抱える幽々子を引き摺りながら、妖夢は会場へと走る。

「……遅れ、ました」

息も途切れ途切れに、妖夢はリングに駆け込む。

「……では、妖夢選手は遅れやがりましたので一機減点からスター

トです。試合開始ッ！」

無慈悲な宣告と試合開始の宣言が射命丸から下された。

妖夢の切り替えは速く、直ぐに刀の一振りを抜刀し構える。

咲夜は曲芸のように何処からかナイフを取り出し、投擲の構えを見せる。

しかし、お互いにその場から動こうとはしない。

魔理沙とチルノの時とは違った空気の対決に、会場は静まり返っていた。

ヒュンツと風を切る音が鳴る。咲夜がナイフを投擲したのだ。

妖夢がそれを見逃さない動作で叩き落とす。投擲武器の相手はとつくに経験している、そう言っているかのような、自身のある表情をしていた。

「甘いわよ」

上から聞こえた声に、妖夢はハッとなって見上げる。

「奇術『エターナルミーク』」

空から降り注ぐ無数の弾幕。

ナイフ型と、円形の弾が入り乱れていて、回避するには範囲が広すぎる。

妖夢はもう一振りの刀も抜刀し、弾幕を切り裂いていく。

しかし、咄嗟に反応したとはいえ体勢も悪い。

妖夢の頬をナイフ型の弾が掠めた。

「ヒットオ！ 咲夜選手の攻撃が妖夢選手に当たりました！ 勿論本来はスルーの範囲ですが時間の都合上ヒットですね」

射命丸の残念な実況により妖夢の機数が減った事が告げられる。

「うつ……なら！」

妖夢は弾幕を切り裂くと同時に自らも鋭く尖った弾幕を放つ。

ナイフ型とは相殺し合い、円形の弾を切り裂き咲夜へと弾幕は迫る。

「っ！」

咲夜は身体を捻り、妖夢の弾幕の範囲から離脱する。

その足が地面に着くかと思われた時だ、妖夢は思い切り地面を蹴り咲夜に接近する。

「はあっ！！」

妖夢は刀の鞘で咲夜に突きを放つ。

だが、既にそこに咲夜の姿は無かった。

「惜しかったわね」

後ろから聞こえた声に、妖夢は鞘を振り向きざまに薙ぐ。

しかしそれは空振りに終わり、空を切る音だけが虚しく響いた。

そこに居た筈なのに居ない。いつの間にか消え、見当違いの場所から現れる。

「能力……」

妖夢がそう呟く。

妖夢にも能力はあるが、それは“剣術を扱う程度の能力”というモノで、応用が出来る様なモノでもこれといって目に見えた変化も分らない能力。

対する咲夜は“時間を操る程度の能力”。勇輝曰く、弾幕ごっこでは反則的にその効果を発揮するもう弾幕を作るために生まれた能力。その、弾幕ごっこに措いての使い方と言えば……。

「なっ……！？」

一瞬で妖夢の視界を埋め尽くす程に現れた弾幕に、それを見る者全員が息を飲んだ。

そして……。

「勝者、十六夜 咲夜選手！！」

妖夢は敗北し、咲夜は次の戦いへと歩を進めた。

其の陸拾捌（後書き）

長くしないと20話で章が終わらないので増量中です。

ダラダラと戦闘パートが続くでしょう。

其の陸拾仇

次は第三回戦、風見 幽香と美鈴の戦いになったのだが……。

「情けない」

「教育しておきます」

と、紅魔館メンバーの機嫌を見れば分かる通り瞬殺であった。

風見 幽香という妖怪は、能力もこれといって変わった弹幕を使った訳でも無く、ただ力押しで美鈴を撃ち破った。

勿論、美鈴が弱かった訳ではない。

紅魔館は幻想郷の中でも選りすぐりの強者が多いために目立たないだけで、単純な身体能力なら咲夜を上回る。

が、風見 幽香は強すぎた。

「つか、勝ち抜いてもアイツと当たるのか……負けようかな」

勇輝は溜息を吐く。

「では第四回戦、桜井 勇輝選手対伊吹 萃香選手、入場してください」

場の凍った空気を何とかしようと、射命丸が次の試合を催促する。

里の人達は萃香を見て、「あれ？ 鬼？ でも小さいし、居る筈もないか」なんて事を言っている。

一方で寺子屋の子供や見知った患者等は勇輝が近くを通った際に応援の言葉をかける。

ここで手を抜けば、恥晒しにも程があるじゃないか。

「んー、行き成り私が相手なんてついてないねー」

「手は抜いてくれよ？ 俺は一応人間なんだから」

「何言ってるのさ」

その小さな体から漏れるのは、レミリアにも勝る程の妖力の片鱗。

「喧嘩で手を抜くのは、鬼の礼儀に反する」

いつもの酔った口調ではない萃香。その威圧感は正に大妖怪のソレだ。

「では、試合開始ッ！」

射命丸の声と共に、勇輝は一度距離を取る。

リングは半径三十メートルの円。最大で六十メートルの距離を置けるが、それは相手がリング端に居る場合。

大体のお互いの距離は四十メートル、弾幕ごっこをするには少し狭い程度。

萃香はまだ動かない。いや……動こうとしていない。

「来なよ、先手は譲ってあげるからさ」

その挑発的とも取れる余裕な態度、それは鬼としての性分なのだろうか。

「なら、お言葉に甘えて」

確認しておくが、今の勇輝は霊力も、身体能力も、常人とそれ程大きな差は無い。

むしろ、身体能力に関しては里の同年代の男性に及ばない程度。

そんな状態で、何故この試合に臨むような事をしたのか。

「……………」

萃香が不思議そうに勇輝の挙動を見つめる。

勇輝は弾幕を展開している訳でも、スペルカードを取り出そうとしてもいない。

ただ、そこに立っている。一部を除く観客にはそう見えた。

それは萃香にも同じで、勇輝が何か仕掛けている様には見えない。

「さて……………」

勇輝が靈力で刀を作り出す。勿論それに切れ味など微塵も無い。

萃香は身構えるが、次の瞬間には目を丸くして硬直してしまった。

勇輝が、まばたきをするにも短い時間で目の前まで移動しているのだ。

勇輝の刀による突きが萃香の小さな体を吹き飛ばす。

萃香は空中で一回転し、体制を整え着地する。

しかし、勇輝は既にその後ろに回り込んでいた。

二撃目が入る。そう勇輝は思ったが、萃香の姿は霧散するように消え、数瞬間を置いて勇輝から三十メートル程離れた所に姿を現す。

「……………ひ、ヒット！ 勇輝選手、目にも止まらぬスピードで萃香選手から一機？ぎ取りましたーッ！」

射命丸が少し遅れて宣言する。静まり返っていた観客も思い出したかの様に歓声を上げた。

「成程ね、靈力を纏って無理矢理身体を動かしてるのか。一撃目は反応出来なかったよ」

「俺の靈力じゃ放出量は限られてくるけど、纏うだけなら一定量の靈力の消費だけで済む。スペルカードだって何枚も使えないんだ、これぐらいの考えはあって当然だろ？ そっちこそ、厄介そうな能力じゃんか、もうコイツで殴れる気がしない」

「密度を操る程度の能力」、それが私の能力だよ。だから……」

勇輝が纏っていた霊力は霧散してしまう。

「もう、その手は使わせない」

「それは、恐ろしい能力で……」

暑さによるものとは違った汗が勇輝の頬を伝う。

ここ数週間、試行錯誤を繰り返した戦闘方法が全く意味を成さなくなってしまったのだ。焦るのも当然。

「じゃあ、次は私の番だね。鬼気『濛々迷霧』」

萃香は圧倒的な量の妖力で自身を囲う。そして……。

「嘘だろオイ……」

そのまま浮遊し、弾幕を撒き散らしながら勇輝へと向かっていく。

それも結構なスピード、競輪選手が乗る自転車程。

しかし、勇輝の回避スキルはこれまでの経験からかなりのモノとなっている。

身を捻って萃香を避け、距離を取ろうと走る。

萃香は此方が見えているのか、急停止した後に勇輝に向かい再度突進を開始する。

何より困るのは未だに漂い続ける撒き散らされた弾幕。これが勇輝の動きを制限していくのだ。

「鬼って割には随分といやらしいスペルカードな事で……」

悪態を吐きながらも、勇輝は足を動かす事を止めない。

しかし、魔理沙の様に強力かつ広範囲に影響するスペルカードなんて、有るには有るが今の霊力で使える筈もない。

仕方ない、ここはもう一つの成果を早々だが見せる事にしよう。

「弾幕が三秒以上空中で停止し続けるのは、欠陥である」

勇輝の呟いた言葉に、試合を見ている者達は何を言い出すのかと首を傾げる。

弾幕に持続性があるものなど珍しくも無い、極当然の弾幕なのだ。それが欠陥である等と、何を言っているのか。

しかし。

「これはどういう事でしょうか！ 萃香選手の弾幕が次々と消えています……！」

萃香の弾幕は消え始めている。

修正したのは世界の法則、自然の理ととれる何か。

勇輝の“欠陥を修正する程度 of 能力”、これは己の価値観が大きく影響している。

だから、それが欠陥だと思い込んでしまえば、それは能力で修正出来る対象となってしまう。

声に出したのは自己暗示のため。そして勇輝は続ける。

「密度が変化する事は、欠陥である」

能力封じ。これは誰に対しても有効であり、それはもはや世界の理への反逆とも取れる行為。

世界のルールすら変えかねない能力。何故こんなモノが勇輝に宿っていたのか。

しかし、その暗示には絶大な集中力が必要となる。

「貰った！」

妖力を纏ったままの萃香が勇輝の背後を狙って突撃する。

「……………『撃墜』」

阿求のジャッジにより、勇輝の持ち機が一つ減る。

能力を封じた代償は、小さくは無いうだ。

「ゴフッ……………」

勇輝の口から漏れたのは血。いくら能力が強大であっても、その身体は普通の人間だ。

萃香はスペルカードの効果が切れたのか、その姿を露わにしている。

「あれ、ホントに能力が使えないや」

自分の手のひらをまじまじと見つめ、そう声を漏らす萃香。

「これで、こっちの攻撃は当たる。って言っても体力なんて殆ど残ってないんだけど」

勇輝は霊力を纏い直す。

後は気力と集中力と、スペルカードの精度次第だ。

萃香が身構える。

勇輝はスペルカードを取り出し、その符の名前を読み上げる。

「騙討『プライドは捨てました』」

勇輝はあろう事かスペルカードを発動させる事無く札を放り投げ、萃香に接近。

呆気にとられ、反応が遅れた萃香に足払いを掛け、そのまま格闘ゲームのコンボでも決めているかの様に身体を回転させ蹴り飛ばす。

射命丸の説明から考えて……。

「これはツーヒットです！！ 勇輝選手、一瞬で二度の攻撃を当て、勝利を？ぎ取りましたーッ！！ しかしコレは狡い汚いえげつない！ しかし時間の都合上、またルール上の違反を犯していないため勝利となります。次やったら失格ですけどね」

勝利したのに歓声も沸かず、冷めた……いや、汚いモノを見る様な目で見られる。

「勇輝せんせーってきたねー大人だよなー」

「私、ちょっとカッコいいと思ってたけどもう二度と思わない」

寺子屋の子供達のそんな呟きが、勇輝の心を抉っていた。

其の陸拾仇（後書き）

勝てる要素が無かったとはいえ、これはやり過ぎですね。

法則の変更、となりますので一日で戻るタイプです。……チートは好きじゃないんですけどね。

其の漆拾

「さて、試合も半数を消化しました！ 第五試合は博麗 霊夢選手
対パチュリー・ノーレッジ選手。あと、この試合のみ桜井 勇輝殿
によるドクターストップが設けられています」

……自身が怪我しているのに試合を止めると言うらしい、あの天狗
は。

試合を放棄した慧音に肩を借りながら射命丸を睨む。

「では、試合開始ッ！」

結果、パチュリーが一枚目のスペルカードを使用した時点で勇輝か
らのドクターストップ。試合は霊夢が不戦勝に近い形で勝利。

第六回戦、橙と藍の試合は藍が辛そうな表情をしながらも橙に弾を
掠らせ勝利。

第七試合、アリスと幽々子の勝負は幽々子が勝利。特筆する様な事
は無かった。

ここで申し訳ないのだが、勇輝の能力によって滞空を続ける弾幕は
殆ど使い物にならない。アリスが恨めしそうな目で見ていたのはそ
のせいだと思う。

そして、日も暮れ始めた頃。

「フランと戦うのは、いつ以来だったかしら」

里の人達も、紫がここに結界を張っている。という事で大抵の人間はここに留まっていた。

それでも、小さな子供や夕食の支度をする者、屋台を見る者は席を外して行ったが。

例え恐ろしい吸血鬼と言っても、実際にその目で力を見た者は里にいない。

好奇心に抗えなかった者が、今、ここに留まりその真価を見ようとしている。

「お姉様、悪いけど今日はフランが勝つよ」

「……少し、姉としての威厳を示さなければいけないようね」

一触即発の雰囲気、射命丸は満足そうな顔をして。

「試合、開始ッ！」

その宣言からコンマ数秒。

「禁忌『レーヴァテイン』！」

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

紅い剣と槍がぶつかり合い、突風を巻き起こす。

どちらのスペルカードも経験している勇輝は苦笑いをする事しかできない。

むしろ、自分が見ていたモノより数段威力が上がっている様にも見える。

妖怪は月日と共に妖力が増していくと聞いたが、数ヶ月で変わるようなものなのだろうか。

深紅の槍がフランを襲い、深紅の剣がレミリアを襲う。

誰もが息をするのも忘れ、決闘を見つめる。

「フラン。まずは一撃、入れさせて貰うわね」

レミリアが飛び上がって距離を取り、グングニルを投擲する。

フランはそれが何処に落ちるか分かっていたように自然な動作で横に逸れてかわし、レーヴァティンを一薙ぎしてから声を出す。

「そんなのフランには当たらないよ。お姉様って勝つ気ある？」

レミリアはピクツと眉を動かすが、そこは抑えて話し始める。

「私のグングニルの本質はその速さと殺傷力。けど、そのチャンスが一度しかない事が唯一の欠点」

レミリアの後ろにいくつもの深紅の魔法陣が現れる。

「知ってる？ 数に勝る暴力は存在しないのよ」

次の瞬間、地面が広範囲に渡って弾け飛んだ。

轟音と砂煙。リングの外からはその二つしか確認する事は出来ない。

「勇輝、お前本当にアレに混ざって暮らしていたのか……？」

「不本意ながら。半年経つ前には既に妹の方と定期的に弾幕ごっこをしてましたね」

「……お前、本当に人間か」

「霊夢が人間であるなら、俺も人間だと思います」

そんな事を勇輝と慧音が言っている間にも、轟音は鳴り続ける。

射命丸もヒットを取って良いのか、そもそも当たっているのかも分からないので戸惑っている。

そんな時、音がピタリと鳴り止んだ。

「……駄目ね。自分で投げてない分、やっぱり一つ一つのスピードが三分の二まで落ちてしまってる。これじゃあ欠点を克服したとは言えないわね。勇輝の様に精密に動かせれば違ってくるんでしょっけど」

里の人達は「いやいや、十分に恐ろしい殺戮用スペルカードです」
みたな表情をしていたが、レミリアは本当にそう思っている様で溜息を吐く。

刹那、煙の中から紅い剣がレミリアを切り伏せようと振るわれる。

レミリアは当然避けた。そして、煙の中から無傷のフランが飛び出してくる。

「お姉様、やっぱり弱くなったんじゃない？　だってあんなの、数が多くたってフランに当たる訳無いもん」

「……少し、口の利き方から教育し直す必要がありそうね」

レミリアの顔には影がかかり、その肩はふるふると震えている。

まるで小さな子供が癇癪を起すのを必死に堪えているような、そんな反応だ。

「そんなんだからお姉様は、お兄様の前で猫じゃらしを前にした猫みたいに尻尾振ってるのが周りに丸分かりになるんだよ」

プツンと、聞こえる筈のない音が聞こえた気がした。

「ふふつ。ふふふふ。面白い事を言うわねフラン。ちょっとグングニルを避けただけでこんなに調子に乗って……。私も子供じゃないから大目に見ようとは思っていたけれど、そんな事はフランには必要なかったみたいね」

「うん。だってお姉様の方が子供っぽい」

レミリアから凄まじい妖力が溢れ出す。

「魔符『全世界ナイトメア』！！」

レミリアを中心に、空は紅で覆われた。

圧倒的な量の弾幕がフランに、地面に降り注いでいく。

「あ、怒った？ ……じゃあ、フランもやるね」

フランは雨の様な弾幕を見据え、回避は不可能と判断した。

「禁忌『禁じられた遊び』！」

四つの刃を持つ手裏剣の様な弾がいくつも現れる。

一つ一つが大人よりも大きく、近づいたら胴体を分断されてしまい
そんな雰囲気があるソレは、弾幕の雨を弾きながらレミリアに向か
っていく。

フランの服が少し裂けた。

レミリアの髪が数本舞った。

フランの足に切り傷が走った。

レミリアの頬が薄く裂けた。

「……………はっ！ まさに接戦！ お互いに譲らぬ一進一退の戦い
です！」

射命丸が思い出したかのように実況を開始する。

他の者達、いや、ここにいる全ての者が勝負に見入っていたのか、射命丸の声に弾かれた様にざわざわと騒ぎ始める。

聞こえて来るのは称賛、畏敬、そして種族等関係なしにした評価の言葉。

「……んだよ、人が治療してる時は文句しか言っていなかった奴等が今更さ」

思わず勇輝はそう呟いてしまう。

恐れていたのは、知らなかったから。

幻想郷の伝承が書き記されている『幻想郷縁起』に記される吸血鬼は、かつての戦争とも呼べる戦いのモノ。

誰も、本来の姿など知りはしなかった。

羽がある、血を吸う。それがどうしたと言うのだ。レミリアもフランも、少なくとも勇輝が幻想郷に来てからは人を殺していない。

何が危険なのか、どこが危害を与えていると言うのか。

尤も、吸血については勇輝が一人で請け負っているからだが。

五百年を生きた吸血鬼。だが、見た目も精神も子供のソレと大して変りない。何故恐れる必要があるのか。

それはきつと変化を求めなかった代償。里に最低限の安全を、交流を。

だからこそその無知、そして定着していった偏見。

鎖国をした日本が世界の変化についていけなかった様に、里も妖怪と敵対した時間のまま止まってしまっていた。……いや、小さな変化に気づこうとしなかった。

だから、ここから変わる。

人は、切っ掛けさえあれば大抵の事は可能とってしまうのだから。

「勝者、レミリア選手！」

そして、試合も決着を迎える。

澄んだ空は月が上り、星がその存在を主張している。

が、空は割れた。否、スキマが現れ、そこから一人の妖怪が現れる。

「高い所から失礼しますが、皆様お見事でしたわ。顔見知りが多いけれど自己紹介を、幻想郷の立案者にして実現者。八雲 紫と言う者ですわ」

胡散臭い口調で現れた紫に、人々は驚き戸惑う……一部は呆れていたが。

「里の皆さん。この催し物、楽しんでいた様で何よりです。そこで急なお話になってしまいましたがお伝えしておきたい事があります」

わざとらしく間を開けてから。紫は澄んだ声で宣言する。

「その桜井 勇輝を、里の代表者兼纏め役として任命いたします。
異議は受け付けませんわ」

其の漆拾壺

「賢者様、それは一体どういう事で……」

村でも力のあつた老人が恐る恐る紫に尋ねる。

「貴方達は感じませんか？ まさに今、幻想郷はその形を変えようとしていますわ」

この場には人と妖怪が争う事無く集まっている。

確かに今までの里の様子を見ていた者からしたら信じられない事なのだろう。

「その変化に、これからの幻想郷の在り方についていくには、強く、賢い交渉役が必要になるのは一目瞭然。それを兼ね備え、更に多くの力を持つ者とラインを持っている。彼以上の適任者はいないと思うのですけれど……」

「ちょっと待ちなさい」

紫が語り終えた所で霊夢が反意を明らかに話し始める。

「勇輝さんは幻想郷に来て長くない。それに、アンタの顔は今の里の在り方が気に入らないって言ってる」

霊夢の言葉に里の人々はざわめき立つ。

「紫様、少しお話が」

藍が真剣な表情で紫に耳打ちする。

「……そうね。私とした事が、何を焦っているのか」

紫は肩を落とし、溜息を吐く。

「今の話し、聞かなかった事にして貰いましょう」

紫がそれだけ言つと、回りから自分は今何をしていた？ 何故賢者様があそこに？ という声が。

「……えげつない事しますね」

恐らくは一部を除く者の記憶を消した。勇輝は紫の話を知っているし、霊夢やレミリアは紫を睨み付けている。

「さて、残り二日のこの祭、存分に楽しめるよう祈ってますわ」

それだけ言つて、紫は藍と橙を連れスキマの中に消えていく。

それを見て、勇輝は呟いた。

「人と妖怪の共生する世界、か……」

それは、きっと叶わない幻想なのだろう。

二日目、朝。

「……暑いし、診療所に帰りたいんだけど」

「あら、エスコートしてくれるのではなかったの？」

紅魔館一行、と言ってもレミリアとフラン、咲夜だけが三人を案内するために勇輝は朝から駆り出されていた。

最初、霊夢をストッパーとして付ける予定だったが、昨日の勇輝の実力と、レミリアやフランの態度を見てこのメンバーでの行動が許された。

他、魔理沙はアリスと屋台巡り、妖夢は幽々子の付き添いで、幽々子は屋台で食べ歩き。霊夢は萃香と酒盛り。……酒を屋台に出す事を聞いた覚えは無いのだが。

プリズムリバー三姉妹は例の場所で演奏中、客足は少な……そこまですくないらしい。

パチュリーは美鈴を連れて帰った。何でも教育をするらしい。チルノも避暑のため霧の湖に帰還した。

「あれは何？」

レミリアが一つの屋台を指差して勇輝に尋ねる。

「えっと、確か射的屋だな。……現代とは大違いだ」

ここでの射的は、猟銃で的を撃ち抜き得点に応じた賞品を。というものだ。

……子供がやっているのを見た時は本当に頭が痛くなった。片頭痛に罹る勢いで。

「面白そうじゃない、やってみましょ」

「おい、走るなって」

走るなら日傘を自分で持つてからにして欲しい。それより、飯にも五百年生きているのならもう少し落ち着いて行動をして欲しい。

そして、今日はやけにフランが大人しい。何かあったのだろうか、そう聞いたらレミリアのせいだと言われた。……まあ、大体予想は着く。

猟銃は重い。そして反動が意外とある。……とりあえず子供にやらせるのは止めてほしい。

「……………この屋台、潰しても構わないかしら」

「的が見えないなら台に乗れ、騒ぎだけは起こさないでくれ」

一方、魔理沙とアリスはと言うと。

「その婆さん。ちよつと見ていかないか？ 里では手に入らないマジックアイテムだぜ」

そんな事を言いながらガラクタにも見えるマジックアイテムを売る

うとする魔理沙に、アリスは頭を抱える。

勿論許可など取っていないし、そもそもアリスは普通に祭を楽しむ予定だった。

「これはここを押すと……あれ？」

実況販売でもしようとしたのか、魔理沙がマジックアイテムの説明をしようとしている。しかし反応しない。

「……他の人と回れば良かったかしら」

そんなアリスの呟きは魔理沙に聞こえる事は無い。

「妖夢、次はアレが食べたいわ」

「幽々子様、あの店は昨日寄ったじゃないですか」

「でも、美味しかったのよ？」

「……ハア、分かりました」

妖夢は屋台の方に歩いて行き、商品を買って幽々子の元に戻る。

「どうぞ、幽々子様」

「……………」

しかし、幽々子は菓子の入った袋をじっと見つめて黙り込む。

そして、菓子を一つ取り出し渋ったような声で。

「妖夢、お礼に一つ食べていいわ」

「買って来たのもお金を出したのも私なんですけど」

と言いつつも妖夢は菓子を受け取る。それに満足したのか、幽々子は自分の分の菓子を取り出し食べ始める。

「という訳でやって来ました。第九回戦。魔砲使い、霧雨 魔理沙 選手対、パツ……悪魔の従者、十六夜 咲夜選手の戦いです」

何の脈絡も無く射命丸の実況が開始される。

現在時刻は午後三時といった所。各々昼食を終えるなり屋台巡りをし、一息つく時間帯だ。

人足は昨日よりも多く、普通に立っていたのでは試合が見えない。

「それで、私達の所に来たの」

「こんなパラソル用意して来る辺りは流石だと思う。常識人には考えられない」

紅魔館の皆さんは常識外れの様でした。昨日からだが。

「レミリアはどっちが勝つと思う？」

「咲夜に決まってるじゃない」

即答かよ、と声には出さないが呆れる。

「それはどうかしらね」

後ろから聞こえたレミリアでもフランでも無い声に勇輝は振り向く。

「アリス？ 何でここに」

「人が少ないから」

考える事は同じらしい。

「それで、魔理沙は何か秘策でもあるのか？」

「無いわ。けどね、ここ何日もずっと私や霊夢と弹幕ごっこの練習をしていたし、珍しくアドバイスまでして貰っていたわ」

「それだけでウチの咲夜に勝てるっても？」

レミリアは眉を顰めてアリスに問う。

「可能性は、十分にあるわよ」

咲夜は一度魔理沙に圧勝しているし、それは二人とも承知している。なのに何故アリスはこうも魔理沙を買っているのか、それがレミリ

アには理解できない。

だが、アリスは言い切った。何故なら……。

「だって、私じゃもう魔理沙に太刀打ち出来ないんだもの」

「リベンジ戦か、燃える展開だぜ」

「そう。でも、今日はお嬢様の前だから勝ち譲ってあげられないの。ごめんなさいね」

「勝利は奪い取るものだぜ」

「貴女が奪うのは図書館の本でしょう？」

「アレは借りてるだけだ、私が死ぬまでの間」

「それを奪っていると言わなくて何と言うのよ」

「固い事言つなよ、私の方が先に逝くのは目に見えてるだろ」

「そういえば、貴女はまだ人間だったわね」

そこで、会話が途切れる。

射命丸が二人を交互に見てから息を吸い込み、大きな声で宣言する。

「では、試合開始ッ!!」

其の漆拾貳

最初に動いたのは、以外にも咲夜の方だった。

小手調べ、といったように四本のナイフが魔理沙に迫る。

魔理沙は既に筭に跨っており、持ち前の速さでそれを避ける。

次の瞬間には魔理沙を囲う様に展開された弾幕の輪が。

「咲夜選手、いきなり能力を使用しての弾幕だーッ！」

勇輝はチラリとアリスの方を見る。

しかしアリスの表情に焦りは無く、余裕すらあるように思えた。

「それはもう見飽きてるぜ」

魔理沙は魔砲でナイフを消し飛ばす事も、スペルカードで反撃する事もしない。

淡々とナイフを避け、空中を舞う。

「成程、少しは考えてるのね」

じゃあこれはどう？ と咲夜が次の攻撃に移る。

そして、魔理沙を三百六十度、前後左右上下を取り巻く弾幕が現れた。

これは避けられない。

「そいつは無理だ。けど突破口が無いなら作るだけだぜ」

魔理沙が小規模な魔砲で、弾幕の球体に人間一人が通れる程の穴を開け飛び出してくる。

咲夜の弾幕には能力を解いてから弾幕が動き出すまでほんの少しタイムラグがある。

一定の実力者が身を守るのには十分な時間だ。

「次はこっちの番だぜ。星符『オールドクラウド』!」

魔理沙の周りにいくつもの魔法陣が現れ、意志を持つかの様にリングの中を回り始める。

「……………?」

咲夜は見たことの無いスペルカードに動きを止め、警戒する。

その視線は、完全に魔理沙から外れていた。

そして動き回る魔法陣は一斉に攻撃を始める。

魔法陣から無数の星屑のような形状の弾幕が放たれ、咲夜に迫って行く。

しかし、咲夜からしたらこの程度の弾幕は容易く避ける事が出来る

し、実際に避ける事が出来ている。

前回の戦いの時とは大分スタンスが変わっているが、これなら前の方が厄介だったと咲夜は思う。

が、次の瞬間には認識を改める事になる。

「恋符『マスタースパーク』！」

魔理沙は、咲夜の遙か上空からリングから食み出しかねない程の大きさの魔砲を放った。

この戦いは、リングの中で、肉眼で確認できる高さまでの範囲での戦い。

区切りは円ではなく円柱。そして、リングギリギリの魔砲を避ける手段等存在しない。

咲夜は咄嗟に自分を囲む空間の時間を操り、少しでもダメージを減らそうとする。

次の瞬間、魔砲が咲夜を呑み込んだ。

勇輝がチラリと隣を見れば心配そうにあたふたするレミリアの姿が。

「……まだ二回戦じゃなかったっけ」

気分的には準決勝辺りの試合。というか、一度ずつ試合を消化しただけで二、三倍のレベルの試合。これは射命丸を問い詰めなければ。

リングに目を向けると魔砲の光は段々と薄れ、咲夜の姿が露になっていく。

メイド服が多少破れ肌が見えている事から完全には防げなかった事が窺える。

「……【撃墜】」

「稗田審判からヒット宣言！ 先制したのは魔理沙選だアーツ！」

高らかに声を上げる射命丸。……活き活きしている、とても。

しかし咲夜もやられっぱなしではない。

「時符『トンネルエフェクト』」

魔理沙を囲う何重ものナイフ、そして弾幕。

「何だやつても無駄だぜ！」

魔理沙の魔砲が咲夜の弾幕を掻き消す。そう、誰もが思ったしかし。

「なっ……！？」

魔理沙の砲撃など意に介さなかったかの様にナイフは魔理沙を襲う。

「時が止まっている物に、干渉は出来ないのよ」

咲夜は一時的にナイフの時を止める事で魔砲による干渉が出来なくした。リスクと言えば相手に時間を与えてしまう事だが、全方位を

困んでいる今、そんな事は関係ない。

「刃は潰してあるから安心するといいわ。それでも十分に痛いでしょうけど」

「だれが諦めるか、私はまだ手を残してるぜ」

「そう……。でも、警戒を緩めるのは危ないわよ」

次の瞬間、魔理沙の帽子が宙を舞った。後ろから一本だけ、他の数倍の速さで迫って来たナイフに持って行かれたのだ。

それはいつでも倒せるという余裕からか。魔理沙は冷や汗を流す。

「言われなくてもやってやるぜ。彗星『ブレイジングスター』！」

そのスペルカードを見て、誰もが絶句した。

魔理沙自身が、膨大な魔力を身に纏い魔砲の様に咲夜に向かったのだ。

萃香が似たようなスペルカードを使っていたが、あちらは弾幕を撒いて行くのが主だった。

しかし魔理沙は違った。

魔砲使いとは言い得て妙だったのかもしれない。大きさも、スピードも萃香の倍以上だ。

咲夜は表情を引き締め全力で回避に回る。

あれではナイフも弾幕も、当たる前にかき消されてしまう。

攻撃は最大の防御、まさにそういうスペルカードだ。

……霊夢辺りなら力尽くで止められるのだろうか。

しかし、咲夜には相性が悪い。

咲夜は強力な弾幕を使わない。いや、使えないのだ。

能力は強力だが、燃費が悪いらしい。体力をこっそり持って行かれるんだとか。

よって咲夜が使う弾幕は能力と併用するために霊力弾よりもナイフが多くなる、そして、勿論火力が下がってしまう。

魔理沙の魔力が尽きるのが先か、咲夜が当たるのが先か。

「……魔理沙の勝ち、かな」

勇輝の呟きにレミリアが眉を顰める。

「どついつ事？」

「精神的な問題。魔理沙は無失点、咲夜は一機削られてる。あそこで攻撃を当てて置けばここでも余裕が持てたんだろうけど、一度勝ったって実績が油断を招いたんだろうな。んで、失敗したことから生まれた負の感情はミスをしやすくなる。……って訳なんだけど」

「……それで勝負は決まらないでしょう？」

「実際、咲夜には強力な攻撃方法が無い。そして魔理沙の魔力の量はふざけているとしか思えないくらい多い。咲夜が不利な事にならない」

「……………」

レミリアが無言で睨みつけてくる。あくまで仮説を立てただけなのだが。

視線を試合に戻すが、変わらず魔理沙の一方的な攻撃が続いていた。

「ッ!！」

咲夜の身体から数センチの場所を魔理沙が通過する。

その強大な魔力が咲夜の背筋を凍らせた。

咲夜はナイフを飛ばすが、最早意味を成さない。

油断せずに攻撃しておけば勝負は着いていたかもしれないと思うと自責の念が込み上げてくる。

魔理沙にも限界はある筈。だが、衰えなど微塵も感じ取れない。

負けるのか。そんな思いが脳裏に浮かぶ。

「……せめて、一撃は当てようかしら」

咲夜は、一本だけナイフを取り出す。顔を上げれば、魔理沙がすぐ目の前まで迫ってきているのが見えた。

「くっ……」

魔理沙は痛む肩を抑えながら迫るナイフを避け続ける。

咲夜は空中でナイフを停止させ、放置した。

魔理沙のあのスペルカードは視界が悪くなるという欠点がある。

障害物が粉碎できる程に強力だったため、特に気にしていなかったがこうもあっさり止められるとは思っていなかった。

時間が止まっている物に干渉は出来ない。止まったまま浮かぶナイフに魔理沙は自分から当たってしまい肩を負傷する。

勿論咲夜も無傷では無い、隕石が掠ったかのような衝撃に肩で息をし、ボロボロの身体に鞭を打って戦っている。

現在、お互いの残機が一になった所だ。

一瞬でも気を抜いた方が負ける。

「空虚『インフレーションスクウェア』」

咲夜のナイフが舞い。

「魔十字『グランドクロス』！」

魔理沙の魔砲がそれを掻き消す。

お互い集中力が切れ掛けて危ない場面が増えて来ている。

「約束、したんだ……」

魔理沙が、スペルカードを取り出す。

「勝って、勇輝と戦うって……」

そして、その符の名を叫ぶ。

「魔砲『ファイナルマスタースパーク』！！」

光がその場にいた全員の目を晦まし、誰もが目を覆った。

光が収まった時、最初に聞こえたのは。

「勝者、魔理沙選手！」

魔理沙の勝利を告げる声だった。

其の漆拾参

「さて……」

勇輝はリングの方に向かって歩き出す。魔理沙が勝ったからには自分も負けていけない。

相手は美鈴を赤子の様に扱う程の実力者、一切の妥協は許されない。

「第十試合、外道のお医者さん、桜井 勇輝選手とフラワーマスタ
ー、風見 幽香選手の戦いです！」

「……誰が外道だ」

確かに能力封じ、騙し討ちなど卑怯な手は使ったものの、外道とまで呼ばれる筋合いは無いと勇輝は思う。

「何でも良いけれど、早く始めてくれないかしら」

幽香が溜息を吐いて試合開始の催促をする。

「試合開始！」

「え、ちよっ……」

勇輝の声は誰にも届く事無く、幽香が持っていた日傘を振り被って勇輝に襲い掛かる。

咄嗟に避ける事が出来たが、先程まで勇輝が立っていた地面は割れ

ていた。

「あら、意外と速い……」

避けられた事などどうでも良いと言った感じに、幽香が弾幕を放つ。

一見、花の様に見えるそれは美しく、見ていて飽きない。しかしその弾は熊をも一撃で昏倒させる程の威力を持っている。

「幽香選手、いきなりの猛攻撃！ これでは外道も打つ手なしか？」

なんて不公平な実況だろうか、しかし勇輝にはそんな事を気にしている余裕もない。

「クソッ、こんな弾幕……」

勇輝は霊力で大剣を作り出し、巨大な花を両断する。

しかし、その鼻先には既に幽香の傘が迫っていた。

ガツッという痛々しい音と共に勇輝の身体は後方に飛ばされ、受け身を取る事も出来ずに地面に背中から落ちる。

その衝撃で肺から酸素が抜け、一瞬の息苦しさを感じる。

顔は腕で庇う事が出来た、しかし……。

「勇輝選手に幽香選手の攻撃がヒット！ しかしそこは外道、ゴキブリの如く生命力で立ち上がって来ます！ ……？ どうしたのでしょうか、勇輝選手の腕が片方おかしい方向に……折れてますね」

妖怪と人間の絶望的な腕力の差、それによる勇輝は霊力も纏っていない状態で攻撃を受けてしまった。

「まだ戦えるようね。鬼に勝ったんだからもう少し楽しめると思ったのに、期待外れよ」

「……上等だ、後悔しやがれ」

相手は手加減などまるでする気は無いし、殺しても構わないと思っている。

ならば、こちらも全力で、最高の状態で相手をしなければならぬ。

腕が折られているのだ。もう、副作用云々の話をしている場合ではないし、何より……。

自分の勝利を期待している者がいるのだ、期待外れと言われたまま終わる訳にはいかない。

「……力の小ささは、欠陥である」

それは、幽香の中での人間に対する常識を覆すのに十分な変化。

「人体の損傷は、欠陥である」

目の前の人間は、折れた腕が治ったどころか、自分の妖力と同等、あるいはそれ以上の霊力を有している。先程までは足元にも及ばなかったというのに。

「とりあえず仕返しだ、一回吹っ飛べ」

不可視の攻撃が幽香を吹き飛ばす。

「これはどういう事でしょう！？」 勇輝選手の腕が治ったと思ったら幽香選手が見えない何かに吹き飛ばされました、……判定は？」

「……【無効】」

「判断できない、見えてないからな」

審判に勇輝の味方は居なかった。

「……ごめんなさい、嘗めてたわ」

幽香はスクツと立ち上がり、謝罪の言葉を述べる。

「だから、全力で貴方を潰しにかかる」

勇輝の背中に冷たいものが走る。

次の瞬間に見えたのは幽香の弾幕。それも、視界を埋め尽くす程の量だ。

「悪いけど負ける気はしないってな」

勇輝は増えた靈力を存分に使い靈力の壁を生み出す。

魔理沙の魔砲すら受け止める壁だ、打ち砕くのは容易ではない。

幽香もそれを理解したのか、回り込んで傘を振るおうとする。

勇輝は瞬時に霊力の刀を作り出し、それを受け止める。

速い、そして普通の人間では耐えられない程に重い攻撃。

「なかなか出来るじゃない、安心したわ」

「そいつはどうも……」

傘を受け止める腕が振るえる。

身体能力を上げた上で霊力で強化しても受け止めるのが精一杯。一体目の前の妖怪はどれ程の力を持っているというのか。

勇輝は霊力を更に放出し、霊力の刀の形状を無理矢理に変え幽香を攻撃する。

しかし、あれだけの力を籠めていたにも関わらずあっさりと後ろに回避された。

「……化物かよ」

「妖怪、それぐらい知ってるわよね」

「ああ、そうだな。本当に化物そのものだ」

勝つ手段は多くは無い。

萃香と違って騙し討ちが通じる様な相手だとも思えない。

思考を巡らせ、打開策を考える。

「……何を考えているのかは分からないけど、そろそろ終わらせてあげる。花符『幻想郷の開花』」

幽香がスペルカードを使う。

遠くから見れば花の様に見えるのだろう、しかし勇輝には弾幕の波にしか見えない。

「霧符『葬々霧』！」

勇輝も負けじとスペルカードで対抗する。

しかし、勇輝のスペルカードは誰もが予想する事が出来ないようなものだった。

リングを視認する事は誰にもできない。青い霊力の瘴気が全てを隠し包んでしまったのだ。

「勇輝選手、そこはやはり外道！ 相手の目を潰して暗躍するつもりでしょうか？ ですが見えなければヒット判定も出来ない事が理解できないんでしょうか？」

しかし、射命丸の予想とは裏腹に丁度射命丸と幽香を結ぶように、その線だけが霧が晴れた。

「うッ……！？」

そして、霧の一部が渦巻き霊力弾となって幽香を襲った。

それを確認できたのは戦っている二人と射命丸のみ。

「ヒット！　しかしこれは卑劣、本当に勇輝選手にプライドはないのか？」

射命丸の実況など誰も聞いてはいないが、試合が見れない事に不満の表情を見せている。

そして、それ以上に不快だったのは当たった本人である幽香だった。

幽香は傘を思い切り振るい、霧を吹き飛ばす。

「……こっちの妖力はこの霧に食い潰されたのね。どこまでも面白くない戦い方」

幽香は妖力で巨大な葉を作り、それを恐ろしい程の腕力で振るう。

暴風は全ての霧を一瞬で吹き飛ばした。だが、勇輝の姿を確認できない。

「上だ」

勇輝は幽香の肩に思い切り踵を振り降ろす。

鈍い音と共に幽香の大勢は崩れる。

「勇輝選手、続けてヒットオ！　先程の陰湿な攻撃とは一転、清々しい踵落とします！」

「いい加減うるせえよ！　もう少し真面目に実況しろ！」

心の底からイライラした様な口調で勇輝は叫ぶ。

しかし、一瞬でも幽香から気を逸らしてしまったのは失敗だった。

勇輝の顔に、傘が叩き付けられる。

地面を割るほどの衝撃に、首の辺りで鳴ってはならない音が鳴る。

幽香はその音にハツとし、殺してしまったかもしれない人間に目を向ける。

「……………ッ！！　ゲホッ、あー死ぬ。痛いにも程がある」

しかし、勇輝はそんな事をモノともせずに立ち上がった。

幽香の目は驚愕で見開かれる。

確実に折った。手応えからして間違いない。

「ん？　ああ、悪いけど死なないんだよね、俺」

ケロツとした声で勇輝は幽香に説明する。骨折なんて欠陥は既に修正した。

「じゃあ、次はこっちの番だ」

「ッ！」

幽香はこれ以上ないぐらいの警戒をする。

リングの中は勇輝の霊力の痕跡が残りすぎていて、見えない霊力弾を感知するのは容易ではない。

だから、自分の後ろに集まって行く霊力に、幽香は気づけない。

「チェックメイトだ」

勇輝は自分の方から弾幕を放ち、尚且つ幽香の後ろに集めた霊力を操作する。

幽香は前方からの弾幕を躲し切った、しかし安心した所で後ろから迫った弾に被弾してしまう。

「勝者、勇輝選手！」

其の漆拾肆

十一回戦は霊夢の勝利、十二回戦はレミリアが棄権という形で終了した。

日の下に出られないのだから仕方ないとは言え、レミリアはとても悔しそうにしていた。

「では次の試合、準決勝、霧雨 魔理沙選手対、桜井 勇輝選手の試合です。お二人はさっさと出て来てくださーい」

「へ、一日に一人一試合じゃないのか？」

射命丸の言葉に勇輝は思わず問いかける。

「何言ってるんですか、お祭は今日含めてあと二日。決勝は明日、準決勝は今日です」

「聞いてねえよ！ 事前に説明しろよ鳥頭！」

「あーはいはい。あんまり審判に文句をつけると減点しますからね」

「……………」

何が都合が悪いかと言うと、勇輝は能力を既に使い切ってしまったている。

霊力と身体能力はまだ十分にあるが、紅魔館での一件でそれだけで

は不安が残るのは分かりきっている。

「どうしたんだ勇輝、怖気づいたのか？」

魔理沙が挑発的な笑みを浮かべて話しかけてくる。

既にリングの中に入ったが、テンションは最低ラインだ。

「いや、つくづく俺の周りにはまともな奴が居ないと思ってな」

「失礼な。私はまともだぜ」

「どの口がそんな事を言うのか……」

「それより、本気で戦うのは霧の異変の時以来だよな。あの時は引き分けだった、今日は勝たせて貰うぜ」

「あー、どっちも動けなくなっただっけか？俺がボロボロにされて、魔理沙は魔力の使い過ぎだった気がするんだけど」

「確かそんな感じだったな。忘れたけど」

どこまでも自己中心的な奴だ、と勇輝は溜息を吐く。

それを狙ったかのように。

「試合、開始ッ！」

目の前を、魔砲が覆い尽くした。

「ま、そんな簡単には当たってやらねーよ」

勇輝は地面を蹴り、自分から見て左に回避する。そのまま霊力の刀を作り出し、魔理沙に切りかかる。

だが魔理沙も簡単には負けるつもりは無い。勇輝の刀を箒で受け止め、更に勇輝を狙う四つの魔法陣を展開させ、勇輝を狙い撃つ。

しかし、弾は全て地面に当たり砂煙を撒き上がらせるだけに終わった。

「萃香との戦いを見てなかった訳じゃないだろ？」

魔理沙の背後から勇輝の声がする。

その声に、魔理沙はニッと笑みを浮かべた。

「ッ！」

魔理沙の背後に現れた魔法陣に、勇輝は慌てて距離を取る。

瞬時に、魔法陣からは魔砲が放たれた。

それを何とか避け、勇輝は呟く。

「魔理沙が頭を使ってるだど……？」

失礼極まりない発言だが、スペルカードや魔砲を乱発していた魔理沙を見ている勇輝にとって衝撃的な程に魔理沙は細かな戦いをして

「行くぜ。天儀『オーレリースソーラーシステム』！」

またも勇輝は聞いた事のないスペルカード。

しかし、それは咲夜と魔理沙の戦いで使用されたモノに似ていた。

いくつのも魔法陣がリングの中を回り始める。

あの星屑のような弾幕なら壁を作り出して防ぐ事が可能だが、そうはいかないのだろう。

魔理沙は箒に乗り、上空へと移動する。

そして、一斉に無数のレーザーにも見える弾幕で魔法陣が勇輝を狙い撃った。

速く、鋭いそれはレミリアのグングニルには劣るものの、数は倍以上、方向はあらゆる面から。

「成程ね、確かに強力だ……」

勇輝は避ける訳でも、壁を作り受け止める訳でもなく、それを撃ち落とす。

身体能力の向上は力や速さが上がるだけではない。動体視力、反射神経も身体能力の一部だ。

当然、修正が施されている。

模範としているレミリアに見える程度の速さなら見る事が出来るし、反応出来るモノなら反応する事が出来る。

後は結構な靈力を込めた弾で相殺し、撃ち落すだけ。

しかし一向に攻撃が止む気配は無い。これでは消耗戦になるだけだ。

「……なら、映符『靈符 夢想封印 散』！」

お札状の弾幕が破裂したかのように飛び散る。

それは魔理沙の弾幕を相殺した上、魔法陣を次々に破壊していった。

「やるな、けどここからだぜ。魔空『アステロイドベルト』！」

その名の通り、空を埋め尽くす程の量の弾幕が勇輝に降り掛かって行く。

勇輝もスペルカードを取り出す。

「武符『武投乱舞』！」

時に靈力で出来た剣が、槍が魔力で出来た星屑を貫き、時に魔力で出来た星屑は靈力で出来た武器を押し潰していく。

拮抗しているように見えても、危ないのは勇輝の方だ。

砕けた星屑は消える事無く、地面に落ちていくのだから。

「面倒な……」

眉を顰めながらも、勇輝は回避を続ける。

お互いに使ったスペルカードは二枚。残り八枚で決着を着けなければ勇輝が負ける可能性は高い。

スペルカードルールは魅せる戦い。もし引き分けになったらより弾幕の美しい方が勝者となる。

ぶつちやけた話、勇輝にそのセンスは無い。

偶々綺麗に見える弾幕を作る事は出来ても、意図して作ると絶対に当たらない弾幕が出来るのだ。

よって勇輝のスペルカードは威力、効率、命中率、趣味等の内から作られる事が多い。

他人のスペルカードをコピーした映符は勇輝自身のスペルカードではないため採点基準以前の問題だ。

「どうしたんだ勇輝、私が強くなり過ぎてビビッてるのか？」

「まさか。魔理沙をこれ以上ないくらいの勝ち方で倒す方法を考えてんだよ」

魔理沙は再び魔法陣を撒き散らし、星屑を降らせる。

勇輝は空中に霊力の足場を作り出し、それを昇って魔理沙と同じ高度に立つ。

「これはあまり使いたく無かったんだけど……」

そう言つて勇輝が懷から取り出したのは黒い小さな鉄の塊。

「いやいや、それはルール違反だろ」

拳銃だつた。

「いや、一応弾だし死ぬ心配は無い。当たり所云々は弁えてるから安心して撃たれると良いよ」

「つーか、どこでそんなもん手に入れたんだ？ 里じゃ売ってない筈だぜ」

「森近の所に壊れたヤツがあつたから、元に戻して改造した」

パンッ、と乾いた音が鳴り響き拳銃の銃口から煙が上がる。

そして、魔理沙の脇腹の辺りは赤い液体で滲んでいた。

「ヒットオ！ ……つて、殺傷武器は禁止なんですけど！？」

射命丸が宣言するが、慌てて止めに入る。

撃たれた魔理沙は……。

「……………痛くない？」

「ペイント弾だ、水で落ちるけど長い間放置すると落ちないかもな」

もうこれは使えないか、と勇輝はそれを地面に落とす。

「さすが勇輝選手、勝つためならどんな手段も使う。外道、悪党、まさにクズ！」

驚かされた事が気に入らないのか射命丸が暴言を吐いている。もう慣れたと勇輝は溜息を吐くだけに終わるが。

「油断してたぜ。だけど次はもうない！ 光撃『シュート・ザ・ムーン』！」

星屑を撒いていたリングの中を回り続ける魔法陣。そこから空に向かってレーザーが放たれる。

足場を崩し、それは勇輝に迫るが今更その攻撃は通用しない。

簡単に勇輝は避けていく。

だが、それだけでは終わらない。

魔理沙自身も星形の弾幕を放ち、勇輝を追い詰め始めた。

レーザーで行動を制限され、そこを魔理沙が狙い撃つ。

「ッ！」

レーザーが勇輝の腕を掠めた。

「ヒット！ 魔理沙選手の攻撃が当たりました。ざまあないです！」

しかし、本当にこれは拙かった。

スペルカードを使う暇もない。足場を作るのに精一杯なので攻撃に移れない。

霊力の消費が大きいので使いたくはなかったが、翼を作り出し更に上空へと回避する。

それを追って魔理沙も飛び上がる。

「薬災『分量違いの猛毒薬』！」

勇輝は一つ一つがパチンコ玉程の大きさの弾幕を撃つ。

急上昇していた魔理沙は勢いを殺し切れずに一撃を貰ってしまう。

負けじと魔理沙もスペルカードで応戦する。

「魔符『ミルキーウェイ』！」

大き目の星型の弾幕。

それは勇輝の作り出した翼に当たり、射命丸がヒットを宣言した。

残りお互いに一機。

「恋符『マスタースパーク』！」

「焉撃『ライフピリオド』！」

息を合わせたかのように、魔理沙が魔砲を放ち勇輝は霊力の砲撃を

放つ。

拮抗し、凌ぎ合うそれを見て外野は手に汗を握り、呼吸を忘れた。

「私の勝ちだぜ、勇輝」

魔理沙はそう笑い、残っていた全ての魔力を注ぎ込む。

威力を増した魔砲は霊力の砲撃と共に勇輝を飲み込んだ。

「勝者、魔理沙選手！」

其の漆拾伍

祭三日目。

「約束を果たして貰おうか」

本来、祭の席に居なくてはならない勇輝は此处、博麗神社で一人の妖怪と向かい合っていた。

「ええ、約束は守るわよ。今から貴方を外界に送る。期間は四十八時間、それまでに要件を終え博麗神社に戻る事。それは理解して貰えているかしら」

勇輝が祭りを成功させた時の報酬、それは外界への帰還だった。

見ればその服装もいつもの白衣ではなく、幻想郷に迷い込んでしまった時に着ていた物だ。

「分かってる。それよりこっちからの条件も覚えてるな？ 俺が外界から持ち込む物、外界での行動には一切関与しない。監視もだ」

「弁えているわ。……それと、もう一度言っておくわね。貴方の存在は既に忘れられている。戸籍も、写真も、記憶も、全てが無かった事にされている。それが幻想郷で暮らすという事よ」

「向こうで馬鹿やってた連中と話せないのは惜しいけど、それ以上に今が充実している。悔いがないって訳じゃないけどそこは割り切ってるさ」

「そう……。通貨は共通だからこちらの物がそのまま使えるわ。少しの間、感慨に浸って来なさい」

勇輝は紫に背を向け、博麗神社の鳥居へと向き直る。

その向こうの階段の下に見えるのは妖怪が住んでいるような森では無く、ある程度整備された道。

結界が解かれ、外界と繋がっているのだ。

そして、勇輝は一段一段階段を踏み締め、道路へと足を着ける。

振り返った時、勇輝の知っているあの博麗神社はもう無い。

何の変哲も無い、寂れた神社がポツンと建っているのが見えるだけだった。

「……さて、まずはここが何処か調べるか」

勇輝が目的地に到着したのは半日が過ぎた頃だった。

思った以上に田舎で、思った以上に遠かったのだ。

空気が悪く感じるのは幻想郷で暮らしていたからだろうか？ 自動車が車道を埋め尽くし、人が溢れ返る街中はどこか他人事のように感じられ、そして懐かしかった。

帰って来た。

それを実感するには何かが欠けている。それもそうだ、自分はもう、この世界から外れてしまった存在なのだから。

両手をポケットに突っ込んで、自分の記憶と照らし合わせながら街を歩く。

時刻は昼をけっこう過ぎてしまった十五時。空腹は感じないが何か胃の中に入れて置かなければ身が持たないかもしれない。

そう思つてコンビニに立ち寄り直ぐに食べられる物を探す。

そして実感する。現代はここまで便利であると。

幻想郷は自分で食べ物を集め、作るしかない。紅魔館は咲夜が用意してくれていたが人里に住み始めてからはそうはいかなかった。

一種の感動を覚えながらも惣菜パンを購入し、コンビニの前で食べてから再び歩き出す。

自分に関係あるものが一切消えてしまつていふ話なのだから、今更こんな街に用は無い。

その筈なのに、自分の足はある場所に向かつてしまう。

それは少しの、何の根拠もない儚い期待。

奴なら、あの男なら何か覚えているかもしれない。そんな気がしてならないのだ。

街の中心部から少し離れて、一軒の武家屋敷の前を通りかかる。

「ここは……」

かつて、父親と一緒に仕事に來た場所だ。

それはもう命懸けの仕事で、指の一本や二本、片方の耳を失ってもおかしくないぐらい危険なものだった。

そんな屋敷を極力見ないようにし、勇輝は歩き続ける。

勇輝はあるマンションの一室の前で立ち止まった。

表札には【桜井】の文字があり、勇輝の心臓は高鳴る。

ドアノブに手をかけてみるが、鍵がかかっていた。どうやら中には誰も居ないようだ。

安心と、がっかりした気持ちを感じながらも勇輝はバッグから鍵を取り出し、そのドアを開ける。

カチャンという音を立てて鍵が開く。

勇輝はドアをゆっくりと開けて、中を覗き見る。

玄関に靴は無い。それどころか、玄関一帯が埃を被っていた。

数週間、下手したら数ヶ月の間、人の出入りが無かったという事。

埃塗れの床を歩くのもどうかと思ったが、既に他人の家でもある。靴を脱いでから上がる。

最初に向かったのはリビング。

テレビが一台、テーブルが一つ、そして、イスが二つ。

そこには三つのイスがあった筈なのに、その面影は無い。覚悟していたとはいえ、胸を締め付けられるような思いだった。

写真立ての中にある写真に、自分の姿は無い。食器棚の箸や皿は父親と、今亡き母親の物だけが置かれている。

耐えない。

勇輝は踵を返し、リビングを出る。

次に向かったのは父親の部屋だ。

部屋の中は一端の研究室の様で、山の様に積み上げられたレポート。怪しげな薬品。大型のパソコンと、分厚い本の並べられた本棚。

何も変わっていない。それに勇輝は安堵する。

勇輝は部屋の奥に進もうとし、コッソリと何かを蹴ってしまう。

何かの薬品の瓶だった。拾い上げてラベルを見ればこう書かれている。

【Sohn】、ゾーン。ドイツ語で……息子。

それを理解した時、勇輝は駆け出していた。

かつて自分の使っていた部屋、そのドアを少々乱暴に開け放ち、中を見る。

最初から使われていなかったかのようにポツカリと空いている部屋。

使っていたベッドも、机も、本棚も何も無い。

その部屋の中心に、ポツンとローラー付きのイスが。

その上には、天井を仰ぎ見ながら煙草を吹かしている一人の男の姿があった。

「よオ、遅かったじゃねえか。クソ餓鬼」

それは紛れも無く、自分の父親の姿だった。

其の漆拾陸

煙草を吹かす人物はよれよれの白衣を纏い、二十代後半のような容姿をしている。

これで既に規格外な存在だが、行動は更に規格外な父親だ。

「遅かった……？」

相変わらず口が悪いのに変わりは無い父親、しかし紫の話では自分は既にここには居ない存在となっている筈だ。

「どうして来るのが分かったか。いや、何で覚えてるって顔だな。そりゃあ手頃な助手が消えたんだ、少しは調べて見ようと思うのは当たり前だろ、片手間だったか」

片手間で居ない存在を探し出した？ それよりも、何故自分の事を息子だと認識できている？

「で、何したんだクソ餓鬼？ お前の居た証拠は何一つ存在していない。最初から居なかったかのように。予想じゃあオカルト的なものに関わってるんだと思うが」

「……ホントに人間かよ。つーか何で覚えてんだクソ親父」

「さーね、俺が隣の国から戻って来たら餓鬼のいた証拠が消えてる。戸籍も、家具も。そこまでだったらどっかの組に喧嘩吹っ掛けてくたばったのかと思うが、写真の中からも消えてやがる。コイツは普通の人間じゃ無理だ」

「……そっか。それで、今日ここに来るかもしれないってのはどうして分かった？」

「駅に監視カメラ、この範囲二キロでマンションに通じる道全てにカメラ、んでマンションの入り口にカメラだ。これだけあれば十分、確認はコイツで出来るしな」

そう言つて小型の端末を見せつけて来る。

それはやり過ぎではないのかとも思ったが、コイツは一応犯罪者だ。対策だろう。

「次はコッチの質問にも答えろよ、お前を神隠ししたのは何だ？可能なら連れて来い、不可能なら居場所を教えろ。どちらも不可能なら正体だけ言え」

父親は怪しげな笑みを浮かべながら言う。

いや、繋がりはまだ既に存在しないのだ。目の前にいるのは父親であつて父親でない。桜井 魅憑という一人の人間。

それよりも不可解なのは魅憑が何故自分の事を覚えているのか。

単に国外に影響が無かった？ しかし勇輝にそれを知る事は出来ない。

「妖怪、妖精、幽霊。……今一信用ならねえな。本当にいるんなら

解剖か実験に付き合っ て貰いたい所だが……」

場所をリビングに移し、 テーブルを挟んで向かい合う形で二人は座る。

「それと、その靈力つてのは“氣”とは違うのか？ あつちなら大
体の構造も、論理も持論を持つてゐるんだが」

「分からない、向こうにも氣を使う奴が居たけど詳しく調べた訳じ
ゃない」

「…… なら、ある一定の条件でのみ感じ取れるモノ。いや、近すぎ
て気づけないモノ？ いや、仮に幻想郷とやらがあつたとして、作
成者は既に何らかの力があつたと考えるべき……」

魅憑は口元に手を当てながらブツブツと呟く。

この男はいつもこうだつた。

突拍子も無く何かについて考え、それを理解し、物にするまで何か
を続ける。

歳は五十程だというのに見た目が二十代後半なのは人の細胞の衰退
防止法を考え自分の身体を弄り回した結果なのだとか。本人にしか
知り得ない事なので確証は無い。

この男は人を救うために医者になつたのではない。人体を弄り回す
のが、人の構造を調べるのが好きで物事を行つてきた結果が医者と
して発揮された。

学歴は高校まで、あとは独学。当然医師免許も資格も持っていない。霊力やら能力の事が分かるなら何人をバラバラにしても知ろうとするのかもしれない。

「……よし。クソ餓鬼、楽しい解剖の時間だ。喜びやがれ」

「断る、誰がテメエの解剖になんか付き合うか」

「固い事言つなよ、お前の細胞の半分は俺の物だろうが」

「さーね、今はどうか。それより、仮にも息子の俺が失踪してたのに感動の再会一つも無いってどういう事だ」

「俺が感動するのは人体の新たな神秘を見出せた時だけだ」

……こんな男だが、その医療についての知識は数十年、下手したら百年近く先までのモノなのだ。この容姿だから勇輝が高校生の時に担任から「お兄様はお呼びでは無いのですが……」と言われていたのはある意味滑稽であつた。

そして、自分で勝手に病原体を作つては隣国に持ち込んで試す。その後ワクチンを使って治して逃走する。一度ついて行った事があるがコイツの頭は末期ではないかと本気で疑つた。

「……まあ、元気そうだし安心したよ。俺はもう行く、他に見ておきたい場所や必要な物を買いたいし」

そう言つて勇輝は立ち上がるが、その肩を急に掴まれ座り直させられる。

「まあそう言うな、一度仕事に付き合え。丁度今夜、新しい仕事先を見つけに行く」

「……死ねばいいのに」

「俺はあと二百年は生きるつもりだ。何しろ老化が遅くてな」

化物かよ、と吐き捨てながらも勇輝は安心する。

本当に、目の前の男は何も変わっていないかった。自分が幻想郷に迷い込む前と、何も……。

「行きたい所があれば行っておけ。ただし、十時には戻ってこい、仕事だ。拒否はさせねえぜ？ お前が消えたせいで狂った予定は百を超えてるんだ」

ニヤニヤと笑いながら話す魅憑の顔からは、悪意しか感じられない。

勇輝は溜息を吐きながらこう思う。

まともな方向になら、少しは変わっていて欲しかった、と。

其の漆拾陸（後書き）

登場人物紹介

桜井 魅憑さくらい みつき

年齢は五十に届くが、容姿は未だに二十代後半。

人を助けるためではなく、趣味で治療を行う結果で無免許の医師に。

その性格は異常なもので、小学生の時には自由工作で人体模型を作った程。

医療知識は現代に広まっている物の数十年先まで進んでおり、よく外国の無法地帯で試したりしているとか、していないとか。

また、医療とは関係なく人体研究を続けている。

身長は百八十程で、髪は乱雑に切り揃えてある黒髪。服装は皺だらけの白衣。

其の漆拾漆

「……なあ、毎度思っただけど何しに行きたいの？」

「仕事探した」

そう言いながら魅憑は銀色のアタッシュケースに何かを詰め込んで行く。

しかし、その隣には鉛弾や銃器がゴロゴロと転がっており、とても穏やかな交渉になるとは思えない。

アタッシュケースをボタンと閉じ、魅憑は振り返る。

「さて、飯食ったら直ぐに行くぞ」

時刻は午後十時半、残業だとしても遅い時間である。

魅憑に連れられ、辿り着いたのは一件のビル。四階建てで、土地はそこまで広くないからか細長い印象を受ける。

魅憑はガラス製の自動ドアの前に立ち、開かない事を確認してから。

「オラア！」

アタッシュケースを振り回し、ガラスを叩き割る。

それと共に警報が鳴り響き、暗かったビルに一斉に明かりが灯る。

「……ハア、どうしていつも暴力沙汰にしたがるんだか」

呆れた表情で魅憑を見送る。

勇輝の事など一切気にしていない様に魅憑はビルの中に入っていく。

聞こえて来るのは発砲音に悲鳴、本当に何がしたくて来ているのだろう。

音が二階に上がった事を確認すると、勇輝もビルの中へと入る。

入って、少し通路を奥に進んだ所で腕と足を撃ち抜かれた男が蹲っているのが見えた。

「テメエ……さっきの男の仲間か。何処の組のモンだ!？」

「あー、誤解しないで欲しいです。俺は一応医者目指して……いや、医者やってます」

「ふざけるな! ドアぶち壊して銃片手に乗り込んでくる医者が何処に居る!」

「……認めたくないんですけど、いるんですよ。このビルの中に撃たれた男は見事に腱が切れてしまっていて、立ち上がる事さえ出来ない。普通なら全治数ヶ月、下手したら二度と動かせなくなる大怪我。

それとは別に頭や肩にも包帯を巻いていた。恐らく、魅憑に此処が狙われた原因はコレだ。

とりあえず、動けない男を押さえつけながら止血を進めていく。これだけの怪我を負って太い血管に傷一つ負っていないのは魅憑が意図してやった事だろう。

骨も折れていないし、腱は魅憑が繋ぎ合せるだろう。もうやる事は無い。

呆けた様な顔をした男を放置し、勇輝は奥へと進んでいく。

最上階に行くまで計三十四人。きっと魅憑はしばらくは楽しそうに此処に通う事だろう。住み込むかもしれない。

最上階で確認できたのはソファに倒れ込んだ男の額に銃を押し当てる魅憑の姿だった。

「何が、目的だ……」

「就職活動だ、文句あるか？」

「ウチ組の奴等を使い物にならずして自分を売り込むか。この街にはとんだ化物がいたものだ」

だが魅憑マンションがあるのは隣街である。

「いや、そつちじゃねえ。お前等クズは当然公の場で治療は出来ねえ、だから俺が引き受けてやろってんだ。感謝しろ」

「医者？ 馬鹿を言うな。 医者がどうしてわざわざ怪我をさせる」

「金取る為に決まってんだろ。 それでどうだ？ 俺なら朝までに全員を元の身体に治せる、 吹っ飛んだ耳も、 潰れた眼も、 ？ げた腕さえも戻してやる。 気に入ったなら契約書にサインしろ」

そう言つて、 魅憑は白衣のポケットからぐしゃぐしゃに丸めた紙を広げて男に見せつける。

それを見た男は目を見開き、 怒声を発した。

「正気か！ 何だこの内容は、 組を潰す気か！？」

「ははっ、 面白い事言うじゃねえか。 たった十人を実験に借りるだけだろ」

契約内容はこうだ。 組の関係者は魅憑の素性を調べない、 報酬は魅憑の言い値で決める、 月に十人を人体実験の被験体とする。 これを破った場合は他の契約者と魅憑自身が総力を挙げて関係者を抹殺する。

「誰がお前の様な危険人物に大切な組の奴等を渡すか！ 帰れ、 貴様に用など無い！」

「強がるなよ、 抗争の引き金は引かれてる。 それを承知で俺は交渉に来ているんだ。 このままなら…… 明日、 ここは火事にでもなるんだろうな」

男の顔からサアアッと血の気が引いて行く。

その表情は恐怖と困惑で塗り固められていた。

「不景気のこの御時世、仕事探しは楽しいねえオイ」

眠った男達が一列に並べられ、楽しそうに傷口を弄っている魅憑はやはり狂っている。

傷口からは筋肉が見えているものの、精々鼻血程度の出血しかしていない。何でも魅憑の使う弾丸は細く、貫通能力が高いのだとか。

勇輝も、魅憑が腱の治療を終えた者から傷口を縫い、塞いで行つた。

この男はいつもこうだ。以前は既に契約していた組だったにも関わらず、運悪く出会った新入りに発砲された事から半数の人間に怪我を負わせた事がある。

初めて見た時は猛反対し、止めようとしたのだが「どうせ後で治すんだからこっちのが安全」と言われてそれ以上の抗議は無駄に。

「なあクソ餓鬼、生やすなら角か羽、どっちが良いと思う？」

「頼むから普通の姿のままにしてくれ……」

つれない奴だ、と言いながらも最後の怪我人の治療を始める魅憑を見て勇輝も治療に専念する。

治療開始から三時間半、三十五人全員の治療が終了した。

「さて、これで仕事は終わりだ。そして喜べ、お前に一つだけプレゼントをくれてやる」

そう言うと、魅憑はアタッシユケースをこそこそと探り中から何かを取り出した。

それは……。

其の漆拾捌

「……何だよそれ？」

魅憑が取り出したのは小さなビンだった。

中には透明な薬品が入っていて、ラベルも付いていない事から何の薬品かは判断できない。

「精力剤だ」

魅憑の言葉に、勇輝は思わず吹き出す。

「馬鹿だろ、何で餓別が精力剤なんだよ！」

「まあ。アレだ。個人的には人間と妖怪のハーフが見たい。つい訳で餓鬼、一匹作ってこい」

「例えそうだったとしてもお前だけには見せねーよ」

そう勇輝が言い返すと、魅憑は心底残念そうな顔をする。

「さて、これでお前に言う事も無くなった。クソ餓鬼の割にはそこそこ出来てるみてえだし、形だけの心配をする必要も無い。……行つてこい、精々目的のために足掻くんだな」

それだけ言つと、魅憑はアタッシュケースを掴んでビルの出口へと向かった。

「……………」

最後まで口の悪い父親だった。アレなら自分が居ても居なくても、好きに暮らして行く事だろう。

まだ明け方まで時間がある。勇輝はバッグを背負い直し、ビルを出た。

「あの餓鬼はそこそ成長したのかねえ……。まだ俺の足元にも及びやしねえ、いつその事実験にでも使えば良かったか？」

魅憑はまだビルに残っていた。正確には屋上に移動していたのだが。そして、暗がりの中からは何者かの声が聞こえて来る。

「あ？ …… ああ、あの薬か。アレは精力剤なんかじゃねーよ、強力なアルカリ性の液体。中に入ってるのは発信機、注意して見れば分かるサイズだが二日で溶けて無くなる。幻想郷とやらの場所を知るのには打って付けの物だろ？ 気分としては有頂天ものだ」

暗がりの中にいるモノへ、魅憑は淡々と説明していく。

「いやいや、邪魔なんてする気はねえって。ただ、興味があったんだよ。人の形をした、人ならざるモノ。構造とか、強度とか、細胞とか。今想像するだけでもわくわくするね」

暗がりからは呆れたような雰囲気漂う。

「さあ、準備を始めようか。お互いの目的を達する為に」

翌日、午後十一時三十分。

勇輝は外界の博麗神社へと再び足を運んでいた。

ここで戻れなかったら妄想癖のある廃人と認定される事だろう。

石の階段を一段一段、踏み締めて上って行く。

今ならまだ、外界で暮らす事を選べたのだろう。

しかし、幻想郷に残したものは多く、外界に残っているものは少なすぎた。

勇輝は迷う事無く、博麗神社の鳥居を潜った。

「お帰りなさい。短い帰郷は楽しめたかしら？」

出迎えたのは紫だった。他に誰の姿も無いようだ。

「……出迎えご苦勞様です。それより聞いて置きたいんですけど、外で俺の事を桜井 勇輝だと認識出来る人って存在しますか？」

「そうね……。私の事を大賢者じゃなく、紫って呼ぶなら答えようかしら」

クスクスと笑いながら紫はそんな事を言う。ふざけているのか、焦

らしているのか。

「紫さん、答えて下さい」

真剣な勇輝の表情に紫はピタリと笑う事を止める。

「有り得ない話でも無いわ。仮に貴方を覚えている人物が居たとするなら、その人物は何らかの特殊な能力を持つ、或いは家系の人物。例えば、幻想郷に迷い混み、無事外界へと生還した者の子孫、そんな所よ。……尤も、生還した者を私は知らないのだけれど」

つまり、魅憑は何らかの能力に目覚めていた可能性が高い。

有り得ない話でも無いだろう。勇輝も能力を持っているし、アレ程に規格外な人間を勇輝は他に知らない。

「後はそうね……。幻想郷を抜け出した妖怪、それと外界の幻想……例えば魔法なんかに関わった者。だけど貴方の回りの人物達の記憶は私が直々に消したわ。記憶と忘却の境界を弄って。だから、貴方を覚えている人物は一人も居なかった、そうでしょう？」

「……ああ、居なかったよ」

ここで居たと答えたなら、真っ先に紫は魅憑の記憶を消しに行くだろう。

自分が居た事を証明する最後の砦を、呆気なく消し去ってしまうのだろう。

それを知ってか知らずか、紫は胡散臭い笑みを浮かべて笑う。

「それでは、疲れている事でしょうし人里までお送りしますわ」

そんな胡散臭い口調の言葉と共に、勇輝は足元に開いたスキマに落ちる。

次に見えたのは住み慣れてきた診療所だった。

しかし、その建物の主は中に居ないのに明かりが灯っている。出掛ける時に消し忘れたのだろうか？

診療所のドアを開け、一歩足を踏み入れる。

「あ、やつと帰ってきた」

診療所のロビーには見知った顔が集まっていた。

最初に勇輝に気づいたのは霊夢。他にも魔理沙、紅魔館メンバー、アリス、白玉楼メンバー、プリズムリバー三姉妹、萃香。何故かチルノが遅れて勇輝に気づく。

「祭の主催者が最終日にどこ言ってたんだよ。紫は里帰りなんて言ってたし、黙って行くななんて心配したんだぜ」

魔理沙は若干拗ねたような口調でそんな事を言う。

見れば、テーブルの上には色々な料理が用意されていて、幽々子を必死に止める妖夢の姿がある。

「こついうのを後夜祭って言うのかしら？ 祭が終わったのは昨日

だけれど」

「お兄様ー、早く食べよう」

これは、勇輝だけのために用意されたモノなのだろう。

そう思うと、勇輝の胸に熱いものが込み上げてくる。

「ああ、悪かったな……。でも明日の朝にでも良かったのに」

そんな悪態を吐きながらも、自然と笑みがこぼれていた。

これからも、自分は幻想郷で暮らしていくのだろう。

後悔していない訳じゃなかった。だが、ここには捨てられない多くのモノが出来た。

だから……。最後に父親に会えたのは良かったのかもしれない。

母親の墓参りにも行けた。もう母では無くなったのかもしれないけれど。

少しだけ友人も見ることが出来た。遠目だったが、何一つ変わらない様子で。

もう、外の世界に思い残す事は無い。

「紫様……、随分と楽しそうですね」

藍は呆れた表情で紫を見る。

「そうね、私は少し歓喜しているわ。これであの子が外界に見切りをつける事が出来たのだもの」

「……惨酷なお方です」

「必要なのよ、彼の存在が。人と妖怪が共に暮らす世界。余りにも長く、先の見えない目標は今、この時代に実現しようとしているわ。態々外界に行かせたのも最後の別れをさせるため。これで前回焦った里の代表者の事もある程度は水に流せた事でしようし」

「……そうでしょうか？」

紫はクスクスと笑いながら月を見上げた。その表情からは、考えていることは何も分からない。

其の漆拾捌（後書き）

第肆章、これにて終了となります。

次回からは永夜異変。ゴキリ、手羽先、兎、ニート。イロモノが
いっぱいですね。

永夜異変が終われば百話、百ページになるんでしょうか。上手く区
切りを着けないと。

では、過度な期待をせずに、引き続き『東方医療録』をお楽しみ下
さい。

其の漆拾仇

幻想郷も夏が終わり、今は涼しげな秋となった。

収穫祭なる祭の様な大宴会も終了し、冬に向けての準備などが始められているが。

「例によつて暇なんだよな……」

「だからといって俺の店に来なくても良いだろう?」

霖之助が何か言っているが気にせず香霖堂の商品を物色する。

時期の移り目なんかは風邪薬が飛ぶように売れたがそれも過去の話ある程度の適応が効いた今は病人の一人も来ない。

数日前に猟師が熊に襲われたのを節目に、診療所はガラツとしている。

「お、これって蓄音機だろ。これだけ古いのは初めて見るな……」

「壊れているけどな」

「直そうか?」

「いや、買い手も無いから必要無い」

それと、能力についてだが副作用的なモノは出なかった。恐らくだが冥界という場所が人間にとって良くなかったのだらうと勝手に結

論付けている。

「それもそうだな。これは……ああ、目覚まし時計か。こんな形のがまだ見れるとは……」

時計にベルが取り付けられている形だ。相当煩いのだろう。

「買わないなら触るな。壊れる」

「壊れてる物が大半だろ」

目ぼしい物は何も見つからない。一度帰郷した際に買えるだけ外界の物を買って来た事もあって必要な物は大体揃っているから問題は無いのだが……。

「そつえば桜井、寺子屋の手伝いは辞めたのか？」

「慧音さんが子供に悪影響だって。クビになった」

教えてる事に問題は無かった筈なのにな、と勇輝は呟く。

そこで来店があつた。

「やっぱり此处に居たか……。勇輝、今日は阿求殿と会う約束だったのだろう？」

噂をすれば何とやら、入って来たのは慧音だ。

「……えーと、短命の原因を調べろってヤツでしたっけ？ 転生に必要なとか聞いてますけど」

何でも、稗田家には“御阿礼の子”という転生し、妖怪の事を書き記している子がいる。その九回目が稗田 阿求らしい。

そのためか、千年以上続く稗田家は人里でも一番と言って良い程の権力を持つ。

しかし“御阿礼の子”は短命で、長くとも三十代で死に至っているらしい。しかもその数年前からは転生の儀式を行うため本当に自由な時間は生まれてから数年と、『幻想郷縁起』を書き終えてから儀式を行うでの間だけなんだとか。

「転生に必要なのは儀式だけと話した事があつただろう？ 原因を明確にするためにお前が呼ばれたのではないか」

「……不死の薬でもあつたら氣にする必要もないんじゃないですかね。俺が言える事でも無いですが」

オカルトは専門外なため、そんな悪態を吐くが慧音はピクリと反応する。……幻想郷には存在するというのだろうか。

「確かに伝えたからな。忘れずに行けよ？」

「了解です。精々原因の解明に努めますよ」

慧音の用事はそれだけだったのか、さつさと店を出ていく。

「……随分と信頼されているじゃないか」

「そうか？ まだ嫌われ者が変わり者のポジションだと思ってる

んだけど」

「御阿礼の子の診察をさせて貰えるんだ。少しは信用され始めてるんだろ」

まあ、信頼と患者の数は比例しないモノだから判断など出来ないのだが。

「だったら良いんだけどな……」

「用が出来たならさっさと帰れ。営業の邪魔だ」

「はいはい、帰りますよ」

少し肌寒くなってきた幻想郷だが、勇輝は依然として白衣を着ている。

人里では白い格好。勇輝で結びついているのか呼び止められる事も多い。暇だから話に付き合うのだが。

そして勇輝がやって来たこの、周りよりも大きな屋敷は何度か足を運んだことのある稗田家である。

「それで、何を調べると言うのでしょうか。お役に立てると思いますませんが」

「阿求様は知つての通り短命。その一生は他の人間の半分程しかありません。ですから、阿求様のお父様がそれを不憫に思い、桜井殿

を呼んだ次第でございます」

使用人らしき人に案内されながら向かうのだが、どこかで聞いたような話しか聞けない。

「転生を繰り返していれば価値観も変わってくると思いますけどね。転生回数は零から九で九回。一度の人生が三十年だとしても二百七十年も生きている。そう考えるとかなり長生きだとは思いますが」

自分なら生き飽きている自信がある。これから体験していく事になると思うが。

「ですが、その大半は使命によって費やされてしまいます」

「むしろその方が良い。目的も無いのに転生を繰り返すのは馬鹿のやる事だと思いますよ」

それ以上使用人は口を利かない。勇輝も話しかけない。

最後に「こちらです」と部屋の前に案内され、使用人は持ち場へ戻るのか来た通路を戻って行く。

「失礼します」

そう言つて襖を開けると。

「あら、本当に来たのね。てっきりサボるのかと思ってたわ」

紫がいた。

「……何で居るんですか。阿求様も定位置みたいに膝の上に乘せられてますし」

「偶然よ。幻想郷縁起の事を話そうかと思ったら貴方が来ると聞いて待っていたの」

「何か用ですか？」

「いいえ、面白そうだから待っていただけ。私はこれで帰るわ。……それよりも、もう満月になるわね」

何か含んだような物言いの紫を無視。関わるとロクな事にならないのは重々承知した。

……何も起きなければいいのだが。

其の捌拾

「……終わり？」

阿求は思った以上に短い診察に思わず勇輝に尋ねた。

「何も分からないですからね。採血だけして、それを調べるぐらいしかやる事が無いですし」

紫がスキマの中に消え、さっさと診察に取り掛かったのだが短命になる病気、というより転生者に前例が無い以上、現時点で手の打ち様が無いのだ。

「望むのであれば周期的に俺の能力で年齢を戻す事も可能でしょうけど、阿求様はそれを望みます？」

「必要ない。私は幻想郷縁起を書くために転生を繰り返している。それが果たせたなら次の転生の準備をするだけ」

「そうですか。じゃ、気が向いたら診療所へどうぞ。……あのスキマ妖怪にも同じ事が出来ると思っているのでそちらに頼っても構いませんけど」

きつと、老いと若返りの境界、みたいなものがあるに違いないので紫なら簡単だろう。

「……貴方は変わっている」

「？ 急に何ですか……」

「他の里の人は私の短命に同情する」

「えーと、価値観の違いだと思いますけれど」

「そう。どちらかと言えば妖怪寄りの考え」

それは心外だ。少なくとも鬼や吸血鬼や紫よりは常識的な考えを持っているつもりでいる。

しかし……。

「あー、恐らくですけど境遇が悪かったのかと。父親は非常識人、幻想郷で最初の住処は紅魔館。親しい知り合いも妖怪のが多いですし……。魔理沙や霊夢あたりも同じような事を言うんじゃないでしょうかね」

「慧音から聞いた。貴方は不死だと」

「確かにそれも関係しているのかもしれませんが、実感するほどの年月を過ごしていないので何とも言えませんね」

「貴方が生きているなら、縁起にも書く事が増えると思う」

そう言つてクスリと阿求は笑う。

「……問題児つて事ですか」

「私は転生前の事はあまり覚えていない。けど、その時の私を知っている存在が生きているのは、素直に嬉しい」

……確かに、生まれ変わったら知らない人間ばかり。というのはキツイものがある。

「以前は一回ごとの人生を知り合いと共に終えたいと思っていた。けど今は転生後にも知り合いがいる。そこに同じ場所で暮らす人間がいるなら気が楽」

「そういえば性別も一定じゃないんですよね。変わるとどんな気分ですか？」

「……死にたくなる」

罪悪感でいっぱいになる返答が返って来た。

「じゃあ、これで失礼しますね。何か分かったら連絡します」

「敬語は使わなくて良い。長い付き合いになると思うから」

「あ、そう？　なら以後そうするよ」

「……やっぱり変わってる」

と、阿求の診察を終えた後は特にする事も無く診療所でダラダラと勇輝は過ごしていた。

採血した血を調べたのだが、これと言っておかしい所は無くやる事が本当に無い。

こんな事なら外界で暇を潰せる物を買ってくるんだったと後悔するが後の祭りだ。

薬品も最低限の蓄えがあるので材料を集める必要も無い。

日も暮れ始めているので出かける様な事はしないが、このまま寝るのも勿体無い気がする。

とりあえず夕食の準備を始めようと台所へ向かった。

「……いい加減慣れたけど、やっぱり不便だよな」

ガスコンロもライターも無いので火打石か火起こし機を使い釜戸で煮たり焼いたりする。何故洋風な建物がありながら文明は江戸時代なのだろうか。

きつと外界を自由に行き来できる商人がいたならばる儲け出来るに違いない。

正直、身体を壊さない程度の栄養が摂ればいいので味や見た目には拘らない。それでなくても一人、自分の為に料理をする習慣なんて現代人には無いのだ。

コンビニでパンを買うなりスーパーの惣菜コーナーに行けば調理された食べ物が食べれたのだ。こんな感性を持っても仕方ない。

そんな事を考えながら、鍋に適当な物を放り込む。野菜、肉、米。面倒だから全部煮る。

多少見た目に問題が出て来るが気にしない。面倒だから。

そこで来客を知らせる呼び鈴が鳴る。外で買って来た物の一つだ。

鍋を火から外して来客が居るであろう玄関に向かう。

しかし、来客は既にロビーにあるソファの上に腰掛け勇輝を待っていた。

「こんばんは、お兄様」

「……フラン、こんな時間に何しに来たんだ」

ロビーの先に見えるドアの外はもう暗くなっている。日は完全に落ちたらしい。

「えっとね、でーと？　のお誘い」

「診察だけしてやるから帰って寝ろ。お前、疲れてるみたいだから」

「あ、それってお医者さんごっ……」

「帰れ、忙しい」

勇輝が冷めた視線を向けながらそう言うと、フランは頬を膨らませて不機嫌である事を主張する。

「冗談はこれぐらいにして、今日はお兄様に頼みがあって来たの」

「飯食ってから聞くよ。聞いた後じゃゆっくり食えそうに無い」

「じゃあフランも食べる」

勇輝が台所へ戻ろうとすると、フランもトコトコと後ろを付いてくる。

そして鍋の前に辿り着いて、フランは中を見て顔を顰める。

「お兄様、もしかして食べるのに困ってる……？ 咲夜に頼もうか？」

「面倒だった。他に誰か食べるって分かってたら真面目な物を作ってる」

いろいろと放り込んだ雑炊は不味いと言う程の味では無かった。見た目は悪いが。

「で、何の用だ？」

「うん、えーっと。何て言えばいいのかな……」

フランは一瞬だけ言い澁むが。直ぐに満面の笑みを浮かべてこんな事を言った。

「お兄様、一緒に月をぶっ壊そうよ」

其の捌拾巻（前書き）

投稿日がクリスマススイヴになってます。

ええ、勿論一人ですとも……それはもう、楽しく……小説を、書いて……。あれ？目から汗が、今は冬なのにどうしてでしょうか……。

其の捌拾巻

「……はいはい、寝言は寝て言おうな。大体月壊したりしたら地球の重力バランスがおかしくなって、最悪滅ぶから」

「違うよ。あの月は偽物なの。妖怪には分かるよ、アレは本物じゃない、誰かの作り出した偽物なの」

何時になく真剣な表情のフラン。だが、それだと……。

「能力で壊せないのか？」

「駄目だった。あの月には“目”が無い。だからフランじゃ壊せない、犯人も捜せないからお兄様の所に来たの」

「……本音は？」

「暇だから犯人と弾幕ごっこがしたい」

正直で宜しい。しかし、フランの弾幕ごっこは死者が出かねない。しかし行かないとなると矛先は自分や霊夢、魔理沙に向く訳で、だったら下らない異変を起こしている犯人に犠牲になって貰おう。

「でもな……手掛かりが一つも無い訳だろ？ どうやって探すんだ」

「まずは、お姉様と咲夜を探す。知らなかったら霊夢を探す。霊夢も知らなかったら魔理沙を探す」

「……他人任せかよ。俺は嫌だ、アイツ等と戦ったら身が持たない」

「えー」

フランはこの機会に全員と戦おうとも思っていたのだろう

ストッパーとして付いて行くのかなさそうだ。

「分かった。けど約束、今から言う事を必ず守れ。じゃないと能力使って紅魔館に送り返す」

「えー」

「……………ハア」

深い溜息を吐いてから、勇輝は診療所の外に出て空を見上げる。

見上げた先にある月は神秘的な輝きを放っており、とても偽物には見えなかった。

「お兄様、まずは何処から潰して行く？ 博麗神社、魔法の森、霧の湖、妖怪の山。おススメは博麗神社だよ。最低でも誰かと弾幕ごっこがしたい」

「……………そうだな、まずは」

目の前の人物をどうにか説得しようか。

慧音は妙な胸騒ぎを感じ、夜の里を巡回していた。

満月が近い事もあってあまり出歩きたくないのだが、何か危険があらうからでは遅い。

紫が里に張っている結界は知能の低い妖怪にしか効果が無い。結界の存在を認識でき、尚且つそれが何の為に張られているのかを理解できる妖怪には意味が無いのだ。

実際、吸血鬼達は診療所に入り浸っているし、アリスや幽香は買い物に度々来る。

そもそも、結界を張った張本人が妖怪である以上慢心してはいられない。

そして、ふと診療所に明かりが灯っているのが見える。

勇輝が試行錯誤や能力の乱用をしてまで取り付けた照明器具のおかげか、周りの民家の数百倍は明るい。蠟燭や行燈の光とは比べ物にならない程の明るさだ。

そして、他の建物と隣接していない事もあってかなり夜は目立つのだ。

中から誰かが出て来る。白いから勇輝だろう。

しかし、後から続いて出て来た者に慧音は顔を顰めた。

「……何故、吸血鬼がこんな時間に？」

いつもは従者に日傘を持たせて昼間に来ていた筈だ。

そして断片的に潰す、弾幕と不穏な単語が聞こえて来る。

疑いたくは無いが、もしそういう事だとしたら止めなくてはならない。

それでも教育者、若い者の指導をしていくのが仕事なのだ。

勇輝がこちらを向く、気づいたらしい。

「こんばんは、慧音さん」

どうしてこうも運が悪いのか。

今からやろうとしている事は表向きには異変解決。しかし実際はフランのフランによるフランのための弾幕ごっこの相手探し。

とりあえず褒められた事では無いのは確かだ。

「ああ、ところで勇輝。どうしてこんな時間に外に出ている、普段は寝るか仕事をしているだろう?」

現在は午後九時といった所、この里に居て今から出掛けようとする人間は極少数だろう。

「えーと、この子。吸血鬼なんですけど、どうも月がおかしいらしいんですよ。それを調べよう」と

「月？ どこがおかしいんだ。普段と変わらない様にしか見えないが……」

「半端な存在には分かんないよーだ。年増の半獣は大人しく人間の御守でもしてたら？」

「ちょ、フラ……」

「ほう……。その餓鬼は教育が必要らしいな。勇輝、手は出すなよ？」

「……はい」

忘れていた。フランは誰が相手でも良いから弾幕ごっこがしたいという事を。

戦える相手がいたなら戦うに決まってるじゃないか。

里の外、以前の祭で使用していたリングの跡地でフランと慧音が睨み合う。

決勝戦は霊夢と魔理沙で戦ったようで、二人の戦いでリングは吹き飛んだのだとか。

嘘か本当かは知らないが、少なくともリングの面影が見当たらない事は確かだ。

先に動いたのはフラン。

レーヴァティンを振り回して慧音に向かっていく。

そういえば慧音の戦っている所を見た事が無いのだがどの程度戦えるのだろうか。

祭では棄権していたから好戦的ではないにしろ、里を守る立場である以上そこそこの実力があるのだろう。

しかし、慧音の戦い方は勇輝の斜め上を行った。

慧音は弾幕など使わなかった。フ란のレーヴァティンを軽々と避け、フ란の両肩を鷲掴みにし、自分の額をフ란の額に振り降ろす。

鈍い音が響き、フ란は足元が覚束ないのかふらふらと後ろに下がる。手に持っていたレーヴァティンは霧散していた。

「……………え、強っ」

暑くも無いのに勇輝の額には汗が浮かんでいた。

其の捌拾貳

「勇輝、お前達は何を企んでるかは知らないが里に危害を加えるつもりであれば教育し直してやる。それを忘れないようにな」

「あれ？ 俺はお咎め無しですか」

「私は口の悪い子供を矯正しようとしたただけだ。別に異変の調査の邪魔をするつもりは無い」

「ああ、そういう事ですか。了解です、里に被害が出ない程度で止めておきます」

慧音はその言葉に満足したのか、額を抑えて蹲っているフランを放置して里の方に歩いて行く。

勇輝はゆっくりフランの方に近寄って、膝を折ってフランの頭を撫でながら話しかける。

「らしくないな、やられっぱなしのままにいるのは」

「……アイツ、戦う気なんて無いんだもん。それに普通の半獣じゃなかった、あのまま本気出してたらお兄様が危なかったかもしれないもん」

「酷いな、そこまで脆い様な奴じゃ無いと思うんだけど……」

「だってフランにとってはお兄様が一番だから。弾幕ごっこより、お姉様よりもずっと……」

甘える様に抱き着いてくるフ란の頭をポンポンと叩く。しかし手は振り払われた。

「そこ痛い。叩かずに擦って」

暗くてよく見えないが相当腫れているようだ。

「慧音さん……アンタの頭蓋骨何で出来てるんですか……」

吸血鬼の身体は相当頑丈な筈なのだが……。

「それよりお兄様、早く行こ。早くしないと盗られちゃう」

「何を、誰に？」

「犯人潰しだよ、魔理沙辺りが搔つ攫って行く気がする。お姉様は霊夢にぶつかると思う」

「……姉妹揃って何がしたいんだか」

それに、フ란の中では犯人を探す事より犯人を潰す事が重要らしい。

一応、生物に向けて能力を使わない様に何度も言っているのだがキレたりしたらどうなるか分からない。

気が振れやすかったのは閉じ込められていた事が主な原因だったように最近はやまってきている。だが感情的なのは変わらないので左程変化は無い。

四百九十五年も一人で狭い檻の様な部屋にいたら気が振れるのも当然なのかもしれない。

それは妖怪にとってはそれ程長い年月でもなかったのかもしれないが、何しろ五世紀分だ。短い筈が無い。

現在ではフランは紅魔館内なら自由に、外ならレミリア、咲夜、勇輝の誰かと一緒の場合動き回る事が出来ている。度々美鈴が犠牲になる事が有るらしいが問題は無いだろう。

そんな説明はさて置き、勇輝はフランに羽交い絞めにされていた。

能力の使用回数が本日の制限に届いているのだ。

だから飛べない、戦えない、逃げられない。とんだ役立たずである。

勿論日付が変われば解消されるが、まだ数時間あるのだ。期待は出来ない。

落ちるかもしれない不安に煽られながらフランに抱えられ空から森を見下ろした。

「フラン、これって何処に向かってるんだ？」

「んー、分かんない」

「分かんないって……」

「だけどこっちに行った方が面白い気がする」

「……そうか、程々にしろよ」

諦めたように勇輝は呟くが、やはりフランはそんな事を気にもしない。

そしてふと、下方に虫が飛んでいるのが見える。

発光しているので蛍か何かだろう。秋には見た事が無いので確証は無いが。

「その人間！」

そして下の方から声がかかる。

声のした方にいたのは一見少女、しかし妖怪だ。

頭には二本の触覚、背には黒い虫のような羽。

「……ゴキブリ？」

「蛍だ！」

そういえば虫の妖怪に殺虫剤は効くのだろうか。ちょっと試してみたい、そんな事を勇輝は考える。

「お兄様、虫の羽音が煩いから壊しても良い？」

「殺生は控えるって、例えゴキブリの様な害虫だとしても一応生きている訳だし。まったく役に立たないけど、本能が嫌っているけれど、

それでもゴキブリだって生きてるから」

「だから蛭だって言ってるでしょ！」

例えで言っただけだったのだが。

「蛭って光るよね、光ってないじゃん」

フランが疑問に思った事を口に出す。

「人型でそんな事する訳無いでしょ、そんな事したら絵的に拙いし」

「じゃあゴキブリじゃないって証明できないんだね」

「うつ……」

「でも蛭よりゴキブリの方が強い気がするよな、何となく」

「……………」

「あ、それフランも思った。蛭って捕まえると直ぐに死んじゃうんだよね？　どこかで聞いた気がする」

「蝉と良い勝負だな、負けてるけど」

勇輝とフランが散々な事を言っていると、虫の妖怪の少女、リゲルの肩はプルプルと振るえていく。

「「やっぱり、蛭って弱そうないメージしかない」」

二人が声を揃えてそう言ったのが引き金だった。

「お前等なんか虫の餌にしてやる！」

涙目でリゲルが弾幕を放ってきた。フランは抱えていた勇輝を捨て、回避行動に移る。

「あ……」

「馬鹿！ 死ぬ！ 落ちるうつつっ！」

今の勇輝の霊力で、落下中に浮き上がるような芸当は出来ない。

何時もなら霊力量を修正し、一度翼を作り羽ばたかせスピードを殺してから霊力をコントロールして浮く。

「ぐふっ……ッー！」

丁度太い樹の枝に洗濯物の様に勇輝は引っ掛かる。

意識が遠退いたが骨は折れなかった。不幸中の幸いというヤツか。

空を見上げればフランに追いかけられるリゲル。立場が既に逆転している辺り相当の実力差があったのだろうか。

腕に付けて来た時計で時刻を確認する。今は午後十時半、能力はまだ使えない。

下を見れば名前も無い様な妖怪がうじゃうじゃと、落ちたら食われる。

「フラン、早く来てくれないかな……」

其の捌拾貳（後書き）

クリスマスにストックが出来ました。年末年始も投稿していけそう
です。……ええ、出来そうです。

其の捌拾参

「まさか吸血鬼だったなんて……」

「よくもお兄様を……、絶対に許さない」

「えっと、落としたのはそっちの責任じゃ……」

そんな会話が上空であつたのは知る筈も無く、勇輝は樹の枝の上で体勢を整え下を見る。

暗くて良く見えないが、ガサガサと枯れ葉を踏む音。ガリガリと樹の幹を引っ掻く音が無数に聞こえてくるのは分かる。獣か、妖怪か。どちらにしる落ちたら拙い。

打った腹部がまだ痛むが、とりあえず上ってくるモノがいない事に安堵し、急いで隣の樹の枝へと飛び移る。

さっきまで立っていた場所を何かが通り過ぎ、黒い影と風を切る音が確認できた。

「そりゃ、鳥の妖怪が居ない訳無いんよな……」

その身には既に靈力を纏っているが、流石に妖怪の爪や牙を防ぐ程の強度がある筈も無い。

爪で刺されたら穴が開くし、牙を立てられれば肉が引き裂かれる。

「あれ？ 気づいてなかったと思ったんだけど……」

「俺は霊力とか、妖力とかそういうのに意外と敏感なんだ。殺気とかには鈍いけど」

外界からやって来た影響か、勇輝は霊力を感じ取りやすい。温度が急激に変わった時に必要以上に暑かったり寒かったり感じるのに似ているのかもしれない。

殺気は……受け過ぎたのか、感じ取れる様なモノでは無いかのどちらか。後者であると信じたい。

「ところで何て妖怪？ 冥土の土産にでも教えてくれよ」

「夜雀だよ、それで分かる？」

「ああ、お前の頭が弱いのは分かった」

僅かに森に差し込む月明かりに照らされる夜雀の姿。長い爪と鳥のような羽、それが雀に見えるかは置いておくが、……何というかチルノやルーミアと同じような雰囲気がある。

「煩い！ 鳥目に鳥頭なんて言われる筋合いなんてない！」

「言っていないし、お前だと両方当て嵌まりそうだけど……」

「視界を奪われる恐ろしさ、思い知らせてあげる！」

夜雀、確か人の視界を真っ暗にする鳥の妖怪。

人間は周りの状況の七割以上を視覚から得ている。それが奪われた時に生み出される感情は戸惑い、不安、そして恐怖。

もし視界を奪われてしまえば、逃げる事すら難しくなる。

「っ!？」

不意に勇輝は目の前が真っ暗になった。

「私の能力はこれとは別だけど、そっちは使うまでも無いかな」

妖怪としての力と、生まれ持った能力。二つの能力を持っている妖怪は少なくない。

レミリアやフランは目に見える力はないが、吸血鬼としての膨大な妖力を。あまり人型の妖怪に出会った事が無いのでこういった存在を勇輝は初めて相手にする。

それよりも、視界を潰されたのが問題だ。

今はまだ樹の上にいるが、動いたら間違いなく落ちる。

フランはさっきから声すら聞こえないので助けに来れないだろう。

「さーて、どうやって食べようかな。人間を食べるのは久しぶりだし、やっぱり味わって食べた方が良いのかな……。うん、まずはバラバラにして持ち帰ろう」

「……ちょっと待ってくれ」

勇輝は、ある確信があつた。

コイツ、絶対にチルノ並に頭が弱い。

失礼極まりない確信であるが、雰囲気というか、第六感的なものがそう言っている。

こついうのを電波を受信したと言つのだろうか。この幻想郷で受信できるとは思えないが。

「見た目とか、雰囲気からは人間っぽさが出てるかもしれないけどさ。俺は人じゃないんだ」

状況的には、人間辞めてる様なものだから嘘でもない。

「え、そうなの？　なんだ、羽も角も無いからてつきり人間かと……」

掛かった！　思わずガッツポーズをしそうになる。

「そもそも、人間がこんな時間に、こんな場所に居る筈がないじゃないか。ところで、月がおかしいと思うんだけど心当たりは無いかな？」

「月？　……言われてみれば少し違和感が。それより、人間の欠片とか持っていない？　美味しそうな匂いもするから人間っぽいなんて思ったんだけど」

「気のせいだと思う」

「そっか。あ、私はミステリア・ローレライだよ」

「ご丁寧にどうも。俺は桜井 勇輝だ」

「でもさ、勇輝って何て妖怪？ そんな人間臭い妖怪は知らないんだけど」

……幽霊と言った方が良かったか、それとも魔法使いですとか、そうしたら疑われなかったかもしれない。どちらにしろ食われるかもしれないが。

「えーと……。あ、そうそう、種類とかじゃなくて一個体の妖怪。うん、だから人に近いんじゃないかな」

鬼、天狗、吸血鬼。種族で分けられるメジャーな妖怪の他に、唯一の個体の妖怪がいる。八雲 紫がその例だ。

世界に一体しか存在せず、類似している存在も無い。そんな妖怪は少ない。

「へー、そうだったんだ。じゃあ知らなくても無理も無いって訳ね」

「だから俺なんか相手にせずさ、能力解いて里にでも行って来たら？」

「あれ？ 鳥目の能力は人にしか効かないから……え？」

「えっ……」

「やっぱり人間！　よくも騙したな！」

「あ、お前の後ろに人間が」

「もう騙されないよ！」

ミスティアの後ろ、そこにいるのは確かに人間とはいい難いかもしれない。

だつて……。

「勇輝さん、最近の異変に全部貴方が関わっているんだけど仕事は良いの？」

妖怪を超える力を持つ人間、博麗の巫女なのだから。

「へっ……？」

次の瞬間には、哀れな妖怪の悲鳴が夜の森へと響き渡った。

其の捌拾肆

「ふう……。それで勇輝さん、今日はどうしてこんな所に？」

ミスティアを容易く撃ち落した後、霊夢は勇輝の方へと向き直り尋ねる。

「異変の調査、それと付き添いだな」

「付き添い？ 誰の？」

「えーと、アイツだ」

そう言いながら勇輝は霊夢の後方の空を指差す。フランがこっちに向かって飛んで来ているのだ。

霊夢は振り返って、その正体を確認すると溜息を吐く。

「二人がそんな事をする筈もないし、出来る訳も無いから二人は白ね。合ってる？」

霊夢は誰も居ない筈の虚空に向かって話す。

すると空間に裂け目が入り、中から一人の妖怪が出て来た。

「ええ、犯人は少なくとも貴女と面識のある者ではないわ。だって実行しても利が得られないもの」

「珍しい組み合わせで、霊夢と紫さんが一緒に異変解決に乗り出す

とは。犯人に同情すらしそうだ」

「あら？ 酷いわね。私達だって鬼じゃないし、やっている事を改めさえすれば見逃さない事も無いわよ？」

紫がクスクスと笑いながらそんな事を言うと、霊夢と紫の間を裂くように紅い大剣が空気を切り裂いた。

「巫女見いつけた！ なんか変なのもいるけど良いや。フランと弾幕ごっこしようよ！」

フランはまるで悪びれた様子など無く、純粹に、無邪気に勝負を仕掛ける。

「霊夢、面倒だからさっさと撒くわよ」

「それは同感ね。吸血鬼なんて相手にしてたら犯人を逃がすかもしれないし」

「あれ、まずは鬼ごっこからなの？ フランが鬼なんだ、じゃあ十数えるね」

フランが一から順に数字を数えだす前に霊夢と紫は飛び去る。

「さーん、しーい」

フランはゆっくりと数字を数えるが、それを遮る様に勇輝が叫んだ。

「ちょっと待てフラン！ まだ時間じゃないから俺は飛べないんだ、それを踏まえて……クソッ！」

霊夢を見つけて頭に血が上ったのか勇輝の声は届かない。

フランは十まで数え終え、猛スピードで霊夢達を追いかけ始めてしまふ。

勇輝は足に霊力を多めに纏わせ、樹を蹴ってそれを追う。

ザワザワと、下の方でナニかが動き出す。まるで勇輝を追うかのよう。

霊夢達をフランが追い、フランを勇輝が追い、勇輝を妖怪が追う。何とも滑稽な状況だがそれを笑う余裕は今の勇輝には無い。

よく漫画やアニメで忍者が樹の枝を次々に移動していくが、勇輝にそれ続けるのは無理そうだった。一度樹の上から飛び降り、今にも消えそうになるフランの姿を走って追う。

「あの馬鹿ッ！ 追いついたら強制送還してやる……」

落ちて来る木の葉やスピードを出している事から来る向かい風に顔を顰めながらも勇輝は悪態を吐く。

このペースで追い掛けて、追いか続けれるのはおよそ十五分。

霊力を体に流して無理矢理に体を動かしているのだから疲労よりも身体へのダメージが大きい以上、疲れを感じてからでは遅い。

そして、ガサガサと勇輝が落ち葉を踏む音以外にも後ろから落ち葉の上を這う様な音が聞こえて来る。

「振り返ったらフランを見失う、振り返らないと後ろのヤツが何か分からない……。どんなホラーゲームだよ」

正直、怖い。

後ろにいるのが獣なのか妖怪なのか。虫なのか蛇なのか。それとも知り合いがふざけて追いかけているのか。

知り合いだったら気が楽だ。後で渾身の拳を頭蓋にお見舞いしてやれば良いのだから。

しかしそれ以外だと、とりあえず食われるか引き裂かれるかだ。

死なないとは言っても死ぬ程に痛く、苦しく、怖ろしい。

そして今は能力が使えない。日付が変わるまで、その苦しみに耐え続けなければならない。精神が崩れてしまつては、能力を使う事も出来ないのだから。

だから、勇輝は走った。フランを恨めしげな目で睨みながら。

しかし、好奇心という誘惑に勝てないのは仕方ない。親であつた魅憑はそれを体現した生活をしているし、きっと遺伝か何かだろう。

一瞬だけ、ほんのコンマ数秒だけならフランを見失わずに済む。そう思つて勇輝は首だけを動かし自分を追う存在を確認した。

「……………あー、見なければ良かった」

本当に、振り返ったのは一瞬だった。しかしそれだけで自分を追うのが何者なのか判断できた。

最初に目に映ったのは鱗、黒く堅そうな刀ですら弾きそうだった。

次に見えたのは金色の眼だ、もし耐性の無い者がそれに睨まれたら硬直する様な恐ろしい目つきの。

そして丸太のように太く、川のように長い身体。それに足は無く、それでいて勇輝を追うスピードは自動車にも匹敵する。

鱗蛇^{うわはみ}、巨大な蛇だ。妖怪かどうかは知らないが、とりあえず見たくなかった。

心なしか足に籠める事の出来る霊力が増えた気がする。

しかし、ズルズルと鱗蛇が巨体を引き摺る音はどんどん近づいてくる。

上空のフランがこちらに気づく素振りは無い。

「フラン！ 次の休みに弾幕ごっこしてやるから！ 頼むからこっち向け！」

大声で叫んでみるがフランは振り返りもしない。聞こえていないようだ。

「ちっ、これでも食らえ！」

勇輝はその手に霊力の槍を作り出す。

長さは四メートル、太さは直径十センチ程の蒼い槍。吸血鬼の紅い槍と対になるかの様な蒼だ。

そして、勇輝はそれをフランに向けて投擲する。

其の捌拾伍（前書き）

皆様明けましておめでとうございます。これで2012年となりました。引き続き当小説をお楽しみ頂けるよう努力していくので、どうか温かい目で見守って頂けたら幸いです。

こういう挨拶って1ヶ月も経つと「え、この投稿日正月だったの？」みたいな反応になりますよね。

其の捌拾伍

蒼い槍はフ란の直ぐ傍の空を貫く。

フ란は意図していなかった方向からの攻撃に一度動きを止め、攻撃のあった方向を睨みつけた。

そして気づく。

「あ、……お兄様忘れてた」

蟒蛇に追われる勇輝を見て、自分が勇輝と一緒に行動していた事を思い出す。

そして、兄と慕っている勇輝が危機に晒されているという事を理解し、フ란はその右手を蟒蛇に向けて翳し、何かを握りこんだ。

フ란の手の中で何かが粉々に碎けるのと同時に、蟒蛇は内側から破裂し、中身を撒き散らした。

そして、蟒蛇が息絶えた事とフ란が動きを止めた事によって勇輝も足を止めた。

「フ란……。言いたい事、分かるよな？」

「えっと……、もう少しで明日だね……？」

「言い分は良く分かった。確かに俺が能力を使い切ってた事も原因だろうけどさ、それでも約束しただろ？ まさか一日どころか三時

間も経ってないのに忘れたなんて言わないよな？」

「確か、お兄様の許可なく攻撃を仕掛けない、お兄様を一人で行動させない、それと……」

「少なくとも二つは破ってる訳だ」

勇輝の直ぐ傍に降り立ち頭を掻きながら苦笑いするフランを余所目に、勇輝は時計で時刻を確認する。

十一時数分前、まだ一時間以上は能力を使えない。

「……もしかして、お屋敷に帰されるの？」

勇輝が黙っているのを怒っていると感じたのかフランが少し控えめに切り出す。

「いや、霊夢が動いてる事から異変の可能性は上がったし、紫さんが付いているから面倒事なのは明らか。けどあの人が居て円滑に異変が解決できると思えないから今回は見逃すよ」

「ホント!？」

「それより状況と現在地の確認、そして何よりも安全が欲しい。つて訳でまた抱えて飛んでくれ」

フランは言われるがままに勇輝を抱え、上空へと飛び上がる。

まず確認したかったのは大体の位置、と言っても周りは森なので何処か分からない場合が多いのだが。

しかし今回は運が良い。

「迷いの竹林か、里の近くに一回戻ってたんだな」

竹林は普通の森と違って夜でも上空から下を見渡す事が出来る。

今まで入った事は無いが、同じような竹が延々と生えているので迷ってしまうのだとか。

しかし、それは同時に隠れるのには打って付けの場所にもなる。

「お兄様、何か分かった？」

「とりあえずあの竹林に行こう、もしかしたら犯人が隠れているかもしれない」

「竹林？ でも、それだったら普通に森に隠れた方が見つかり難いんじゃないの？」

「あそこには滅多に人が入らないんだ、調べて見る価値はあるかもしれない」

「分かった、じゃあ行くね」

二人は竹林へと向かう。その先で何が待っているのかも知らずに……。

「知ってるなら最初から言ってくれば良かったのに」

人里の直ぐ近く、そこには三人の人影があった。

一人はアリス、無駄な戦いだったと溜息を吐き隣に呆れた視線を向ける。

「そうだな。そうだったなら私達は普通にそこへ行ってた筈だぜ」

魔理沙がそんな事を言いながら肩を竦めるが、それは直ぐにアリスに否定された。

「先に仕掛けたのは魔理沙でしょ。……まったく、一人で勝てると思ってたの？」

「いやぁ……」

苦笑いをしながら魔理沙は視線を逸らす。

「……お前達、場所は教えたんだから速く行ったらどうだ？ 私の知っている限りだと勇輝は既に探し回っているぞ。吸血鬼と一緒に」

慧音は見た目はボロボロだが余力が残されている様にいつも通りの声色で二人にさっさと里から離れる様に促す。しかしその表情は諦めたような呆れたものだった。

「勇輝が？ 吸血鬼って言うとレミリアかフランか……。髪の色と分かるか？」

「確か薄い黄色だったな……」

「妹の方ね、どちらも敵に回したくないのは変わらないけど」

「むしろ性質が悪いぜ、見つかったら即バトルになりそうだ」

既に霊夢が襲われた事を知らない二人はそうならないと良いな程度の認識しかしていない。

会ったとしても勇輝と一緒に話す余地もあるだろうと甘い認識を
してしまっていた。

「結構深い森なんだな、竹林ってもう少し規模が小さいものだと思う
ってたんだけど」

迷いの竹林に入った勇輝たちはしばらく竹林の奥へと進み続けてい
た。

迷いの竹林と言っただけあって、この竹林を初めて入ったにも関わら
ず迷わないで進み続けるのは酷な、いや不可能だろう。

太さも、形も、長さも殆ど変わらない竹が並び立ち、それは永遠に続
くかのように続いている。

当然、道がある筈も無い。歩いてこの竹林の奥深くまで入ってしま
えば抜けるのは困難だ。

「お兄様」

ある程度進んだ所でフランが急に止まる。

勇輝も気付いていた。

刹那、挟み込むようにして竹林から何者かが二人を狙い撃った。

フランは上空へ、勇輝は投げ落とされ地面へと回避した。

「これで仕留められたなら異変に集中できたんだけど、一筋縄ではいかないようね……」

「ここまでついて来たって事は乱戦になるかもしれないし、退場して貰うしかないんじゃない？」

待ち伏せしていた霊夢と紫が姿を表す。

「良いよね、お兄様。“アレ”を試しても」

「それが前提条件で来てるんだ、さっさと終わらせるぞ」

その捌拾陸

大見得を切った勇輝だったが、致命的な欠陥がある事が分かり回避行動に専念していた。

能力で身体能力や霊力を上げないと話にならない事に気づいたのだ。

「ちょこまかと……」

霊夢が上空から勇輝を狙い撃つ。

勇輝は竹を遮蔽物にしたり、少ない霊力を振り絞ってそれを避ける。

チラリと時計を見て時刻を確認するが長針は二十五を指している。
まだ三十分以上あるのだ。

普段の勇輝はお世辞にも強いとは言えない。それは自分自身がよく知っている。

もちろん幻想郷内の事であって外界から来た人間からしたら化物同然の強さでもあるが、今戦っている相手はその化物以上の強さだ。

「見逃してはくれそうにないし、フランは……」

空の方に視線をやり、フランの姿を探す。意外と早く見つかったが苦戦している様だった。

フランが攻撃を仕掛ける度に紫はスキマへと姿を消し、フランの死角から現れ攻撃を仕掛ける。フランは野性的感性でそれを避ける事

が出来ている様だが、やはり攻撃は当たらない。

二人が試したかったのは二対二のタッグバトル。相手は一对一では最強クラスなのだから、慣れていないタッグバトルではこちらに利があると思つての事だつた。

しかし、今の勇輝は足手纏い。フランの足を引っ張るような事しか出来ない。

タッグバトルは味方同士での補い合いが出来てこそその勝負、これでは有利になつたと言えない。

何か、時間を稼げる手段があれば……。

無論、そこまでタッグバトルに持ち込もうとするのには理由もある。

少し前の事だが、フランやレミアに一对多数、二対多数の戦いにはならないのか？ という質問をしたのだ。

スペルカードルールは決闘のためにあるものであり、一对一は基本の事、最早暗黙の規則と言つても良いだろう。

しかし、多数対多数は絶対にありえないのだろうか。フランやレミアも少し思う所があつたのか試してみたのだ。

勇輝とフラン、咲夜とレミアで組んでのタッグバトル。結果は敗北に終わったがフランは負けたのが気に入らないらしくメイド妖精を何匹も呼び出し練習をさせられた。

経験がある以上はこちらに利があるのだ。

あと三十分、時間を稼げる何か。それを見つけないければ――
――

「恋符『マスタースパーク』!!」

眼前の竹林が魔砲につて薙ぎ払われる。

土煙が舞い、それは勇輝の姿を包み込んだ。

「魔理沙!？」

霊夢が驚きの声を上げる。それは魔理沙も同じだ。

「あれ?　なんで霊夢がここに居るんだ?」

「私は勇輝さんと戦ってたの、魔理沙は?」

「私はアイツだ」

魔理沙が自分の進行方向を指し、霊夢はその先に目をやる。

「失礼ね、私には西行寺　幽々子という名前があるのに……」

「幽々子?　どうしてこんな所に……。って言うか冥界から出て来ないでよ、幽霊なんだから」

「妖夢も来ているわよ、人形遣いと戦っているわ」

「おお、アリスと逸れたと思ったら先に会ってたのか。安心したぜ」

霊夢は額を押さえる。異変を解決しに来ただけなのにどうして過去の異変の犯人がこつも集まって来るのかと。

「何だか賑やかな、こんな場所でお祭りでもあったのかしら？」

「……ホント、今日は賑やかな。どうして吸血鬼まで出て来るのやら」

霊夢が後ろからした声に洩々と振り返る。そこには咲夜とレミリアの姿があった。

五組十人、幻想郷でも選りすぐりのメンバーがこうして出て来ている。

もし全員が結託していたなら犯人には最大限の同情を送っていたに違いない。

そこから先は乱戦。

元より戦っていた霊夢、紫、フラン、アリス、魔理沙、幽々子、妖夢は元よりレミリアが面白がって遊撃していくのだから收拾が着かない。

ちやっかり勇輝は避難して時間を稼いでいるのだから救い様が無い。

その乱戦の中でも目立つのはレミリア達だった。

咲夜が上手く能力でレミリアをサポートし、レミリアが強力な弾幕を撒き散らす。

既にこの場の全員にパートナー以外は全員敵、そんな意識が植え付けられているのは言うまでも無かった。

そして魔理沙は祭の決勝戦を思い出し霊夢に攻撃を仕掛ける。レミリアも何年か前の敗北の恨みを晴らしたいのか霊夢に集中的な攻撃を仕掛ける。妖夢もトラウマ的な何かを克服したいのか霊夢に攻撃を仕掛ける。フランも面白がって霊夢に攻撃を仕掛ける。咲夜もレミリアに便乗して霊夢に攻撃を仕掛ける。幽々子は一番手強そうだからと霊夢に攻撃を仕掛ける。アリスはそんな他の面々を見て速く終わりそうだからと霊夢に攻撃を仕掛ける。

「何なのよこれは!？」

思わず叫ぶ霊夢だが時既に遅し、一斉に攻撃が放たれ轟音と共に爆発する。

それを見て数名がガッツポーズをしていたのだから霊夢は異変後に仕返しをしても許されるだろう。

攻撃が当たっていたのなら。

「ハア、どれだけ人の恨みを買ったのよ……」

「私が知る訳無いでしょ！ 異変を解決しただけじゃない！」

爆発地点の遥か上空で霊夢はスキマの中から姿を現す。紫が助け出していたようだ。

「霊夢、このままだと間に合わなくなる。早く勝負を収めましょう」

「そうね……。本来の目的は全員そこなのよね……」

納得がいけないといった表情をしながらも霊夢はスペルカードを取り出す。

そして、勇輝の腕時計の長針が十二を指した。

其の捌拾漆

「……さて」

勇輝は竹の陰に隠れながら辺りを見渡す。

様々な色の弾幕が飛び交い何本もの竹が折り倒され、少し前までの静かな竹林の面影は既に無くなっている。

能力を直ぐに使っても良いのだが、それでは総攻撃に遭った時の対処が出来ない。

数が減るのを待つのが上策なのだろうが霊夢と紫は他チームに牽制され本領が発揮できていない。

何時の間にか加わったレミリアと咲夜は他よりは連携が取れていて厄介。

魔理沙の魔砲は一度張られた弾幕を無に還してしまう。早々に退場して貰うしかない。

フ란の姿を確認するが、言い付け通りに無茶はしていないようだ。大分頭に血が上っている様だが。

「あ……」

「は？」

考込んでいるとアリスと目が合ってしまう。

無情にもアリスの切り替えは速く、即座に人形を取り出し弾幕を放ってくる。

「そう言えば今日はこんな所にどんな御用で？」

弾幕の範囲から逃れようと走りながら勇輝は問いかける。

「魔理沙に月の事で相談して、犯人を探しに来たのよ。こんな事になるとは思っても見なかったけど」

「帰ったらどうだ？ 夜更かしは肌に悪いだろ」

「嫌よ、魔理沙にどんな嫌味を言われるか分かったものじゃないから」

「説得に付き合うからさ」

「私に被害は出ない？」

「……………保証は、出来ないな」

次に返って来るのは言葉では無く弾幕。そして人形。

そしてその人形の一体が糸が切れたように勇輝の足元に飛ばされる。

即座にそこから離れたのは良い判断だっただろう。人形が爆発したのだから。

熱風と衝撃で砕けた地面が勇輝を襲う。

「火薬なんか仕込んでるのか……。爆弾かよ」

「私に火力が足りないのは前々から分かっていたし、これが一番手っ取り早いだよ」

以前なら人形を霊力の刀で切り裂いて壊していく手もあっただろうが、今回は遠距離からの攻撃で破壊しなければならないようだ。

しかしあの人形は意外と丈夫でちよつとやそつとの攻撃では破壊できない。

「余裕なんて微塵も無いか……」

勇輝の直ぐ目の前に一体の人形が飛び出してくる。

そして勇輝は炎と黒煙に包まれた。

「……………」

アリスはジッと勇輝の居た場所を見つめる。

これで倒せたとは思っていない。だが、万が一直撃していたら致命傷だ。早々に治療しなければならぬだろう。……いや、必要ない。勇輝は自分の能力で三度まで傷を完全に回復できる。

しかしそんなアリスの心配は無用の物だった。

黒煙が振り払われ、中から傷一つない勇輝の姿が現れる。

「危ないだろ、普通の人間だったら死んでる所だ」

「普通じゃないでしょ、貴方は」

「それもそうだ」

勇輝はアリスに向けて反撃を開始する。

一対一なら勇輝も普段通りの戦いが出来る。だが、それはアリスも同じであり、勝機はどちらにもある。

いや、この場合は一対多数とも言えるだろう。

アリスの武器は人形。壊しても壊しても次の人形を取り出し勇輝を多方向から攻撃する。

操っている本人を護りつつ勇輝を逃がさない陣形は厄介な物だった。

だが、そんな攻防も今この場では一時のモノでしかない。

二人の間、そこに深紅の槍が突き刺さり地面は爆発する。流れ弾なのか故意にやったのかは分からないが勇輝は即座にその場を離脱する。

「ケホッ、何が起こったの……？」

土煙がアリスを覆い、アリスは咳込んでしまう。

だが何かを感じ取り、直にその場を離れた。

そして先程まで立っていた地面が斬撃によって切り裂かれる。

「外しましたか……」

アリスはハツとして声のした方へと目をやる。

「……そうだったわね、貴女と戦っていたんだった」

「忘れられているとは心外です。お陰様でスキだらけでしたが」

暗がりから現れたのは妖夢だった。刀をアリスに向け、言い放つ。

「私はこれ以上、幽々子様の警護役として相応しくない戦いをする訳にはいかないんです。だから……」

妖夢は地面を蹴り、アリスへと接近する。

「勝たせて貰います！」

「お兄様！」

「フランか、今の状況は？」

アリスの方から逃れて来て、運良く勇輝はフランと合流できていた。

「あのスキマ妖怪、凄く面倒だよ。フランの攻撃が全然当たらない」

「紫さんか……。今は何処……ッ！」

フ란の背後にスキマが開かれたのを確認すると、即座に勇輝はフランを掴んで離れる。

直後、スキマの中から溢れる様な弾幕が流れ出ていた。

「大丈夫、だよな？」

「うん。ありがと、お兄様」

次にスキマから出て来たのは弾幕ではなく、紫だった。

「お姫様を助けるナイトって所かしら。魅せるじゃないの」

「会話中に攻撃をしかける所は悪役の極みですよね。射命丸から貰った外道の称号は紫さんにお渡ししますよ」

「いらないわ」

「俺もいらないです」

勇輝の背には既に霊力の翼がある。機数の決まった対決では邪魔でしかないが、相手が倒れるまでの戦いでは攻撃にも防御にも使う事が出来る。

勿論、霊力の消費が大きいが今は関係ない。

「フラン、アレを……」

「ん、分かった」

フランは勇輝から少し離れる。

そして二人はスペルカードを取り出した。

「『禁忌』『残酷な人形遊び』」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2112v/>

東方医療録

2012年1月5日16時51分発行